

博士論文（要約）

論文題目 瑜伽行派における五遍行の研究
— 『瑜伽師地論』を中心として—

氏 名 楊 潔

目次

序章	1
1.1 研究主題	1
1.1.1 五遍行と瑜伽行派のアビダルマ	1
1.1.2 アビダルマの心所	2
1.1.3 五遍行と他の学派の心所分類における関連概念	3
1.2 先行研究	4
1.2.1 心所に関する研究における一般的考察方法	4
1.2.2 先行研究における五遍行に対する考察	5
1.2.3 先行研究が提示する五遍行に関する疑問	7
1.3 問題の所在	9
1.3.1 アビダルマ論書研究の再検討	9
1.3.2 五遍行説に関する先行研究の問題点	10
1.3.3 まとめ	13
1.4 本研究の課題、構成および予想される成果	13
第1章 五遍行についての『瑜伽論』の説明の概略	15
1.1 manaskāra (作意)	15
1.1.1 作意に関する『瑜伽論』の説明	15
1.1.2 初期経典に見られる作意	17
1.1.3 作意に関する有部の理解	19
1.1.4 瑜伽行派のその他論書の理解	20
1.2 sparśa (触)	22
1.2.1 初期経典に見られる触	22
1.2.2 触に関する有部の理解	24
1.2.3 触に関する『瑜伽論』の説明	25
1.2.4 瑜伽行派のその他論書の理解	27
1.3 vedanā (受)	29
1.3.1 初期仏教と有部の論書に見られる受	29
1.3.2 受に関する『瑜伽論』の説明	29
1.3.3 瑜伽行派のその他論書の理解	32
1.4 saṃjñā (想)	33
1.4.1 初期仏教と有部の論書に見られる想	33
1.4.2 想に関する『瑜伽論』の説明	34
1.4.3 瑜伽行派のその他論書の理解	35
1.5 cetanā (思)	36

1.5.1 初期経典に見られる思	36
1.5.2 思に関する有部の理解	37
1.5.3 思に関する『瑜伽論』の説明	38
1.6 本章の結論	39
第2章 「遍行」という概念	40
2.1 すべての状態の心に、すべての地に、常に、心所が俱起するという遍在	40
2.1.1 「遍行」(sarvatraga) という語について	40
2.1.2 『瑜伽論』における「遍行」の理解	40
2.1.3 まとめ	47
2.2 識と五心所との具有関係	48
2.2.1 『瑜伽論』の理解	48
2.2.2 『唯識三十頌』が説く遍在：八識に遍く存在すること	50
2.3 本章の結論	50
第3章 アーラヤ識と五心所	52
3.1 はじめに	52
3.2 アーラヤ識の五心所についての「撰決択分」の説明	52
3.2.1 アーラヤ識の五心所についての説明	52
3.2.2 アーラヤ識の五心所の説明における問題点	54
3.3 「本地分」に見られる関連記述	55
3.3.1 意地に随行するものとしての五心所	55
3.3.2 カララの段階における心所の存在	56
3.3.3 胎内の「名色」(nāmarūpa) に関する『瑜伽論』の説明	58
3.3.4 初期経典に説かれる「名」(nāman)	63
3.3.5 まとめ	64
3.4 アーラヤ識の心所の特徴	65
3.4.1 アーラヤ識の受の特徴	65
3.4.2 まとめ	68
第4章 tajja- manaskāra- について	69
4.1 tajja に関する様々な解釈	69
4.1.1 「本地分中五識身相応地」における tajjo manaskārah と識の生起	69
4.1.2 パーリ文献の tajja	70
4.1.3 「本地分」の tajja に対する漢訳とチベット語訳の解釈	70
4.1.4 tajja に対する世親の解釈	71
4.1.5 tajja- manaskāra- に対する「撰決択分」の解説	72
4.2 tajja を「それから生じる」と解釈する場合の問題	73
4.2.1 tajja- manaskāra- の前に感官と対象に対する言及がない	73
4.2.2 感官と対象があっても作意がない	74

4.2.3 tajja- manaskāra- が現れる原因に関する「意地」の説明	78
4.3 tajja- manaskāra- と tajja- vijñāna- の関係	80
4.3.1 作意は識と同時に起こるもの	80
4.3.2 『順正理論』に見られる*pratyupasthito bhavati についての説明	82
4.4 本章の結論	83
第5章 認識対象に対する思 (cetanā) の働き	
— 「随与」 (*anupradāna) を中心として—	86
5.1 思に対する『瑜伽論』「本地分」の説明	86
5.1.1 「本地分」における思の定義文	86
5.1.2 業に関連する概念としての思	86
5.1.3 「本地分」の説明の問題点	87
5.2 思に対する『瑜伽論』「撰決択分」の説明	88
5.2.1 思の定義文に見られる「随与」	88
5.2.2 「随与」と結合・分離の関係について	90
5.3 「随与」について	93
5.3.1 「本地分」に見られる「随与」の原語	93
5.3.2 「撰決択分中菩薩地」における「随与」の用例	94
5.4 「本地分中有尋有伺地」の anupradānāt について	95
5.4.1 「有尋有伺地」の記述とその問題点	96
5.4.2 漢訳とチベット語訳が示す理解	97
5.4.3 初期経典における関連箇所	98
5.4.4 anupradānām の形について	99
5.4.5 anuppadātā の意味について	100
5.4.6 まとめ	100
5.5 本章の結論	101
結論	103
付録 I 資料編	105
Text A 『瑜伽師地論』「本地分」における「五遍行」関連部分の抜粋テキスト及び和訳	107
Text B 『瑜伽師地論』「撰決択分」の漢訳における「五遍行」関連の抜粋テキスト及び和訳	195
Text C 『瑜伽師地論』「撰決択分」のチベット語訳における「五遍行」関連の抜粋テキスト 及び和訳	245
付録 II 『瑜伽論』「有尋有伺地」の縁起説に見られる説明文について	289
付録 III アーラヤ識の所縁としての器世間の説明における *aparicchina 再考	295
参考文献	311

序章

1.1 研究主題

1.1.1 五遍行と瑜伽行派のアビダルマ

本論文では「五遍行」という概念を取り上げる。「五遍行」とは、インド大乘仏教の一学派である瑜伽行派による、精神的・物質的構成要素 (dharma, 法) に関する一つの分類概念である。

瑜伽行派 (yogācāra) とは、その名が示すとおり、ヨーガ (yoga, 瑜伽) という修行法の実践を重んじる人々の総称である。同派は、認識における主観と客観の構造はすべて識のはたらきの中で起こる現象であると主張し、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・マナス (末那識)・アーラヤ識 (阿頼耶識) という八つの識を設定し、それら八識の転変 (pariṇāma) によって現象界の成立を説明する。このようにあらゆる現象や存在を認識に還元することから、唯識派とも呼ばれる。この学派の最古の文献である『瑜伽師地論』(以下『瑜伽論』)の成立は4世紀頃とされている。瑜伽行派の成立時期は、一般には4-5世紀と考えられている。

瑜伽行派は、その認識論に基づいて、精緻な法 (dharma) の体系を構築した。それは説一切有部のアビダルマにも匹敵するものであり、大乘のアビダルマとも称される。

初期仏教以来、個体存在のあり方を分析し観察することが煩悩からの解脱につながる重要な教理とされている。部派仏教に至ると、仏の教説 (法) を整理・解釈し、さらに体系化することが盛んになり、数多くの論書が作られた。このように法を分析・体系化するものはアビダルマ (abhidharma, 阿毘達磨) と呼ばれる。最初期のアビダルマ論書としては、主として南方のパーリ上座部 (以下「上座部」) のものと北インドの説一切有部 (以下「有部」) のものが現代まで伝わっている¹。その後、各部派では論書に対する注釈書や概説書などが作成され、それぞれの理論がさらに整備された。そのうち、世親 (Vasubandhu, 5世紀頃) によって著された『俱舍論』は有部カシュミール毘婆沙師の教説を批判しつつ体系的にまとめたものである²。上座部のアビダルマ思想はブッダゴーサ (Buddhaghosa, 5世紀頃) の『清浄道論』(Visuddhimagga) によって集大成された。

瑜伽行派のアビダルマ理論を組織的に述べる代表的な文献は、無著 (Asaṅga, 4-5世紀頃) による『阿毘達磨集論』、世親による『五蘊論』などである。一般に、瑜伽行派の法体系は有部の影響を受けていると言われている。概念の名称や分類の方法なども、瑜伽行派と有部には共通しているところが多い。そのため、瑜伽行派のアビダルマは有部のアビダルマを継承しながら、瑜伽行派独自の教理に基づいてこれに調整と改変を施したものと見做されてきた³。

¹ 上座部には『法集論』などの七つの論書 (紀元前3世紀頃～紀元前後) がある。説一切有部も、『発智論』、および『集異門足論』・『法蘊足論』・『識身足論』・『界身足論』・『施設足論』・『品類足論』(これら六つの論書は六足論とも総称される) の七つの論書 (紀元前2世紀頃～紀元前後) を有する。平川 [1974: 177-179] 参照。

² 説一切有部では『発智論』に対する注釈として2-3世紀頃に『毘婆沙論』が編纂された。『毘婆沙論』は有部内外の諸異説を批判し、カシュミール毘婆沙師説を正統説として位置付ける。世親はその教説を経量部の立場から批判しつつ体系的にまとめて『俱舍論』(Abhidharmakośa) を著述した。一方、衆賢は説一切有部の伝統的立場から『俱舍論』中の世親説を批判し『順正理論』を著した。

³ 例えば、水野 [1964: 318] では、「瑜伽行派は順逆に拘らず、有部からの影響がきわめて多い。心

瑜伽行派のアビダルマは、瑜伽行派の教理研究においても、アビダルマ研究においても、考察の中心とされていなかった。瑜伽行派の教理を研究する際は、アーラヤ識説や三性説など、瑜伽行派に特有の説が多く注目を集めてきたことがその主な理由である。加えて、アビダルマ研究においては、瑜伽行派のアビダルマは有部のアビダルマという土台から派生したものにすぎないと考えられていたことも理由として挙げられる。

その結果、瑜伽行派のアビダルマについて考察する際には、有部アビダルマを基準とし、有部のものと相似するものは有部の説を継承したものとされ、有部の教理に見られない、あるいは有部の理解と異なるものは瑜伽行派による変更と帰結されることが多かった。

しかしながら、こうした考え方で瑜伽行派のアビダルマを研究してきたことにより、問題が単純化されてしまったきらいもある。本研究が取り上げる五遍行という概念は、それを端的に示す一例である。

1.1.2 アビダルマの心所

一切法は精神的・物質的要素に大きく分かれる。例えば、個体存在を五蘊として説明する場合、色蘊は物質的な要素であり、受蘊・想蘊・行蘊・識蘊の四つは精神的な要素である。アビダルマでは、精神的要素をさらに詳しく分析する場合、心 (citta) には、様々な心所 (caitasika/caitta, 心作用)⁴が同時に存在し、働いているという見解がある。これは心と心所との「相応思想」(水野 [1964 : 221])とも呼ばれる。有部、瑜伽行派、および上座部はともにこの心・心所の相応関係を主張する⁵。現存する文献の大多数は、心・心所の相応関係を主張している。心・心所相応思想は仏教の主流であると言ってもよい。

論書成立の先後順序からみると、一般には、有部の心所説の成立が先行しており、瑜伽行派の説はその影響の下に独自に発展したものである。一方、上座部では、水野 [1964 : 258-259]によれば、初期のアビダルマ論書(『法集論』)においてすでに数多くの心所をあげているものの、未だ組織化されたものではない。上座部の心所説の体系化は比較的遅く、有部と瑜伽行派から何らかの影響を受けて形成されたものである、と考えられている⁶。

有部と瑜伽行派の代表的な体系として、一切法を有為(作られたもの)と無為(作られたものでないもの)に大別し、さらに有為を色(物質)・心・心所・心不相応行(心に相応しないもの)の四つに区別し、計五つのカテゴリーに分類する有部の「五位七十五法」と、瑜伽行

所法説においてもやはり瑜伽行派は有部説を継承している部分が多い。けだし、瑜伽行派が発生したころには、すでに有部の心所法説は相当に発達していたからである。従って、有部説をうけてこれを改善した瑜伽行派の心所法説は、その最初からほとんど完成したものであるために、有部のような幾度とない著しい変化発達をへることがなかった」と述べている(旧字体を新字体に改め、「、」を「,」に、「。」を「.」に改めた。以下同じ)。

⁴ 心所 (caitasika/caitta) とは、心に属するもの、すなわち、心 (citta) が働くとき、その作用・様態・性質などが付属するものとして、必ず心に伴って存在する(相応する)とされている。水野 [1997 : 255-256, 257] では、心所説は初期經典にその萌芽的なものがあり、アビダルマ仏教時代にいたって発達を遂げたとしている。

⁵ その反対の見解、つまり心所を認めない部派もある。経部はその代表例である。

⁶ 水野 [1964 : 372] では、「故に有部等とパーリ仏教との間には心所法分類の完成には七八百年という年代的相違があり、従ってその分類組織も有部のものは独創的であり、瑜伽行派はこれを継承して改善し、パーリ佛教は直接には有部等の影響を受けなかったかも知れないが、その心所説は間接的には有部や瑜伽行派からのなんらかの影響を受けて発達したものと見ることができであろう」と総括している。

派の「五位百法」を挙げることができる⁷。この二つの分類体系においては、心所法に分類される法が最も多く、有部では46法、瑜伽行派では51法を数えており、それぞれ全体の半数以上を占めている。瑜伽行派の心所分類の冒頭に位置するのが、五遍行という分類概念である。

1.1.3 五遍行と他の学派の心所分類における関連概念

遍行とは、教理的には複雑な解釈がなされるが、一言で言えば、遍在する心作用を意味する。瑜伽行派は、作意 (manaskāra)・触 (sparśa)・受 (vedanā)・想 (saṃjñā)・思 (cetanā) の五つを遍在する心作用とし、五つの「遍行」(sarvatraga) と称した。

この分類概念は瑜伽行派に特有のものではあるが、関連する分類概念が有部・上座部によっても説かれている。有部・上座部の心所説は区分方法に多少の相違はあるが、「遍在する」という性質をもつ心所のグループとして、説一切有部には「十大地法」が、上座部には「共一切心心所」がある。

有部は、受・思・想・欲・触・慧・念・作意・勝解・三摩地を十の「大地法」(mahābhūmika) と総称する。

有部の説く「大地」は、隠喩を用いて心と心所との関係を表したものである。すなわち、心は大地 (mahābhūmi) のようであり、心所はその大地のような心に属し、その上に生じ、働くものである⁸。このように、有部における心所法の分類は、基本的に「地」という隠喩を共通に用いる特徴が見られる⁹。その中で、十大地法は「何の限定もないいかなる心においても遍く俱生するところの心所の群 (原文そのまま)」¹⁰とされており、心所法の分類概念の冒頭に位置している (第1.2.2.1節の表参照)。

⁷ 「七十五法」という呼称は、『阿毘達磨俱舍論』に対して玄奘の弟子普光が著した注釈書『俱舍論記』に初出する。「五位百法」は、世親作と伝えられる『大乘百法明門論』の分類法に従った呼称である。

斎藤ほか [2014 : iii] によれば、五位百法と五位七十五法との間には、各々の法の定義以外に、配置や分類に関して以下のような相違点がある。第一に、五つのカテゴリーの配列順序をみると、有部の体系では、色 (rūpa, 物) は心・心所に先行して最初に配置されているのに対して、瑜伽行派の体系では、心が冒頭に置かれ、色は心・心所の後に配置されている。第二に、「心」の分類に関しては、有部が心作用 (心所) の基礎という観点からただ一つの心として扱うのに対して、瑜伽行派では、心を「識」の観点から八識に開いて詳説する。第三に、有部の体系では、「あらゆる心に遍在する心作用」として、心所法に「十大地法」という分類が設けられている。これに対して、瑜伽行派は、この十の心所法を五遍行と五別境という二種類の心所法に区分して説明する。第四に、瑜伽行派では、随煩惱 (根本煩惱に付随する煩惱) や心不相応行 (心に相応しない形成作用) などの法は実在する存在ではなく、ただ「言語表示としての存在」(仮有) であるとしている。

⁸ 『俱舍論』では次のように説明している。AKBh 54, 14–15: bhūmir nāma gativiśayaḥ/ yo hi yasya gativiśayaḥ sa tasya bhūmir ity ucyate/ tatra mahatī bhūmir eśām iti mahābhūmikāḥ ye sarvatra cetasi bhavanti/ (【訳】地とは行く領域 (生起する範囲) である。なぜなら、ある [法] はある [法] の行く領域であるとき、かの [法] がその [法] にとって [比喩的に] 地と言われる。) gativiśaya に関しては櫻部 [1979 : 281] 参照。

⁹ 有部の心所法の分類は、不定法 (aniyata, 善、煩惱のいずれの心にも限定されない心所) 以外に、「十大地法」(mahābhūmika, 大地 [のような心] に属する十法)、「十大善地法」(kuśalamahābhūmika, 善の大地 [のような心] に属する十法)、「六大煩惱地法」(kleśamahābhūmika, 煩惱の大地 [のような心] に属する六法)、「二大不善地法」(akuśalamahābhūmika, 不善の大地 [のような心] に属する二法)、「十小煩惱地法」(parīttakleśabhūmika, 小煩惱の地 [のような心] に属する十法) に分類されている。

¹⁰ 吉元 [1982 : 208] は、次に示す『俱舍論』の説明などに基づいて、十大地法を上記のとおり解釈した。AKBh 54, 15–16: tatra mahatī bhūmir eśām iti mahābhūmikāḥ ye sarvatra cetasi bhavanti/ (【訳】その [大地, 大善地, 大煩惱地などの五種類] の中で、あらゆる場合の心に存在するこれら [の心所法] にとって、地 (行く領域) は大きいので、[これらの心所法は] 大地 [法] である。)

この十の心所は、初期の有部論書『界身足論』にすでに登場する¹¹。それ以降の論書では、順序の相違はあるものの、内容的にはそのまま継承されている¹²。

上座部の分類体系では、触・受・想・思・心一境性¹³・命根¹⁴・作意の七つを「共一切心心所」(sabbacittasādhāraṇa, 八十九心すべてに共通する心所)¹⁵とし、心所の分類の冒頭に置いている¹⁶。

このように、有部の十大地法、瑜伽行派の五遍行、上座部の共一切心心所では、触・受・想・思・作意の五項目が共通している。

1.2 先行研究

1.2.1 心所に関する研究における一般的考察方法

アビダルマの体系では、心所法は数が多いうえ、各論書における分類や説明は必ずしも一致しない。心所説に関する研究は次の4つの側面に注目してなされたものに大別される。

- (1) 特定の文献における心所法の体系、ないし特定の学派の心所法の体系を整理するもの。具体的には、分類法と分類概念、法の数、法の配列順、法の名称と定義などについて確認し考察するものである。
- (2) 学派の思想史を考察するもの。すなわち各論書における心所説を比較し、その発達史を考察するものである。とくに有部を中心とするものが多い¹⁷。
- (3) 学派の間、とくに有部・瑜伽行派の間の心所説を比較し、その発達や変遷を考察するもの。瑜伽行派の心所説に関する研究に多く見られる。瑜伽行派と有部の心所説は共

¹¹ 一色 [2015 : 28] は、「これら諸学者の研究の中から共通する見解を集めるならば、〈大地〉説について以下のような発達史を抽出することができる。すなわち、〈大地〉説は『界身足論』に始まり、『衆事分論』、『品類足論』、『甘露味論』、『旧婆沙』、『新婆沙』、『心論』、『心論経』、『雑心論』、『俱舍論』と継承された」と総括している。

¹² 勝又 [1961 : 423] によれば、「(前略) 後世の論書になるといづれも十大地法説をそのまま継承している。しかし十大地法の配列順序は一定していないのであって(後略)」としている。

¹³ 心一境性 (cittass' ekaggatā/cittkekaggatā) は、大まかに言えば、精神集中を意味する。定 (samādhi)、止 (samatha)、心住 (cittatṭhiti) ともいう。水野 [1964 : 414] 参照。

¹⁴ 命根 (jīvitindriya) が心に遍在する心所に配置されていることは、パーリ仏教の心・心所説に特有の説である。パーリ仏教では、命根を色命根と非色命根との二つに区別し、前者は色身の活動と存続、後者は心・心所の活動と存続を維持するために不可欠な要素であるとしている。共一切心心所における命根は、非色命根に相当する。水野 [1964 : 424-425] 参照。

¹⁵ 水野 [1964 : 57] は、「ところがパーリ仏教では阿毘達磨時代に心識分類の標準が確定し、その注釈時代以後は一切心は常に必ず八十九種または百二十一種として分類され、八十九心説は心識分類の定説となったのである」としている。八十九心の分類の標準は、七識界門・三性門・界繫門・五受門・有因無因門の五つである。水野 [1964 : 57] 参照。

¹⁶ 上座部の分類体系の成立は比較的遅い。その発端となったのがブッダゴーサ (5世紀頃) とほぼ同時代と言われるブッダダッタ (Buddhadatta, 仏授) の *Abhidhammāvatāra* (『入阿毘達磨論』) や *Rūpārūpavibhāga* (『色非色分別論』) であり、それらを最終的に体系化したのは、12世紀頃のアヌルッダ (Anuruddha, 阿那律) が著した *Abhidhammatthasaṅgaha* (『撰阿毘達磨義論』) であったとされている。ブッダダッタは、一切法を心・心所・色・涅槃の四つに分類した。また、心所として五十二法を列挙し、それらをさらに共一切心心所・善心所・不善心所の三つに分類した。アヌルッダはそれを継承しながらも、五十二心所を共一切心心所・雑心所・不善心所・共善浄心所・離心所・無量心所・慧根の七つに分類した。水野 [1964 : 262-264]、吉元 [1982 : 197] 参照。

¹⁷ 例えば、有部の心所論については、木村泰賢 [1925] 「佛教心理論に於ける心作用分類の発達」以来、数多くの研究がなされた。一色 [2015 : 28, 43] 参照。

通点が多く、密接に関連している。そのため、瑜伽行派の心所説を論じるとき、有部の心所説から瑜伽行派の心所説への発展と変遷に大きな関心が寄せられた。

- (4) 阿含・ニカーヤに遡って、関連する概念を考察し、心所説の由来や発達過程を探究するもの¹⁸。有部、上座部の心所説に関する研究に多く見られる。瑜伽行派の心所説研究に関しては、(3)に述べたように有部の心所説との比較に尽き、阿含・ニカーヤに遡って考察するものは殆どない。

(1) から (4) のいずれにおいても、文献における定義を収集し、文献成立の前後関係に基づいて比較・検討するかたちで研究が行われている。

1.2.2 先行研究における五遍行に対する考察

五遍行は、瑜伽行派の文献において、心・心所説に関する議論の中でしばしば言及される。五遍行を扱う従来の研究では、以下のような考察が行われている。

1.2.2.1 五遍行と十大地法の関係

有部と瑜伽行派の心・心所説は、両派の代表的な分類法である五位七十五法と五位百法に従って示せば、次のようになる¹⁹。

有部の心・心所説			瑜伽行派の心・心所説	
心 (1)	心 (= 識, 意)		心 (8)	眼識, 耳識, 鼻識, 舌識, 身識, 意識, 末那識, 阿頼耶識
心 所 (46)	大地法 (10)	受, 想, 思, 欲, 觸, 慧, 念, 作意, 勝解, 三摩地	遍行(5)	作意, 觸, 受, 想, 思
	大善地 法(10)	信, 勤, 捨, 慚, 愧, 無貪, 無 瞋, 不害, 輕安, 不放逸	別境(5)	欲, 勝解, 念, 定, 慧
	大煩惱 地法(6)	無明, 放逸, 懈怠, 不信, 昏沈, 掉舉	善(11)	信, 精進, 慚, 愧, 無貪, 無瞋, 無癡, 輕安, 不放逸, 捨, 不害
	大不善 地法(2)	無慚, 無愧	煩惱(6)	貪, 瞋, 慢, 無明, 疑, 不正見
	小煩惱 地法(10)	忿, 覆, 慳, 嫉, 惱, 害, 誑, 諂, 憍, 恨	隨煩惱 (20)	忿, 恨, 惱, 覆, 誑, 諂, 憍, 害, 嫉, 慳, 無慚, 無愧, 不信, 懈怠, 放逸, 昏沈, 掉舉, 失念, 不正知, 散亂
	不定地 法(8)	惡作, 眠, 尋, 伺, 貪, 瞋, 慢, 猶豫	不定(4)	睡眠, 惡作, 尋, 伺

¹⁸ 例えば、水野 [1964] 『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』はその代表的な研究例である。水野 [1942] 「心心所思想の發生過程に就て」(水野 [1997] 収録), 勝又 [1956] 「十大地法説の成立過程について」(勝又 [1961] 収録), 西村 [2002] 『アビダルマ教学』などにおいても心所説の由来や発達過程について詳細な議論が行われている。

¹⁹ 斎藤ほか [2011 : xi], 斎藤ほか [2014 : x] 参照。

第 1.1.3 節で述べたように、遍行に配当される五つの心所（作意・触・受・想・思）は、有部では十大地法に分類される。さらに、瑜伽行派の心所説では、五遍行の次に、欲（chanda）・勝解（adhimokṣa）・念（smṛti）・定／三摩地（samādhi）・慧（prajñā）の五つの「別境」（pratinīyataviṣaya）が説かれる。別境とは、それぞれ特殊な対象をもつ心所である。この五遍行と五別境をあわせると、説一切有部の説く十大地法（受、想、思、欲、觸、慧、念、作意、勝解、三摩地）になる。

つまり、瑜伽行派の五遍行と五別境は、有部の十大地法と密接な関係を有することが分かる。十大地法は『界身足論』以来の数多くの有部論書において説明されている（注 11 参照）。そのうち、『界身足論』『品類足論』『毘婆沙論』などは 2-3 世紀以前にすでに成立している²⁰。つまり、瑜伽行派の文献に先んじて成立していることになる。このため、五遍行と五別境は、瑜伽行派独自の考察によって十大地法を二分したものである、と従来から指摘されている²¹。

さらに、瑜伽行派が十大地法を五遍行と五別境に二分した理由について、次のような議論が行われた。まず、水野 [1964 : 331-332] と吉元 [1982 : 202] は、識の設定が有部と異なることを主たる理由として挙げている。すなわち、瑜伽行派は有部や上座部とは異なり、心を八識と捉えており、心に属する心所をアーラヤ識や末那識との対応とも併せて考察し、解釈する。それゆえ、欲・勝解・念・定・慧の五つは、アーラヤ識には相応しないため、「別境」として別立てすることになった。一方、作意・触・受・想・思の五つが八識に共通して存在することを認め、この五法を遍在する心所とし、有部の十大地法と同様に、すべての心所法の筆頭に置いている。

また、前に述べたように、有部の大地法はいかなる心にも遍在する心所を意味している。瑜伽行派では、遍在するという性質をより厳密に分析しており、その理解は有部と異なっていることが指摘されている。勝又 [1961 : 378]、吉元 [1985 : 157] によれば、『瑜伽論』では、遍在の性質として、有部の文献には見られない一切性・一切地・一切時・一切俱の四つが説明されており、作意などの五心所はこの四つをすべて備えているのに対して、欲などの五心所は一切時・一切俱の二つを備えていないとされている。さらに勝又 [1961 : 379] は、『瑜伽論』においては、欲などの五心所は「それぞれの各別の境を縁ずる」とされているため、「別境の心所という思想が確立したのである」と指摘している。

先行研究の説をまとめると、欲などの五心所は遍在するという性質にあてはまらないが故に別境として分けられた、ということになる。

1.2.2.2 五遍行に属する心所の考察

先行研究では、遍行・別境と十大地法との比較検討が行われた。その結果、別境五法の定義は有部のものと大きな相違が認められるのに対して²²、遍行五法の定義は、有部の説とほ

²⁰ 『界身足論』『品類足論』については注 1 参照。『毘婆沙論』の成立年代は、一般には 2-3 世紀頃と推定されている。平川 [1974 : 185-186] 参照。

²¹ 例えば、水野 [1964 : 331] は、「有部の十大地法は瑜伽行派では五遍行・五別境の二類とされた」と述べる。また、勝又 [1961 : 437] は、「瑜伽論では四種一切の原理を立てて十大地法説を批判し、十大地法を遍行と別境とに区分したのであるが、ついで成唯識論では特に欲・勝解・念・定・慧が遍行ではない理由を明確にしている」と述べる。

²² 吉元 [1985] は別境心所の定義について詳しく考察し、「別境心所に当る五心所の定義では、瑜伽唯識学派と説一切有部の論書の間では、はっきりとその定義の仕方が異なっている」と指摘している（[1985 : 163]）。

ぼ同様であることが指摘されている²³。

また、配列順序についても詳細な考察がなされている。すなわち、有部の諸論書における十大地法の配列順序は一定ではない。これに対して、瑜伽行派の諸論書においては、五別境は常に「欲・勝解・念・定・慧」の順序になっている。五遍行については、「受、想、思」の三法の順序が固定されており、多くの場合、それらは触と作意の後に置かれる。これは、心所の生起順序に対する瑜伽行派の理解を反映したものである、という²⁴。

1.2.2.3 まとめ

このように、先行研究では、瑜伽行派の五遍行と五別境は、有部の十大地法を同派独自の教理に基づいて二分したものであるとされている。五遍行に関する研究は、有部の心所説との比較研究に基づき、十大地法から五遍行と五別境への変遷を論じるものが主要なものである²⁵。

その変遷の背景について、従来の研究は総じて次のように説明している。すなわち、欲などの五つの心所は、1) アーラヤ識と相応しない；2) 一切時・一切俱という二つの性質を備えていないため遍在するものではない；3) この五心所に対する瑜伽行派の定義はそもそも有部のものとは異なる点がある、という理由により、遍在心所から分立されたのである、という。つまり、瑜伽行派は欲などの五心所を独自に理解し、別境として別立てしたと考えられている。

一方、遍行の五心所については、ほとんどの研究によれば、瑜伽行派の理解は有部のものと定義上大差がない。言い換えれば、十大地法の中の作意などの五心所は、遍在する心所の枠内に留まり、「遍行」と名付けられたのである。

1.2.3 先行研究が提示する五遍行に関する疑問

しかしながら、五遍行説のこのような捉え方には疑問が残る。Schmithausen [1987] は、『瑜伽論』におけるアーラヤ識の説明を考察し、次に引用するように、潜在的識であるアーラヤ識が作意などの五心所と相応すると言えるかどうかには疑問の余地がある、と指摘している。

²³ 水野 [1964 : 384] は、触について、「その定義も大体有部説をうけており、觸は有部と同様に実有の法である」としている。受については、「瑜伽行派でも領納ということをも苦楽等の領納にかぎるとした」と述べて、『成唯識論』や『唯識三十頌釈』における説明を紹介している ([1964 : 394-396])。想については、「大体はパーリ仏教や有部の定義説明と同様であるが、(中略) 顕揚聖教論の定義のみは瑜伽行派独特の種子説をもって説明されている。しかしその内実はいずれも同一である」としている ([1964 : 404])。思については、「大体有部説と同様な定義説明がなされている」としている ([1964 : 410])。作意については、「有部や瑜伽行派の定義説明は大体同一であって (後略)」と述べている ([1964 : 430])。

吉元 [1985 : 162] は、「各論書におけるこれら十心所の定義を見ると、遍行心所に当る作意等の五心所には、さほど相違のないことがわかる」と述べ、五別境を別立することをめぐっては [1985 : 164, 166-167]、瑜伽行派説の作意と有部説の欲との関係、瑜伽行派説の想の作用と有部説の念の作用の関係などについて論じている。

²⁴ 以上は勝又 [1961 : 423-427] の要約である。

『集論』のみは受・想・思を先に置いている。勝又 [1961 : 426] は「これは五蘊説によって心所を分類した場合であるからである」と指摘している。

²⁵ そのほか、特定の文献における心所説を考察するものもあるが、数は少ない。例えば、Sharf [2016] “Is Yogacara Phenomenology Some Evidence? Some Evidence from the Cheng weishi lun” は、『成唯識論』における五遍行説を取り上げて、現象学との比較研究を行っている。

【訳】もしアーラヤ識の認識機能、すなわち「認識させること」、例えば対象を把握することや知覚することを真に受け取るならば、これら心作用の説は不合理なものでもないようだが、少なくともそれら（心作用）の中の一部はそれ（アーラヤ識）の潜在意識の性質とはそう簡単に適合するものでもない。（中略）想、思、作意のような本来活動的なものである心作用の場合、問題があるかもしれない²⁶。

また、Schmithausen [1987 : 86] は、アーラヤ識が五心所と相応すると説く場合、ほかの教説との齟齬が生じてしまうことを指摘している（本論第3章第3.1節参照）。

このアーラヤ識が五心所と相応するという説について、Schmithausen [1987 : 85-87] では、それはアビダルマ的教理に説かれる識が必ず備える性質（所縁の認識や心所との相応関係など）をアーラヤ識の概念に追加したものである、と指摘されている。勝又 [1961] にも同様の見解が見られる²⁷。

ここで、問題点を改めて整理してみる。まず、

- A. 心を一集合体として心所説を説明する説一切有部と異なっており、瑜伽行派は、八識説を展開してその心所説を説く学派である。
- B. 瑜伽行派の心所説では、遍在する心所として、五遍行という特有の分類概念を立てている。

ということが議論の出発点である。そこで、先行研究は、十大地法という分類概念に遡り、その分類概念に基づいて五遍行説の成立の背景と過程を解釈し、次のことを指摘する。

- C. 瑜伽行派は十大地法を五遍行・五別境に二分した。欲などの五心所は、アーラヤ識と相応せず、また、すべての状態に遍在するものでもないため、別境として別立てした。一方、作意などの五心所は、アーラヤ識を含め、すべての心（識）と相応し、かつ、すべての状態に遍在するものとして、遍行と称した。
- D. 瑜伽行派と有部の文献において、五遍行とされる各心所の定義はほぼ同様である。つまり、瑜伽行派における遍行の五心所の定義は、基本的に有部の定義を継承している。

しかし、ここにひとつの疑問が生じる。すなわち、遍行の各心所の定義が有部とほぼ同様であるならば、五心所に対する瑜伽行派の理解もまた有部と類似していると考えられる。ところが、瑜伽行派は有部とはまったく異なる心・心所説を有し、その独特な心・心所説に基づいて、あらゆる心に遍在するものとして五遍行というカテゴリーを立てている。そうすると、五遍行という概念の外延である作意・触・受・想・思の五心所と、そこに内包される、遍在するという性質を有するものとは性格が一致せず、概念自体の整合性が取れていない。

Schmithausen [1987] は、このことについて疑義を呈しつつも、深くは追究していない。Schmithausen [1987] は、アーラヤ識が五心所と相応するという説は、アビダルマに説かれる識の性質をアーラヤ識の概念に追加したものである、と結論している。

このように、先行研究では、五遍行説は、五心所が遍在するという性質を八識に敷衍適用

²⁶ Schmithausen [1987 : 97-98] : “Though the assumption of these factors does not seem unreasonable if the cognitive function of ālayavijñāna – viz. “making known” (*vijñapti*), i. e. cognizing or perceiving, an object – is taken seriously, at least some of them do not easily fit its subliminal character. ... it may seem problematic in the case of essentially actualistic factors like ideation (*saṃjñā*), volitional impulse (*cetanā*) or (focussing of) attention (*manaskāra*).”

²⁷ 勝又 [1961 : 416-417] は、十大地法と五遍行を論じる中で、瑜伽行派の五遍行説について批判を呈している。すなわち、アーラヤ識にも五遍行が相応するという説は、単に六識の心所概念をアーラヤ識に機械的に移した形式的な理論にすぎず、不可解な学説となった、という。

した、形式的な理論にすぎない、と見做されている。

1.3 問題の所在

以上、五遍行説に関する先行研究を総括した。これらの研究には議論の余地があるが、それについて論じる前に、まず、アビダルマ論書に関する過去の研究について、再検討すべき点を述べる。

1.3.1 アビダルマ論書研究の再検討

アビダルマは数多くの法を扱っている。その上、各学派はそれぞれの理論的背景に基づいて法の組織化を行っている。様々な文献の中のアビダルマ体系は微妙に異なっており、時には整合性を欠いた状態を呈している。したがって、従来の研究では、アビダルマの理論、あるいは、少なくともその一部は、単に教条的、形式的なものにすぎないと捉える傾向がしばしば見られる。

アビダルマはこのように捉えられていたため、従来の研究では、第 1.2.1 節に述べたように、文献間・学派間の理解の相違や、理論の発達史に主眼が置かれていた。その際に、文献成立の順序は関連する理論の相互関係を判定するための重要な基準となっている。しかし、このような研究手法は問題を単純化してしまう可能性がある。

まず、学派教理の研究、特に学派間の理論の比較研究に際し、文献成立の順序を前提として議論を進めることは妥当であり、これは思想研究の基本的な手法でもある。しかし、インド仏教の場合、史料が甚だしく不足しており、各学派の実態は未だ十分に把握されていない。文献の成立順序は、必ずしもそこに説かれている教理の発展順序と一致するわけではない。この状況では、相似する理論、あるいは部分的に異なる理論が文献に見られる場合、それらの文献の成立順序が確定されたとしても、それだけで学派間の理論伝承の経路を積極的に証明することはできない。言い換えれば、文献の成立順序は補助的なものに過ぎず、決定的な方向を示すものではない。

また、アビダルマに形式的、教条主義的な一面があることは事実である。しかし、各学派の理論では、分類や解釈の仕方に多少の違いはあっても、法の名称は基本的に共有されている。これは、法の名称が共通の源、すなわち経典に由来することを反映している。第 1.1.1 節に述べたように、アビダルマは、各学派が、それぞれの学派の内部で継承してきた経典・教法に基づいて、教説を整理・解釈したものである。このようなアビダルマは、本来、修行の実践における観察や、学習・教授などの利便のために作られたものである。したがって、アビダルマは堅い法則を作るのではなく、法の整理と解釈に際して、学派の間、あるいは同じ学派に属する論書の間で異なる説明をする余地がある。

各派のアビダルマ体系は、法の選別・分類・配列や、法の定義・解説などの点でそれぞれの特徴を示しているが、このような明確な差異が生じるまでには、各派における仏説（経典）の伝承状況、教説の伝承状況、自派の理念、実践体験など、様々な要素に影響され、複雑な過程を経てきたものと推測される。

それゆえ、アビダルマの中の一見整合性を欠いたように見える説には、その形成過程を明らかにしうる手がかりが潜んでいる可能性もある。そのような矛盾を孕んだ説を単に不合理な教説として切り捨てず、そこから何を読み取ることができるかをより慎重に検討する必要があると言えよう。

1.3.2 五遍行説に関する先行研究の問題点

第 1.2.3 節に述べたように、先行研究では、遍行の五心所の定義と、この五心所が八識に共通して存在するという事の間には整合性がない、という疑義が呈されている。ここで、従来の研究における議論の流れや方法を改めて検討してみたい。

1.3.2.1 五遍行に対する先行研究の考察の方法について

文献成立の順序から見ると、五遍行には十大地法という先行する分類概念がある。このため、従来の研究では、瑜伽行派の五遍行と五別境は、有部の十大地法を継承し、さらに二分したものであるとされている。この仮説を前提として、第 1.2.2.1 節に述べたように、瑜伽行派の遍在心所についての考察（勝又 [1961 : 378-379]、水野 [1964 : 331-332]、吉元 [1985 : 153-166] など）は、十大地法を二分した理由に着目し、とくに別境の五心所は遍在心所ではないという側面に焦点を合わせたものとなっている²⁸。一方、遍行の五心所は遍在心所であるという側面に関しては、文献の内容に沿って紹介・説明するにとどまり、詳しい議論が殆どなされていない。

五遍行説と十大地法説は確かに一見すると類似する点が多い。しかし、前節で論じたように、この類似は、まず十大地法が存在し、それを二分することによって五遍行が生じたという継承の経路を積極的かつ決定的に証明しているとは言い難い。五遍行を考察する際に、十大地法という外部の概念を出発点として議論を進めると、問題の焦点がずれてしまう可能性がある。それゆえ、瑜伽行派内部の説に焦点を合わせ、その教説を解明することから考察を行うのが妥当と考えられる。

これまでの研究では、欲などの五心所を五別境として別立てしたという問題だけが殊更に取り上げられ、五遍行は顕著な特徴が見られないため議論の中心となっていなかった。しかし、五遍行は瑜伽行派の論書において八識の関連概念としてしばしば議論されており、同派の思想体系では五別境より重要視されている。五遍行についてより深く考察する必要があると考える所以である。

1.3.2.2 瑜伽行派文献の扱い方について

1.3.2.2.1 五遍行に言及する瑜伽行派の文献

瑜伽行派の文献の中で、五遍行について論じているのは、『瑜伽論』、『顕揚聖教論』、『阿毘達磨集論』、『五蘊論』、『唯識三十頌』、『成唯識論』、およびこれらの文献の注釈書である²⁹。

そのうち、第 1.1.1 節に述べたように、『瑜伽論』は瑜伽行派が拠り所とする最初期の文献である。五遍行という分類概念は『瑜伽論』に初めて登場する。『瑜伽論』に関しては第 1.3.2.3 節に論じる。

『瑜伽論』以降、五遍行は無著や世親の著作においてしばしば議論されている。『顕揚聖教論』（以下『顕揚論』）は無著が『瑜伽論』を組織的に整理したものと伝えられる。ときに『瑜伽論』の説明を発展させた記述が見られるが、五遍行についての説明は基本的に『瑜伽論』の内容に従っている。

また、無著に帰される『阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*、以下『集論』）は、その題

²⁸ このうち、吉元 [1985 : 153-166] は『阿毘達磨集論』を中心として、五遍行・五別境を取り上げて論じ、特に五別境について詳細な考察を行っている。

²⁹ 『百法明門論』は、五遍行について議論せず、単に列挙しているにとどまるため、ここでは省略する。

名の通り、瑜伽行派のアビダルマを詳細に整理・集成した論書である。一方、世親の『五蘊論』(*Pañcaskandhaka*)は、五蘊を中心に、関連する概念を簡潔にまとめたものである。いずれの論書においても、五遍行は五蘊の枠組みの中で簡潔に説明されている。

また、唯識思想を集大成した世親の代表作である『唯識三十頌』(以下『三十頌』)では、五遍行は八識いずれにも相応する心所として数回言及されている。

さらに、これらの論書に対する注釈書も五遍行について論じている。主なものとして、『集論』の釈論『阿毘達磨雜集論』(以下『雜集論』)³⁰、『五蘊論』に対する安慧(*Sthiramati*, 6世紀)の注釈『五蘊論釈』、『三十頌』に対する安慧の注釈『三十頌釈』、『成唯識論』³¹などが挙げられる。

1.3.2.2 先行研究における瑜伽行派文献の扱い方

従来の研究では、五遍行の定義について検討する場合、『集論』『五蘊論』『成唯識論』など、五遍行を集中的に論じるテキストを用いる傾向がある。また、『瑜伽論』の記述に言及する際でも、五遍行の定義を文脈から抽出し、『集論』など瑜伽行派の論書における定義文を併記のうえ、十大地法など他派の遍在心所の定義と比較することが多い。

しかしながら、先に示したように、『瑜伽論』『集論』『五蘊論』『成唯識論』など瑜伽行派の諸文献は、基本的に、異なる著者(編纂者)の作品であり、成立の歴史的な段階も確認できる。したがって、瑜伽行派の各論書の間には理解の相違が存する可能性を考慮する必要がある。

1.3.2.3 『瑜伽論』の記述に対する先行研究の考察について

第1.3.2.2.1節に述べたように、五遍行説は、瑜伽行派の最古の文献である『瑜伽論』に初出する。その後の瑜伽行派の論書は、法の数に些かの違いを見せるが、法の配置に関しては『瑜伽論』の説を基本的に継承している。したがって、五遍行に対する理解、とくに作意などの五心所が遍在する心所とされた経緯について検証する場合、『瑜伽論』における記述は、同派の論書の中でも非常に重要な考察対象であると言える。

1.3.2.3.1 『瑜伽論』の概略

『瑜伽師地論』(*Yogācārabhūmi*)は、瑜伽行派が拠り所とする最初期の文献であり、仏教教理を網羅的に論じる、漢訳で百巻にも及ぶ大部の論書である。著者は、中国伝では弥勒(*Maitreya*)、チベット伝では無著とされている³²。同書の成立は遅くとも4世紀頃とされて

³⁰ 『阿毘達磨雜集論』の著者について、漢伝では、釈論を著したのは獅子覚(あるいは覚獅子, *Buddhasiṃha*)であり、本論を含めて一つの作品として編纂したのは安慧であるとされる。一方、チベット伝では、本論と釈論を合体して編纂したのは最勝子(*Jinaputra*)であるとされる。塚本・松長・磯田[1990: 349]参照。

³¹ 『三十頌』には世親による自注がなく、十大論師によって注釈されたと言われるが、今日に伝わるのは安慧の釈論のみである。『成唯識論』は、玄奘(および窺基)がそれら諸論師の注釈を、護法の説を中心に合糅して漢訳したものである。塚本・松長・磯田[1990: 362]参照。

³² 『瑜伽論』は、中国伝においても、チベット伝においても、無著が禪定状態において兜率天に昇って弥勒から教を聴き、それを記録したものとされている。瑜伽行派では初祖とされている弥勒という人物に関しては、意見が分かれている(佐久間[2012: 25]参照)。高橋[2012: 74]は、「「弥勒」と称した人物が歴史的に実在したかどうかは定かではない。今日の学界では、歴史上の人物として確認できる最初の瑜伽行派の思想家は無着(*Asaṅga* アサンガ)であり、「弥勒」は無着に先立つ瑜伽行派創成期の論師達の総称、あるいは無着の瞑想体験中に現れたイメージと解釈されている」と総括している。

いるが、その成立事情に関しては不明な点が多く、未だ定説がない。一般には、『瑜伽論』の内部には思想的な発展段階が見られるが、全体として、後代の瑜伽行派の思想的な基盤を提供したと認められている³³。

『瑜伽論』は、「本地分」「撰決択分」「撰事分」「撰異門分」「撰積分」という五つの部分からなる。このうち、「本地分」がまず成立し、それを整理してさらに解明するものとして、「撰決択分」が成立したと考えられている。「本地分」は、玄奘訳によれば、十七の部分からなり³⁴、「撰決択分」もそれに応じて構成される。今日では、『瑜伽論』は思想的な発展段階の視点から、三つに分けることができると考えられている³⁵。

五遍行は主に「本地分」の「五識身相応地」と「意地」、及び「撰決択分」の関連箇所において説明されている。

1.3.2.3.2 『瑜伽論』の特徴

『瑜伽論』は、アビダルマ的要素が随所に備えているものの、いわゆるアビダルマ論書ではない。まず、同書は、各部分の成立の順序や、部分間の関係などに関して不明な点が多く、全体の構造は組織的に整っていない。この点において、『瑜伽論』は『集論』『五蘊論』などの論書とはかなり異なっている。次に、『瑜伽論』は、経典解釈、とくに初期経典を解釈する性格が強い。「撰事分」全体が阿含経典に対する注釈であるほか、「本地分」などにも、様々な形で経典解説を行っている部分がある³⁶。さらに、明確な文章で物事を定義して議論するアビダルマ論書とは異なり、『瑜伽論』では、複雑な理論を説明しているにもかかわらず、表現は必ずしも綿密ではなく、問題の本質を明言しないことも稀ではない。

また、『瑜伽論』では多様な内容が取り扱われており、教理を組織的に整然とまとめた部分が多い。しかしながら、心・心所の理論に関する記述は簡潔で、趣旨を理解することは必ずしも容易ではない。また、文脈と関係なく散発的に何らかの概念が説明されることがあり、時として、そうした箇所に重要な内容が含まれている。組織的にまとめた部分だけに着目すると、関連する繊細な議論を見落としてしまう恐れもある。それゆえ、『瑜伽論』を扱う際には、研究対象を関連する文脈に置いて考察する必要がある。

『瑜伽論』の五つの部分のうち、「本地分」の大多数はサンスクリットテキストが校訂出版されつつあるが、それ以外の部分は断片的に報告されているにすぎず、全体は漢訳とチベッ

³³ 高橋 [2012 : 77], 高橋 [2005 : 3-5] 参照。

『瑜伽論』は、全体的構成や各部分の関係に関して不明な点が多い。学者の中には、百巻にも及ぶこの論書は、複数の作者により、長期間にわたって編纂・増広され続けて現在伝わる形になったと考える傾向がある。一方、この増広説に対して、勝呂 [1989 : 249] は、「この予想は実際に『瑜伽論』を読めばただちに裏切られる。(中略)各部分が相互に引用し合っていて、現形が一時期において成立したものであることを示しているからである」と反論している。

³⁴ 十七とは、(1) 五識身相応地、(2) 意地、(3) 有尋有伺地、(4) 無尋唯伺地、(5) 無尋無伺地、(6) 三摩呬多地、(7) 非三摩呬多地、(8, 9) 有心無心地二地、(10) 聞所成地、(11) 思所成地、(12) 修所成地、(13) 声聞地、(14) 独觉地、(15) 菩薩地、(16) 有余依地、(17) 無余依地である。高橋 [2012 : 78-81] 参照。

³⁵ 高橋 [2012 : 82] によれば、Schmithausen [1987 : 14] は、アーラヤ識という概念に着目して、『瑜伽論』を、「①アーラヤ識への言及を含まない部分(『声聞地』『菩薩地』および「撰事分」)、②アーラヤ識が散見されるが、『解深密経』に言及しない部分(「本地分」のうち、『声聞地』『菩薩地』を除いた部分)、③アーラヤ識を詳細に扱い、『解深密経』を引用する部分(「撰決択分」)の三段階」に区分している。

³⁶ 宇井 [1958 : 315-342], 勝呂 [1989 : 272], 高橋 [2012 : 83] 参照。

ト語訳でのみ伝わる³⁷。また、「本地分」のサンスクリットテキストを漢訳およびチベット語訳と対照すると、しばしば内容の相違が見られ、中には原文が異なっていたと思われる部分もある。サンスクリット写本の作成年代は古くても10世紀ごろと言われており³⁸、漢訳とチベット語訳はそれぞれ7世紀と9世紀に訳出したものである。この場合、サンスクリット原典に加えて、漢訳とチベット語訳を参照する必要もある。

1.3.2.3.3 先行研究における『瑜伽論』の扱い方

『瑜伽論』を研究資料として扱う場合は、上記の様々な問題を解決しなければならない。しかし、先行研究では、『瑜伽論』における五遍行の定義を扱う際に、これらの問題にはあまり関心が払われていない。ほとんどの研究は、五遍行の定義を文脈から抽出し、他の論書における定義文と比較しながら考察している。吉元[1985:160-161]は、「本地分」の記述だけを取り上げ、「撰決択分」には言及していない。水野[1964:384-429]は、「本地分」と「撰決択分」の双方に言及しているものの、両者を併記するに留まる。

このように、『瑜伽論』における五遍行の理解は十分に研究されているとは言えない。

1.3.3 まとめ

五遍行に対する先行研究の上記の見解を総括すると、次のとおりである。

1. 瑜伽行派の五遍行と五別境は、有部の十大地法と密接な関係を有する。
2. 瑜伽行派における作意などの五心所の定義は有部の説とほぼ同様である。つまり、瑜伽行派における遍行の五心所の定義は、基本的に有部の定義を継承している。
3. 五遍行と五別境は、瑜伽行派独自の考察によって十大地法を二分したものである。十大地法を五遍行と五別境に二分した主要な理由の一つとして、作意などの五心所は、アーラヤ識を含め、すべての識に相応する一方、欲などの五心所はアーラヤ識には相応しないということが挙げられる。
4. アーラヤ識が作意などの五心所と相応するという事は『瑜伽論』に説かれている。この説は、有部アビダルマに説かれる識の性質（心所との相応関係など）をアーラヤ識の概念に追加したものである。
5. 以上のことから、五遍行説は、有部の五心所の定義を継承しつつ、五心所の遍在する性質を八識に敷衍適用した、形式的な理論にすぎない、と考えられている。

しかしながら、先行研究における『瑜伽論』の扱い方には議論の余地があり、『瑜伽論』が五遍行を如何に理解しているかは十分に研究されていない。

1.4 本研究の課題、構成および予想される成果

本論では次のような手順で考察を進める。

第1章では、「本地分」と「撰決択分」の説明に基づいて、初期経典、有部の論書、および瑜伽行派のその他論書と対照しながら、作意などの五心所に関する『瑜伽論』の説明を考察する。五心所の中の作意と思についての『瑜伽論』の説明には特に問題となる点があり、紙

³⁷ 「撰決択分」のサンスクリット語写本は、ごく一部を除き未報告である。

³⁸ 「本地分」については、声聞地、菩薩地、およびそれ以外の部分に各々対応する写本が存在する。写本の状態は部分によって異なるが、一般には、10世紀～12世紀頃のものとしてされている。塚本・松長・磯田[1990:322-326]、Delhey[2009:78-80]参照。

幅の都合で第1章において扱うことは難しい。それらの問題に関しては、第4章と第5章において詳しく考察する。

第1章、第4章および第5章の考察により、五心所に対する『瑜伽論』、および瑜伽行派の定義は必ずしも有部の説を継承していないことを指摘する。

第2章では、『瑜伽論』を中心として、「遍行」という概念に対する理解について検討する。この章の考察により、「遍行」という概念に関する『瑜伽論』の解釈が明らかになる。

第3章では、アーラヤ識の五心所に関する『瑜伽論』の記述を考察する。アーラヤ識が作意などの五心所と相応することは『瑜伽論』「撰決択分」において説明されている。それゆえ Schmithausen [1987] は、「撰決択分」の記述に基づいてこの問題を論じ、「本地分」ではアーラヤ識と心所の相応関係は殊更問題とされていなかったが、「撰決択分」に至って初めて両者の相応関係が示された、と指摘している。第3章では Schmithausen [1987] のこの見解を再検討し、「本地分」にはアーラヤ識と心所の相応関係を暗示する記述があることを指摘する。「本地分」のこの記述を分析することにより、『瑜伽論』のアーラヤ識が作意などの五心所と相応するという説は、必ずしも有部アビダルマの教理を踏襲しているわけではないことを指摘する。また、第3章ではアーラヤ識の五心所の特徴に関する『瑜伽論』の解釈を考察する。この考察により、アーラヤ識の五心所と六識の五心所は異なる性質を有することが明らかになる。

結論では、以上の考察を総括する。

また、付録Iでは、資料として、『瑜伽論』「本地分」と「撰決択分」における該当内容のテキストを抜粋して、校訂と和訳を施す。

付録II『『瑜伽論』「有尋有伺地」の縁起説に見られる説明文について』では、本論第3章の議論で用いる『瑜伽論』「本地分中有尋有伺地」の説明の一文について考察する。この一文は従来の研究では難解であると指摘されているが、本論ではこの問題に立ち入っていない。付録IIの考察により、この一文が初期経典の表現を解説している可能性を指摘することができる。

付録III「アーラヤ識の所縁としての器世間の説明における *aparicchinnā 再考」では、付録Iに示した「撰決択分」の抜粋の中の、アーラヤ識の所縁についての説明文に見られる *aparicchinnā という語について、先行研究の諸解釈を検討しつつ、「本地分」に関連する記述があることを指摘して解釈を試みる。

なお、本研究において『瑜伽論』「本地分」の「意地」「有尋有伺地」を引用する際は、基本的に Bhattacharya 校訂 *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga* を底本としたが、必要に応じて写本に基づき改訂を行った（校訂の方針、略号などについては「付録I 資料編 Text A」の説明を参照）。

第1章 五遍行についての『瑜伽論』の説明の概略

『瑜伽論』では、五遍行については「本地分中意地」、及び「摂決択分中五識身相応地・意地」（「本地分」の「五識身相応地」と「意地」に対する「摂決択分」の解説）において説明されている。「本地分中意地」と「摂決択分」の関連箇所では、作意・触・受・想・思（いわゆる五遍行）と欲・勝解・念・定・慧（いわゆる五別境）の十心所に関して、それぞれの本質とはたらきが説明されている。「本地分」と「摂決択分」の説明の構造は同様である。従来の研究は、基本的に「本地分」と「摂決択分」に見られるこれらの説明に基づいて、五心所に関する『瑜伽論』の理解を考察している。

しかし、『瑜伽論』の該当記述は簡潔で、趣旨を理解することは必ずしも容易ではない。「本地分中意地」の該当記述以外の箇所、および「本地分中五識身相応地」においても、関連する説明が散見される。また、「本地分」と「摂決択分」の説明の内容は基本的に一致しているが、必ずしも同様ではない。序章の第1.3.2.3節に述べたように、従来の研究のほとんどは、五遍行の定義をこれらの文中から抽出し、他の論書における定義文と比較しながら考察している。吉元〔1985：160-161〕は、「本地分」の記述だけを取り上げ、「摂決択分」には言及していない。水野〔1964：384-429〕は、「本地分」と「摂決択分」の双方に言及しているものの、両者を併記するに留まる。

本章では、「本地分」と「摂決択分」の説明に基づいて、初期経典、有部の論書、および瑜伽行派のその他論書と対照しながら、作意などの五心所に関する『瑜伽論』の理解を考察する。五心所の中の作意と思についての『瑜伽論』の説明には特に問題となる点があり、それらの問題に関しては、第4章と第5章において詳しく考察する。

1.1

*第1章第1.1節～第1.6節（ページ15-39）は、学位授与日である令和3年3月19日から5年以内に雑誌掲載等の形で掲載予定であるため、公表することができません。

第2章 「遍行」という概念

序章で述べたように、従来の研究では、作意などの五心所が遍在する心所とされた経緯、つまり五遍行という概念の形成について、十分な考察がなされていない。本章では、「遍行」という概念について、『瑜伽論』を中心として、瑜伽行派の論書における関連する記述を検討する。

遍在するという性質に関して、瑜伽行派の論書の記述には、概ね二種の解釈が見られる。ひとつは、すべての状態の心に、すべての地に、常に、心所が俱起するという解釈であり、いまひとつは、八識に共通して存在するという解釈である。前者は『瑜伽論』にのみ見られる。

2.1 すべての状態の心に、すべての地に、常に、心所が俱起するという遍在

2.1.1 「遍行」(sarvatraga) という語について

「遍行」は、すべての場所に行き渡っていることを意味する。それに「五」を付けて「五遍行」というのは古来中国法相宗の伝統的な呼称である。これがサンスクリット語から直接訳出した術語であるかどうかは資料不足のため断定できない。「遍行」の原語である *sarvatraga* (すべてのところにある) という語は、しばしば形容詞として名詞を修飾する。心所法にかかる場合は、遍在する心所法を意味し、作意・触・受・想・思の五法を指すが、それ以外の場合は必ずしもこの五心所を表すわけではない¹。この点を意識したのか、*sarvatraga* が心所法にかかる場合、漢文文献ではよく「遍行」に「五」を加えて、「五遍行」とし、作意などの五法を指すことを明示する。チベット語文献では、*sarvatraga* の訳語として、*thams cad du 'gro ba* (すべてのところにあるもの) と、*kun tu 'gro ba* (遍在するもの) との二つがあるが、五心所を表示する際は、基本的に *kun tu 'gro ba* (遍在するもの)、または *kun 'gro lnga* (五つの遍在するもの) を用いる。本研究においても便宜上、「五遍行」という呼称で五心所を総称する。

2.1.2 『瑜伽論』における「遍行」の理解

2.1.2.1 「本地分」における心所の区別方法

遍在する心所法を表す「遍行」(*sarvatraga*) という語は、後に述べるように、『瑜伽論』「撰決択分」の中に用例があるが、「本地分」にはその用例が見られない。

「本地分」では、数多くの心所法について、その特徴や性質によって整理と分類がすでに行われている。その記述の中で、分類の基準が示される。「本地分」では「遍行」の語を用いないが、その分類に関する説明から作意・触・受・想・思の五心所の共通点、すなわち遍在

¹ 例えば、『瑜伽論』「本地分中声聞地」では、「充滿している所縁たる事物」(*vyāpyāmbanavastu*) というものを説明する時、以下のような表現が見られる。ŚrBh-T2 48, 13-14 : *tāny etāni bhavanti catvāry āmbanavastūni sarvatragāni sarveṣv āmbaneṣv anugatāni* / (【訳】ほかならぬこれらのものである。四つの所縁たるものはすべてのところに行き渡っているものであり、すべての所縁にしたがうものである)。漢訳(427c19-20)では、「如是四種所縁境事，遍行一切，隨入一切所縁境中」，チベット語訳(D dzi 76b4; P wi 92a7-8)では *dmigs pa'i dngos po bzhi po de dag ni thams cad du 'gro zhing/ dmigs pa thams cad kyi rjes su song ba dang* と訳されている。

することに対する『瑜伽論』の理解が窺われる。

Text A 4.1.1, 4.1.2:

また、心と心所の束の中に、心が認識される。また、五十三の心所が認識される。すなわち、〔随行するものの場合に〕述べられた通りの、作意を^き始めとし、尋（思考）と伺（考察）を^き終わりとするものである。

これら心所法の中で、すべての状態（善、染汚など）の心において生じ（sarvatra citta utpadyante）、すべての地にいるものにおいて（sarvabhūmike）〔生じ〕、すべての時に（sarvadā）〔生じ〕、すべてが（sarve）〔生じる〕ものとはどれか。答える。五つ、すなわち作意を始めとして、思を^き終わりとするものである。

すべての状態〔の心〕において生じ、すべての地にいるものにおいて〔生じるが〕、しかし、すべての時に〔生じる〕ではなく、すべてが〔生じる〕で〔も〕ないものとはどれか。同じく五つ、すなわち、欲を始めとして、慧を^き終わりとするものである。

すべての状態〔の心において生じる〕ではなく、善〔心〕のみに〔生じる〕（kuśala eva na sarvatra）、しかし、すべての地にいるものにおいて〔生じるが〕、すべての時に〔生じる〕ではなく、すべてが〔生じる〕で〔も〕ないものとはどれか。信を始めとして、不害を^き終わりとするものである。

すべての状態〔の心において生じる〕ではなく、染汚〔心〕のみに〔生じる〕（kliṣṭa eva na sarvatra）、すべての地にいるものにおいて〔生じる〕で〔も〕なく、すべての時に〔生じる〕で〔も〕なく、すべてが〔生じる〕で〔も〕ないものとはどれか。貪を始めとして、不正知を^き終わりとするものである。

すべての状態〔の心において生じる〕が、しかし、すべての地にいるものにおいて〔生じる〕ではなく、すべての時に〔生じる〕で〔も〕なく、すべてが〔生じる〕で〔も〕ないものとはどれか。悪作（後悔）^{おき}を始めとして、伺（考察）を^き終わりとするものである²。

「本地分中意地」のこの記述では、意地に随行するものについての説明（Text A 2.4 および本章第 2.2.1.1 節参照）に挙げられている心所を、sarvatra citte, sarvabhūmike, sarvadā, sarve という四つの側面から考察し、五種類に区分している。この四つの sarva については説明がなされていないので、意味は明瞭ではない。後述のとおり、水野 [1964]、吉元 [1985] では「遍行」の意味を論じる中で、この記述に言及するが、両者の解釈には異なる点もある。以下では、まずこの四つの sarva の意味について水野 [1964]、吉元 [1985] 両説に再検討を加えて考察する。

(1) sarvatra citte に関しては、直後の説明に照らせば、その意味が明確になる。信などの心所については、「sarvatra ではなく、善〔心〕のみに〔生じる〕」（kuśala eva na sarvatra）とあり、また貪などの心所については、「sarvatra ではなく、染汚〔心〕のみに〔生じる〕」（kliṣṭa eva na sarvatra）と説明する。『瑜伽論』の注釈書である『瑜伽論釈』（*Yogācārabhūmivyākhyā）

² Text A 4.1.1, 4.1.2: tatra cittacaitasikakalāpe cittam copalabhyate | caitasās ca tripañcāśad upalabhyante | tadyathā manaskārādayo vitarkavicāraparyavasānā yathā nirdiṣṭāḥ ||

eṣāṃ caitasānāṃ dharmānāṃ kati sarvatra citta utpadyante sarvabhūmike sarvadā sarve ca | āha | pañca manaskārādayas cetanāparyavasānāḥ |

kati sarvatrotpadyante sarvabhūmike na ca sarvadā na sarve | pañcaiva chandādayaḥ prajñāparyavasānāḥ | kati kuśala eva na sarvatra | api tu sarvabhūmike na sarvadā na sarve | śraddhādayo 'hiṃsāparyavasānāḥ | kati kliṣṭa eva na sarvatra na sarvabhūmike na sarvadā na sarve | rāgādayo 'samprajanyaparyavasānāḥ | kati sarvatra no tu sarvabhūmike na sarvadā na sarve | kaukṛtyādayo vicāraparyavasānāḥ ||

においては、「すべての心にとは、善・不善・無記の〔心〕ということである」と解説している³。

善・不善・無記は心の状態である。したがって、*sarvatra citte* とは、善・雑染に関わらず、すべての状態の心において、ということの意味していることが分かる。この部分に関して、水野〔1964：319〕では「善・不善・無記の一切三性にわたり」、吉元〔1985：156〕では「善、悪等三性の心に共通して」とし、近似した理解を示している。

(2) *sarvabhūmike* に関しては、先行研究においては確定的な解釈が見られない。水野〔1964：319〕では、「欲、色、無色の三界一切地に生じ」とするが、吉元〔1985：156〕では「あらゆる心理状態において」とする⁴。

『瑜伽論』の用例から見ると、*bhūmi* は多くの場合、修行の階梯、もしくは禅定の段階を指し、場合によっては禅定の段階によって区分される領域（欲界、色界の諸禅天など）を指す。「本地分」の「有尋有伺地」では、有情の楽の区別について詳論する箇所がある。ここでは、楽を七聖財というものに関連付けて、その七聖財から生じる楽と、そうではない楽の二種類に分類している。そして、後者について、「欲界を範囲とするものであるからこそ、すべての地にあるもの (*sarvabhūmika*) ではない⁵と説明する。また、「撰決択分中有尋有伺等三地」では、一部の随煩惱について、「初静慮の地に属するものである。残りのものはすべての地に属するものである」と説明する⁶。このことから、*sarvabhūmika* は三界、すなわち禅定にかかわっていることを表す修飾語であることが分かる。

『瑜伽論釈』では、「すべての地に属するものでありというのは、欲〔界〕・色〔界〕・無色〔界〕・無漏〔界〕の地に属するものであるから。(中略) すべての地に属するものでもないとは、貪などが無漏地には存在しないので、すべての地に属するものではない」と解説している⁷。また、玄奘はこの *sarvabhūmika* を「一切地」と訳す。この「一切地」について、『瑜

³ YBhVy (D 'i 105b6; P yi 129a7-8): *sems thams cad du zhes bya ba ni dge ba dang/ mi dge ba dang/ lung du ma bstan pa'i'o (pa'i'o D; pa'o P) //*

⁴ 吉元〔1985：157〕では、有部の『アビダルマディーパ』と『俱舍論』における *bhūmika* の説明に基づき(吉元〔1982：207-208〕参照)、「本地分中意地」におけるこの *sarvabhūmika* について、「地 (*bhūmika*) とは、心の趣くところ (*gati*)、すなわち行境 (*gati-viṣaya*) ということであり、心の生起する領域という意味である。従って、一切地とは、遍く心所が活動し生起するところのあらゆる領域ということになる」と述べている。

⁵ YBh 96, 16-17 : *punar anāryadhanajam na sarvabhūmikaṃ kāmāvacaratvād eva |* (【訳】また、聖財から生じるのではない〔楽〕は、欲界を範囲とするものであるからこそ、すべての地にあるものではない。)

⁶ チベット語訳 (D zhi 112a1-2; P zi 117a1-3) : *de la mnyam par gzhang pa'i sa pa'i nye ba'i nyon mongs pa rnams ni 'di lta ste/ rtog pa dang dpyod pa dang sgyu dang/ g.yo dang/ rmugs pa dang rgod pa dang rgyags pa dang bag med pa dang (dang D; dang/ P) le lo rnams te/ de la dang po bzhi ni bsam gtan dang po'i sa pa dag yin no// lhag ma rnams ni sa thams cad pa (pa P; dang dus thams cad pa D) dag yin par rig par bya'o//* (【訳】また、〔禅〕定を有する地の諸々の随煩惱は、例えば尋・伺・誑・諂・昏沈・掉挙・橋・放逸・懈怠であり、その中で、最初の四つのは初静慮の地に属するものである。残りのものはすべての地に属するものであると知られるべきである。)

漢訳 (622c8-11) : 「又有定地諸隨煩惱，謂尋・伺・誑・諂・昏沈・掉舉・橋・放逸・懈怠等，初静慮地有初四種，餘通一切地。」(【訳】また、〔禅〕定を有する地の諸々の随煩惱，例えば尋・伺・誑・諂・昏沈・掉舉・橋・放逸・懈怠など〔の中で〕，初静慮には最初の四つが存在し，残りのものは一切地に共通して存在する。)

「撰決択分」では、心所の分類は上記の「本地分」の分類と少し異なる。水野〔1964：321〕は、「食以下のものを煩惱・随煩惱に二分し、前半で区分された悪作・睡眠・尋・伺の類は別に立てずして、これを随煩惱中におさめている」と指摘している。

⁷ YBhVy (D 105b7-106a2; P 129b1-3): *sa thams cad pa yin te zhes bya ba ni 'dod pa dang/ gzugs dang/ gzugs*

伽師地論略纂』(以下『略纂』)の著者である基は二通りの解釈を示している。ひとつは「有尋などの三地」,すなわち有尋有伺,無尋有伺,無尋無伺という三つの地を指すとする解釈であり,いまひとつは色界の四禪天,無色界の四天,および欲界の合せて九つの段階を指すとする解釈である⁸。いずれの解釈においても,基は禪定との関連で「一切地」を捉えている。

したがって,この文脈における *sarvabhūmike* は,基本的に,水野 [1964] のように,禪定に関連する概念として三界と理解するのが妥当と考えられる。また,『瑜伽論釈』に示されている,無漏〔界〕という修行論的視点を含む解釈も合理的と考えられる。

(3) *sarvadā* は,文字通りに解釈すれば「すべての時に」である。『瑜伽論釈』では,この語が何を意味するかについて解説がなされていない。『略纂』では「一切時とは,心が生じる場合,必ず存在する」と解説する⁹。水野 [1964 : 319] では「一切時に」とし,特に説明していない。吉元 [1985 : 156] では「心ある限り,無始以来いつの時にも」とする。いずれの解釈も,*sarvadā* とは,識が働いている限り常にある,という意味であるという共通の理解を示している。本研究もこのような理解をとる。

(4) *sarve* は,文脈から見ると,「〔五心所〕すべて」と理解できる。この語について,吉元 [1985 : 156] には「(これら五心所が)互いに俱起し合って同時に」という説明が見られ,水野 [1964 : 319] では「一切心に相応俱起する」とされている。

玄奘はこの *sarve* を「一切」と訳す。『略纂』では,この「一切」について,「〔それら心所は〕自体の状態にしたがって,一つが起きると必ず共に〔起きる〕」と解説する¹⁰。また,『瑜伽論釈』では,欲から慧までの五つ,すなわち五別境に対して,「すべてが〔生じる〕で〔も〕ないもの (*na sarve [utpadyante]*) という場合,ここで,その意味は,望まれたものに対してのみ生じる,その場合,ほかのものが生じないのであって,ある時には二つ,ある時には三つが生じるが,〔欲などの五心所〕すべてが必ず生じるのではないと観察されるべきである」と説明する¹¹。

したがって, *sarve* は,それらの「遍行」とされるべき心所がすべて共に存在する,すなわち,俱起することを意味している。つまり,すべての心ではなく,五心所すべて,を表していることが分かる。したがって,水野 [1964] の「一切心に相応俱起する」という理解には難点がある。

以上の考察に基づいて,「本地分」のこの記述を一表に纏めれば,次のとおりになる。

med pa dang/ zag pa med pa'i sa pa yin pa'i phyir rol/ ... *sa thams cad pa yang ma yin zhes bya ba ni 'dod chags la sogs pa ni zag (zag P; gang zag D) pa med pa'i sa la med pa'i phyir sa thams cad pa ma yin no//*

⁸ 『略纂』(T43, 20c2-3): 「一切地者有二義。一云有尋等三地。二云色四,無色四,并欲界一,合為九地。」(【訳】一切地とは二つの意味がある。一つは,有尋などの三地という。二つは,色〔界〕の四つ,無色〔界〕の四つ,並びに欲界の一つ,合せて九つの地となるという。)

⁹ 『略纂』(20c3-4): 「一切時者,心生必有。」

¹⁰ 『略纂』(20c4-5): 「一切耶者,隨其自位,起一必俱。」

¹¹ YBhVy (D 105b6-b7; P 129a8-b1): *thams cad ma yin pa zhes bya ba la/ 'dir de'i don ni gang gi tshe 'dod pa tsam la 'byung ba de'i tshe gzhan dag mi 'byung la/ (la/ D; gi (ill.) P) res 'ga' ni gnyis/ res 'ga' ni gsum 'byung gi/ (gi/ D; gi P) thams cad nges par 'byung ba ni ma yin par blta bar bya'o//*

心所 (分類名称 ¹²)	sarvatra citte (善・不善・無記の 状態の心すべてに)	sarvabhūmike (三界・無漏界 すべてに)	sarvadā (常に)	sarve (心所すべて が〔同時に〕)
作意～思 (遍行)	○	○	○	○
欲～慧 (別境)	○	○	×	×
信～不害 (善)	×	○	×	×
貪～不正知 (煩惱, 随煩惱)	×	×	×	×
悪作～伺 (不定)	○	×	×	×

2.1.2.2 作意等の五心所と欲等の五心所の区別に関する「本地分」の理解

四つの sarva に関する「本地分」の上記の記述から、作意などの五心所と異なり、欲などの五心所は sarvadā (常に生じる) と sarve (五心所すべてが〔同時に〕生じる) という二つの特徴を備えていないことが分かる。つまり、作意などの五心所と欲などの五心所の区別は、主として、sarvadā と sarve の要件を満たしているか否かにあると言える。「本地分」では、この記述の少し後に説明があり、sarvadā と sarve についての具体的な理解が窺える。

まず、物事を認識するとき、作意などの五心所がそれぞれの役割を果たし、同じ物事の異なる特徴を認識させるということが説明される。

Text A 4.4.1:

そこで、識によって、物事 (vastu) の特徴を全体的に認識させる (vijñāpayati)。同じその〔物事の特徴〕は、〔まだ〕認識させられていないものが認識されるべき特徴と言われ、それを作意によって認識させる。同じその〔物事の特徴の〕中に、好ましい〔特徴〕と、好ましくない〔特徴〕と、その両者のいづれでもない特徴があり、それを触によって受容する。同じその〔物事の特徴の〕中に、有益の〔特徴〕と、有害の〔特徴〕と、その両者のいづれでもない特徴があり、それを受によって受容する。同じその〔物事の特徴の〕中に、言語表現の発動因 (nimitta) たる特徴があり、それを想によって受容する。同じその〔物事の特徴の〕中に、正しい〔行為〕と、誤った〔行為〕と、その両者のいづれでもない行為 (pratipatti) の発動因たる特徴があり、それを思によって受容する。

したがって、これらの作意を始めとして、思を終わりとする心所は、すべての状態〔の心〕において〔生じ〕、すべての地にいるものにおいて〔生じ〕、すべての時に〔生じ〕、すべてが生じる¹³。

この記述は、一つの vastu (物事) を認識するとき、その vastu の、全体的な特徴を認識させるのは識であり、特定の特徴を認識させるのは作意などの五心所であると説明している。ここで、tad eva (同じその〔vastu の特徴]) や tatraiva (同じその〔vastu の特徴の〕中に) という言葉によって、五心所は同一の vastu の中の特定の特徴に対して各々働くことが強調されている。五心所が同一の vastu を認識対象としていることは、心・心所の活動時間の設定

¹² () 内は五位百法による分類名称。吉元 [1985 : 157] 参照。

¹³ Text A 4.4.1: tatra sakalam vastulakṣaṇam vijñānena vijñāpayati | tad evā vijñaptam vijñeyalakṣaṇam ity ucyate | yan manaskāreṇa vijñāpayati | tatraiva śubhāśubhobhayaviparītalakṣaṇam yat sparśena pratipadyate | tatraivānugrahopaghātobhayaviparītalakṣaṇam yad vedanayā pratipadyate | tatraiva vyavahāranimittalakṣaṇam yat samjñayā pratipadyate | tatraiva samyāmithyobhayaviparītapratipattinimittalakṣaṇam yac cetanayā pratipadyate |

tasmād ete manaskārādayaś cetanāparyavasānāś caitasāḥ sarvatra sarvabhūmike sarvadā sarve cotpadyante ||

に関わっている。文脈が前後するが、「本地分」では、上記引用箇所少し前で次のように述べている。

Text A 4.3.3:

如何にして一つの心を設定することがあるのか。言語習慣に従うもの (vyāvahārika) としての心の刹那によって [一つの心を設定するのであり]、[実際の] 活動の刹那によってではない。

言語習慣に従うもの [としての心の刹那] によって [設定される] 「一つの心」とは何か。ことばの同一の拠り所として、同一の物事に対して (**ekasmin vastuni**)、ある [一定の] 時間をかけて認識結果が生じる場合、その間、「一つの心」 [と設定される]。そしてまた、ある [心の刹那] はその [「一つの心」] と同じ相続に属する (**tatsamānapravāha**) 場合、その [心の刹那] も同じく「一つの [心]」と呼ばれる¹⁴。

ここでは、「一つの心刹那」(心の一瞬間)を言語習慣の側面から分析している。この説明に従えば、心や心所は同一の **vastu** に対して一定の時間をかけて働き、認識結果が生じるならば、言語習慣にしたがって、その経過した時間が「一つの心刹那」と設定される。つまり、心や心所の実際の活動の刹那が異なる場合であっても、同一の **vastu** に対して活動しているのであれば、一つの心刹那に同時に働いているものとされる。したがって、作意などの五心所は、厳密に言えば実際の働きに時間差があるかもしれないが、同一の **vastu** に対して活動しているのであれば、心 (=識) が働いている限り、常に (**sarvadā**) あり、かつ五心所すべて (**sarve**) が同時に生じるとされている。

一方、欲などの五心所は次のように定義されている。

Text A 4.4.3:

欲とは何か。[それはすなわち、] 望まれた物事それぞれに対して、その [物事] に相当する (**tadanugā**)、しようと欲することである。

勝解とは何か。[それはすなわち、] 確定された物事それぞれに対して、その [物事] に相当する、確認することによる信念である。

念とは何か。[それはすなわち、] 習熟された物事それぞれに対して、その [物事] に相当する、言い及ぶこと (**abhilapanā**) である。

三摩地とは何か。[それはすなわち、] 観察されるべき物事それぞれに対して、その [物事] に相当する、詳しく考察すること (**upanidhyāna**) に依存している、心の専一である。

慧とは何か。[それはすなわち、] 同じ観察されるべき物事それぞれに対して、あるいはは道理によって生じたものとして、あるいはは道理でないものによって生じたものとして、あるいはは道理によって生じたものでもなく道理でないものによって生じたものでもないものとして、その [物事] に相当する、諸法の分析 (**pravīcayā**) である¹⁵。

¹⁴ Text A 4.3.3: *katham ekasya cittasya vyavasthānaṃ bhavati | vyāvahārikena cittakṣaṇena no tu pravṛttikṣaṇena |*

vyāvahārikenaikacittam katamat | ekena padasamnisrayeṇaikasmin vastuni yāvata kālena vijñaptir utpadyate tāvad ekam cittam | yac cāpi tatsamānapravāham tad apy ekam evocyate |

¹⁵ Text A 4.4.3: *chandaḥ katamaḥ | yad īpsite vastuni tatra tatra tadanugā kartukāmatā ||*

adhimokṣaḥ katamaḥ | yan niścite vastuni tatra tatra tadanugāvadhāraṇabhaktiḥ ||

smṛtiḥ katamā | yat samstute vastuni tatra tatra tadanugābhilapanā ||

samādhiḥ katamaḥ | yat parīkṣye vastuni tatra tatra tadanugam upanidhyānasamnisṛitam cittaikāgryam ||

prajñā katamā | yat parīkṣya eva vastuni tatra tatra tadanugo dharmāṇaṃ pravīcayāḥ | yogavīhitato vāyogavīhitato vā naiva yogavīhitato nāyogavīhitataḥ ||

欲・勝解・念・三摩地・慧の五つは、同一の *vastu* に対してではなく、それぞれ、望まれた *vastu*, 確定された *vastu*, 習熟された *vastu*, および観察されるべき *vastu* に対して働く。言い換えれば、この五心所は特定の場合にのみ生じるものであり、常に (*sarvadā*) あるものではない。また、同一の *vastu* に対して活動するものではないから、「一つの心」、すなわち一つの心刹那に同時に働くものとされない。したがって、欲などの五心所すべて (*sarve*) が同時に生じるのではない。

2.1.2.3 「撰決択分」における「遍行」心所の用例

遍在する心所法を表す「遍行」(*sarvatraga*) という語の用例は「本地分」には見られない。「撰決択分」における用例を見ると、漢訳では「遍行」、チベット語訳では *kun tu 'gro ba* となっている。

(漢訳 Text B 4.0.1, 4.0.2) :

問う：諸識が生じるとき、幾つの遍行する心〔所〕法と俱起するの。答える：五つ。一に作意、二に触、三に受、四に想、五に思である。

問う：また、幾つの遍行しない心〔所〕法と俱起するの。答える：遍行しない〔心所〕法には多種あるが、優れたものはただ五つである。一に欲、二に勝解、三に念、四に三摩地、五に慧である¹⁶。

(チベット語訳 Text C 4.0.1, 4.0.2) :

識が生じる時、遍在する心所法がいくつ生じるのかと言うならば、答える。五つ。すなわち、作意と、触と、受と、想と、思とである。

非遍在の〔心所法〕がいくつ生じるのかと言うならば、答える。非遍在の〔心所法〕は多いであるけれども、優れたものは五つ。すなわち、次のようである。欲と、勝解と、念と、三摩地と、慧とである¹⁷。

この引用文における「遍行」と *kun tu 'gro ba* は、*sarvatraga* 対する訳語であると考えられる。また、第 2.2.1.2 節で論じるように、同じ「撰決択分」においてアーヤ識が五遍行に相応することを説明する箇所において、「五遍行心相應法」(五つの遍行する心相應法)、*sems dang mtshungs par ldan pa kun tu 'gro ba lnga po* (五つの遍在する心相應〔法〕) という表現も確認される。

上記引用文では、欲などの五心所は、非遍在の心所の中の特に優れたものとして挙げられている。第 2.1.2.1 節の表において示したように、欲などの五心所は、すべての状態の心において (*sarvatra citte*)、すべての地にいるものにおいて (*sarvabhūmike*) 起こるものである。すなわち、四つの *sarva* の中の二つを満たす。そのほかの非遍在の心所は、一つを満たすか、全く満たさない。この意味で欲などの五心所は優れたものとされていると考えられる。

¹⁶ Text B 4.0.1, 4.0.2 : 「問：諸識生時，與幾遍行心法俱起？答：五。一作意，二觸，三受，四想，五思。問：復與幾不遍行心法俱起？答：不遍行法乃有多種，勝者唯五。一欲，二勝解，三念，四三摩地，五慧。」

¹⁷ Text C 4.0.1, 4.0.2: *nmam par shes pa 'byung ba na sems las byung ba'i chos kun tu 'gro ba du 'byung zhe na/ smras pa lnga ste/ (smras pa lnga ste/ PNG; smras pa/ lnga ste DC) yid la byed pa dang/ reg (reg DCNG; rig P) pa dang/ tshor ba dang/ 'du shes dang/ sems pa'o//*

kun tu 'gro ba ma yin pa du 'byung zhe na/ smras pa/ kun tu 'gro ba (ba DCPG; ill. N) ma yin pa ni mang mod kyi gtso bo ni lnga ste/ 'di lta (lnga ste/ 'di lta DCNG; ill. P) ste/ 'dun pa dang/ mos pa dang/ dran pa dang/ ting nge 'dzin dang/ shes rab bo//

また、「撰決択分」では、欲などの五心所について、「本地分」における欲・勝解・念・三摩地・慧の上記定義に類似した説明を行っている¹⁸。

(漢訳 Text B 4.5) :

問う：これら五種の遍行しない心〔所〕法はどのような個別の対象としての物事に対して生じるのか。答える：その順番に応じて、愛着しているもの、確定したもの、習熟したもの、観察されるべきものという四つの対象としての物事に対して生じる。三摩地と慧は最後の対象に対して、残りのもの（欲、勝解、念）は順次に前の三つの対象に対して〔生じる〕¹⁹。

(チベット語訳 Text C 4.5) :

それらの非遍在の〔心所法〕は、如何なる別々に限定された物事に対して生起するのかと言うならば、答える。四つの種類、〔すなわち、〕望まれたもの、確定されたもの、習熟されたもの、詳しく観察されたものに対して順次に〔生起する〕。その中で、三摩地と慧は最後のもの（詳しく観察されたもの）に対して〔生起する〕。残りのもの（欲、勝解、念）は順次に、前の三つに対して〔生起する〕²⁰。

2.1.3 まとめ

以上のように、作意などの五心所のみが、(1) 善・雑染に限らず、すべての状態の心において、(2) すべての地（欲・色・無色の三界と無漏界）にいるものにおいて、(3) 識が働いている限り、常に、(4) すべてのが俱起する、という四つの要件を満たしている。これは五心所が共有する性質である。一方、欲などの五心所は各々特定の物事に対して働くものであり、常にすべてが俱起するものではない、ということが『瑜伽論』「本地分」において明示されている。

「撰決択分」では、このような作意などの五心所と欲などの五心所をそれぞれ、遍在する心所と、非遍在の心所の中の優れたもの、と称しており、これは「本地分」の記述の趣旨と一致している。漢訳の「遍行」とチベット語訳の *kun tu 'gro ba* はサンスクリット語の *sarvatraga* に対応していると考えられる。おそらく『瑜伽論』では初めから「遍在するもの」(*sarvatraga*) によって作意などの五つの心所を総称したわけではなく、「撰決択分」に至り、「本地分」のこの四つの *sarva* を総称する際に *sarvatraga* という語を用いるようになり、後に『顕揚論』『五蘊論』『三十頌』などの論書において術語として継承され、用いられたと考えられる。

以上の考察から、『瑜伽論』では、「遍行」(*sarvatraga*) とは、すべての地にいるもののあらゆる状態の心において常に俱起することである、と理解されていることが分かる。それに

¹⁸ この節に示している「撰決択分」の二つの記述に基づいて、勝又 [1961 : 379] では、欲などの五心所は「それぞれの各別の境を縁ずる」とされているから、「ここで初めて別境の心所という思想が確立したのである」と指摘されている。しかし、直前の第 2.1.2.2 節で示した「本地分」の説明に照らして見ると、「撰決択分」のこの記述はその内容を纏めるものに過ぎず、新しい思想を述べるものではないことが分かる。

¹⁹ Text B 4.5 : 「問：此不遍行五種心法於何各別境事生耶？答：如其次第，於所愛，決定，串習，觀察四境事生。三摩地、慧於最後境，餘隨次第於前三境。」

²⁰ Text C 4.5: *kun tu 'gro ('gro DPNG; ill. C) ba ma yin pa gang dag yin pa de (de DCNG; om. P) dag dngos po so sor nges pa gang la skye bar 'gyur zhe (zhe DPNG; zha C) na/ smras pa/ nam pa bzhi po (po DPNG; ill. C) 'dod pa dang/ nges pa dang/ 'driś pa dang/ nye bar brtags pa la go rims bzhi du (du DPNG; de C) ste/ de la ting (ting DPNG; teng C) nge 'dzin dang shes rab ni tha ma la'o// lhag ma rnams ni go rims bzhi (bzhi DPNG; ill. C) du gong ma gsum la'o//*

対して、先行研究（水野 [1964 : 331–332]、吉元 [1982 : 202] など）に示されている、八識すべてに遍在すること、という点について明確な記述は『瑜伽論』には見られない。

2.2 識と五心所との具有関係

2.2.1 『瑜伽論』の理解

2.2.1.1 六識身に随行するものとしての五心所に関する「本地分」の説明

「本地分」では、この五心所は識に「随行するもの」(sahāya, 助伴)と位置づけられている。まず「本地分中五識身相応地」は、眼識を例にとり、この「随行するもの」について、次のように述べる。

Text A 1.1.1.4:

随行するものとは何か。それ（眼識）と同時に存在し相応する (tatsahabhūsamprayuktās) 心所法である。すなわち、**作意、触、受、想、思**という。眼識と同時に存在し、〔それと〕相応する心所法はほかにもある。また、それら〔心所法〕は〔眼識と〕同一の所縁を有し、異なる様相 (ākāra) を有し、〔すなわち眼識と〕「同時に存在するもの」(sahabhū) であり、そして、それぞれに活動 (vṛtti) を有し、すべてが固有の種子から生じ、〔すなわち眼識と〕「相応するもの」(samprayukta) である。様相を有し、所縁を有し、拠り所を有するものである²¹。

耳識、鼻識、舌識、身識も眼識と同様であるとされている²²。作意など五心所は、眼・耳・鼻・舌・身識と同時に存在し、相応する心所法の代表的なものとして挙げられている。

次に、「本地分五識身相応地」に続く「意地」においては、作意などの五心所を始めとする五十一²³の心所法が「随行するもの」とされる。

Text A 2.4:

随行するものとは何か。すなわち、**作意・触・受・想・思**、欲・勝解・念・三摩地・慧、信・慚・愧・無貪・無瞋・無痴・精進・輕安・不放逸・捨・不害、貪・瞋・無明・慢・見・疑と、忿・恨・覆・惱・嫉・慳・誑・諂・諂・害・無慚・無愧・昏沈・掉挙・不信・懈怠・放逸・忘念・散乱・不正知、悪作・睡眠・尋・伺という。以上のような類に属するものは〔意地と〕同時に存在し相応する心所法であり、随行するものと呼ばれる。〔意地と〕同一の所縁を有し、異なる様相を有し、〔すなわち〕「同時に存在するもの」であり、それぞれに活動を有し、固有の種子から生じ、〔すなわち〕「相応するもの」で

²¹ Text A 1.1.1.4: saḥāyaḥ katamaḥ | tatsahabhūsamprayuktās caitasā dharmāḥ | tadyathā manaskāraḥ sparśo vedanā saṃjñā cetaneti | ye 'py anye cakṣurvijñānena sahabhūsamprayuktās caitasā dharmās te punar ekāmbanā anekākārāḥ sahabhuvaś caikaikavṛttayaś ca sarve ca svabijān nirjātāḥ samprayuktāḥ sākārāḥ sālambanāḥ sāsrayāḥ ||

²² Text A 1.1.2.4: saḥāyaḥ karma ca cakṣurvijñānavad veditavyam || (【訳】〔耳識にとって〕随行するものとはたらきは眼識の〔場合の〕ように知られるべきである。)

Text A 1.1.3.4: saḥāyaḥ karma ca pūrvavad veditavyam || (【訳】〔鼻識にとって〕随行するものとはたらきは前（眼識の場合）のように知られるべきである。)

舌識と身識に関しても、鼻識と同様の記述が見られる (Text A 1.1.4.4, 1.1.5.4 参照)。

²³ 「意地」は五十一の心所を挙げているが、水野 [1964 : 319–322] によれば、「本地分」では元来、五十三の心所が「随行するもの」とみなされていたという。Text A-tr 注 19, 注 27 参照。

ある。様相を有し、所縁を有し、抛り所を有するものである²⁴。

この作意・触・受・想・思の五心所は、六識身すべてに随行する。すなわち、それぞれの識と同時に存在し、その識と同じ所縁に対してそれぞれの作用を果たしつつ活動すると考えられている。

2.2.1.2 アーラヤ識が五心所に相応することに関する「撰決択分」の説明

「撰決択分」では、冒頭においてアーラヤ識について詳しい論証と説明が行われている。この説明において、アーラヤ識はこの五心所に相応して活動するということが次のように明示されている。

(漢訳 Text B 1.2.1, 1.2.2) :

アーラヤ識は五つの遍行する心相応法、すなわち作意・触・受・想・思と常にともに相応しているということである。

この五つの法もまた、ただ異熟のみに包摂される。世間の有智者でさえ了知し難いから、最も極めて微細なものである。また、常に〔アーラヤ識と〕同一の類の所縁を対象として活動する²⁵。

(チベット語訳 Text C 1.2.1, 1.2.2) :

ここで、アーラヤ識が相応することについて、五つの遍在する心相応〔法〕である作意・触・受・想・思と相応する。

それらの〔五つの〕法もまた、異熟に包摂されており、世間の有智者たちでさえ了知し難いから、微細なものであり、常に同一の所縁に対して共に活動するものである²⁶。

アーラヤ識と相応するこの五心所は、六識のそれと同様に、常にアーラヤ識と同じ所縁に対して活動すると考えられている。

このように、『瑜伽論』では、作意などの五心所は、「本地分」においては眼識などの五識身と同時に存在し相応するものとされ、かつ意地と同時に存在し相応するものであるとされている。一方、「撰決択分」においては、アーラヤ識と常に共に存在し相応するものとして説明されている。ただし、この五心所とマナスとの具有関係については、『瑜伽論』、およびその後の『顕揚論』『集論』には言及が見られない。

²⁴ Text A 2.4: saḥāyaḥ katamaḥ | tadyathā manaskāraḥ sparśo vedanā saṃjñā cetanā chando 'dhimokṣaḥ smṛtiḥ samādhiḥ prajñā śraddhā hrīr apatrāpyam alobho 'dveṣo 'moho vīryam prasrabdhir apramāda upekṣāhimsā rāgaḥ pratigho 'vidyāmāno dṛṣṭir vicikitsā krodha upanāho mrakṣaḥ pradāsa īrṣyā mātsaryam māyā śāthyam mado vihiṃsāhrikyam anapatrāpyam styānam auddhatyam āsraddhyam kausīdyam pramādo muṣitasmṛtītā vikṣepo 'samprajanyam kaukṛtyam middham vitarko vicāraś cety evaṃbhāgiyāḥ sahabhūsamprayuktāś caitasā dharmāḥ saḥāya ity ucyante || ekālambanā anekākārāḥ sahabhuva ekaikavṛttayaḥ svabījanirjātāḥ samprayuktāḥ sākārāḥ sālambanāḥ sāśrayāḥ ||

²⁵ Text B 1.2.1, 1.2.2 : 「阿頼耶識與五遍行心相應法恒共相應，謂作意、觸、受、想、思。

如是五法亦唯異熟所攝。最極微細，世聰慧者亦難了故。亦常一類緣境而轉。」

²⁶ Text C 1.2.1, 1.2.2: 'di la kun gzhi rnam par shes pa mtshungs (mtshungs DCN; tshungs PG) par ldan pa (pa PNG; pas DC) na sems dang mtshungs par ldan pa kun tu 'gro ba lnga po yid la byed pa dang/ reg pa dang/ tshor ba dang/ 'du shes dang/ sems pa rnams dang mtshungs par ldan no//

chos de dag kyang rnam par smin par bsduṣ pa dang/ 'jig rten gyi mkhas pa rnams kyis kyang rtogs par dka' ba'i phyir phra ba dang/ gtan du (du DCN; tu PG) dmigs pa gcig la mtshungs par (par DCN; pa PG) 'jug pa yin no//

2.2.2 『唯識三十頌』が説く遍在：八識に遍く存在すること

八識については、世親の『唯識三十頌』に至って、初めて組織的に議論されるようになった。そのうち、アーラヤ識については、「常に触・作意・受・想・思を伴っている」と明言し²⁷、六識についても、触などの遍行心所と相応することを示している²⁸。これは『瑜伽論』とほぼ同様である。マナスについては、まず「常に我見・我痴・我慢・我愛と名づける四つの有覆無記の煩惱を伴っている」²⁹と述べ、続いて「触などのほかのものを〔伴っている〕」³⁰とする。すなわち、マナスも触などの遍行心所と相応することが明確にされている。

このように『三十頌』は、八識すべてが五遍行と相応することを示している。心所側から見れば、この五心所のみが八識に共通して相応する。この意味で、遍在するとは、八識すべてに遍く存在することであると理解しうる。

安慧による『三十頌』の釈論では、触などの五法が末那識と相応する理由について、「この五法はすべての識と相応する。遍行であるから」³¹と説明する。『成唯識論』においても、アーラヤ識が触などに相応することについて、護法は「この五〔法〕は遍行に包摂されるものである以上、故に必ず蔵識と相応する」³²と解説する。ここでも、「遍行」とは八識に遍在することであるという理解が示されている³³。

2.3 本章の結論

『瑜伽論』「本地分」では、心所法を整理して、四つの sarva、すなわち、善・雑染に関わらずすべての状態の心において、すべての地にいるものにおいて、常に、心所すべてが俱起する、という四つの特性により心所を類別する。作意などの五心所のみがこの四つの特性のすべてを有している。言い換えれば、すべての状態の心において、すべての地にいるものにおいて、常に、心所すべてが俱起することは、作意・触・受・想・思の五心所の特徴であり、そのため「攝決択分」ではそれらを「遍行」(*sarvatraga) という語によって総称する。一方、

²⁷ Triṃśikākārikā 13: tatrālayākhyam vijñānam vipākaḥ sarvabījakam || 2 (cd) || ... sadā sparśāmanaskāravitsamjñācetanānvitam || 3 (cd) ||

（【訳】その〔三つの転変の〕中で、アーラヤという識は異熟であり、すべての種子を有するものである。（中略）常に触・作意・受・想・思を伴っている。）

²⁸ Triṃśikākārikā 13: tṛtīyaḥ ṣaḍvidhasya yā | viśayasyopalabdhiḥ sā kuśalākuśalādvayā || 8 (bcd) ||

sarvatragair viniyataiḥ kuśalais caitasair asau | samprayuktā tathā kleśair upakleśais trivedanā || 9 || **ādyāḥ sparśādayaś** chandādhimokṣasmṛtayaḥ saha | samādhidhībhyāṃ niyatāḥ (10abc)

（【訳】第三〔の転変〕は、六種の対象を知覚することであり、その〔知覚すること〕は善なるものと、不善なるものと、どちらでもないものである。それ（知覚すること）は、三つの受を有し、**遍在する〔心所〕**・限定されている〔心所〕・善なる〔心所〕・煩惱たる〔心所〕・随煩惱たる〔心所〕と相応している。**最初のもの（遍在する心所）には、触などがある。**欲・勝解・念は、三摩地と慧とともに、限定されている〔心所〕である。）

²⁹ Triṃśikākārikā 13: tadālambaṃ manonāma vijñānam mananātmakam || 5(cd) ||

kleśais caturbhiḥ sahitam nivṛtvāyākṛtaiḥ sadā | ātmadrṣṭyātmamohātmamānātmāsnehasamjñitaiḥ || 6 ||

（【訳】それ（アーラヤ識）を所縁とし、思考を本質とするマナスという識がある。常に我見・我痴・我慢・我愛と名づける四つの有覆無記の煩惱を伴っている。）

³⁰ Triṃśikākārikā 13: anyaiḥ sparśādyais (7ab)

³¹ TrBh 66, 16–17: ete hi pañca dharmāḥ sarvatragatvāt sarvavijñānaiḥ samprayujyante |

³² 『成唯識論』(T31, 11c26–27)：「此五既是遍行所攝，故與蔵識決定相應。」

³³ 勝又 [1961 : 385] は、遍行に対する安慧の理解について考察する中で、「八識のすべてに起るから遍行であると説くのは、八識説を中心とする唯識三十頌の思想に基づいて理解するからである」と指摘している。

この五心所以外の心所は、四つの特性の一部を有するか、あるいはそのいずれも有さない。「撰決択分」ではそれらの心所を「非遍行」と総称する。欲などの五心所はその代表的なものとして説明されている。

遍行心所と別境心所についての上記議論においては、「本地分」でも「撰決択分」でも、アーラヤ識との相応については全く言及が見られない。

『三十頌』は、五識、意識、アーラヤ識は五心所と相応するという『瑜伽論』の教説を踏襲したうえで、さらにマナスと五心所との相応関係を論じ、初めて八識すべてが遍行心所と相応することを明示する。『三十頌』の影響により、「遍行」とは八識に遍在することであるという理解が後代の瑜伽行派文献に見られるようになる。

序章第 1.2.2.1 節に述べたように、先行研究では、瑜伽行派が十大地法を五遍行と五別境に二分した理由について、欲などの五心所はアーラヤ識には相応しないため、「別境」として別立てすることになった、という解釈が示されている（水野 [1964 : 331-332], 吉元 [1982 : 202] など）。しかしながら、『瑜伽論』における心所の説明にはこのような理解は見られない。瑜伽行派は、少なくとも同派の最古の文献である『瑜伽論』の段階では、八識との相応関係という発想から五遍行と五別境を区別して立てたのではない。

以上の考察から、『瑜伽論』における遍行心所と別境心所についての議論は、心・心所の相応関係というより、むしろ、心（＝識）が物事（vastu）を認識する過程における心所の状態と働きに着目して遍行心所と別境心所を区別していると言えよう。

第3章 アーヤ識と五心所

*第3章（ページ52-68）は、学位授与日である令和3年3月19日から5年以内に雑誌掲載等の形で掲載予定であるため、公表することができません。

第4章 tajja- manaskāra- について

第1章で述べたように、五遍行の中の作意 (manaskāra) は心を対象に向かわせる心作用である。『瑜伽論』「本地分」では、眼識などの五識や意識が生起するためには、感官と認識対象と tajja- manaskāra- という三つの要因が必要とされている。これによれば、tajja- manaskāra- は識の生起に関わる概念であると思われる。

しかし、この tajja- manaskāra- は解釈が困難である。『瑜伽論』「本地分」では、眼識を例に識の生起を説明する中で、作意と眼識という二つの語の前には tajja という語が付され、“tajjo manaskārah” “tadjasya cakṣurvijñānasya” という形で示されている。複合語 tajja は多くの場合「それから生じる」と理解される。しかし、この一文に対する漢訳とチベット語訳は必ずしもそのように訳してはいない。また、世親はその著作『縁起経釈』の中で *tajja- manaskāra- に相当する語に注釈を施しているが、その解釈は単純ではない。

本章では、『瑜伽論』に見られる tajja- manaskāra- に関する記述を中心として、tajja- manaskāra- という用語について考察する。

4.1 tajja に関する様々な解釈

4.1.1 「本地分中五識身相応地」における tajjo manaskārah と識の生起

「本地分中五識身相応地」では、眼識の生起について、次のように述べられている（説明の便宜上、記号①②により段落を区別する）¹。

Text A 1.2.1:

① tatra cakṣuḥ paribhinnaṃ bhavati | rūpam anābhāsagataṃ bhavati | na ca tajjo manaskārah pratyupasthito bhavati | na tadjasya cakṣurvijñānasyotpādo bhavati ||

② yataś ca cakṣur aparibhinnaṃ bhavati | rūpam ābhāsagataṃ bhavati | tadjas ca manaskārah pratyupasthito bhavati | tatas tadjasya cakṣurvijñānasyotpādo bhavati ||

tajja という語は、一般には tad+ja の複合語と理解され、「それ（ら）から生じる」または「それ（ら）によって生じる」を意味する。したがって、tad を通常の指示代名詞として、既述の語を指すものと考えれば、上記の文は次のように訳されることになる（pratyupasthito bhavati を「起ころうとしている」と解釈する理由については第4.3.2節に述べる）。

① さて、眼が壊れており、色が顕現しておらず、そして (ca)、それ（眼と色）から生じる作意は起ころうとしていない。それ（眼、色、作意の三つ）から生じる眼識の生起はない。

② 一方、眼が壊れておらず、色が顕現しており、そして、それ（眼と色）から生じる作意が起ころうとしている。それゆえ、それ（眼、色、作意の三つ）から生じる眼識の生起がある。

¹ 筆者は、楊 [2017] において、tajja- manaskāra- の tajja- に関する様々な解釈を提示した上、『瑜伽論』「撰決択分」の解釈について考察した。本章第4.1節は上記拙論にもとづく。ただし、上記拙論では、一部の解釈に関して紙幅の都合で扱えなかった。そのため、再録にあたり、論述を修正・補訂した。

4.1.2 パーリ文献の *tajja*

また、上記の文脈における *tajja* を「それに属する」「それに相応する」と解釈する可能性も考慮すべきかもしれない。パーリ文献では、*tajja* は上述の *tad+ja* のほか、サンスクリット語の *tadīya* に対応する場合があることが知られている²。そもそも識の生起に三要因が必要とされるという記述は『瑜伽論』に特有のものではない。識の生起の三要因に関して、室寺 [2010: 216–219] では、初期經典の『象跡喩經』の經句傳承を有部や瑜伽行派の論書が共有していたものであると指摘している。

マッジマ・ニカーヤの *Mahāhatthipadopamasutta* (『大象跡喩經』, 中阿含『象跡喩經』に対応) では、感官, 対象, *tajja-samannāhāra-* (= *tajja-manaskāra-*) が備わっている場合に *tajja-viññāṇabhāga-* (認識の一部, 例えば眼識) の顕現があると述べている (注 19, 20 参照)。有部の論書『大毘婆沙論』は、『象跡喩契經』という經名を明示しつつ, *tajja-manaskāra-* に相当すると考えられる「能生作意」を含む一文を引用している³。『大毘婆沙論』に引用されている一節は意識の生起について述べているが, 感官(「意処」), 対象(「法処」), *tajja-manaskāra-* (「能生作意」) があるときに識(意識)が生じるという構造は, 「本地分」の内容と一致している。

こうしたことから, 「本地分」の *tajja-manaskāra-* などの表現は經典に由来するものであったことが推定される。仮にパーリ語のように, *tajja* を *tadīya* と解釈することが許されれば, *tajja-manaskāra-* を「それ(眼と色)に相応する作意」と訳すことができるかもしれない。

ブッダゴーサの注釈では, マッジマ・ニカーヤ『大象跡喩經』の *tajja-samannāhāra-* と *tajja-viññāṇabhāga-* に対してそれぞれ, 「眼と色によって…生起しつつある作意」, 「それに相応する識の部分」と解説されている⁴。すなわち, 前の *tajja-samannāhāra-* の *tajja* を *tad+ja* (それ(既述のもの)によって生じる)とし, 後の *tajja-viññāṇabhāga-* の *tajja* を *tadīya* (それに相応する)として, 二通りに解釈している。

4.1.3 「本地分」の *tajja* に対する漢訳とチベット語訳の解釈

tajja という語は, 「本地分」では *manaskāra* と *caḥsurvijñāna* に付されているが, 漢訳とチベット語訳はいずれも, それぞれの *tajja* に対して異なる訳を与えている。例えば⑥の訳は次のようになっている(①の漢訳とチベット語訳には, 上記のサンスクリット語テキストとの相違が見られる。この問題については後述する)。

(チベット語訳)

このように, 眼も壊れておらず, 色も顕現しており, それと共に生じる作意 (*de dang 'byung ba yid la byed pa*) もまた起ころうとしているとき, それゆえ, それから生じる眼識 (*de las*

² Cone p. 274: “*tajja*, mfn, [ta(d)+ja; cf S. *tajja*(tat+ja), *tadīya*], coming from or belonging to or relating to him/her/that; of the same kind; appropriate to that”.

³ 『大毘婆沙論』(T27, 58c19–21): 「如象跡喩契經中說舍利子言。若内意處不壞, 外法處現前, 及能生作意正起, 爾時意識生。」類似した内容は『阿毘曇毘婆沙論』(T28, 43c13–15)にも見られる。「如經說。尊者舍利弗作如是言。諸長老。若不壞意内入, 照了外入法, 能生正觀現在前, 則意識生。」室寺 [2010: 218–219] 参照。

⁴ MN-a, Vol. 2, p. 229, 28–33: *tajjo samannāhāro ti cakkhuñ ca rūpe ca paṭicca bhavaṅgaṃ āvaṭṭetvā uppajjamānamanasikāro. ... tajjassā ti *tadanurūpassa. viññāṇabhāgassā ti viññāṇakoṭṭhāsassa.* (*原文は *tandanurūpassa* となっているが, おそらく誤植)

(【訳】「*tajjo samannāhāro*」, すなわち眼と色に縁って, 潜在的な心を転向させて, 生起しつつある作意。(中略)「*tajjassā*」, すなわちそれに相応する。「*viññāṇabhāgassā*」, すなわち識の部分。)

skyes pa'i mig gi rnam par shes pa) が生起することになる⁵。

(漢訳)

必ず、眼が壊れておらず、色が〔目の〕前に顕現しており、生じさせる作意(「能生作意」)がまた起ころうとしているときにはじめて、生じさせられる眼識(「所生眼識」)は生じ得る⁶。

ここで、後の *tajja- cakṣurvijñāna-* に対して、漢訳とチベット語訳は一致して、「それから生じる眼識」、すなわち既述のものから生じるものと理解しているが、前の *tajja- manaskāra-* に対しては、「それから生じる作意」と訳出してはいない。

チベット語訳の *de dang 'byung ba yid la byed pa* は、*'byung ba* と *yid la byed pa* の間に格関係が明示されず、解釈がやや難しいが、これを同格ととれば、「それと共に生じる作意」と理解できる。一方、漢訳の場合、玄奘は「能」と「所」の対応関係において、作意を「能生」、識を「所生」とする。言い換えれば、漢訳では、*manaskāra* に付く *tajja* は、前の眼と色ではなく、後の識を指す代名詞であり、*tajja- manaskāra-* は、その識を能動的に生起させる作意であると捉えている。

このように、漢訳とチベット語訳はいずれも、一文において前後に二回出てくる *tajja* をそれぞれ異なる意味で捉えており、*tajja- manaskāra-* を「それ(眼と色)から生じる作意」とは理解していない。

4.1.4 *tajja* に対する世親の解釈

『縁起経』に対する世親の釈論である『縁起経釈』(**Pratītyasamutpādayākhyā*, PSVy) は、識を解説する際に、やはりこの三要因に言及する。

tajja- manaskāra- に対する世親の解釈はすでに室寺 [2010] で詳細に考察されている。室寺 [2010 : 221–222] によれば、『縁起経釈』は、*tajja- manaskāra-* の *tajja* に対して、「それを引き起こすもの」(*de skyed par byed pa*)、あるいは「その目的のために生じること」(*de'i ched du skyes pa*) という語義解釈を示している。さらに *tajja- manaskāra-* を「[*vijñāna* の生起と] 相反することのなきもの (*mi mthun pa med pa*)」とし、熟睡などの時に、感官と対象があっても、識は生起しないという例を挙げ、*tajja- manaskāra-* を「識別を引き起こす注意力」と理解している、という⁷。その場合、複合語 *tajja* の前分の *tad* は、既出の感官と対象ではなく、直後に言及される識を指すと見なされている⁸。

室寺 [2010] の関心は世親の解釈に向けられており、「本地分」の記述にも言及するものの、

⁵ Text A-tib 1.2.1: 'di ltar mig kyang yongs su ma nyams la/ gzugs kyang snang bar gyur cing/ **de dang 'byung ba yid la byed pa** yang nye bar gnas par gyur na/ de'i phyir **de las skyes pa'i mig gi rnam par shes pa** 'byung bar 'gyur ro//

⁶ Text A-chi 1.2.1 : 「要眼不壞，色現在前，能生作意正復現起，所生眼識方乃得生。」

⁷ チベット語の訳語は Muroji [1993 : 15–16] 参照。

⁸ 世親は、『俱舍論』「業品」において、次に示すように、*tajja* を「それ(既述のもの)から生じる」という意味で用いる。

AKBh 192, 15–18: *cetanā mānaṣaṃ karma (1c) cetanā manaskarmeti veditavyam/ tajjaṃ vākkāyakarmanī // (1d) yat tac cetanā janitaṃ cetayitvā karmety uktam kāyavākkarmanī te veditavye/* (【訳】思は意に属する業である) [と偈頌 1c は説く]. 思は意業であると知られるべきである。「それから生じる、口 [業] と身業とがある」 [と偈頌 1d は説く]. 思は何であれ、思がなされた後に、業が生じると説かれる。それらはすなわち、身口の二業であると知られるべきである.)

詳しい考察はなされていない⁹。また、*tajja- manaskāra-* に関する「撰決択分」の解釈は取り上げられていない。いずれにしても室寺 [2010] の意義は、世親の解釈が「本地分」の一文に対する玄奘訳、チベット語訳のいずれの解釈とも異なっていることを指摘した点にあったが、「本地分」の *tajja- manaskāra-* の解釈が深められたわけではなかった。

4.1.5 *tajja- manaskāra-* に対する「撰決択分」の解説

「撰決択分」では、「本地分中五識身相応地・意地」を解説する際に、*tajja- manaskāra-* について、次のように述べている。

(チベット語訳 Text C 3.3) :

「それと共に生じる作意」とは何かと言うならば、それは、その壊れていない拠り所（感官）と、その顕現と結合した対象と、それによって、「心に向けること」（＝作意）が引き起こされることである¹⁰。

(漢訳 Text B 3.3) :

如何なるものを生じさせる作意（「能生作意」）と名付けるのか。拠り所が壊れていないから、対象が現前するから、起こされるものであり、心所を引き起こすことができる¹¹。

ここではチベット語訳・漢訳とも、「本地分」の場合と同様に、それぞれ、*de dang 'byung ba yid la byed pa*、「能生作意」という訳語を用いており、原語は *tajja- manaskāra-* であったと推定できる。この説明文では、前半は **tajja*、後半は **manaskāra* について解説していると考えられる。後半では、「本地分」における *manaskāra* の定義文 (**cetasa ābhogaḥ*) を提示することにより説明が行われている¹²。前半は、チベット語訳の「それによって…引き起こされる」(*des...mngon par grub pa*) と、漢訳の「…から起こされる」(「…故所起」) によって、*tajja* の意味を説明していると考えられる。この解説に従えば、複合語 *tajja* の *tad* を「感官」および「対象」と理解し、「それ(*tad*)によって生じる」あるいは「それ(*tad*)から生じる」と解釈していることが分かる。

以上のように、識の生起の三要因に関する説明文の中の *tajja- manaskāra-* に関して、「本地分」の漢訳とチベット語訳、さらに世親の解釈は区々であるが、「撰決択分」では、*tajja* を「それから生じる」あるいは「それによって生じる」という基本的な意味合いで捉えていること

⁹ 室寺 [2010 : 218] では、第 4.1.1 節で示した『瑜伽論』「本地分」の前後二つの *tajja* に対して、漢訳もチベット語訳も異なる訳語を与えて訳し分けていることが指摘されている。この指摘は妥当と言える。この箇所は *tajja- manaskāra-* に対して、室寺 [2010 : 218] は「それ〔ら「眼」と「色」とにもとづいて、それら〕と生じた (*tajja*, 能生/*de dan 'byun ba*) 注意力」という折衷的な訳を提示している。しかし、玄奘訳の「能生」、すなわち「(それを) 生じる」と、チベット語訳の *de dang 'byung ba*、すなわち「それと共に生じる」では、意味がそもそも異なっている。この点について室寺 [2010] は深く探究していない。

¹⁰ Text C 3.3: *de dang 'byung ba yid la byed pa gang yin zhe na/ gnas yongs su ma nyams pa de dang yul snang ba dang phrad pa de dang/ des sems kyi (kyi DC; can gyi PNG) 'jug pa mngon par grub pa gang yin pa ste/*

¹¹ Text B 3.3 : 「云何名爲能生作意？謂由所依不壞故，境界現前故所起，能引發心所。」

¹² *manaskāra* についての説明は、チベット語訳 *sems kyi 'jug pa* では「本地分」における作意の定義文 (*manaskāraḥ katamaḥ | cetasa ābhogaḥ || YBh 60, 1; yid la byed pa gang zhe na/ sems kyi 'jug pa'o/ D 30a7–30b1; P 34a2*) と一致しているため、サンスクリット語原語は *cetasa ābhogaḥ* であると推測される。一方、漢訳の「能引發心所」（「心所を引き起こすことができる」）は「本地分」の漢訳 (291c8) における「引心為業」（「心を引くことをはたらきとする」）という説明とやや異なる。いずれにせよ、この後半の説明文は、「本地分」の説に沿って、*manaskāra* とは、心、あるいは心所を引き起こすはたらきをもつものであると解説する。

が確認できる。「撰決択分」が示すこの **tajja** 解釈は、「本地分」本来のものであるとは断定はできないが、「本地分」の対応箇所に対する理解の一例を示すものであると言える。

4.2

*第4章第4.2節～第4.4節（ページ73-85）は、学位授与日である令和3年3月19日から5年以内に雑誌掲載等の形で掲載予定であるため、公表することができません。

第5章 認識対象に対する思 (cetanā) の働き — 「随与」 (*anupradāna) を中心として—

五遍行の思 (cetanā) は、『瑜伽論』「本地分」の「五識身相応地」と「意地」、及び「摂決択分」の関連箇所において説明されている。第1章第1.5.3節においてすでに示したように、「本地分」の思に対する説明は極めて簡潔である。『集論』『五蘊論』などは、その内容を継承しながら、若干、内容を補足している。先行研究はそれらをさほど相違がないものと見なしてきた。

しかしながら、後に述べるように、「本地分」中に散見される、思のはたらきと思の五遍行としての性質に関する記述には、整合性を欠いているかの印象を与える箇所がある。

また、「摂決択分」の思に対する説明を見ると独特の解説をしているが、意味が不明瞭な点がある。特に、漢訳にのみ見られる「随与」という語は難解である。「随与」は「摂決択分」の思に関する説明を理解するうえで重要な単語であると思われるが、チベット語訳に対応が見られないこともあり、これまでまったく関心が払われてこなかった。

そこで、本章では、『瑜伽論』における五遍行の思に関する記述を取り上げて考察し、特に「摂決択分」の定義文に見られる「随与」という語について検討する。

5.1 思に対する『瑜伽論』「本地分」の説明

5.1.1 「本地分」における思の定義文

「本地分中意地」では、五遍行の思を次のように簡潔に定義している¹。

Text A 4.4.2.5:

思とは何か。心を作動させることである²。

また、五遍行のはたらきについて説明する箇所では、思のはたらきを次のように解説する。

Text A 4.4.4.5:

思は何のはたらきを有するのか。尋 (vitarka, 思考) と、身〔業〕・語業などを発動することをはたらきとする³。

この説明によると、思は心を作動させ、尋と、身業・語業などを発動するものであり、行為の形成作用に関連する概念であるという印象を受ける。

5.1.2 業に関連する概念としての思

第1章第1.5.1節に述べたように、思は、業すなわち行為に関連する概念として初期經典から説かれてきた。

¹ 筆者は、楊 [2018] において、思に関する『瑜伽論』「摂決択分」の説明文に見られる「随与」という語について考察した。本章第5.1, 5.2, 5.3節は、上記拙論にもとづく。再録にあたり、内容を一部修正・補訂した。

² Text A 4.4.2.5: cetanā katamā | cittābhisamkāraḥ ||

³ Text A 4.4.4.5: cetanā kiṃkarmikā | vitarkakāyavākkarmādisamutthānakarmikā ||

また『俱舍論』では、「思とは、心を作動させることであり、すなわち、意業である」⁴と述べ、思を *cittābhisamkāra* と定義し、それを意業と同一視している。同様の例は、『品類足論』にも見られる⁵。すなわち、この意業としての思がなされた後に、身・語の行為（「思已業」）が発動されるという解釈である（第1章第1.5.2節参照）。

思を意業とする解釈は、次に示すように、瑜伽行派の文献である『集論』と『五蘊論』にも見られる。『集論』や『五蘊論』においても、思は *cittābhisamkāra* によって定義されている。

（『集論』）

思とは何か。心を作動させることであり、意業である。善、不善、無記に対して心を動かすはたらきがある⁶。

（『五蘊論』）

思とは何か。功德、過失、その両者のどちらでもないものという点から心を作動させることであり、意業である⁷。

これらの論書の内容と上記の『瑜伽論』の説明文を比較すると、『瑜伽論』の記述には意業への言及がない⁸。また、尋 (*vitarka*)⁹との関連付けは、『瑜伽論』のほか、『集論』『五蘊論』にも見られるが、『俱舍論』はこれに言及しない。この二点に相違が見られるものの、思は心を作動させるものであるという基本的な定義は、各文献で一致している。したがって、思に関する定義は、瑜伽行派と、『俱舍論』に代表される有部の間で大差がないと考えられてきた¹⁰。

5.1.3 「本地分」の説明の問題点

しかしながら、五遍行の文脈から見ると、思が尋や身・語の行為を発動するという、『瑜伽論』の説明にはいささか違和感を禁じ得ない。第2章第2.1.2.1節で論じたように、「本地分

⁴ AKBh 54, 20: *cetanā cittābhisamkāro manaskarma* |

⁵ 『品類足論』(693a12-13): 「思云何。謂心造作性。即是意業。此有三種。謂善思、不善思、無記思。」（【訳】思とは何か。心の造作性であり、すなわち意業である。これには三種があり、すなわち、善思、不善思、無記思である。）

⁶ AS 15, 37: *cetanā katamā/ cittābhisamkāro manaskarma/ kuśalākuśalāvyākṛteṣu cittapreraṇakarmikā//*

⁷ PS 5, 6-7: *cetanā katamā/ guṇato doṣato anubhayataś cittābhisamkāro manaskarma/*

⁸ 上記のとおり、『瑜伽論』の思の定義文には意業への言及がないが、その理由は明らかでない。ただし、次に示すように、『瑜伽論』「本地分中有尋有伺地」には、心を作動させることを意業に関係づけて説明する箇所が見られる。『瑜伽論』でも、心を作動させることと意業の関係を完全に否定しているわけではないと考えられる。

YBh 207, 2-3: *saṃskāraskandhaḥ⁽¹⁾ katamaḥ |⁽²⁾ cittābhisamkāramanaskarmajātiḥ sarvā |⁽²⁾*

(¹) *skandhaḥ* MS; *kandhaḥ* Bh-ed. (²) *tiḥ | sarvaḥ* MS; *tiḥ |* Bh-ed; *tiḥ sarvā | em.*

（【訳】行蘊とは何か。すべての類の、心を作動させることとしての意業である。）

⁹ 尋 (*vitarka* 思考) は、伺 (*vicāra* 考察) という概念とともに、有部や瑜伽行派の法の分類体系において、不定なる心所法に数えられている。尋と伺は、初期經典以来、語行の発動の先導とされてきた。有部では、尋は心の粗大な思索、伺は心の微細な思索と区別されるが、思との関連は説明されていない。一方、『瑜伽論』など瑜伽行派の論書では、尋を粗大な「意言」(*manojalpa*, 「発話的思考」(斎藤ほか [2014: 177])), 伺を微細な「意言」とする。

¹⁰ 水野 [1964: 410] は、思について、「大体有部説と同様な定義説明がなされている」と述べ、また吉元 [1985: 162] は、「各論書におけるこれら十心所の定義を見ると、遍行心所に当る作意等の五心所には、さほど相違のないことがわかる」と纏めている。

中意地」では、五遍行の四つの特徴を説明する際に、一切地（欲界、色界などの領域）にいる者に五遍行があると述べている。一方、次に示すように、『瑜伽論』では基本的に、二禅以上の禅定や、二禅天以上では尋も伺も存在せず、また四禅以上の禅定では語行も身行も存在しないとされる。

（「本地分中有尋有伺地」）

その〔三界の〕中に、欲界全体と色界のうちの初禅天に、中間の禅に入っているものや〔その中間の禅に対応する領域に〕生まれるものを除いて、尋・伺を伴う地である。中間の禅に入っているものや〔その中間の禅に対応する領域に〕生まれるものは、尋を伴わず、ただ伺を伴う地である。（中略）二禅を含む残りの色界と無色界全体は、尋・伺を伴わない地である¹¹。

（「本地分中三摩呬多地」）

滅尽〔定〕に入ろうとしている人には、三つの行がどのように順次に滅するのか。これは二つである。動作と静止とである。その中に、動作を起こす人は語ることをもなす。そのうち、初禅には作用がある。語行が存在するから。一方、静止に到達する時、それら（三つの行）の順次の滅は、二禅より始まって、順次の定に入っている人にある¹²。

この前提に立つと、四禅以上の状態では、思があるにも関わらず、そのはたらき、すなわち尋や身・語の行為の発動がないということになる。

言い換えれば、「本地分」が示す、五遍行としての思の性質、すなわち禅定の諸段階に遍在することと、思の具体的なはたらき、すなわち尋などの発動との間には整合性が欠けているということになる。これは『瑜伽論』「本地分」が説く思の問題点であると言えよう。この問題は「撰決択分」において再考されることになる。

5.2 思に対する『瑜伽論』「撰決択分」の説明

5.2.1 思の定義文に見られる「随与」

「撰決択分」は、上記の「本地分中五識身相応地意地」を解説する際に、思を次のように定義している。なお、思のはたらきについては、「本地分」とほぼ同様の説明を行っている¹³。

¹¹ YBh 74, 1-5: tatra sakale kāmādhatau rūpadhātau ca prathamadhyāne dhyānāntarikam samāpattuyupapattikam sthāpayitvā savitarkā savicārā bhūmiḥ samāpattuyupapattikam dhyānāntarikam *avitarkā vicāramātrā bhūmiḥ | ... dvitīyaṃ dhyānam upādāyāvaśiṣṭo rūpadhātuḥ sakalaś cārūpyadhātur avitarkāvicārā bhūmiḥ | (*avitarkāvicāramātrā を avitarkā vicāramātrā に改めた)

¹² SamāhitāBh 207, 1-5: nirodham samāpadyamānasya katham anupūrveṇa trayāḥ saṃskārā nirudhyante? dvayam idam: cāro viharāś ca. tatra cāre vartamānaḥ kathām api karoti. tatra prathamasya dhyānasya vyāpāro vāksaṃskārasadbhāvāt. yadā tu viharām ārabhate, tadā teṣāṃ dvitīyād dhyānāt prabhṛty anupūrvasamāpatter anupūrvanīrodhaḥ.

「三摩呬多地」のこの箇所に対して、『略纂』（84b20-21）は「二禅は語行を滅する。四禅は身行を滅する。滅〔尽〕定は心行を滅する」と解説する（「二定滅語行。四定滅身行。滅定滅心行。故言次第滅三種行」）。

また、語行と身行の滅に関しては、『大毘婆沙論』（780c26-29）にも類似する説明が見られる：「身・語行云何。謂從初靜慮入第二靜慮時，語行已滅。從第三靜慮入第四靜慮時，身行已滅。」（【訳】身行と語行とは何か。初静慮（初禅）から第二静慮（二禅）に入った時、語行は滅した。第三静慮（三禅）から第四静慮（四禅）に入った時、身行は滅したということである。）

¹³ 思のはたらきに関する「本地分」と「撰決択分」の記述は、チベット語訳と漢訳ではそれぞれ次のようになっている。

(チベット語訳 Text C 4.1.5) :

sems pa gang zhe na/ gsum 'dus pa las dmigs pa de la tshor ba dang/ phrad pa dang/ 'bral
(*'bral* DPNG; *'brul* C) ba'i phyir (*phyir* DPNG; ill. C) **sems mngon par 'du byed pa gang yin**
pa'o//

(漢訳 Text B 4.1.5) :

思云何？謂三和合故**令心造作**，於所緣境隨與領納和合乖離。

チベット語訳の *sems mngon par 'du byed pa* と漢訳の「令心造作」の原語は *cittābhisamkāra* であると推定される¹⁴。「撰決択分」は、**cittābhisamkāra* を、所縁、すなわち認識対象と関連付けて解説している。これは「本地分」や『集論』『五蘊論』の記述には見られない説明である。この説明文はチベット語訳・漢訳とも簡潔に過ぎて文意が確定し難い。以下では、この一文の意味を考察する。

5.2.1.1 チベット語訳における思の理解について

チベット語訳の中では、*dmigs pa de la tshor ba dang/ phrad pa dang/ 'bral ba* という部分が特に問題となろう。室寺ほか [2017] では、この定義文を次のように翻訳する。

意思とは如何なるものか。〔感覚能力ないし思考能力と、対象と、認識という〕三者の和合に基づき、**その認識対象に対する感受と結び付いたり離れたりするために**、心を造り上げることである。(室寺ほか [2017: 21])

この訳では、問題の部分は「所縁に対する感受と結合すること、または分離すること」(以下、【理解1】とする)を意味していると考えられている。この場合、*tshor ba* は名詞であり、結合・分離の対象である。

一方、*tshor ba* を動詞として、また直後の *dang* を並列の助辞として理解すれば、次のように訳すことも可能である。

思は何かと言うならば、三つが結合すること(触)に基づいて、**その所縁に対して、感受すること、結合すること、または分離することによって**、心を作動させることである。(【理解2】とする)

この場合、感受すること、結合すること、分離することの三つの動作はともに「所縁」を対象とする。

「本地分」(Text A-tib 4.4.4.5) : *sems pa las ci byed ce na/ rtog pa dang/ (/ DPNG; om. C) lus dang (dang PNG; dang/ DC) ngag gi las (las DC; om. PNG) la sogs pa slong ba'i las byed do//* (【訳】思は何をなすのかと言うならば、尋と、身〔業〕・語業などを発動するはたらきをなす。)

「撰決択分」(Text C 4.3.5) : *sems pa las gang dang ldan zhe na/ rnam par rtog pa dang/ lus dang ngag gi las kun nas slong ba'i las can yin no//* (【訳】思は何のはたらきをもつのかと言うならば、尋(思考)と、身〔業〕・語業を発動するはたらきをもつものである。)

「本地分」(Text A-chi 4.4.4.5) : 「思作何業？謂發起尋伺、身語業等為業。」(【訳】思は何のはたらきをなすのか。尋伺や身〔業〕・語業などを發起することをはたらきとする。)

「撰決択分」(Text B 4.3.5) : 「思為何業？謂發起尋伺、身語業為業。」(【訳】思は何のはたらきをなすのか。尋伺や身〔業〕・語業を發起することをはたらきとする。)

¹⁴ 「本地分」の思の定義文は *cetanā katamā | cittābhisamkārah ||* であった(第5.1.1節参照)。この箇所の *cittābhisamkāra* はチベット語訳では *sems mngon par 'du byed pa*、漢訳では「心造作」となっている(注18参照)。

要するに, dmigs pa de la tshor ba dang の tshor ba を名詞として読むか, 動詞として読むかに応じて, dang の役割が変わり, この文に対する理解も異なることになる。【理解1】では, 結合や分離の対象は感受となっているが, 【理解2】では, 感受すること, 結合すること, 分離することは, いずれも所縁を対象としている。

5.2.1.2 漢訳における思の理解について

上述のチベット語訳に対応する漢訳は「於所縁境隨與領納和合乖離」となっている。この一節は漢文として難解である。初めに「於所縁境」(所縁としての対象に対して)とあり, 何らかの動作の対象が示されている。この後に「隨與領納和合乖離」と続く。「和合」と「乖離」は, 対象との結合と分離を表す動作として理解できる。しかし, 「隨與領納」の意味は明瞭ではない。そもそも, この訳文の中の「隨與」(以下では「隨与」と表記)という語はチベット語訳には対応する語が見られない。一方, 「領納」という語は, 五遍行の「受」(vedanā) の定義文の anubhavanā (経験すること, 感受すること) の訳語であるため(注18参照), 「受」の同義語であると理解できる。チベット語訳にある tshor ba は一般的には vedanā の訳語であるが, ここでは anubhavanā の訳語である可能性を否定できない。いずれにしても, 感受するという動作を表していることは間違いないであろう。

これに対して, 「隨与」の意味は明確ではない。一般的に「与」という字は, 「与する」「と(共に)」「与える」などの意味をもつ。これを「隨」と組み合わせて「隨与」という熟語を作る例は珍しい。第5.2.2.1節で詳しく論じるように, 「撰決択分」では, いま問題として一節に先立つ箇所に「境隨与」という表現が見られる。これについては, 基と同時代の学僧たちの間でも解釈が分かれていた模様であり, 「対象を心に随って転じさせる」(「令境隨心轉」)と理解する者もいれば¹⁵, 「思はこの対象に随って, 識とともに転じる」(「思隨此境与識俱轉」)と理解する者もいる¹⁶。前者は「隨与」を「随って」と解釈しており, 後者は「隨」と「与」に分けてそれぞれ異なる目的語を想定している。当時の中国の学僧にとっても, 「隨与」は容易に理解できることばではなかったことが窺われる。

5.2.2 「隨与」と結合・分離の関係について

5.2.2.1 「撰決択分」における行蘊の解説に見られる「隨与」の用例

「撰決択分」は, 上述の五遍行の説明に先立ち, 蘊について説明する。それによれば, 受・想・行蘊はそれぞれ眼・耳・鼻・舌・身・意との接触から生じるものと定義されている。したがって, 受・想・行はそれぞれ都合六種類になる。第1章第1.2.1.2節に述べたように, 初期仏教以来, 受想行蘊はしばしば, 六受身, 六想身, 六思身と言い換えられることがある。同様の解釈は『瑜伽論』の「本地分中声聞地」にも見られる¹⁷。すなわち, 眼などの六根と

¹⁵ 『略纂』(188c8-9): 「備師云。謂思能發心, 令境隨心轉。為之言作。作境隨與心也。」(【訳】備師が言う。〔それは〕思は心を発し, 対象を心に随って転じさせることができるということである。為すは作すという意味である。〔すなわち〕対象の心に隨与することを作す〔ということである〕。)

¹⁶ 『略纂』(188c7-8): 「景師云。謂於和合乖違等境, 思隨此境, 與識俱轉。」(【訳】景師が言う。和合や乖違などの対象に対して, 思はこの対象に随って, 識とともに転じるということである。)

ただし, このように「隨」と「与」がそれぞれ境と識を目的語としていると理解することは, 漢文の解釈としては難しい。このように理解するのは景師だけである。

¹⁷ ŚrBh-T1 108, 11-17: tatra vedanāskandhaḥ katamaḥ / ... ṣaḍ vedanākāyās cakṣuḥsaṃsparśajā vedanā śrotraghrāṇajihvākāyamaṇḥsaṃsparśajā vedanā / tatra saṃjñāskandhaḥ katamaḥ / ... ṣaṭ saṃjñākāyās cakṣuḥsaṃsparśajā saṃjñā śrotraghrāṇajihvākāyamaṇḥsaṃsparśajā saṃjñā / saṃskāraskandhaḥ katamaḥ / ṣaṭ cetanākāyāḥ cakṣuḥsaṃsparśajā cetanā, śrotraghrāṇajihvākāyamaṇḥ saṃsparśajā cetanā / (【訳】また, 受蘊と

の接触によって生じるものであるため、受などの蘊は六種になるとされる。「撰決択分」のこの箇所では六受身などの表現は用いられていないが、背景にはこうした考え方がある。

この説明文のチベット語訳によれば、受想行蘊、すなわち六受身、六想身、六思身それぞれの特徴は「経験すること」(myong ba)、「表象させること」(kun tu shes par byed pa)、「作動させること」(mngon par 'du byed pa)である。漢訳では、これらを「領納」「等了」「造作」と訳す。これらの特徴は、「本地分中意地」の五遍行としての受、想、思の定義と一致しており¹⁸、五遍行との関連性を示している。蘊と五遍行は異なる概念であるが、このように定義が一致しているため、蘊の解釈は遍行を理解するための助けとなると考えられる。

三種の蘊のうち、行蘊、すなわち思に対する説明の中に、「随与」という語が見られる。

(漢訳 Text B 2.1.2-2.1.4) :

問う。受〔蘊〕の自性は如何なるものか。答える。略して六種がある。すなわち眼〔の接触〕などの六触によって生じたものである。(中略)また、すべての受はみな領納の相〔をもつ〕。

問う。想〔蘊〕の自性は如何なるものか。答える。これも前のように六種があると知られるべきである。(中略)また、すべての想はみな等了の相〔をもつ〕。

問う。行〔蘊〕の自性は如何なるものか。答える。これも前のように六種があると知られるべきである。また、この行〔蘊〕の相は、五種類によって心を造作させる。一は、対象の随与をなすこと、二は、それ(対象)の合会をなすこと、三は、それ(対象)の別離をなすこと、四は、雑染の行為を發することができること、五は、心を自在に転じさせることである。また、この行〔蘊〕の相は略して三種がある。一は善行、二は不善行、三は無記行である。また、すべての行はみな造作の相〔をもつ〕¹⁹。

(チベット語訳 Text C 2.1.2-2.1.4) :

受〔蘊〕は何かというならば、それは六種と觀察されるべきである。すなわち、眼・耳・鼻・舌・身・意の接触から生じたものである。(中略)〔受は〕すべてもまた経験することという特徴をもつものである。

想〔蘊〕とは何かと言うならば、それも前と同様に、六種〔と觀察されるべき〕である。(中略)すべてもまた表象させることという特徴をもつものである。

諸行とは何かと言うならば、それらもまたまさに前と同様に、六種〔と觀察されるべき〕

は何か。(中略)六受身、すなわち、眼との接触によって生じる受、耳・鼻・舌・身・意との接触によって生じる受である。また、想蘊とは何か。(中略)六想身、すなわち、眼との接触によって生じる想、耳・鼻・舌・身・意との接触によって生じる想である。行蘊とは何か。六思身、すなわち、眼との接触によって生じる思、耳・鼻・舌・身・意との接触によって生じる思である。)

¹⁸ Text A 4.4.2.3-4.4.2.5: vedanā katamā | anubhavanā || samjñā katamā | samjānanā || cetanā katamā | cittābhisamskārah || (【訳】受とは何か。経験することである。想とは何か。表象することである。思とは何か。心を作動させることである。)

この箇所は漢訳では「受云何?謂領納。想云何?謂了像。思云何?謂心造作。」、チベット語訳では tshor ba gang zhe na/ (/ PNG; om. DC) myong ba'o// 'du shes gang zhe na/ kun shes pa'o// sems pa gang zhe na/ sems mngon par 'du byed pa'o// (/ DPNG; / C) となっている (Text A-chi, Text A-tib 4.4.2.3-4.4.2.5 参照)。

¹⁹ Text B 2.1.2-2.1.4 : 「問: 何等是受自性? 答: 略有六種。謂依眼等六觸所生。(中略) 又一切受皆領納相。

問: 何等是想自性? 答: 此亦六種, 如前應知。(中略) 又一切想皆等了相。

問: 何等是行自性? 答: 此亦六種, 如前應知。又此行相由五種類令心造作。一為境隨與, 二為彼合會, 三為彼別離, 四能發雜染業, 五令心自在轉。又此行相略有三種。一者善行, 二不善行, 三無記行。又一切行皆造作相。」

である。また、それは次のようにである。すなわち、**対象に適応させることと、それ（対象）と結合されるべきことと、それ（対象）から分離されるべきことと、**雑染と業が執られるべきことと、心によって支配されるべきこととによって、心を作動させることは五種であると観察されるべきである。諸行は略して、善と不善と無記のものである。すべてもまた作動させることという特徴をもつものである²⁰。

ここでは、心を作動させることの具体的内容として、五種を挙げて解説している。漢訳の「随与」に対応するチベット語は、*mthun par byed pa* であると考えられる。すなわち、この「随与」は、結合・分離と共に、心を作動させることの一つと数えられており、この三つはいずれも、認識対象に対するはたらきであることが明示されている。

5.2.2.2 「撰決択分」における思の定義文の構造について

第 5.2.1.2 節に述べたように、思の定義文の漢訳に見られる「於所縁境随与領納和合乖離」という一節の中で、「所縁境」は動作の対象を意味し、「和合」と「乖離」はその対象との結合と分離の動作を意味すると理解できる。「領納」も、感受するという動作を表していると考えられる。しかし、「随与領納」の構造は明瞭ではない。すなわち、「随与」も動作を表す語として理解できるが、その動作の対象は、直後の「領納」か、あるいは直前の「所縁境」か、二通りの解釈が可能である。前者の場合、この一節は「所縁境に対して、領納することに随与し、結合または分離する」と理解できる。しかし、前節で述べた行蘊の説明文に照らせば、後者、すなわち「随与」は「所縁境」を対象とする動作を意味すると理解する方が妥当であろうと思われる。この解釈に従えば、「領納」も「所縁境」を目的語として、「所縁境としての対象を感受する」という動作を意味すると考えられる。要するに、「随与」「領納」「和合」「乖離」はいずれも動作を表す語であり、「所縁境」を目的語としている。

玄奘訳『瑜伽論』に対する基の注釈『略纂』も同様の捉え方をしている。『略纂』は、行蘊についての説明文の中の「為境随与」に対して、この思の定義文を援用して「随与および領納〔させる〕」（「随与与領納」）と解説し、「領納」は「随与」とともに起るものであるとしている²¹。

以上の議論に基づいて、「撰決択分」の思の定義文の漢訳は、

思とは何か。三和合（触）の故に、心を造作させることであり、所縁としての対象に対して、随与して領納すること、和合すること、または乖離することである。

と理解できる。

²⁰ Text C 2.1.2–2.1.4: tshor ba gang zhe na/ de ni rnam pa drug tu blta bar bya (*bya* PNG; *bya ba* DC) ste/ mig dang/ (/ DCN; om. PG) rna ba dang/ sna dang/ (/ DCPG; om. N) lce dang/ lus dang/ yid kyi 'dus te reg pa las byung ba'o// (// DCNG; / P) ... thams cad kyang myong ba'i mtshan nyid yin no/

'du shes gang zhe na/ de yang snga ma bzhin du rnam pa drug go//... thams cad kyang kun tu (*tu* PNG; *du* DC) shes par byed pa'i mtshan nyid yin no//

'du byed rnams gang zhe na/ (/ DPNG; om. C) de dag kyang snga ma kho na bzhin du rnam pa drug go// de yang 'di lta ste (*ste* DCNG; ill. P) **yul dang mthun par byed pa dang/ (/ DPNG; // C) de dang phrad (*phrad* DPNG; ill. C) par bya ba dang/ de dang bral (*bral* DC; '*bral* PNG) bar bya ba dang/** kun nas nyon mongs pa dang/ las (*las* DCNG; *lus* P) kun tu (*tu* PNG; *du* DC) blang bar bya ba dang/ sems kyis dbang bsgyur bar (*bar* DCNG; *ba* P) bya ba'i phyir sems mngon par 'du byed pa rnam pa lgar (*lgar* DCN; *sngar* PG) blta bar bya'o// 'du byed rnams ni mdor bsdu na dge ba dang mi dge ba dang lung du ma bstan pa dag ste/ (/ N; om. DCPG) thams cad kyang mngon par 'du byed pa'i mtshan nyid yin no//

²¹ 『略纂』(188c10–11):「由思令心於所縁境隨與與領納，不須言和合等。」【訳】思は心を所縁としての対象に随与と領納させるので、和合などを説く必要がない。

第 5.2.2.1 節の冒頭に述べたように、「撰決択分」では、行蘊の説明文が五遍行の思の定義文に先立っている。両者とも心の作動の有りに関する説明である。漢訳の場合、「随与」は結合と分離とともに、対象に関する動作の一つとして示されている。これに対して、チベット語訳における行蘊の説明文では、「対象に適応させること」(yul dang mthun par byed pa) という訳文が漢訳の「為境随与」に対応していると考えられる。しかし、チベット語訳では、五遍行の思の定義文に、漢訳の「随与」に対応するものが見当たらず、訳文も二通りに解釈し得るなど、安定していない。チベット語訳が原文の趣旨をどの程度正確に伝えているかには疑問が残り、資料としての信頼性に不足があると言わざるを得ない。この前提に立って、以下は漢訳を重視しつつ「随与」について考察する。

5.3 「随与」について

「随与」という語を用いて五遍行の思を説明する例は、基本的には『瑜伽論』「撰決択分」のこの箇所にはしか見られない²²。第 5.2.1.2 節で触れたように、「与」という字は、「与する」「と(共に)」「与える」など様々な意味をもつため、「随与」という語の意味は確定し難い。漢文として読むと、おそらく「随与」は「随って与する」、つまり「随う」と理解することになる。この場合、「境随与」は、「対象に随うこと」を意味することになる。

5.3.1 「本地分」に見られる「随与」の原語

『瑜伽論』「本地分」のサンスクリット語原文と玄奘訳とを対照すると、「声聞地」と「菩薩地」では、「随与」は anupradāna の訳語であることが認められる²³。

このうち、「菩薩地」では、菩薩の清浄なる戒の功德について説明する際に、次のように述べている。

また、次のものは菩薩の、四つの功德と結びついた自性戒である。(中略) 無上の正等覚の果報を理解し〔他に〕与えることと〔結びついた〕、大きな果報と利益を有する〔自性戒〕と知られるべきである²⁴。

ここで、「随与」(anupradāna) は、基本的には「与えること」を意味していると考えられるが、接頭辞 anu と pra が付されることによって、どのようなニュアンスが加わっているのかは不明である。

²² 『瑜伽論』の内容を要約する『顕揚論』(T31, 481a29-b4) は、思についても「和合」「随与」などの語を用いて説明している(「思者、謂令心造作得失俱非、意業為體。或為和合、或為別離、或為隨與、或為貪愛、或為瞋恚、或為棄捨、或起尋伺、或復為起身語二業、或為染汚、或為清淨行、善・不善・非二為業」)。ここでは、「随与」は挙げられているにとどまり、解説は行われていない。

²³ 「本地分中意地」では、「隨與一煩惱隨煩惱相應所起分別」(280c13-14, 対応原文 YBh 12, 20-21 : anyatamenānyatamena vā kleśopakleśena yaḥ samprayuktaḥ saṅkalpaḥ) という一文の中に、「隨與一」という訳語が見られるが、これは「某の一つの〔煩惱・隨煩惱〕と〔相應する〕」(すなわち「與隨一〔煩惱・隨煩惱相應〕」)を意味しており、「撰決択分」の上記の箇所の「隨與」とは関係がない。

²⁴ BBh 138, 9-17: tat punar etac caturbhir guṇair yuktaṃ svabhāvasīlaṃ bodhisattvānām... mahāphalānuśamsaṃ veditavyaṃ anuttarasamyaksambodhiphalaparigrahānupradānatayā.

この箇所は、漢訳(511a9-10)では「如是菩薩具四功德自性尸羅。(中略)應知即是能獲大果勝利淨戒、攝受隨與無上正等菩提果故。」、チベット語訳(D wi 74b2-5; P zhi 85b2-6)では byang chub sems dpa' rnam kyī tshul khriṃs kyī ngo bo nyid yon tan bzhi dang ldan pa ... bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub kyī 'bras bu yongs (yongs D; yong P) su 'dzin cing sbyin par byed pas 'bras bu dang phan yon che bar rig par bya'o// となっている。

一方、「声聞地」では、止観の修行、つまり禅定の修行に関する説明の中に「随与」の用例が見られる。「声聞地」は、止と観を解説した後、捨 (*upekṣā*) について説明するが、その中で「随与」(*anupradāna*) が用いられている。以下、捨に関する一節を引用する。

捨とは何か。それは、止〔という側面〕と観という側面の所縁に対して、汚れのない心をもっている者の心が平等であること (*cittasamā*) である。〔また捨は〕等しく自然に活動することである。また〔捨は〕活動に適している心をもっている者の活動にふさわしいことである。努力することなく活動するという〔活動にふさわしいこと〕は、心の *anupradāna* である²⁵。

この「声聞地」の記述は、捨に関する説明である。禅定の初めの段階では、止、観などを行うが、それらを適切に修した後、人は、心が平等であること (*cittasamā*)、等しく自然に活動すること (*prasaṭhasvarasavāhitā*)²⁶、活動にふさわしいこと (*karmaṇyatā*) という特徴をもつ捨の状態に入る。このうち、活動にふさわしいこととは、努力することなく活動することであり、そのような状態の中に心の *anupradāna* というものがある、と説明される。

「撰決択分」の思の定義文は、心と所縁との関係を説明しているため、「随与」の用法に、「声聞地」の「随与」(*anupradāna*) との類似点が認められる。しかし、このような共通点がありながらも、両者の文脈は全く同様ではない。「声聞地」の記述は禅定の修行を背景として、止観の所縁について説明している。一方、「撰決択分」は、禅定や止観などについては明言していない。また、「撰決択分」は所縁に対する「随与」「和合」「乖離」の三つを並列して説いているが、「声聞地」の記述にはこれが見られない。

5.3.2 「撰決択分中菩薩地」における「随与」の用例

第 5.2.1 節と第 5.2.2.1 節に示した「撰決択分中意地」の二つの箇所、すなわち、五遍行の思の定義文と行蘊の説明文においては、思についての解説に三つの共通点が見られる。まず、思は触にもとづくものである。また、思は心を作動させるもの (*abhisamkāra*) である。最後に、思の作動の具体的な有り様として、所縁に対する「随与」、結合、分離が挙げられる。これらの三つの共通点は思の特徴であると考えられる。

「撰決択分中菩薩地」には、この三つの特徴のうち、二番目と三番目が見られる箇所がある。そこでは、遍計所執性への執着に関する説明の中で、「随与」、結合、分離の三つの作動が取り上げられている。

(チベット語訳)：

遍計所執性に対する執着は要約して言うと、二種類であると知られるべきである。すな

²⁵ ŚrBh-S 393, 6–9: tatropekṣā katamā | yā ālambane asaṃkliṣṭacetasaḥ cittasamā śamathavipaśyanāpakṣe | *prasaṭhasvarasavāhitā | karmaṇyacittasya ca karmaṇyatā, cittasyānupradānam anābhogakriyā | (*prasaṭhasvarasavāhitā を prasaṭhasvarasavāhitā に改めた)

この箇所は漢訳 (456b8–11) では「云何為捨。謂於所縁心無染汚心平等性、於止觀品調柔正直任運轉性、及調柔心有堪性能性。令心隨與、任運作用。」、チベット語訳 (D dzi 144b1–2; P wi 174a4–6) では de la btang snyoms gang zhe na/ zhi gnas dang/ lhag mthong gi phyogs kyi dmigs pa la sems kun nas nyon mongs pa med pa'i sems mnyam pa nyid dang/ rnal du bab pa (pa P; ba D) dang/ rang gi ngang gis 'jug ('jug D; 'dzin P) pa dang/ sems nyams bde ba dang/ sems las su rung ba'i rjes su rtsol ba med pa'i bya bas gtod pa gang yin pa'o// となっている。

²⁶ prasaṭha は、漢訳では「調柔正直」、チベット語訳では rnal du bab pa (落ち着く) と訳されている。この語の意味は明瞭ではないが、『瑜伽論記』(465b11–12) は「調柔正直」について、「止観均平」(止と観が平均していること) と解説している。文脈から見ても、等しさを意味していると考えられよう。

わち、作動させることによる執着と、名称の習慣による執着である。そのうち、作動させることによる執着は五種類であると知られるべきである。すなわち、貪という作動させることと、瞋という作動させることと、結合するという作動させることと、分離するという作動させることと、捨に安定するという作動させることとである²⁷。

(漢訳)：

さらに、遍計所執自性執は略して二種があると知られるべきである。一に、加行執、二に、名施設執。加行執はまた五種があると知られるべきである。一に、貪愛の加行によるもの、二に、瞋恚の加行によるもの、三に、合會の加行によるもの、四に、別離の加行によるもの、五に、捨隨與の加行によるもの²⁸。

チベット語訳の *mngon par 'du byed pa* は *abhisamkāra* の訳語であると推測される(注14参照)。これに対し、漢訳では「加行」となっているが、「加行」という語は *abhisamkāra* の訳語としてしばしば用いられる。これは思の第二番目の特徴である。さらに、この一節の漢訳は、結合、分離、「隨與」の三つの作動について述べている。これは思の第三番目の特徴である。

ただし、漢訳では、「隨與」が「捨隨與」になっており、「隨與」と共に「捨」が説かれている点が異なっている。直前の節に示した「声聞地」の記述によれば、禪定の修行における捨という状態には、「隨與」(*anupradāna*) というのはたらきがある。このことから、捨と「隨與」は関連する概念であることが窺われる。

一方、チベット語訳では、「捨隨與」に対応するのは *btang snyoms su 'jog pa* である。この中の *btang snyoms* は「捨」に対応すると考えられ、「隨與」に対応するのは *'jog pa* である。「声聞地」の記述の中の *anupradāna* は、チベット語訳では *gtod pa* と訳されている(注25参照)。*gtod pa* という語には、心の集中という意味があり、これを意味する場合は、*'jog pa* と言い換えられることがある²⁹。したがって、ここの *'jog pa* は *anupradāna* の訳語と考えられる。

この「撰決択分中菩薩地」の記述を「撰決択分中意地」の記述と比較すると、文脈上の違いはあるものの、結合、分離、「隨與」の三つの作動について説明しているという点では共通している。したがって、両者は「隨與」という作動に関して共通の理解を有していることが予想される。「声聞地」は、「隨與」と捨との関連性を示している一方、結合や分離には言及していない。しかし、「撰決択分中菩薩地」では、「隨與」とともに捨に言及し、「隨與」と捨の関連を示している。

5.4 「本地分中有尋有伺地」の *anupradānāt* について

以上の考察により、「隨與」は捨の状態における心のはたらきであり、その原語は *anupradāna* である可能性が高いことが分かった。*anupradāna* という語は、「菩薩地」では、基本的には「与えること」を意味する。これに対して、「声聞地」では、捨について説明する際に *anupradāna*

²⁷ チベット語訳 (D zi 20b3-5; P'i 22a5-7) : *kun brtags pa'i ngo bo nyid du 'dzin pa ni mdor bsdu na/ rnam pa gnyis (gnyis D; gnyas P) su rig par bya ste/ mngon par 'du byed pas 'dzin pa dang/ ming gi (gi D; gis P) brdas 'dzin pa'o/ de la mngon par 'du byed pas 'dzin pa ni rnam pa lngar rig par bya ste/ rjes su chags pa'i mngon par 'du byed pa dang/ khong khro ba'i mngon par 'du byed pa dang/ phrad pa'i mngon par 'du byed pa dang/ 'bral ba'i mngon par 'du byed pa dang/ btang snyoms su 'jog pa'i mngon par 'du byed pa'o//*

²⁸ 漢訳 (704a7-10) : 「復次、遍計所執自性執當知略有二種。一加行執、二名施設執。加行執當知復有五種。一貪愛加行故、二瞋恚加行故、三合會加行故、四別離加行故、五捨隨與加行故。」

²⁹ Negi p. 1728 参照。

が用いられており、「菩薩地」における *anupradāna* とは異なることを意味しているかの印象をうける。しかしながら、思、あるいは捨に関する記述はいずれも簡潔で、*anupradāna* の意味は特定し難い³⁰。

『瑜伽論』「本地分中有尋有伺地」の *Bhattacharya* 校訂本（以下 *Bh-ed*）では、離間語（「告げ口」のこと）についての説明文に *anupradānāt* という表現が見られる。捨とは文脈は異なるが、この離間語に関わる一文も、*anupradāna* という術語を理解するための手掛かりとなると考えられる。

5.4.1 「有尋有伺地」の記述とその問題点

離間語は、十悪業道の中の語（*vāc*）に関わる業道の一つで、「有尋有伺地」において解説されている。*Bh-ed* の該当箇所では、次に示すように、*anupradāna* が単数従格の形（*anupradānāt*）で用いられる。（比較の便宜上、*ダンダ*は、写本に基づくものは“|”，*Bhattacharya* が独自に施したものは“/”によって示す。）

Bh-ed 175, 8–176, 3:

paiśunikaḥ khalu bhavaṭīty uddeśapadaṃ bhedābhiprāyatvād vibhedakaḥ / eṣāṃ śrutvā teṣāṃ ārocayati | teṣāṃ vā śrutvaiṣāṃ ārocayati | yathāśrutabhedānukūlaṃ vacanaṃ / samagrāṇaṃ bhettā bhavati viprītisaṃjananatayā / bhinnānāṃ cānupradānāt prītiḥ sambhavati | gopanatayā vyagrārāmo bhavati viprītisaṃjanane kliṣṭacittatayā | vyagarataḥ prītisambhavavilopane kliṣṭacittatayā vyagrakaraṇiṃ vācam bhāṣate 'śrutvā vā paraprayojanatayā vā / samāsārthaḥ punar bhedābhiprāyatā abhinnabhedaprayogātā bhinnabhedaprayogātā bhedakliṣṭacittatā paraprayojanatā ca paridīpitā bhavati //

引用文の中ほどの、網かけした一文に、*bhinnānāṃ cānupradānāt* という表記が見られる。しかし、写本の該当箇所は、次に示すように、*bhinnānāṃ cānupradānām* という複数属格の形になっている。

MS 48a1-3:

paiśunikaḥ khalu bhavaṭīty uddeśapadaṃ | bhedābhiprāyatvād vibhedakaḥ eṣāṃ śrutvā teṣāṃ ārocayati | teṣāṃ vā śrutvaiṣāṃ ārocayati | yathāśrutabhedānukūlaṃ vacanaṃ samagrāṇaṃ bhettā bhavati | viprītisaṃjananatayā bhinnānāṃ cānupradānām prītisambhavati | lopanatayā vyagrārāmo bhavati viprītisaṃjanane kliṣṭacittatayā | vyagarataḥ prītisambhavavilopane kliṣṭacittatayā vyagrakaraṇiṃ vācam bhāṣate 'śrutvā vā paraprayojanatayā vā samāsārthaḥ punar bhedābhiprāyatā | abhinnabhedaprayogātā | bhinnabhedaprayogātā bhedakliṣṭacittatā paraprayojanatā ca paridīpitā bhavati |

また、後に述べるように、漢訳、チベット語訳ともに従格への訂正を支持していない。

根拠となる資料がないにもかかわらず、*Bhattacharya* はあえて写本の読みを訂正している。写本の読み方では意味が通じないと判断したのであろう。実際、この一箇所だけではなく、校訂本 *Bh-ed* と写本を比較すると、*Bh-ed* では*ダンダ*の位置が頻繁に修正されている。そもそもこのテキストには、構文が不明確で、理解し難い箇所が多々ある。問題の一文（網かけ

³⁰ 筆者は、楊 [2019] において、「本地分中有尋有伺地」の *anupradānāt* という表現について考察した。本章第 5.4 節は、上記拙論にもとづく。ただし、上記拙論では、紙幅の都合で一部の内容を省略した。そのため、再録にあたり、内容を補訂した。

の箇所) の場合、写本では *viprītisaṃjanatayā bhinnānām cānupradānām prītisambhavati* となっており、主語が明示されていない。これに対して、Bh-ed では三つの訂正が加えられている。まずダンドの位置の修正により、文頭の *viprītisaṃjanatayā* を前の一文にかけている。次に *prītisambhavati* を *prītiḥ sambhavati* に改め、*prītiḥ* という主語を設けている。最後に、*anupradānām* を *anupradānāt* (*anupradāna* という動作名詞の単数従格) に改めている。しかし、この文の趣旨は依然として明瞭でない。

5.4.2 漢訳とチベット語訳が示す理解

写本で *bhinnānām cānupradānām* となっている箇所は、漢訳では「別離を随印するとは」(随印別離者)、チベット語訳では「分裂したものたちを不和にするとは」(*bye ba rnams mi 'dum par byed ces bya ba ni*) と訳されている。漢訳の「随印する」という訳語は意味が明確ではない³¹。一方、チベット語訳の「不和にする」も、既に分裂したものたちを不和にするということになり、やや理解し難い。

この一節において、漢訳とチベット語訳はともに不明瞭な点があるものの、次の点に関しては一致している。すなわち、漢訳は「者」、チベット語訳は *ces bya ba ni* によって、この一節を引用文であるかのように扱っている。これに対して、サンスクリット原文は引用であることを示していない。Bhattacharya はこの箇所のチベット語訳に疑義を呈するものの、注記するに留まる。

実は、同様の問題はこの一箇所だけではなく、周辺に数箇所、見られる(原文に対応する *iti* がある箇所は細い下線で、対応がない箇所はボールド+波線で表記する)。

(漢訳)

「復次、離間語者者、此是總句。若為破壞者、謂由破壞意樂故。聞彼語已向此宣說、聞此語已向彼宣說者、謂隨所聞順乖離語。破壞和合者、謂能生起喜別離故。隨印別離者、謂能乖違喜更生故。熈壞和合者、謂於已生喜別離中心染汚故。樂印別離者、謂於乖違喜更生中心染汚故。說能離間語者、謂或不聞、或他方便故。此中略義者、謂略顯示離間意樂、離間未壞方便、離間已壞方便、離間染汚心、及他方便應知。」(316a14-23)

(チベット語訳)

phra ma can yin zhes bya ba ni bstan pa'i tshig go// (// D; / P) mnam par 'byed par byed pa zhes bya ba ni dbye ba'i bsam pa dang ldan pa'i phyir ro// 'di dag las thos nas de dag la zlos pa dang/ de dag las thos nas 'di dag la (*la* D; *las* P) zlos pa zhes bya ba ni/ dbye ba dang mthun pa'i tshig ji skad thos pa'o// mthun pa rnams 'byed par byed ces bya ba ni (*ni* P; *na* D) mi dga' ba bskyed pas so// bye ba rnams mi 'dum par byed ces bya ba ni/ dga' bar 'gyur ba gcod pas so// mi 'dum par dga' ba yin zhes bya ba ni nyon mongs pa can gyi sems kyis mi dga' ba bskyed pa'o// mi 'dum par mos pa zhes bya ba ni nyon mongs pa can gyi sems kyis dga' bar 'gyur ba dang (*dang* D; *dang*/ P) mi mthun par byed pa'o// (// D; / P) mi mthun par bya ba'i tshig smra ba zhes bya ba ni/ ma thos pa 'am/ gzhan la 'chol ('chol em.; 'tshol D; 'tshol P) ba ste/ don mdor bsdu na/ dbye ba'i bsam pa dang/ ma bye ba dbye ba'i sbyor ba dang/ bye ba mi mthun par bya ba'i sbyor ba dang/ bye ba la nyon mongs pa can gyi sems yod pa dang/ gzhan la 'chol ('chol D; 'tshol P) ba yang yongs su ba stan pa yin no// (D tshi 88b4-89a1; P dzi 102a5-102b1)

³¹ ちなみに、『瑜伽論記』では、この箇所について二通りの短い解説を行っている (T42, 357b15-16, 357b20-21 参照)。

サンスクリット原文には *iti* が二箇所あり、漢訳・チベット語訳の対応箇所は、引用文を提示する「者」と *zhes bya ba ni* を用いて訳出している。しかし、問題の箇所を含め、原文に *iti* が無いにもかかわらず、両訳では共通して引用文として訳出している箇所が六箇所ある。

以上の論点をまとめると、二つの問題点が明らかになる。まず、『瑜伽論』のこの離間語に関する記述は、全体的に構文が不明確であり、内容が理解し難い。一方、漢訳とチベット語訳は原文と構造上の相違を示している。また、写本における *bhinnānām cānupradānām* の中の *anupradānām* という表現は意味が明らかでない。その表現について漢訳とチベット語訳ではそれぞれ異なる理解をしている。

5.4.3 初期経典における関連箇所

漢訳とチベット語訳において引用文とされている箇所は、サンスクリット原文の以下の箇所（ボールドで表記）に対応していると考えられる。

“*paīsunikaḥ khalu bhavati*”^{ty} uddeśapadaṃ | *bhedābhiprāyatvād “vibhedakaḥ” “eṣāṃ śrutvā teṣāṃ ārocayati | teṣāṃ vā śrutvaisāṃ ārocayati*”^{ti} yathāśrutabhedānukūlaṃ vacanaṃ “*samagrāṇām bhettā bhavati*” | *viprīṭisaṃjananatayā*⁽¹⁾ “*bhinnānām cānupradānām*”⁽²⁾ *prīṭisambhavati*⁽³⁾ | *lopanatayā*⁽⁴⁾ “*vyagrārāmo bhavati*” *viprīṭisaṃjanane kliṣṭacittatayā | “vyagrarataḥ” prīṭisambhavavilopane kliṣṭacittatayā “vyagrakaraṇīm vācam bhāṣate” ’śrutvā vā paraprāyojanatayā vā samāsārthaḥ punar bhedābhiprāyatā | abhinnabhedaprayogātā | bhinnabhedaprayogātā bhedakliṣṭacittatā paraprāyojanatā ca paridīpitā bhavati* | (MS 48a1-3; Bh-ed 175, 8-176, 3)

⁽¹⁾ *saṃjananatayā* MS; *saṃjananatayā* Bh-ed, em. ⁽²⁾ *cānupradānām* MS; *cānupradānāt* Bh-ed. ⁽³⁾ *prīṭisambhavati* MS; *prīṭiḥ sambhavati* Bh-ed. ⁽⁴⁾ *lopanatayā* MS; *gopanatayā* Bh-ed. ※ダングは便宜的に写本通りに示し、Bh-ed との差異は表記しない。

試みに、これら引用箇所と見なし得る部分を抽出し、つなげてみると、次のようになる。

paīsunikaḥ khalu bhavati vibhedakaḥ, eṣāṃ śrutvā teṣāṃ ārocayati teṣāṃ vā śrutvaisāṃ ārocayati samagrāṇām bhettā bhavati bhinnānām cānupradānām vyagrārāmo bhavati vyagrarato vyagrakaraṇīm vācam bhāṣate.

ところで、初期経典では、離間語に関する記述の中に、この一文と類似するものがしばしば見られる。例えば、マッジマ・ニカーヤでは次のように述べられている（両者における類似する部分を下線で示す）。

Sāleyyakasutta (MN 41. Vol. 1, p. 286, 31-35):

piṣunāvāco kho pana *hoti, ito sutvā amutra akkhātā imesaṃ bhedāya amutra vā sutvā imesaṃ akkhātā amūsaṃ bhedāya, iti samaggānaṃ vā bhettā bhinnānaṃ vā anuppadātā, vaggārāmo vaggarato vagganandī vaggakaraṇim vācam bhāsītā hoti.*

【訳】しかるに、離間語を言う者がいる。こちらを分裂させるために、こちらから聞いてそちらに告げる者である。あるいは、そちらを分裂させるために、そちらに聞いてこちらへ告げる者である。というように、和合しているものたちを分裂させる者、あるいは、すでに分裂したものたちを anuppadā する者である。不和を喜び、不和を楽しみ、不和を嬉しがり、不和にさせる言葉を言う者である。

アングッタラ・ニカーヤにもほぼ同様の経文がある³²。したがって、『瑜伽論』のこの説明文は、漢訳とチベット語訳が示すように、関連する經典の引用を挟みながら解説を行っていることが分かる。

5.4.4 anupradānām の形について

上の經典では、『瑜伽論』の問題箇所に対応する部分は *samaggānaṃ vā bhettā bhinnānaṃ vā anuppadātā* となっている。また、經典では、上記の引用文に続いて、十善業道が述べられる。その中の離間語を離れた者についての説明文では、*bhinnānaṃ vā sandhātā sahitānaṃ vā anuppadātā* (分裂しているものたちを和解させる者、あるいは、すでに和解したものたちを *anuppadā* する者) と述べる³³。この二つの文は、離間語を言う者と、離間語を離れた者について述べており、*anuppadātā* という行為者名詞を用いている。この表現は、初期經典においてほぼ定型句となっているが、後者、すなわち離間語を離れた者の場合の *anuppadātā* の事例がより多く見られる。また対応する内容は漢訳『中阿含』でも確認することができる³⁴。

さらに、「離間語を離れた者」については、『根本説一切有部律』の「破僧事」(SbhV 232, 24) に、*bhinnānām sandhātā bhavati; samagrāṇām cānupradātā*³⁵ というサンスクリットの平行文が見られる³⁶。『瑜伽論』の問題箇所 *samagrāṇām bhettā bhavati bhinnānām cānupradānām* とは正反対の内容となっているが、形式上、*anupradātā*, *anupradānām* の語を除けば、全く同様である。その他、『十地経』では、第二離垢地の菩薩は離間語から離れているということについて、次のように述べている。

また、〔その菩薩は〕離間語から離れたものであり、有情を分裂させず、悩乱せずに振る舞うものである。その〔菩薩〕は、そちらを分裂させるために、こちらから聞いてそちらに告げる者ではない。こちらを分裂させるために、そちらから聞いてこちらに告げる者ではない。和合しているものたちを分裂させたりしない。すでに分裂したものたちに *anupradā* することをしない。不和を喜ぶものではない。不和を楽しむもの〔ではない〕。真実なものでも不実なものでも、不和にさせる言葉を言わない³⁷。

³² AN 10.206. Vol. 5, p. 293, 8–12: *pisunāvāco hoti ito sutvā amutra akkhātā imesaṃ bhedāya, amutra vā sutvā imesaṃ akkhātā amūsaṃ bhedāya, iti samaggānaṃ vā bhettā bhinnānaṃ vā anuppadātā vaggārāmo vaggarato vagganandī vaggakaraṇiṃ vācam bhāsītā hoti.*

³³ *Sāleyyakasutta* (MN 41. Vol. 1, p. 288, 10–14): *piṣuṇaṃ vacaṃ pahāya piṣuṇāya vācāya paṭivirato hoti, ito sutvā na amutra akkhātā imesaṃ bhedāya amutra vā sutvā na imesaṃ akkhātā amūsaṃ bhedāya, iti bhinnānaṃ vā sandhātā sahitānaṃ vā anuppadātā samaggārāmo samaggarato samagganandī samaggakaraṇiṃ vācam bhāsītā hoti.*

³⁴ 離間語を言う者について、『中阿含』15経「思経」(T1, 437c14–16)では次のように述べる：「二日兩舌，欲離別他。聞此語彼，欲破壞此。聞彼語此，欲破壞彼。合者欲離，離者復離。而作群黨，樂於群黨，稱說群黨。」(AN 10.207 に対応。語業に関する内容は AN 10.207 では省略されている。AN 10.206. Vol. 5, p. 295, 26–p. 296, 2 参照)

離間語を離れた者について、『中阿含』80経「迦絺那経」(T1, 552c1–5)では次のように述べる：「諸賢。我離兩舌，斷兩舌，行不兩舌，不破壞他。不聞此語彼，欲破壞此。不聞彼語此，欲破壞彼。離者欲合，合者歡喜。不作群黨，不樂群黨，不稱說群黨，我於兩舌淨除其心。」(ニカーヤに対応なし)

³⁵ *bhinnānām* (sic), *samagrāṇām* (sic).

³⁶ Chung, Fukita [2011 : 92–94] 参照。「破僧事」の平行文については、筆者が日本印度学仏教学会第69回学術大会発表後、八尾史博士(当時早稲田大学高等研究所講師)のご指摘を受けた。

³⁷ DBh-K 38, 10–14: *piṣunavacanāṭ pravirataḥ khalu punar bhavati | *abhedāvihetḥāpratipannaḥ sattvānām sa netaḥ śrutvāmūtrākhyātā bhavaty amīṣāṃ bhedāya | nāmutaḥ śrutvehākhyātā bhavaty eṣāṃ bhedāya | na *saṃhitān bhinatti na bhinnānām anupradānaṃ karoti | na vyagrārāmo bhavati | na vyagrarato na vyagrakaraṇiṃ vācam bhāṣate | sadbhūtām asadbhūtām vā | (*abhedāvihetḥāpratipannaḥ を*

以上のことから、離間語の文脈では動詞 *anu-pra-√dā* の派生語である *anupradātā* や *anupradāna* が定型表現として用いられていることが分かる。『瑜伽論』の当該の箇所も離間語を扱っており、類似した表現が用いられていたものと推測される。文章表現の相似性から見ると、初期経典とより一致していることは一目瞭然であろう。したがって、『瑜伽論』のこの説明文は、離間語を言う者について述べる初期経典の文章を引用して解説を加えたものと推定される。

5.4.5 *anuppadātā* の意味について

anupradātā という語については、漢訳の阿含や論書では意識が多く、意味を確定し難い³⁸。一方、マッジマ・ニカーヤのアッタカターでは、離間語を離れた者が *anuppadātā* となる場合について、次のように解説する。

anuppadātā とは、和解を *anuppadātā*, [すなわち] 二人が和解したのを見て、「このような良家に生まれ、このような諸々の功德を備えたあなたたちには、これが相応しいのだ」などと言い、強化する者 (*dalhīkammaṃ kattā*) という意味である³⁹。

類似例はディーガ・ニカーヤのアッタカター (DN-a, Vol. 1, p. 74, 23–26) にも見られる。これらを主な根拠として、*anuppadātā* を「さらに与える者、励ます者、強める者、扇動する者」と解釈することが見られる⁴⁰。

ところで、離間語を言う者について、アッタカターでは *anuppadātā* を *upatthambhetā* に言い換えて、次のように解説する。

「というように、和合しているものたちを分裂させる者」とは、このように、和合のもの、[すなわち、] 二人の友達を分裂させる者である。「あるいは、すでに分裂したものたちを *anuppadā* する者」とは、「あなたはよくやった。それを数日だけやめていることで、あなたに多大な不利益がなされるであろう」と、このように、分裂したものたちが再び和解しないよう、*anuppadātā*, [すなわち] 確実にする者 (*upatthambhetā*) であり、理由を示す者という意味である⁴¹。

upatthambhetā (固める者) は、上記のマッジマ・ニカーヤのアッタカターの中の *dalhīkammaṃ kattā* の同義語として、「強化する者」の意味で用いられている可能性もあるが、*upatthambhetā* に対応するサンスクリット語の *upa-√stambh* には「持続する、維持する」という意味もある。この注釈の内容に照らせば、*anu-ppa-√dā* には、現在の状態を元に戻らないように持続させるという含意があると考えられる。

abhedāvihethāpratipannaḥ, **saṃhitāṃ* を *saṃhitān* に改めた。DBh-R 24, 2–7 参照。)

³⁸ 例えば、「思経」と「迦絺那経」(注 34 参照) ではそれぞれ、「離者復離」(離れた者をさらに離れさせる)と「合者歡喜」(和合した者を喜ばせる)となっている。また、『集異門足論』(T26, 408b24. 注 41 参照) では、「已乖離者令永間隔」(すでに乖離した者を永く隔たらせる)となっている。

³⁹ MN-a, Vol. 2, p. 207, 14–17: *anuppadātā* ti sandhānānuppadātā. dve jane samagge disvā, tumhākaṃ evarūpe kule jātānaṃ, evarūpehi guṇehi samannāgatānaṃ anucchavikam etan ti ādini vatvā dalhīkammaṃ kattā ti attho.

⁴⁰ CPD p. 203: “one who gives in addition (freely), i.e. who encourages, confirms, or incites”.

⁴¹ MN-a, Vol. 2, p. 330, 33–p. 331, 4: *iti samaggānaṃ vā bhettā* ti evaṃ samaggānaṃ vā dvinnaṃ saḥāyakānaṃ bhedakaro. *bhinnānaṃ vā anuppadātā* ti, sutṭhu katamā tayā tam pajahantena¹ katipāhen’ eva te mahantaṃ anattaṃ kareyyā ti evaṃ bhinnānaṃ puna asandhānāya *anuppadātā*² upatthambhetā, kāraṇaṃ dassatā ti attho. (1, 2. の句読点を取った.)

『集異門足論』(408b24–29) には部分的に類似した記述が見られる。

5.4.6 まとめ

以上のことから、「有尋有伺地」のこの離間語の説明文は、初期經典の定型句を引用し、間に解説を挟み込んだものと考えられる。その中で、写本では *anupradānām*, Bh-ed では *anupradānāt* となっている問題の箇所は、經典の記述に照らせば、*anupradātā* と校訂すべきであろう。この場合、*anu-pra-√dā* は「[状態を]維持する、持続させる；強化する」という意味を有すると考えられる。

また、「有尋有伺地」におけるこの説明文の構造と内容は、次のように解釈し得る（經典の引用文であろうと想定される箇所をボールドで示す）。

paīsunikaḥ khalu bhavātīty uddeśapadaṃ | bhedābhiprāyatvād vibhedakaḥ / eṣāṃ śrutvā teṣāṃ ārocayati | teṣāṃ vā śrutvaiṣāṃ ārocayatīti yathāśrutabhedānukūlaṃ vacanaṃ / samagrāṇāṃ bheṭṭā bhavati viprītisaṃjananatayā⁽¹⁾ / bhinnānāṃ cānupradātā⁽²⁾ prītisambhavati⁽³⁾ lopanatayā⁽⁴⁾ / vyagrārāmo bhavati viprītisaṃjanane kliṣṭacittatayā | vyagrarataḥ prītisambhavavilopane kliṣṭacittatayā / vyagrakaraṇīm vācaṃ bhāṣate 'śrutvā vā paraprāyojanatayā vā / samāsārthaḥ punar bhedābhiprāyatā abhinnabhedaprayogātā bhinnabhedaprayogātā bhedakliṣṭacittatā paraprāyojanatā ca paridīpitā bhavati //

⁽¹⁾ *saṃjananatayā* MS; *saṃjananatayā* Bh-ed, em. ⁽²⁾ *cānupradānām* MS; *cānupradānāt* Bh-ed; *cānupradātā* em.

⁽³⁾ *prītisambhavati* MS; *prītiḥ sambhavati* Bh-ed. ⁽⁴⁾ *lopanatayā* MS; *gopanatayā* Bh-ed. ※ダンダについては、写本に基づくものは“|”，筆者によるものは“/”により示す。

【訳】「離間語〔者〕がいる」とは総括する語句である。分裂させようとするものであるから、「分裂させるもの」〔という〕。「こちらのことを聞いてそちらに告げる。あるいは、そちらのことを聞いてこちらに告げる」、すなわち聞いた通りの分裂に適する言葉を〔告げる〕。「和合しているものたちを分裂させる者である」〔、すなわち〕敵意を生じさせるものとして。「また、すでに分裂したものたちを〔分裂した状態で〕持続する者」〔、すなわち〕好意が起りそうな人に対して、妨害するものとして。「不和を喜ぶものである」〔、すなわち〕敵意を生じさせることに汚れた心をもつものとして。「不和を楽しむもの」〔、すなわち〕好意が起りそうなことを破壊することに汚れた心をもつものとして。「不和にさせる言葉を言う」〔、すなわち〕あるいは〔相手から〕聞かず〔不和にさせる言葉を言う〕、あるいは他者を利用して〔不和にさせる言葉を言う〕。そして、要約：分裂させようとすることと、分裂していないものたちに対して分裂を行うことと、すでに分裂したものたちに対して分裂を行うことと、分裂させることに汚れた心をもつことと、他者を利用して〔告げさせる〕こととが明らかにされたことになる。

5.5 本章の結論

以上の考察から、「撰決択分中意地」における思の定義文「三和合故令心造作，於所緣境隨與領納和合乖離」に見られる「随与」は、捨 (*upekṣā*) と関連する概念であり、*anupradāna* が原語として想定される。「有尋有伺地」の用例についての考察により、『瑜伽論』の中の *anu-pra-√dā* は「[状態を]維持する、持続させる；強化する」を意味することが分かる。この解釈に照らせば、第 5.3.1 節に示した「声聞地」の捨の説明文における *cittasyānupradānam anābhogakriyā* という一文は、「努力することなく活動するという〔活動にふさわしいこと〕は、心の、〔その捨の状態を元に戻らないように〕持続させることである」と理解することができる。つまり、捨の文脈の「随与」(*anupradāna*) は「〔捨（平静）の状態を〕持続させる

こと」を意味していると考えられる。

第5.2.1.2節で示したように、「領納」の原語は *anubhavanā* であると認められる。したがって、「随与領納」は *anupradāna* と *anubhavanā* によって構成される複合語であると想定され、『略纂』が解釈するように、連動した動作を表すものであると考えられる。

以上の議論に基づいて、この定義文は次のようにと理解できる。

思云何？謂三和合故，令心造作，於所緣境，隨與領納、和合、乖離。

【訳】思とは何か。三和合（触）に基づいて、心を作動させることである。すなわち、所縁としての対象に対して、[捨（平静）の状態を] 持続させながら領納すること、和合すること、または乖離することである。

思に関する「撰決択分」のこの定義文は、心（識）と認識対象との関係に限定してその作動の有り方を解説している。特に「随与領納」という作動は禅定における捨（*upekṣā*）との関連性が高い。これは、ほかの瑜伽行派文献には見られない、『瑜伽論』独自の理解である。従来の研究では、思に対する瑜伽行派の理解は有部の理解とほぼ同じであるとされてきた。しかし、以上の考察から、『瑜伽論』の思の理解は有部とは異なり、禅定を背景としていることが明らかになった。

捨（*upekṣā*）は、四禅以上の禅定にある心のはたらきである⁴²。第5.1.3節では、「本地分」の五遍行に関する記述に対して疑問を提起した。すなわち、思はすべての地にある心所であるにも関わらず、思のはたらきについての説明は、四禅以上の地には適用されない、という。一つの可能性として、「撰決択分」の思の解釈は、「本地分」の記述に対して合理的な解釈を与えようとしていたと考えられる。

⁴² 『瑜伽論』「本地分中三摩呬他地」（*SamāhitaBh* 196, 7）：*upekṣāsahagataḥ samādhiḥ katamaḥ? caturthād dhyānāt prabhṛti*.（【訳】捨を伴う三摩地とは何か。四禅以上のものである。）

結論

本研究では、『瑜伽論』を中心として、瑜伽行派の五遍行説を考察した。

第1章では、作意などの五心所に関する『瑜伽論』の説明を考察した。また、第4、5章では、五心所の中の作意と思について、『瑜伽論』の説明において特に問題となる点を考察した。この考察によれば、作意に関しては、有部の論書、特に比較的古い有部の論書は修道論的な観点から論じる傾向があるのに対して、『瑜伽論』は、識を対象に向かわせ認識させるという作意の機能を重要視する。触に関しては、有部の論書では、触は感官、対象、識の三つの結合であるのか、あるいは、それとは別のものであるのかが一大問題とされるが、『瑜伽論』では特にこれを問題としていない。『瑜伽論』などの瑜伽行派の論書の説明を見れば、瑜伽行派の関心は、感官、対象、識の結合から受の生起に至る過程における触の作用にある。瑜伽行派は、触が対象の特徴を捉え、楽などの受に対応させ確定させるという作用を重要視して解説しようとしている。想に関しては、『瑜伽論』などの瑜伽行派の論書は、想と言語表現との関係を重んじて説明している。思に関しては、有部では意業との関係を重要視して説明するのに対して、『瑜伽論』ではそのことは殊更問題とされていない。『瑜伽論』、特に「撰決択分」の説明は識と認識対象との関係に限定してその作動の有り方を解説しており、禪定を背景として論じていることを窺わせる。

従来の研究では、作意などの五心所に関する瑜伽行派の理解は有部の理解とほぼ同様であるとされてきた。しかし、第1章の考察で明らかにしたように、五心所に関する『瑜伽論』の説明には、有部と同様の、あるいは近似する表現がしばしば見られる一方、有部の論書には見られない、独自の要素もいくつかある。これらは、瑜伽行派独自の問題意識を反映している。このことから、五心所に対する『瑜伽論』、および瑜伽行派の理解は、必ずしも有部の説を踏襲していないことが明らかになる。

第2章では、「遍行」という概念について、『瑜伽論』を中心として、瑜伽行派の論書における関連する記述を検討した。遍在するという性質に関して、瑜伽行派の論書には、概ね二種の解釈が見られる。ひとつは、『瑜伽論』に見られる、すべての状態の心に、すべての地に、常に、心所が俱起するという解釈である。『瑜伽論』は、この四つは作意・触・受・想・思の五心所の特徴であると考え、「撰決択分」において作意などの五心所を「遍行」(*sarvatraga)という語によって総称する。この五心所以外の心所は、四つの特性の一部を有するか、あるいはそのいずれも有さない。「撰決択分」ではそれらの心所を「非遍行」と総称する。欲などの五心所はその代表的なものとして説明されている。遍行心所と別境心所についての『瑜伽論』の議論においては、「本地分」でも「撰決択分」でも、アーラヤ識との相応については全く言及が見られない。

一方、遍在するとは八識に共通して存在することである、という解釈もある。八識すべてが遍行心所と相応するというのを初めて明言したのは『三十頌』である。八識に共通して存在するという解釈は、『三十頌』の影響によって生まれたものであろう。

先行研究では、瑜伽行派が十大地法を五遍行と五別境に二分した主な理由の一つは、作意などの五心所はアーラヤ識を含め、すべての識に相応する一方、欲などの五心所はアーラヤ識には相応しないということにあるとされている。しかし、第2章の考察により、瑜伽行派の最古の文献である『瑜伽論』は、八識との相応関係に基づいて五遍行と五別境を別に立てているのではないことが分かる。『瑜伽論』における遍行心所と別境心所についての議論は、

心・心所の相応関係というより、むしろ、物事 (vastu) が認識される過程における心所の状態と働きに着目して遍行心所と別境心所を区別していると言える。

第3章では、アーラヤ識の五心所に関する『瑜伽論』の記述を考察した。

先行研究では、アーラヤ識と心所の相応関係は『瑜伽論』「本地分」においては特に問題とされていなかったが、「撰決択分」に至って、アビダルマに説かれる識の性質（心所との相応関係など）がアーラヤ識の概念に追加された、と考えている。しかし、第3章で明らかにしたように、『瑜伽論』「本地分」の記述は、アーラヤ識が心所を伴うこと、また、そのアーラヤ識の心所は、縁起説の名色支の名 (nāman), すなわち再生の最初の段階における名であることを暗示している。一方、「撰決択分」では、アーラヤ識の心所は作意・触・受・想・思であると解説する。これはニカーヤにおける縁起説の名色支の名の解説と一致している。

また、第3章の考察により、『瑜伽論』はアーラヤ識と五心所の相応関係を述べているが、その五心所は転識の五心所と区別されている、ということも明らかになった。言い換えれば、「本地分」と「撰決択分」に説かれている五遍行の定義は転識の心所を説明するものであり、その記述にはアーラヤ識の五心所が反映されていない。五遍行の定義に基づいてアーラヤ識の五遍行を理解することはできない。

従来の研究では、五遍行説は、有部の五心所の定義を継承しながら、五心所の遍在する性質を八識に敷衍適用した、形式的な理論にすぎない、と見做されている。五遍行と十大地法の間形式上の関連性があることは一目瞭然である。しかし、本研究が明らかにしたように、五遍行に関する『瑜伽論』の説明は十大地法とは異なる関心を示している。また、『瑜伽論』のアーラヤ識が作意などの五心所と相応するという説は、必ずしも有部の思想を踏襲しているわけではなく、ニカーヤの思想に類似性を見いだすことができる。その意味で、この説は六識の性質を機械的にアーラヤ識に敷衍したものであるとは言えない。アーラヤ識と五心所の相応関係は、一見したところ五遍行の定義と整合的でないという印象をうける。しかし、同じ『瑜伽論』の「本地分」と「撰決択分」では、アーラヤ識の心所と五遍行の理解が一貫しており、教説として成り立っている。

瑜伽行派のアビダルマに関する先行研究は、有部アビダルマとの比較にとどまり、初期經典に遡って検討することは殆ど行われていない。しかし、本研究で示したように、瑜伽行派のアビダルマは、有部とは異なる関心に基づいて、初期經典の教説を同派の理論体系において再整理および再解釈している。『瑜伽論』では、時には、初期經典の難解な教説に対して同派独自の解釈が呈示されていることもある。したがって、瑜伽行派のアビダルマを研究することは、同派の教理（例えばアーラヤ識）に対する理解を深める上で重要であるのみならず、初期經典の教説を理解するための手がかりともなる。この意味で、研究者は瑜伽行派のアビダルマに、より大きな関心を払うべきであると言えよう。

本研究で示したように、五心所に関する『瑜伽論』の説明は禅定を背景としていることが窺われる。作意が現れる四つの原因についての『瑜伽論』の説明は、禅定の修行との関連性を漠然と示している。これを見れば、瑜伽行派において、五遍行の教説は修行、例えば法の観察や禅定に応用されている可能性が浮上する。また、『瑜伽論』などの瑜伽行派の論書では、思は尋伺を発動するものであるとされている。このような見解は有部の論書には見られない、瑜伽行派独自の解説である。瑜伽行派のこうした考え方はより深く探究する必要があるが、本研究ではそこまで考察が及んでいない。今後の課題としたい。

付録 I 資料編

説明

1. 『瑜伽師地論』では、manaskāra (作意)・sparśa (触)・vedanā (受)・saṃjñā (想)・cetanā (思)の一連の概念については、主題として包括的に説明されてはならず、文脈に沿って散発的に言及されているにすぎない。本論文の参考資料として、『瑜伽論』の「本地分」と「摂決択分」の中から、関連するテキストを次のように抜粋し、和訳を付して示す。

Text A は、「本地分」の、「五識身相応地」と「意地」における該当部分について、サンスクリット語の校訂テキストを改訂のうえ、和訳を付したものである。なお、対照のため、漢訳とチベット語訳の校訂テキストを併せて提示する。

Text B は、「摂決択分」の、「本地分中五識身相応地・意地」に対する解説における該当部分について、漢訳テキストを校訂のうえ、和訳を付したものである。

Text C は、同じく「摂決択分」の、「本地分中五識身相応地・意地」に対する解説における該当部分について、チベット語訳テキストを校訂のうえ、和訳を付したものである。

2. 使用したテキストの説明、校訂の方針 (editorial policy)、および略号 (Sigla and Abbreviations) などについては、各部分の冒頭に提示する。

Text A

『瑜伽師地論』「本地分」における
「五遍行」関連部分の抜粋テキスト及び和訳

説明

Text A は、「本地分」の「五識身相応地」と「意地」における「五遍行」関連部分について、サンスクリット語の校訂テキスト（Bhattacharya 校訂 *The Yogācārabhūmi of Ācarya Asaṅga*, Calcutta, 1957）を改訂したもの、およびその和訳（Text A-tr）である。

なお、改訂にあたっては、漢訳とチベット語訳を参照した。対照のため、両訳の校訂テキストを併せて提示する。

◆ サンスクリット語改訂テキストについて

◇ 使用したテキスト

改訂テキストの作成に際しては、チベット・サキヤ寺院 Chhag-pe-lha-khang 所蔵写本の写真（R. Sāṅkrtyāyana により 1936 年に撮影されたもの、Göttingen 大学より公開されたフィルムのコピー）を使用した。

◇ Editorial Policy

1. The division into paragraphs and the subtitles in [] is editorial.
2. Folio numbers of Sanskrit manuscript and Bhattacharya's critical edition are given in the () in the nearest subtitles, e.g., “MS 1b3l; Bh-ed 4, 1” means the text starts at folio 1b, line 3, the left segment in the manuscript, and page 4, line 1 in the Bhattacharya's edition.
3. Variants of *daṇḍas* are recorded.
4. Characters written in the margin of are recorded.
5. The following types of variants are not reported:
 - gemination of consonants, e.g., *chanda* written as *cchanda*, *varṇa* written as *varṇṇa*
 - alternative use of nasal consonants (*ñ*, *ṅ*, *n*, *m*, *ṃ*)
 - irregular use of sibilants (*ś*, *ṣ* and *s*)
 - indistinguishable *b* and *v*
 - non-application of sandhi
 - application and non-application of *avagraha*

◇ Sigla and Abbreviations

om.	omitted in
em.	emended
cf.	confer
MS	manuscript
Bh-ed	critical edition of <i>Yogācārabhūmi</i> by Bhattacharya
YBh-c	Chinese translation of <i>Yogācārabhūmi</i>
YBh-t	Tibetan translation of <i>Yogācārabhūmi</i>
<i>l</i>	the text starts at the left segment in the MS

- r* the text starts at the right segment in the MS
m the text starts at the middle segment in the MS

◇ Editorial Signs

·	illegible part of an <i>akṣara</i> due to physical damage
··	illegible <i>akṣara</i> due to physical damage
∅	unreadable <i>akṣara</i> (s) due to severe damage
()	uncertain reading
◇	additional <i>akṣara</i> (s) in the margin
<i>Italic</i> (in text)	emendation
	<i>daṇḍa</i>
	double- <i>daṇḍa</i>
	half- <i>daṇḍa</i>

◆ 漢訳校訂テキスト (Text A-chi (YBh-c)) について

◇ 使用したテキスト

校訂に際しては、『大正蔵』と、『大正蔵』に収録されていない趙城金蔵などの四つの版本を使用した。版本および略号を以下に示す。

T : 『大正新脩大蔵経』第 30 冊

(T)資 : 資福蔵 (T : 「宋」)

(T)普 : 普寧蔵 (T : 「元」)

(T)徑 : 徑山蔵 (T : 「明」)

(T)崇 : 崇寧蔵 (T : 「宮」)

(T)倉 : 正倉院聖語蔵本 (T : 「聖」)

(T)知 : 知恩院本 (T : 「知」)

金 : 趙城金蔵, 『中華大蔵経』第 27 冊 (北京, 中華書局 1984–1996 年刊)

房 : 房山石経, 『房山石経』第 18 冊 (北京, 華夏出版社 2000 年刊)

麗 : 高麗蔵, 『高麗再雕版大蔵経』第 15 冊 (ソウル, 東国大学校 1957–1976 年刊)

磧 : 磧砂蔵, 『磧砂大蔵経』北京本第 46 冊 (北京, 綫装書局 2005 年刊)

◇ Editorial Policy

1. Taisho edition is used as the basic text.
2. The division into paragraphs is editorial.
3. Line numbers of the editions are given at the beginning of each partition. e.g., “T 580a29” means the text starts at page 580, upper column, line 29 in the Taisho edition.
4. Chinese character variants are not reported, e.g., 無 written as 无, 蘊 written as 蘊, 礙 written as 碍, 總 written as 摠, 華 written as 花.
5. Modern Chinese punctuation marks as follows are used. “,” (comma), “、” (enumeration comma), “:” (colon), “。” (full stop), “?” (question mark), “!” (exclamation mark), “—” (dash).

◆ チベット語訳校訂テキスト (Text A-tib (YBh-t)) について

◇ 使用したテキスト

校訂に際して使用した版本および略号を以下に示す。

- D sDe dge edition, No. 4035, sems tsam, tshi.
- C Cone edition, No. 4002, sems tsam, zhi.
- P Peking edition, No. 5536, sems tsam, dzi.
- N sNar thang edition, No. 4304, sems tsam, dzi.
- G Golden edition, No. 3539, sems tsam, dzi.

◇ Editorial Policy

1. sDe dge edition is used as the basic text.
2. The division into paragraphs is editorial.
3. Folio numbers of the editions are given at the beginning of each partition and in the () embedded in texts with abbreviations of each edition. e.g., “D4b2” means the text starts at folio 4b, line 2 in the sDe dge edition.
4. The **bsdu yigs** occurred in P edition, N edition and G edition are not recorded.
5. The indistinct uses of *p* and *b*, *d* and *ng* are not recorded.
6. The alternative use of *-gs* and *-d* or *-t* in N and G editions are recorded.

◇ Sigla and Abbreviations

- em. emended
- om. omitted in
- ill. illegible

◇ Editorial Signs

- / *shad*
- // *gnyis shad*

Text A

[Part 1, Pañcavijñānakāyasamprayuktā bhūmiḥ prathamā]

1.0 (MS 1b3l; Bh-ed 4, 1)

pañcavijñānakāyasamprayuktā bhūmiḥ katamā | pañca vijñānakāyāḥ svabhāvataḥ |¹ teṣāṃ
cāśrayaḥ |² teṣāṃ cālambanaṃ |³ teṣāṃ ca sahāyaḥ |⁴ teṣāṃ ca karma samāsataḥ
pañcavijñānakāyasamprayuktā⁵ bhūmiḥ ||⁶

1.1 (MS 1b3r; Bh-ed 4, 4)

pañca vijñānakāyāḥ katame |⁷ cakṣurvijñānaṃ śrotagrahrāṇajihvākāyavijñānaṃ⁸ ||⁹

1.1.1

1.1.1.1 (MS 1b3r; Bh-ed 4, 5)

cakṣurvijñānaṃ katamat |¹⁰ yā cakṣurāśrayā rūpaprativijñaptiḥ ||

1.1.1.2 (MS 1b4l; Bh-ed 4, 6)

cakṣurvijñānasyāśrayaḥ katamaḥ |¹¹ cakṣuḥ sahabhūr āśrayaḥ |¹² manaḥ samanantara āśrayaḥ |¹³
sarvabījakam āśrayopādātṛ vipākasaṃgrhītam ālayavijñānaṃ bījāśrayaḥ | tad etad abhisamasya
dvividha āśrayo bhavati |¹⁴ rūpī cārūpī ca |¹⁵ tatra cakṣū rūpī | tadanyo 'rūpī ||¹⁶

cakṣuḥ katamat | catvāri mahābhūtāny upādāya cakṣurvijñānasamniśrayo rūpaprasādo
(¹⁷ 'nidarśanaṃ sapratigham ||¹⁷)

manaḥ katamat | yac cakṣurvijñānasyānantarātītam¹⁸ vijñānaṃ ||¹⁹

sarvabījakam vijñānaṃ katamat | pūrvakam prapañcaratihetum upādāya yaḥ sarvabījako vipāko
nirvṛttaḥ ||

1.1.1.3

1.1.1.3.1 (MS 1b5r; Bh-ed 4, 12)

cakṣurvijñānasyālambanaṃ katamat |²⁰ yad rūpaṃ sanidarśanaṃ sapratigham ||²¹

¹ °taḥ | MS; °tas Bh-ed.

² | MS; om. Bh-ed.

³ | MS; om. Bh-ed.

⁴ | MS; om. Bh-ed.

⁵ °sampra·ktā MS; °samprayuktā Bh-ed, em. cf.: 相應 YBh-c; ldan pa YBh-t.

⁶ °miḥ MS; °miḥ || Bh-ed, em.

⁷ °me MS; °me | Bh-ed, em.

⁸ °kāyavijñānaṃ MS; °kāyamanovijñānaṃ Bh-ed. cf.: 身識 YBh-c; lus dang/ yid kyi rnam par shes pa YBh-t.

⁹ | MS; || Bh-ed, em.

¹⁰ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

¹¹ °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

¹² | MS; | Bh-ed, em.

¹³ āśra·ḥ | MS; āśrayaḥ | Bh-ed, em. cf.: 依 YBh-c; gnas YBh-t.

¹⁴ °ti MS; °ti | Bh-ed, em.

¹⁵ ca MS; ca | Bh-ed, em.

¹⁶ °pī MS; °pī || Bh-ed, em.

¹⁷ °darśanaṃ sapratigham MS; °darśanaḥ sapratighaḥ || Bh-ed.

¹⁸ °vijñānasyā·ntarātītam MS; °vijñānasyānantarātītam Bh-ed, em. cf.: 眼識無間過去 YBh-c; mig gi mam
par shes pa'i sngon rol du 'das ma thag pa YBh-t.

¹⁹ | MS; || Bh-ed, em.

²⁰ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

²¹ °ghaṃ MS; °ghaṃ | Bh-ed; °ghaṃ || em.

Text A の和訳

[Part 1 五識身相応地]

1.0 [五識身相応地]

五つの識身と結びついている地（五識身相応地）とは何か。本質としては、五つの識身である。またそれら（五つの識身）には拠り所がある。またそれらには所縁（認識対象）がある。またそれらには随行するもの（sahāya）がある。またそれらにははたらき（karma）がある。纏めると、五つの識身と結びついている地である。

1.1 [五識身]

五つの識身とは何か。眼識〔と〕、耳・鼻・舌・身識である。

1.1.1 [眼識]

1.1.1.1 [眼識の本質]

眼識とは何か。それは眼〔の感官〕を拠り所とし、色かたち（rūpa）に対する認識機能である。

1.1.1.2 [眼識の拠り所]

眼識の拠り所とは何か。同時に存在する拠り所は眼である。直前の拠り所は意（manah）である。種子の拠り所は、すべての種子を有する、拠り所（身体）を執持する主体である（āśrayopādātṛ），異熟に包摂されている（vipākasamgrhītam）アーラヤ識である¹。それで、以上のものを総括すると、二種類の拠り所になる。〔すなわち〕物質的なものと非物質的なものである。その中で、眼は物質的なものであり、それ以外のものは非物質的なものである。

眼とは何か。四元素によって〔構成される〕、眼識の拠り所である清澄なもの（rūpapasādo）²であり、見えないものであり、抵触のあるものである³。

意とは何か。それは眼識にとっての、間を空けずに過ぎ去った識である。

全ての種子を有する識とは何か。戯論（prapañca）を愛樂するという過去の原因に基づいて生じた、全ての種子を有する異熟である⁴。

1.1.1.3 [眼識の所縁]

1.1.1.3.1 [定義]

眼識の所縁とは何か。それは見えるものであり、抵触のある色かたちである。

¹ Schmithausen [1987 : 43] 参照。

² rūpapasāda については佐々木 [2009] 参照。

³ 説一切有部と瑜伽行派では、抵触のあるものか、示すことができるかに応じて、色（物質）を三種に分類する。第一は、抵触があり、かつ見えるものである。それは眼識の対象である。第二は、抵触はあるが、見えないものである。それに対応するのは、眼・耳・鼻・舌・身体という五つの感官、および耳・鼻・舌・身体という四つの識の対象の、合わせて九つである。第三は、抵触のない、かつ見えないものである。それは意識の対象たる特殊の物質であり、法処所撰色とも呼ばれる。また、一部の論書では、法処所撰色は無表色（外に表出されない行為、注5参照）であると解釈する。

⁴ Schmithausen [1987 : 229, 509–514] 参照。

1.1.1.3.2

1.1.1.3.2.0 (MS 1b5r; Bh-ed 4, 13)

tat punar anekavidham²² samāsato varṇaḥ samsthānaṃ vijñaptiś ca ||²³

1.1.1.3.2.1

1.1.1.3.2.1.1 (MS 1b6l; Bh-ed 4, 14)

varṇaḥ katamaḥ²⁴ tadyathā nīlaṃ pītaṃ lohitaṃ avadātaṃ chāyātapa āloko 'ndhakāram abhraṃ
dhūmo rajo mahikā²⁵ nabhaś^{(26)cāpy ekavarṇam²⁶} ||

samsthānaṃ^{(27)katamat} | tadyathā²⁷ dīrghaṃ hrasvaṃ vṛttaṃ parimaṇḍalam aṇu sthūlam²⁸ śātaṃ
viśātaṃ unnatam avanatam ||

vijñaptiḥ katamā²⁹ tadyathādānaṃ nikṣepaṇaṃ saṃmiñjitaṃ³⁰ prasāraṇaṃ³¹ sthānaṃ niṣadyā
śayyābhikramo 'tikrama ityevamādīḥ ||

²² °dham MS; °dham | Bh-ed, em.

²³ ca MS; ca || Bh-ed, em.

²⁴ | MS; | Bh-ed, em.

²⁵ mahikā MS; mahikā Bh-ed, em. cf.: 霧 YBh-c; khug rna YBh-t.

²⁶ cāpy ekavarṇam MS; caikavarṇam || Bh-ed; cāpy ekavarṇam || em. cf.: 及空一顯色 YBh-c; dang/ nam
mkha' kha dog gcig pa'o YBh-t.

²⁷ katamatad° MS; katamat | tad° Bh-ed, em.

²⁸ °lam | MS; °lam Bh-ed, em.

²⁹ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

³⁰ saṃmiñjitaṃ MS; samiñjitaṃ Bh-ed. cf.: 屈 YBh-c; bskum pa YBh-t.

³¹ prasāraṇaṃ MS; om. Bh-ed. cf.: 伸 YBh-c; brkyang ba YBh-t.

1.1.1.3.2 [眼識の所縁の分類その一]

1.1.1.3.2.0 [総説]

さらにそれ（眼識の所縁）は多種である。纏めると、色彩と、形状と、表出された〔行為〕（vijñapti）とがある⁵。

1.1.1.3.2.1 [詳説]

1.1.1.3.2.1.1

色彩とは何か。すなわち、青・黄・赤・白・影・光・明・闇・雲・煙・塵・霧であり、また、空（そら）も一種の色彩である⁶。

形状とは何か。すなわち、長・短・球形・円形⁷・微細・粗大・平ら・ゆがみ・凸・凹である。

表出された〔行為〕とは何か。すなわち、取る・捨てる・曲げる・伸ばす・立つ・座る・横たえる・行く・跨ぐというようなことである。

⁵ vijñapti は、有部や瑜伽行派の行為論・業論において、外に表出された行為を指す術語であり、よく「表色」とも訳される。対概念の avijñapti（無表色）は、外に表出されない、行為の残存影響のことを表す（櫻部・上山 [1996 : 121-122] 参照）。

また、『俱舍論』や『順正理論』などの有部論書では、色かたちを色彩と形状の二種に分類して説明するが、「表出された行為」という種類は述べていない（AKBh 6, 7-8 ; 『順正理論』 T29, 334a2 参照）。

⁶ 空を一種の色彩とする考え方は、次に示すように、『俱舍論』や『順正理論』などの有部論書において、一種の主張として挙げられている。

ABKh 6, 10-13 : “viṃśatidhā” (10a) tadyathā nīlam pītam lohitaṃ avadātaṃ dīrghaṃ hrasvaṃ vṛttaṃ parimaṇḍalaṃ unnataṃ avanataṃ sātaṃ visātaṃ abhraṃ dhūmo rajo mahikā cchāyā ātapaḥ ālokaḥ andhakāram iti | kecin nabhaś caikavarṇam iti ekaviṃśatiṃ sampathanti | (【訳（斎藤ほか [2014 : 21]）】「二十種である。」つまり、青・黄・赤・白・長・短・円柱・球・凸・凹・滑らか・ざらざら・雲・煙・塵・霧・影・光・明・闇である。ある者は、空も一つの色であるので、二十一を読み上げる。）

『順正理論』(334a11) : 「有説。色有二十一種。空一顯色第二十一。」(【訳】ある〔者〕が言う。〔すなわち〕色は二十一種がある。空という一つの色は第二十一のものである。)

⁷ 漢訳における vṛttaṃ parimaṇḍalam の対応箇所では、「方」「円」となっている。この二つの語は『俱舍論』にも挙げられており、玄奘訳と真谛訳ではともに「方」「円」となっている。しかし、vṛtta は一般的には「円い」を意味している。櫻部 [1997 : 78-85] は『俱舍論』の該当箇所について考察し、vṛtta と parimaṇḍala を「方」「円」の意味で解することは難しく、立体的な円（球形）と平面的な円（円形）と理解する方が妥当である、と指摘した。この考え方に従って、ここでは vṛtta を「球形」、parimaṇḍala を「円形」と訳した。

1.1.1.3.2.1.2 (MS 2a1l; Bh-ed 5, 1)

api khalu varṇaḥ katamaḥ |³² yā³³ rūpanibhā³⁴ cakṣurvijñānagocaraḥ ||³⁵
 samsthānaṃ katamat |³⁶ yo rūpapracayo dīrghādīparicchedākāraḥ ||³⁷
 vijñaptiḥ katamā |³⁸ tasyaiva pracitasya rūpasyotpannaniruddhasya vairodhikena kāraṇena
 janmadeśe cānutpattis tadanyadeśe ca nirantare vā³⁹ sāntare vā saṃnikṣṭe viprakṣṭe ⁽⁴⁰⁾votpattir
 vijñaptir ity ucyate || tasminn eva vā deśe vikṛtotpattiḥ ||⁴⁰

1.1.1.3.2.1.3 (MS 2a2l; Bh-ed 5, 6)

tatra ⁽⁴¹⁾varṇa ābhāvabhāsa⁽⁴¹⁾ iti paryāyāḥ ||⁴²
 samsthānaṃ pracayo⁴³ dīrghaṃ hrasvam ityevamādayaḥ paryāyāḥ ||⁴⁴
 vijñaptiḥ karma kriyā ceṣṭehā pariṣpanda iti paryāyāḥ ||⁴⁵

1.1.1.3.2.2 (MS 2a2m; Bh-ed 5, 8)

sarvāsāṃ varṇasamsthānavijñaptīnām⁴⁶ ⁽⁴⁷⁾cakṣurgocaraś cakṣurviśayaś cakṣurvijñānagocaraś
 cakṣurvijñānaviśayaś⁽⁴⁷⁾ cakṣurvijñānālambanaṃ manovijñānagocaro manovijñānaviśayo
 manovijñānālambanam iti paryāyāḥ ||⁴⁸

1.1.1.3.3 (MS 2a3l; Bh-ed 5, 10)

punas tad eva suvarṇaṃ vā durvarṇaṃ vā tadubhayāntarasthāyi vā varṇanibhaṃ ||

³² °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

³³ yā MS; yo Bh-ed.

³⁴ °nibhā MS; °nibhaś Bh-ed.

³⁵ | MS; || Bh-ed, em.

³⁶ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

³⁷ | MS; || Bh-ed, em.

³⁸ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

³⁹ vā MS; om. Bh-ed. cf.: 或無間 YBh-c; bar du ma chod pa 'am YBh-t.

⁴⁰ votpattir vijñaptir ity ucyate || tasminn eva vā deśe vikṛtotpattiḥ MS; vā tasminn eva vā deśe 'vikṛtotpattir
 vijñaptir ity ucyate || Bh-ed; votpattir vijñaptir ity ucyate || tasminn eva vā deśe vikṛtotpattiḥ || em. cf.: 或即於
 此處變異生。是名表色。 YBh-c; phyogs de nyid du yang mi 'gyur ba 'byung ba ni nram par rig byed ces bya'o//
 YBh-t.

⁴¹ varṇaḥ | ābhāḥ | avabhāsa MS; varṇa ābhāvabhāsa Bh-ed, em. cf.: 顯色者，謂光、明等 YBh-c; kha dog ni
 snang ba dang gsal ba dang zhes bya ba YBh-t.

⁴² °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

⁴³ pracayaḥ | MS; pracayo Bh-ed, em.

⁴⁴ °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

⁴⁵ °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

⁴⁶ varṇasthāna° MS; varṇasamsthāna° Bh-ed, em. cf.: 顯、形、表色 YBh-c; kha dog dang dbyibs dang nram
 par rig byed YBh-t.

⁴⁷ cakṣurgocaraḥ <cakṣurviśayaḥ> <cakṣurvijñānagocara(ra)ø> cakṣurvijñānaviśayaḥ MS; cakṣurgocara[ś
 cakṣurviśaya]ś cakṣurvijñānagocara[ś cakṣurvijñānaviśaya]ś Bh-ed; cakṣurgocaraś cakṣurviśayaś
 cakṣurvijñānagocaraś cakṣurvijñānaviśayaś em. cf.: 眼所行，眼境界，眼識所行，眼識境界 YBh-c; mig gi
 spyod yul dang/ mig gi yul dang/ mig gi nram par shes pa'i spyod yul dang/ mig gi nram par shes pa'i yul dang
 YBh-t.

⁴⁸ °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

1.1.1.3.2.1.2

さらにまた、色彩とは何か。それは色かたちの現れであり、眼識の活動領域である。

形状とは何か。それは色かたちの集積であり、長いものなどを区分するための様相である。

表出された〔行為〕とは何か。ほかならぬその集積している色かたちが生じて滅した時、矛盾するという原因によって⁸、〔すでに〕生起の場所に〔再び〕生じないことと、その〔生起の場所とは〕別な場所において、〔時間的に〕間隔なく〔生じること〕、あるいは、間隔をあけて〔生じること〕、あるいは、近接している〔場所〕や遠く離れた〔場所〕に生じるとは、表出されたものと呼ばれる。あるいは、同じその〔生起の〕場所において、〔集積している色かたちに〕変化が生じること〔も表出されたものと呼ばれる〕。

1.1.1.3.2.1.3

また、色彩、光、輝きとは同義語である。

形状、集積、長、短というようなものは同義語である。

表出された〔行為〕、行為、動作、行動、動き、活動とは同義語である。

1.1.1.3.2.2 [同義語]

色彩・形状・表出された〔行為〕のすべてには、眼の活動領域、眼の対象、眼識の活動領域、眼識の対象、眼識の所縁、意識の活動領域、意識の対象、意識の所縁という同義語がある。

1.1.1.3.3 [眼識の所縁の分類その二]

また、同じそれ（色かたち）は、美しい色彩・醜い色彩・その両者のいずれでもない色彩として現れたものである。

⁸ 「矛盾するという原因によって」の意味は不明瞭である。『瑜伽論釈』（以下 YBhVy）と『瑜伽師地論略纂』（以下『略纂』）では次のように解説しているが、両者の理解が異なることが窺える。

YBhVy (D 'i 76a1-2; P yi 91a7-8) : *mi mthun pa'i rgyus zhes bya ba ni mngon par 'du byed par nges pa'i sems pa gcig las gcig byung ba las kun nas slong ba'i sems las bslang ba'i rtsol bas bskyed nas phyogs de nyid du gzugs 'byung ba dang mi mthun pa'i rlung gis so//* (【訳】「矛盾するという原因によって」とは、作動することに確定している一つの思が一つの行為を生じたこと、〔すなわち〕行為を発動する心が行為を起こす功用によって生じた後に、同じ場所において、色が生じること矛盾する風〔元素〕によって〔ということ〕である。)

『略纂』(T43, 5c11-13) : 「由變異者，即發業心剎那滅故，果隨因變。不同正量等先滅後生。故先生處不生。」(【訳】「変異する〔という原因〕によって」とはすなわち、業を発動する心が刹那滅であるから、果は因に従って変わる。正量〔部〕など〔が主張する〕前に滅して、後に生じるというのと違う。したがって前に生じた場所に生じない。)

1.1.1.4 (MS 2a3/; Bh-ed 5, 12)

sahāyaḥ katamaḥ |⁴⁹ tatsahabhūsamprayuktās caitasā dharmāḥ |⁵⁰ tadyathā⁵¹ manaskāraḥ⁵²
sparśo vedanā samjñā cetaneti |⁵³ ye^(54, 'py anye⁵⁴) cakṣurvijñānena sahabhūsamprayuktās⁵⁵ caitasā
dharmās te punar ekāmbanā anekākārāḥ sahabhuvāś caikaikavṛttayaś ca⁵⁶ sarve ca svabījān nirjātāḥ
samprayuktāḥ sākārāḥ sālambanāḥ sāsrayāḥ ||⁵⁷

⁴⁹ | MS; | Bh-ed, em.

⁵⁰ °māḥ MS; °māḥ | Bh-ed, em.

⁵¹ °thā MS; °thā | Bh-ed.

⁵² manaskāraḥ MS; manaskāraḥ Bh-ed. cf.: 作意 YBh-c; yid la byed pa YBh-t.

⁵³ °ti MS; °ti | Bh-ed, em.

⁵⁴ pyenye MS; 'py anye Bh-ed, em. cf.: 及餘 YBh-c; gzhan gang dag YBh-t.

⁵⁵ sahabhūmi° MS; sahabhū° Bh-ed, em. cf.: 俱有 YBh-c; lhan cig 'byung zhing YBh-t.

⁵⁶ ca MS; ca | Bh-ed.

⁵⁷ | MS; || Bh-ed, em.

1.1.1.4 [眼識の随行するもの]

随行するものとは何か。それ（眼識）と同時に存在し相応する（*tatsahabhūsamprayuktās*）心所法である⁹。すなわち、作意、触、受、想、思という。眼識と同時に存在し、〔それと〕相応する心所法はほかにもある¹⁰。また、それら〔心所法〕は〔眼識と〕同一の所縁を有し、異なる様相（*ākāra*）を有し、〔すなわち眼識と〕「同時に存在するもの」（*sahabhū*）であり、そして、それぞれに活動（*vr̥tti*）を有し、すべてが固有の種子から生じ、〔すなわち眼識と〕「相応するもの」（*samprayukta*）である。様相を有し、所縁を有し、拠り所を有するものである。

⁹ 文脈は少し異なるが、『俱舍論』でも、心と心所法は同時に存在し、相応しているという理解が示されている。AKBh 88, 18–20 : *samāna āśrayo yeṣāṃ te cittacaittāḥ anyonyam samprayuktakahetuḥ / samāna ity abhinnas tadyathā ya eva cakṣurindriyakṣaṇās cakṣurvijñānasyāśrayaḥ sa eva tatsamprayuktānām vedanādīnām eva yāvan *manah / indriyakṣaṇo manovijñānatatsamprayuktānām veditavyaḥ / yaḥ samprayuktakahetuḥ sahabhūhetur api saḥ / (*manah / indriyakṣaṇo を manaindriyakṣaṇo に改めた。)* (【訳】共通の拠り所を有するそれらの心・心所は相互に相応している原因（相応因）である。共通のものとは異なるものである。例えば、刹那の眼の感官は眼識の拠り所であるとき、同じそ〔の刹那の眼の感官〕はまさにそ〔の眼識〕と相応する受などの〔拠り所〕である。乃至、刹那の意の感官は、意識と、そ〔の意識〕と相応する〔受など〕の〔拠り所〕であると知られるべきである。相応している原因であるものは、同時に存在している原因（俱有因）でもある。)

¹⁰ 言い換えれば、眼識に必ず随行する心所法は、作意・触・受・想・思である。ほかに、場合によって眼識に随行する心所法もある。YBhVy では次のようにまとめている。

YBhVy (D 77a7–77b1; P 93a5–7): *de dag ni (ni D; gi P) gdon mi za bar 'byung bar 'gyur ba yin no// 'dun pa ni 'dod pa'i dngos po kho na la 'byung bar 'gyur te/ gzhan la ma yin no// dran pa yang 'dris ('dris P; dris D) pa'i dngos po kho na la ste/ gzhan la ma yin la/ de dag la sogs pa gzhan yang 'khrul ba yod pa'i phyir ma nges pas de'i phyir kun tu 'gro ba ni lnga kho nar zad do//* (【訳】それら（作意などの五つ）は必ず生起するものである。欲は欲した物事のみに対して生起し、それ以外の〔物事〕に対して〔生起するもの〕ではない。念も習熟した物事のみに対して〔生起し〕、それ以外の〔物事〕に対して〔生起するもの〕ではなく、さらにそれら〔欲、念〕などのほかのものは迷乱なるものである。必ずしも〔眼識と同時に生起する〕わけではない。したがって、〔作意などの〕遍在するものは五つだけに終わる。)

また、『瑜伽論』のこの文は、眼識に随行する五遍行以外の心所法については詳しい説明を行っていない。YBhVy と『略纂』ではそれぞれ、次のように解説している。

YBhVy (D 77b1; P 93a7–8) : *sems las byung ba'i chos gzhan gang dag ces bya ba ni dran pa dang/ dad pa dang/ 'dod chags la sogs pa'o//* (【訳】「心所法はほかにもあり」とは、念、信、貪欲などである。)

『略纂』(5c27–6a3) : 「五識與幾心所相應。此論下文謂五十三。准略有二說。一云有三十，除二十三。謂別境五，善中輕安，煩惱中三，隨煩惱十二，小十及邪欲・勝解，并不定二。二云有三十六，除十七。謂煩惱三，隨惑十，不定四。故此說因位。無漏位與二十一俱。遍行別境，并善十一。」(【訳】〔眼識などの〕五識はいくつの心所と相応するのか〔に関して〕、この〔瑜伽〕論の後文では〔意識は〕五十三〔の心所と相応する〕と述べる。それに準じて、略して二種の説がある。一は、三十があり、二十三を除くという。〔すなわち、〕別境の五つと、善の中の輕安と、煩惱の中の三つと、隨煩惱の十二、つまり〔忿などの〕十の小〔隨煩惱〕および邪欲と邪勝解、並びに不定の二つ〔を除く〕。二は、三十六があり、十七を除くという。〔すなわち、〕煩惱の三つと、隨煩惱の十と、不定の四つ〔を除く〕。したがって、これらは因の段階のことを述べているのである。〔果である〕無漏の段階では二十一〔の心所〕とともに〔存在〕する。〔すなわち、〕遍行と別境〔の十〕、並びに善の十一である。)

1.1.1.5 (MS 2a4l; Bh-ed 5, 16)

karma katamat | tat ṣaḍvidhaṃ draṣṭavyaṃ | āditas tāvat svaviṣayālabhanaviḥṅgatiḥ karma⁵⁸
punaḥ svalakṣaṇaviḥṅgatiḥ⁵⁹ punar vartamānakālavivṅgatiḥ⁶⁰ punar ekakṣaṇaviḥṅgatiḥ⁶¹ punar
dvābhyām ākārabhyām manovivṅgatiḥ⁶² kuśalākliṣṭānuvṅgatiḥ⁶³ ca⁶⁴ karmasamutthānānuvṅgatiḥ⁶⁴
ca⁶⁵ punar iṣṭāniṣṭaphalaparigrahaḥ⁶⁶ ṣaṣṭhaṃ karma ||⁶⁷

1.1.2

1.1.2.1 (MS 2a5l; Bh-ed 6, 4)

śrotravivṅgatiḥ katamat | yā śrotrāśrayā śabdaprativivṅgatiḥ⁶⁸

1.1.2.2 (MS 2a5m; Bh-ed 6, 4)

āśrayaḥ katamaḥ⁶⁹ sahabhūr āśrayaḥ śrotraṃ⁷⁰ samanantara āśrayo manaḥ⁷¹ bijāśrayas tad
eva sarvabījakaṃ ālayavivṅgatiḥ ||

śrotraṃ katamat⁷² catvāri mahābhūtāny upādāya⁷³ śrotravivṅgatiḥ samāśrayo rūpaprasādo
(⁷⁴ 'nidarśanaṃ sapratighaṃ⁷⁴) | manobījayaḥ pūrvavad vibhāgaḥ ||⁷⁵

1.1.2.3

1.1.2.3.1 (MS 2a6l; Bh-ed 6, 9)

ālabhanaṃ katamat | śabdā anekavidhā anidarśanāḥ⁷⁶ sapratighāḥ ||⁷⁷

⁵⁸ karmaḥ MS; karma | Bh-ed, em.

⁵⁹ °ptiḥ MS; °ptiḥ | Bh-ed, em.

⁶⁰ °ptiḥ MS; °ptiḥ | Bh-ed, em.

⁶¹ °ptiḥ MS; °ptiḥ | Bh-ed, em.

⁶² °ttiḥ MS; °ttiḥ | Bh-ed, em.

⁶³ ca | MS; ca Bh-ed, em.

⁶⁴ °vṛtitaś MS; °vṛttiś Bh-ed, em. cf.: 隨發業轉 YBh-c; las kun las slong ba'i rjes su 'jug pa YBh-t.

⁶⁵ ca MS; ca | Bh-ed, em.

⁶⁶ °haḥ | MS; °haḥ Bh-ed, em.

⁶⁷ karma te MS; karma || Bh-ed, em. cf.: 是第六業 YBh-c; las drug pa'o// YBh-t.

⁶⁸ °ptiḥ MS; °ptiḥ | Bh-ed, em.

⁶⁹ °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

⁷⁰ °traṃ MS; °traṃ | Bh-ed, em.

⁷¹ °naḥ MS; °naḥ | Bh-ed, em.

⁷² °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

⁷³ upāya MS; upādāya Bh-ed, em. cf.: 所造 YBh-c; rgyur byas pa YBh-t.

⁷⁴ 'nidarśanaṃ sapratighaṃ MS; 'nidarśanaḥ sapratighaḥ Bh-ed.

⁷⁵ °gaḥ MS; °gaḥ || Bh-ed, em.

⁷⁶ anidarśanā MS; anidarśanāḥ Bh-ed, em.

⁷⁷ °ghāḥ MS; °ghāḥ | Bh-ed; °ghāḥ || em.

1.1.1.5 [眼識のはたらき]

はたらきとは何か。それは六種であると理解されるべきである。まずはじめに、それ自体の対象物を所縁として認識させることは〔第一の〕はたらきである。次に、自相（固有の特徴）を認識させることである。次に、現在の時間〔にある対象〕を認識させることである。次に、〔対象の〕一刹那を認識させることである。次に、二つの様相を伴い、意識に随って活動することである。〔すなわち〕善・染汚〔の様相を伴って意識に〕随って活動すること¹¹、業（行為）を発動すること〔の様相を伴って意識に〕に随って活動することである。次に、望ましい〔果報〕と望ましくない果報を取ること（parigraha）が第六のはたらきである。

1.1.2 [耳識]

1.1.2.1 [耳識の本質]

耳識とは何か。それは耳〔の感官〕を拠り所とし、音声に対する認識機能である。

1.1.2.2 [耳識の拠り所]

拠り所とは何か。同時に存在する拠り所は耳である。直前の拠り所は意である。種子の拠り所は、〔眼識の場合と〕同じくすべての種子を有するアーヤ識である。

耳とは何か。四元素によって〔構成される〕、耳識の拠り所である清澄なものであり、見えないものであり、抵触のあるものである。意と種子の〔拠り所〕に関して、前（眼識の場合）と同じ区別である。

1.1.2.3 [耳識の所縁]

1.1.2.3.1 [定義]

所縁とは何か。見えない、抵触のある多種の音声である。

¹¹ 「本地分意地」に関連する記述が見られる。§2.5 参照。

1.1.2.3.2 (MS 2a6l; Bh-ed 6, 9)

tadyathā śaṅkhaśabdaḥ paṭahaśabdo bherīśabdo mṛdaṅgaśabdo nṛttaśabdo⁷⁸ gītaśabdo
vāditaśabda āḍambaraśabdaḥ⁷⁹ strīśabdaḥ puruṣaśabdo vāyuvanaspatiśabdo vyakto 'vyaktaḥ sārthako
nirarthakaḥ⁽⁸⁰⁾ parīttamadyocanadīśabdaḥ⁽⁸⁰⁾ kalakalaśabda⁸¹
⁽⁸²⁾uddeśasvādhyāyadeśanāsāmkaṭhyavinīscayaśabda⁽⁸²⁾ ity evaṃbhāgīyā bahavaḥ śabdāḥ ||⁸³

1.1.2.3.3

1.1.2.3.3.1 (MS 2a7m; Bh-ed 6, 14)

sa punar upāttamahābhūtaḥ⁸⁴ 'nupāttamahābhūtaḥ⁸⁵
⁽⁸⁶⁾upāttānupāttamahābhūtaḥ^{ca} |⁽⁸⁶⁾ tatra prathamo yo 'dhyātmapratyaya eva |⁽⁸⁷⁾ dvitīyo yo
bāhyapratyaya eva |⁽⁸⁸⁾ ṛtīyo⁽⁸⁹⁾ ya ādhyātmikabāhyapratyayaḥ ||⁽⁸⁹⁾

1.1.2.3.3.2 (MS 2b1m; Bh-ed 6, 16)

sa punar mānāpiko 'mānāpikas tadubhayaviparītaḥ ||⁹⁰

1.1.2.3.4 (MS 2b1m; Bh-ed 6, 18)

tatra śabdo ghoṣaḥ svano⁹¹ niruktir nādo vāgvijñaptir iti paryāyāḥ ||⁹²
śrotragocaraḥ śrotraviśayaḥ śrotravijñānagocaraḥ⁽⁹³⁾ śrotravijñānaviśayaḥ
śrotravijñānālambanaṃ⁽⁹³⁾ manovijñānagocaro manovijñānaviśayo manovijñānālambanaṃ iti
paryāyāḥ ||

1.1.2.4 (MS 2b2l; Bh-ed 7, 3)

sahāyaḥ karma ca⁹⁴ cakṣurvijñānavad veditavyaṃ ||⁹⁵

⁷⁸ nṛtta ° MS; nṛtya ° Bh-ed.

⁷⁹ āḍamba ° MS; āḍambara ° Bh-ed, em.

⁸⁰ parīmadhyocanadīśabdaḥ MS; parītto madhya ucco nadīśabdaḥ Bh-ed; parīttamadyocanadīśabdaḥ em.
cf.: 下中上聲, 江河等聲 YBh-c; chung ngu dang 'bring dang chen po dang/ chu klung gi sgra dang/ YBh-t.

⁸¹ kalakalāśabdaḥ | MS; kalakalaśabda Bh-ed, em. cf.: 鬪諍誼雜聲 YBh-c; ca co'i sgra dang YBh-t.

⁸² °viniścayaśabdaḥ | MS; °vinirṇayaśabda Bh-ed; °viniścayaśabda em. cf.: 受持演說聲、論義決擇聲 YBh-c;
lung nod pa'i sgra dang/ kha ton byed pa'i sgra dang/ 'chad pa'i sgra dang/ 'bel ba'i gdam dang/ mnam par gtan la
'bebs pa'i sgra dang YBh-t.

⁸³ °bdāḥ MS; °bdāḥ || Bh-ed, em.

⁸⁴ °kaḥ | MS; °ko Bh-ed, em.

⁸⁵ °kaḥ | MS; °ka Bh-ed, em.

⁸⁶ upāttānupāttamahābhūtaḥ^{ca} ···ø MS; upāttānupāttamahābhūtaḥ^{caḥ} | Bh-ed;
upāttānupāttamahābhūtaḥ^{ca} | em. cf.: 因執受大種聲、因不執受大種聲、因執受不執受大種聲 YBh-c;
zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu las byung ba dang/ ma zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu las byung ba dang/ zin
pa dang ma zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu las byung ba'o YBh-t.

⁸⁷ eva MS; eva | Bh-ed, em.

⁸⁸ eva MS; eva | Bh-ed, em.

⁸⁹ ya < m a > dhyātmikabāhyapratyayaḥ MS; yo bāhyādhyātmapratyaya eva || Bh-ed; ya

ādhyātmikabāhyapratyayaḥ || em. cf.: 內外緣聲 YBh-c; gang nang dang phyi rkyen du gyur pa YBh-t.

⁹⁰ °taḥ MS; °taś ca || Bh-ed; °taḥ || em.

⁹¹ svano MS; svaro Bh-ed.

⁹² °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

⁹³ śrotravijñānālambanaṃ MS; śrotravijñānaviśayaḥ śrotravijñānālambanaṃ Bh-ed, em. cf.:
耳識境界, 耳識所緣 YBh-c; rna ba'i mnam par shes pa'i yul dang/ rna ba'i mnam par shes pa'i dmigs pa dang
YBh-t.

⁹⁴ (ca) MS; ca Bh-ed, em. cf.: 助伴及業 YBh-c; grogs dang las YBh-t.

⁹⁵ °tad veditavyaṃ | MS; °vad veditavyaṃ || Bh-ed, em. cf.: 如眼識應知 YBh-c; mig gi rnam par shes pa'i rang
bzhin du rig par bya'o YBh-t.

1.1.2.3.2 [具体例]

例えば、螺貝の音声・パタハ太鼓の音声・大鼓の音声・ムリダンガ太鼓の音声・舞踊の音声・歌の音声・楽器の音声、〔演劇中の〕対話の音声・女性の音声・男性の音声、風と樹木の音声、明瞭なもの・不明瞭なもの、意味をもつもの・意味をもたないもの、小・中・大河の音声、喧噪の音声、音読・暗誦・説教・対話・議論の音声、というような類の多くの音声である。

1.1.2.3.3 [分類]

1.1.2.3.3.1

また、それ（音声）は、〔心・心所によって〕執られている元素を原因とするものと、〔心・心所によって〕執られていない元素を原因とするものと、〔心・心所によって〕執られている〔元素〕と執られていない元素〔両方〕を原因とするものとである¹²。その中で、最初のは内的なものを縁とするもののみである。第二のものは外的なものを縁とするもののみである。第三のものは内的なものとの外的なもの〔両方〕を縁とするものである。

1.1.2.3.3.2

また、それ（音声）は、好ましいもの・好ましくないもの・その両者のいずれでもないものである。

1.1.2.3.4 [同義語]

また、音声、鳴き声、音、発語、ほえ声、言葉として表出された〔行為〕とは同義語である。

耳の活動領域、耳の対象、耳識の活動領域、耳識の対象、耳識の所縁、意識の活動領域、意識の対象、意識の所縁とは同義語である。

1.1.2.4 [耳識の随行するものとはたらき]

随行するものとはたらきは眼識の〔場合の〕ように知られるべきである。

¹² 執られている (upātta) について、俱舍論 (AKBh 23, 16-17) では次のように解説している : upāttam iti ko 'rthaḥ / yac cittacaittair adhiṣṭhānabhāvenopagrhitam anugrahopaghātābhyām anyonyānuvidhānāt / yal loke sacetanam ity ucyate / (【訳】「執られている」とは何の意味なのか。それは、諸々の心・心所によって、拠り所たるものとして執持されているものである。利益と損害に関して互いに一致するから。世間において、それは「感覚を有するもの」と言われている。)

また、音声に関する、執られている元素を原因とするものなどの分類については、『俱舍論』にも述べられている。『瑜伽論』のこの箇所の説明は、次に示すように、『俱舍論』で言及されている「ほかの人々」の説に類似している。 AKBh 6, 23-25: tatropāttamahābhūtahetuko yathā hastavākchabdah/ anupāttamahābhūtahetuko yathā vāyuvanaspatinadīśabdah / ... upāttānupāttamahābhūtahetuko 'py asti śabda ity apare/ tadyathā hastamṛdaṅgasamyogaja iti/ (【訳】その中で、〔心・心所によって〕執られている元素を原因とするものは、例えば、手〔を打つ〕やことば〔を話す〕音声である。〔心・心所によって〕執られていない元素を原因とするものは、例えば、風と樹木と河の音声である。(中略)〔心・心所によって〕執られている〔元素〕と執られていない元素〔両方〕を原因とする音声もあると、ほかの人々が〔言う〕。それは例えば、手とムリダンガ太鼓との接触から生じた〔音声〕である、と。)

1.1.3

1.1.3.1 (MS 2b2m; Bh-ed 7, 5)

ghrāṇavijñānaṃ katamat |⁹⁶ yā ghrāṇāśrayā⁹⁷ gandhaprativijñaptiḥ |

1.1.3.2 (MS 2b2m; Bh-ed 7, 5)

āśrayaḥ katamaḥ |⁹⁸ sahabhūr āśrayo ghrāṇaṃ |⁹⁹ samanantara āśrayo manaḥ |¹⁰⁰ bījāśrayas tad
eva sarvabījakam ālayavijñānaṃ ||¹⁰¹

ghrāṇaṃ katamat |¹⁰² yaś¹⁰³ catvāri mahābhūtāny upādāya ghrāṇavijñānasamñisrayo
rūpaprasādo ⁽¹⁰⁴⁾ 'nidarśanaṃ sapratigham ||⁽¹⁰⁴⁾ manobījayoḥ pūrvavad vibhāgaḥ ||¹⁰⁵

1.1.3.3

1.1.3.3.1 (MS 2b3m; Bh-ed 7, 11)

ālambanaṃ katamat | gandhā anekavidhā¹⁰⁶ anidarśanāḥ¹⁰⁷ sapratighāḥ ||¹⁰⁸

1.1.3.3.2 (MS 2b3m; Bh-ed 7, 11)

sugandhā vā durgandhā vā samagandhā¹⁰⁹ vā ghrāṇīyās |¹¹⁰

1.1.3.3.3 (MS 2b3r; Bh-ed 7, 12)

tadyathā mūlagandhaḥ sāragandhaḥ patragandhaḥ puṣpagandhaḥ phalagandha ityevamādayo
bahavo gandhāḥ ||¹¹¹

1.1.3.3.4 (MS 2b4l; Bh-ed 7, 14)

tatra gandho ghrāṇīyo jighraṇīya āghrātavya ityevamādayaḥ paryāyāḥ ||¹¹²
ghrāṇagocarō¹¹³ ghrāṇaviṣayo ghrāṇavijñānagocarō ghrāṇavijñānaviṣayo
ghrāṇavijñānālambanaṃ manovijñānagocarō manovijñānaviṣayo manovijñānālambanam iti¹¹⁴
paryāyāḥ ||¹¹⁵

1.1.3.4 (MS 2b4r; Bh-ed 7, 19)

sahāyaḥ karma ca pūrvavad veditavyaṃ ||¹¹⁶

⁹⁶ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

⁹⁷ ghrāṇāśrayā MS; ghrāṇāśrayā Bh-ed, em. cf.: 依鼻 YBh-c; sna la brten nas YBh-t.

⁹⁸ °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

⁹⁹ °naṃ MS; °naṃ | Bh-ed, em.

¹⁰⁰ °naḥ MS; °naḥ | Bh-ed, em.

¹⁰¹ | MS; || Bh-ed, em.

¹⁰² °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

¹⁰³ yaś MS; yac Bh-ed.

¹⁰⁴ 'nidarśanaṃ sapratigham MS; 'nidarśanaḥ sapratighaḥ || Bh-ed; 'nidarśanaṃ sapratigham || em.

¹⁰⁵ °gaḥ MS; °gaḥ || Bh-ed, em.

¹⁰⁶ °dhāḥ | MS; °dhā Bh-ed, em.

¹⁰⁷ atidar° MS; anidar° Bh-ed, em. cf.: 無見 YBh-c; bstan du med YBh-t.

¹⁰⁸ °ghāḥ MS; °ghāḥ | Bh-ed; °ghāḥ || em.

¹⁰⁹ sama<ga>ndhā MS; samagandhā Bh-ed, em. cf.: 平等香 YBh-c; dri mnyam pa YBh-t.

¹¹⁰ °yās MS; °yās Bh-ed; °yās | em.

¹¹¹ °ndhāḥ MS; °ndhāḥ || Bh-ed, em.

¹¹² °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

¹¹³ °na·caro MS; °nagocarō Bh-ed, em. cf.: 鼻所行 YBh-c; sna'i spyod yul YBh-t.

¹¹⁴ iti | MS; iti Bh-ed, em.

¹¹⁵ °yā MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

¹¹⁶ | MS; || Bh-ed, em.

1.1.3 [鼻識]

1.1.3.1 [鼻識の本質]

鼻識とは何か。それは鼻〔の感官〕を拠り所とし、においに対する認識機能である。

1.1.3.2 [鼻識の拠り所]

拠り所とは何か。同時に存在する拠り所は鼻である。直前の拠り所は意である。種子の拠り所は、〔眼識の場合と〕同じくすべての種子を有するアーラヤ識である。

鼻とは何か。それは四元素によって〔構成される〕、鼻識の拠り所である清澄なものであり、見えない、抵触のあるものである。意と種子の〔拠り所〕に関して、前（眼識の場合）と同じ区別である。

1.1.3.3 [鼻識の所縁]

1.1.3.3.1 [定義]

所縁とは何か。見えない、抵触のある多種のにおいである。

1.1.3.3.2 [分類]

〔それ（におい）は〕良いにおい・悪いにおい・中間的なにおいという嗅覚対象である。

1.1.3.3.3 [具体例]

例えば、根のにおい・髓のにおい・葉のにおい・花のにおい・果実のにおい、というような多くのにおいである。

1.1.3.3.4 [同義語]

また、におい、嗅覚対象、嗅ぐもの、におうものというようなものは同義語である。

鼻の活動領域、鼻の対象、鼻識の活動領域、鼻識の対象、鼻識の所縁、意識の活動領域、意識の対象、意識の所縁とは同義語である。

1.1.3.4 [鼻識の随行するものとはたらき]

随行するものとはたらきは前（眼識の場合）のように知られるべきである。

1.1.4

1.1.4.1 (MS 2b4r; Bh-ed 7, 21)

jihvāvijñānaṃ katamat | yā jihvāśrayā rasaprativijñaptiḥ ||¹¹⁷

1.1.4.2 (MS 2b5l; Bh-ed 7, 21)

āśrayaḥ katamaḥ ||¹¹⁸ sahabhūr āśrayo jihvā ||¹¹⁹ samanantara āśrayo¹²⁰ manaḥ ||¹²¹ bījāśrayas¹²²
tad eva sarvabījakam ālayavijñānaṃ ||¹²³

jihvā katamā ||¹²⁴ yaś catvāri mahābhūtāny upādāya jihvāvijñānasamniśrayo rūpaprasādo
(¹²⁵ 'nidarśanā sapratighā ||¹²⁵) manobījayoḥ pūrvavad vibhāgaḥ ||

1.1.4.3

1.1.4.3.1 (MS 2b5r; Bh-ed 8, 4)

ālambanaṃ katamat ||¹²⁶ rasā anekavidhā anidarśanāḥ sapratighāḥ ||¹²⁷

1.1.4.3.2 (MS 2b6l; Bh-ed 8, 4)

te punas tiktāmlakatuḥkaṣāyalavaṇamadhurā mānāpikā vāmānāpikā¹²⁸ vopekṣāsthānīyāḥ
svādanīyāḥ ||¹²⁹

1.1.4.3.3 (MS 2b6m; Bh-ed 8, 6)

tatra rasaḥ svādayitavyo 'bhyavahartavyo bhojyaṃ peyaṃ lehyaṃ coṣyaṃ¹³⁰ upayogyam¹³¹
(¹³² ityevamādayaḥ ||¹³²) paryāyāḥ ||¹³³

jihvāgocaro jihvāviśayo jihvāvijñānagocaro jihvāvijñānaviśayo jihvāvijñānālambanam
manovijñānagocaro manovijñānaviśayo manovijñānālambanam iti paryāyāḥ ||¹³⁴

1.1.4.4 (MS 3a1m; Bh-ed 8, 11)

sahāyaḥ karma ca pūrvavad veditavyaṃ ||¹³⁵

1.1.5

1.1.5.1 (MS 3a1m; Bh-ed 8, 13)

kāyavijñānaṃ katamat | yā kāyāśrayā spraṣṭavyaprativijñaptiḥ ||

¹¹⁷ °ptiḥ MS; °ptiḥ || Bh-ed, em.

¹¹⁸ °maḥ MS; °mah | Bh-ed, em.

¹¹⁹ °hvā MS; °hvā | Bh-ed, em.

¹²⁰ āśrayoḥ MS; āśrayo Bh-ed, em. cf.: 等無間依謂意 YBh-c; yid ni de ma thag pa'i gnas so YBh-t.

¹²¹ °naḥ MS; °nah | Bh-ed, em.

¹²² bījāśrayaḥ MS; bījāśrayas Bh-ed, em.

¹²³ ālayavijñānaṃ MS; ālayavijñānaṃ || Bh-ed, em. cf.: 阿賴耶識 YBh-c; kun gzhi rnam par shes pa YBh-t.

¹²⁴ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

¹²⁵ 'nidarśanā sapratighāḥ MS; 'nidarśanaḥ sapratighaḥ || Bh-ed; 'nidarśanā sapratighā || em.

¹²⁶ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

¹²⁷ °ghāḥ MS; °ghāḥ | Bh-ed; °ghāḥ || em.

¹²⁸ vā | amānāpikā MS; vāmānāpikā Bh-ed, em.

¹²⁹ °yās MS; °yāḥ | Bh-ed, em.

¹³⁰ coṣyam MS; cūṣyam Bh-ed.

¹³¹ upayogyam MS; upabhogyam Bh-ed. cf.: 應受用 YBh-c; nye bar spyad pa YBh-t.

¹³² ityevamādayaḥ MS; iti Bh-ed. cf.: 如是等 YBh-c; la sogs pa YBh-t.

¹³³ °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

¹³⁴ °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

¹³⁵ °vyam MS; °vyam || Bh-ed, em.

1.1.4 [舌識]

1.1.4.1 [舌識の本質]

舌識とは何か。それは舌〔の感官〕を拠り所とし、味に対する認識機能である。

1.1.4.2 [舌識の拠り所]

拠り所とは何か。同時に存在する拠り所は舌である。直前の拠り所は意である。種子の拠り所は、〔眼識の場合と〕同じくすべての種子を有するアーラヤ識である。

舌とは何か。それは四元素によって〔構成される〕、舌識の拠り所である清澄なものであり、見えない、抵触のあるものである。意と種子の〔拠り所〕に関して、前（眼識の場合）と同じ区別である。

1.1.4.3 [舌識の所縁]

1.1.4.3.1 [定義]

所縁とは何か。見えない、抵触のある多種の味である。

1.1.4.3.2 [具体例と分類]

また、それ（味）は苦さ・酸っぱさ・辛さ・渋さ・塩辛さ・甘さであり、好ましいもの・好ましくないもの・気にならない状態に位置つけられる (*upekṣāsthānīyāḥ*)、味覚対象である。

1.1.4.3.3 [同義語]

また、味、味覚対象、呑み込まれるべきもの、食べられるもの、飲まれるもの、舐められるもの、吸われるもの、享受されるものというなどのようなものは同義語である。

舌の活動領域、舌の対象、舌識の活動領域、舌識の対象、舌識の所縁、意識の活動領域、意識の対象、意識の所縁とは同義語である。

1.1.4.4 [舌識の随行するものとはたらき]

随行するものとはたらきは前（眼識の場合）のように知られるべきである。

1.1.5 [身識]

1.1.5.1 [身識の本質]

身識とは何か。それは身体を拠り所とし、触覚対象に対する認識機能である。

1.1.5.2 (MS 3a1r; Bh-ed 8, 14)

āśrayaḥ katamaḥ |¹³⁶ (137) *sahabhūr āśrayaḥ*¹³⁷ kāyaḥ |¹³⁸ (139) *samanantara āśrayo*¹³⁹ manaḥ |¹⁴⁰
bījāśrayas tad eva sarvabījakam ālayavijñānam ||¹⁴¹

kāyaḥ katamaḥ |¹⁴² yaś catvāri mahābhūtāny upādāya kāyavijñānasaṃmiśrayo¹⁴³ rūpaprasādo
(144) 'nidarśanaḥ sapratighaḥ ||¹⁴⁴ manobījayoḥ¹⁴⁵ pūrvavad vibhāgaḥ ||

1.1.5.3

1.1.5.3.1 (MS 3a2m; Bh-ed 8, 19)

ālambanaṃ katamat |¹⁴⁶ spraṣṭavyam anekavidham anidarśanaṃ sapratighaṃ ||¹⁴⁷

1.1.5.3.2 (MS 3a2r; Bh-ed 8, 19)

tadyathā pṛthivy āpas tejo vāyur laghutvaṃ gurutvaṃ ślakṣṇatvaṃ karkaśatvaṃ śītaṃ jighatsā
pipāsā tṛptir balaṃ daurbalyaṃ (148) *vyādhir jarā maraṇaṃ*¹⁴⁸ *kaṇḍūr*¹⁴⁹ mūrchā picchilaṃ śramo
viśramo mṛdutaṃ (150) *ūrjā cety*¹⁵⁰ evambhāgīyaṃ bahuvidhaṃ spraṣṭavyaṃ ||¹⁵¹

1.1.5.3.3 (MS 3a3m; Bh-ed 9, 3)

tat punaḥ susaṃsparśaṃ vā dussaṃsparśaṃ vopekṣāsthānīyaṃ¹⁵² vā sparśanīyaṃ ||¹⁵³

1.1.5.3.4 (MS 3a3m; Bh-ed 9, 4)

tatra spraṣṭavyaṃ spṛśīyaṃ sparśanīyaṃ kharaṃ dravaṃ calam uṣṇam ityevamādayaḥ¹⁵⁴
paryāyāḥ ||¹⁵⁵

kāyagocaraḥ kāyaviśayaḥ kāyavijñānagocaraḥ kāyavijñānaviśayaḥ kāyavijñānālambanaṃ
manovijñānagocaro¹⁵⁶ manovijñānaviśayo manovijñānālambanaṃ *iti paryāyāḥ*¹⁵⁷ ||

1.1.5.4 (MS 3a4m; Bh-ed 9, 8)

sahāyaḥ karma ca pūrvavad veditavyam ||

¹³⁶ °mah MS; °mah | Bh-ed, em.

¹³⁷ mahābhūtāśrayaḥ MS; *sahabhūr āśrayaḥ* Bh-ed, em. cf.: 俱有依 YBh-c; lhan cig 'byung ba'i gnas YBh-t.

¹³⁸ °yaḥ MS; °yaḥ | Bh-ed, em.

¹³⁹ samananta(r)āśrayo MS; *samanantarāśrayo* Bh-ed; *samanantara āśrayo* em. cf.: §1.1.2.2, §1.1.3.2, §1.1.4.2.

¹⁴⁰ °naḥ MS; °naḥ | Bh-ed, em.

¹⁴¹ ālavijñānaṃ MS; *ālayavijñānaṃ* || Bh-ed, em. cf.: 阿賴耶識 YBh-c; kun gzhi rnam par shes pa YBh-t.

¹⁴² °mah MS; °mah | Bh-ed, em.

¹⁴³ °sanīśrayo MS; °saṃnīśrayo Bh-ed, em. cf.: 身識所依 YBh-c; lus kyi rnam par shes pa'i rten po YBh-t.

¹⁴⁴ 'nidarśanasapratighaḥ MS; 'nidarśanaḥ sapratighaḥ || Bh-ed, em.

¹⁴⁵ manobījāyo MS; *manobījāyoḥ* Bh-ed, em. cf.: 意及種子 YBh-c; yid dang sa bon gyi YBh-t.

¹⁴⁶ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

¹⁴⁷ °ghaṃ MS; °ghaṃ | Bh-ed; °ghaṃ || em.

¹⁴⁸ vyādhijarāmarāṇaṃ MS; *vyādhir jarā maraṇaṃ* Bh-ed, em. cf.: 病、老、死 YBh-c; nad dang/ rga ba dang/ 'chi ba dang YBh-t.

¹⁴⁹ karṇṇa MS; *kaṇḍūr* Bh-ed, em. cf.: 蚌 YBh-c; g.ya' ba YBh-t.

¹⁵⁰ ūrjā cety MS; *rjava(?) ity* Bh-ed. cf.: 勇 YBh-c; mdangs bzang ba dang YBh-t.

¹⁵¹ °vyam MS; °vyam || Bh-ed, em.

¹⁵² vā <u>pekṣā° MS; vopekṣā° Bh-ed, em. cf.: 捨處所觸 YBh-c; btang snyoms kyi gnas YBh-t.

¹⁵³ °yam MS; °yam || Bh-ed, em.

¹⁵⁴ ityevamādayaḥ MS; *ityādayaḥ* Bh-ed. cf.: 如是等 YBh-c; la sogs pa YBh-t.

¹⁵⁵ °yāḥ MS; °yāḥ || Bh-ed, em.

¹⁵⁶ °raḥ | MS; °ro Bh-ed, em.

¹⁵⁷ vijñānālambanaṃ MS; *vijñānālambana[m iti paryāyāḥ]* Bh-ed, em. cf.: §1.1.1.3.2.2, §1.1.2.3.4, §1.1.3.3.4, §1.1.4.3.3.

1.1.5.2 [身識の拠り所]

拠り所とは何か。同時に存在する拠り所は身体である。直前の拠り所は意である。種子の拠り所は、[眼識の場合と] 同じくすべての種子を有するアーヤ識である。

身体とは何か。それは四元素によって [構成される]、身識の拠り所である清澄なものであり、見えない、抵触のあるものである。意と種子の [拠り所] に関して、前 (眼識の場合) と同じ区別である。

1.1.5.3 [身識の所縁]

1.1.5.3.1 [定義]

所縁とは何か。見えない、抵触のある多種の触覚対象である。

1.1.5.3.2 [具体例]

例えば、地・水・火・風、軽さ・重さ・滑らかさ・粗さ、寒さ・飢え・渴き・満腹・強さ・弱さ・病気・老衰・死亡・痒さ・麻痺¹³・粘滑・疲労・弛緩・柔軟・活力というような類に属する多くの種類の触覚対象である。

1.1.5.3.3 [分類]

さらに、それ (触覚対象) は心地よい接触・心地よくない接触・気にならない状態に位置つけられる身体感覚である。

1.1.5.3.4 [同義語]

また、触覚対象、触れられるもの、身体感覚、硬さ、流動、動き、暖かさというようなものは同義語である。

身体の活動領域、身体の対象、身識の活動領域、身識の対象、身識の所縁、意識の活動領域、意識の対象、意識の所縁とは同義語である。

1.1.5.4 [身識の随行するものとはたらき]

随行するものとはたらきは前 (眼識の場合) のように知られるべきである。

¹³ mürchā は、漢訳では「悶」、チベット語訳では brygal ba と訳され、ともに「目眩、気絶、昏迷」と解釈されている (Text A-chi, Text A-tib 1.1.5.3.2 参照)。しかし、「本地分中意地」では、意地には五識身が有さない特殊なはたらきがあるという説明の中で、次のように mürchā を挙げている。

『瑜伽論』「本地分中意地」(YBh 14, 7-8) : kathaṃ mürchām āpadyate | vātapittavibhramaṇatayā abhigātayā ativirekatayā yaduta purīṣavirekeṇa vā śonitavirekeṇa vā viriktasya cātyadhyavasāyatayā || (【訳】如何にして昏迷に陥るのか。[体内の] 風と胆汁が乱れたことによって、攻撃されたことによって、過度に排出したこと、すなわち排泄している人の糞の排出や血の排出によって、過度に努めることによって [昏迷に陥る].)

この説明文の mürchā は昏迷を意味すると考えられる。もし身体の場合の mürchā も同じ昏迷を意味するならば、mürchā は五識身が有さない、意地の特殊なはたらきであるという説明と矛盾することになる。mürchā は無感覚、硬くなることを意味するので、身体の場合の mürchā は、麻痺と理解できる。したがって、上のように解釈した。

1.2

1.2.1 (MS 3a4m; Bh-ed 9, 10)

tatra cakṣuḥ paribhinnaṃ bhavati | rūpam anābhāsagataṃ bhavati | na ca tajjo manaskāraḥ
pratyupasthito bhavati |¹⁵⁸ na⁽¹⁵⁹⁾ *tajjasya cakṣurvijñānasyotpādo*¹⁵⁹ bhavati ||¹⁶⁰

yataś ca cakṣur aparibhinnaṃ¹⁶¹ bhavati | rūpam ābhāsagataṃ bhavati | tajjaś ca manaskāraḥ
pratyupasthito bhavati |¹⁶² tatas *tajjasya*¹⁶³ cakṣurvijñānasyotpādo bhavati ||¹⁶⁴

yathā cakṣurvijñānam evaṃ śrotraghrāṇajihvākāyavijñānāni draṣṭavyāni ||¹⁶⁵

1.2.2 (MS 3a5r; Bh-ed 10, 2)

tatra cakṣurvijñāna utpanne trīṇi cittāny upalabhyante yathākramam aupanipātikaṃ paryeṣakaṃ
niścitaṃ ca |¹⁶⁶ *tatrādyam*¹⁶⁷ cakṣurvijñānam eva |¹⁶⁸ dve manovijñāne ||¹⁶⁹

tatra⁽¹⁷⁰⁾ *niścitāc cittāt prabhṛti*⁽¹⁷⁰⁾ saṃkleśo vyavadānaṃ ca draṣṭavyaṃ |¹⁷¹ tatas
tannaṣyandikaṃ¹⁷² cakṣurvijñānam api kuśalākuśalaṃ pravarttate |¹⁷³ na tu svavikalpavaśena |¹⁷⁴
tāvac ca dvayor manovijñānacakṣurvijñānayoḥ kuśalatvaṃ vā kliṣṭatvaṃ vā¹⁷⁵ yāvat tan mano
nānyatra vikṣipyate ||¹⁷⁶

yathā cakṣurvijñāna utpanna evaṃ yāvat kāyavijñāne¹⁷⁷ veditavyaṃ ||¹⁷⁸

¹⁵⁸ °ti MS; °ti | Bh-ed, em.

¹⁵⁹ *tasya cakṣurvijñānasyotpādo* MS; *tasya cakṣurvijñānotpādo* Bh-ed; *tajjasya cakṣurvijñānasyotpādo* em. cf.: §1.2.1; 所生眼識必不得生 YBh-c; de las skyes pa'i mig gi rnam par shes pa 'byung bar mi 'gyur te YBh-t.

¹⁶⁰ | MS; || Bh-ed, em.

¹⁶¹ *aviparibhinnaṃ* MS; *aparibhinnaṃ* Bh-ed, em. cf.: 不壞 YBh-c; yongs su ma nyams YBh-t.

¹⁶² °ti MS; °ti | Bh-ed, em.

¹⁶³ *tajjasya* MS; *tajjo śya* Bh-ed. cf.: 所生 YBh-c; de las skyes pa'i YBh-t.

¹⁶⁴ | MS; || Bh-ed, em.

¹⁶⁵ °ni MS; °ni || Bh-ed, em.

¹⁶⁶ *ca* MS; *ca* | Bh-ed, em.

¹⁶⁷ *tatrādyam* MS; *tatra cādyam* Bh-ed. cf.: 初是 YBh-c; de la dang po ni YBh-t.

¹⁶⁸ *eva* MS; *eva* | Bh-ed, em.

¹⁶⁹ °ne MS; °ne | Bh-ed; °ne || em.

¹⁷⁰ *niścitācittāt prabhṛti* MS; *niścitāc cittāt paraṃ* Bh-ed; *niścitāc cittāt prabhṛti* em. cf.: 決定心後 YBh-c; nges pa'i sems phan chad nas YBh-t.

¹⁷¹ °vyam MS; °vyam | Bh-ed, em.

¹⁷² °kam MS; °kam | Bh-ed.

¹⁷³ °te MS; °te | Bh-ed, em.

¹⁷⁴ °na MS; °na | Bh-ed, em.

¹⁷⁵ *vā* MS; om. Bh-ed. cf.: 或善或染 YBh-c; dge ba 'am/ nyon mongs pa can YBh-t.

¹⁷⁶ °te MS; °te || Bh-ed, em.

¹⁷⁷ °vijñāne MS; °vijñānaṃ Bh-ed. cf.: 乃至身識 YBh-c; lus kyi rnam par shes pa'i bar du YBh-t.

¹⁷⁸ | MS; || Bh-ed, em.

1.2 [五識の生起]

1.2.1 [五識の生起の三要因]

さて、眼が壊れており、色かたちが顕現しておらず、そして、それ（眼識の生起）に相應する作意は起ころうとしていない。それに相應する眼識の生起はない。

一方、眼が壊れておらず、色かたちが顕現しており、そして、それ（眼識の生起）に相應する作意が起ころうとしている。それゆえ、それに相應する眼識の生起がある¹⁴。

眼識と同様に、耳〔識〕・鼻〔識〕・舌〔識〕・身識が理解されるべきである。

1.2.2 [五識身の生起における三つの心]

また、眼識が生起した時、三つの心が知覚される。順次に、突発的に起こる (aupanipātika) [心] と、探求する (paryeṣaka) [心] と、確定された (niścita) [心] とである。その中で、最初のものは眼識のみであり、〔後の〕二つは意識である。

また、確定された心から始まり、雑染 (saṃkleśa) と純淨 (vyavadāna) が観察されるべきである。それから、それ（確定された心）の等流〔果〕である眼識もまた善や不善なるものとして活動するが、それ（眼識）自体の分別によってではない。そして、その意〔識〕は別なところに散乱しない限り、意識と眼識の二つが善なるもの (kuśalatvam)、あるいは染汚なるもの (kliṣṭatvam) である。

眼識が生起した時と同様に、〔耳識から〕身識まで〔が生起した〕時、〔三つの心が認識されるということ〕が知られるべきである。

¹⁴ この記述におけるサンスクリットテキストと漢訳・チベット語訳の相違については、本論第4章第4.2.2.1節参照。また、この一文の解釈については第4章参照。

1.3 (MS 3b1l; Bh-ed 10, 9)

tatra deśāntaraprasthitasyeva ⁽¹⁷⁹⁾yānapadā āśrayo ⁽¹⁷⁹⁾ draṣṭavyaḥ ⁽¹⁸⁰⁾ pañcānāṃ vijñānakāyānām
⁽¹⁸¹⁾ sahasārthikavat ⁽¹⁸²⁾ sahāyāḥ ⁽¹⁸³⁾ karaṇīyavad ālambanam ⁽¹⁸⁴⁾ svasāktivāt tatkarma ⁽¹⁸⁵⁾
 aparāḥ paryāyāḥ ⁽¹⁸⁶⁾ gr̥hasthasya gr̥havad eṣām āśrayo draṣṭavyaḥ ⁽¹⁸⁷⁾ bhogavad ālambanam ⁽¹⁸⁸⁾
 dāsīdāsādivāt sahāyāḥ ⁽¹⁸⁹⁾ vyavasāyavat karma ||
 yogācārabhūmau pañcavijñānakāyasamprayuktā ⁽¹⁹⁰⁾ bhūmiḥ ⁽¹⁹¹⁾ samāptā || ||

[Part 2, manobhūmidvitīyā 1]

2.0 (MS 3b2l; Bh-ed 11, 1)

manobhūmiḥ katamā ⁽¹⁹²⁾ sāpi pañcabhir evākārair ⁽¹⁹³⁾ draṣṭavyā ⁽¹⁹⁴⁾ svabhāvata āśrayata
 ālambanataḥ sahāyataḥ karmatāś ca || ⁽¹⁹⁵⁾

2.1 (MS 3b2m; Bh-ed 11, 3)

svabhāvaḥ katamaḥ ⁽¹⁹⁶⁾ yac cittaṃ mano vijñānam || ⁽¹⁹⁷⁾

2.1.1 (MS 3b2r; Bh-ed 11, 4)

cittaṃ katamat | yat sarvabījopagatam āśrayabhāvopagatam āśrayabhāvasaṃniviṣṭam ⁽¹⁹⁸⁾ upādātṛ
 vipākasaṃgr̥hītam ālayavijñānam ||

2.1.2 (MS 3b3l; Bh-ed 11, 6)

manaḥ katamat ⁽¹⁹⁹⁾ yat ṣaṇṇām api vijñānakāyānām anantaraniruddham kliṣṭam ca mano yan
 nityam avidyātmadr̥ṣṭyasmmimānatṛṣṇālakṣaṇaiś caturbhiḥ kleśaiḥ samprayuktam || ⁽²⁰⁰⁾

¹⁷⁹ yānapadāśrayo MS; yānam āśrayo Bh-ed; yānapadā āśrayo em. cf.: 所依如往餘方者所乘 YBh-c; gnas ni yul gzhan du 'gro ba'i bzhon pa bzhin du YBh-t.

¹⁸⁰ 'vyah MS; 'vyah | Bh-ed.

¹⁸¹ 'nām MS; 'nām Bh-ed; 'nām | em. cf.: 應觀五識所依如往餘方者所乘，所緣如所為事，助伴如同侶 YBh-c; gnas ni yul gzhan du 'gro ba'i bzhon pa bzhin du blta bar bya'o// mnam par shes pa'i tshogs lnga po dag ni grogs rnam ni 'gron po 'grogs pa lta bu'o// dmigs pa ni bya ba'i don lta bu'o YBh-t.

¹⁸² sahasārthikavat MS; sahāyārthikavat Bh-ed. cf.: ibid.

¹⁸³ 'yāḥ MS; 'yāḥ | Bh-ed, em.

¹⁸⁴ 'naṃ MS; 'naṃ | Bh-ed, em.

¹⁸⁵ 'ma MS; 'ma | Bh-ed, em.

¹⁸⁶ 'yah MS; 'yah | Bh-ed, em.

¹⁸⁷ 'vyah MS; 'vyah | Bh-ed, em.

¹⁸⁸ 'nam MS; 'nam | Bh-ed, em.

¹⁸⁹ sahāya MS; sahāyāḥ | Bh-ed, em.

¹⁹⁰ pañcavijñānakāya° MS; pañcavijñāna[kāya]° Bh-ed. cf.: 五識身相應 YBh-c; mnam par shes pa'i tshogs lnga dang ldan pa'i YBh-t.

¹⁹¹ bhūmiḥ MS; bhūmiḥ prathamā Bh-ed. cf.: 地 YBh-c; sa ste dang po YBh-t.

¹⁹² katamāḥ MS; katamā | Bh-ed, em.

¹⁹³ evākārair MS; ākārair Bh-ed. cf.: 此亦五相 YBh-c; de yang rnam pa lnga kho nar YBh-t.

¹⁹⁴ 'vyā MS; 'vyā | Bh-ed, em.

¹⁹⁵ ca MS; ca || Bh-ed, em.

¹⁹⁶ 'maḥ MS; 'maḥ | Bh-ed, em.

¹⁹⁷ 'nam MS; 'nam || Bh-ed, em.

¹⁹⁸ 'bhāvasaṃniviṣṭam MS; 'bhāvaniṣṭham Bh-ed; 'bhāvasaṃniviṣṭam em. cf.: 依附依止性 YBh-c; gnas kyi dngos por gnas pa dang YBh-t.

¹⁹⁹ katamaḥ MS; katamat | Bh-ed, em.

²⁰⁰ 'ktam MS; 'ktam || Bh-ed, em.

1.3 [五識身についての譬喩]

また、五識身の拠り所は、ほかの場所に赴いている人にとっての乗りものの足の如くと見られるべきである。諸々の随行するものは〔ほかの場所に赴いている人にとっての〕旅の同行者の如き、所縁は〔ほかの場所に赴いている人にとっての〕為されるべきものの如き、そのはたらきは〔ほかの場所に赴いている人〕自身の能力の如く〔と見られるべきである〕。

ほかの〔喩えの〕仕方がある。〔すなわち〕これら（五識身）の拠り所は家主にとっての家の如くと見られるべきである。所縁は享受されるべきもの（bhoga）の如き、諸々の随行するものは男女の従者などの如き、はたらきは仕事の如く〔と見られるべきである〕。

〔以上〕瑜伽師地の中の五つの識身と結びついている地が〔説き〕終わった。

[Part 2 意地その 1]

2.0 [意地]

意と結びついている地（意地）とは何か。それもまた、〔五識身相応地と〕同じ、五つの様相によって観察されるべきである。〔すなわち〕本質という点で、拠り所という点で、所縁という点で、随行するものという点で、及びはたらきという点でである。

2.1 [意地の本質]

本質とは何か。それは心・意・識である。

2.1.1 [心]

心とは何か。それは、すべての種子を備えており、拠り所であるもの（身体）を備えており、拠り所であるものに依存しているものであり、執持する主体であり、異熟に包摂されているアーラヤ識である¹⁵。

2.1.2 [意]

意とは何か。それは、六つの識身いずれにとって間を空けずに滅したものと、染汚されたマナスとである。それ（染汚されたマナス）は常に、痴（無明）・我見（我についての誤った見解）・我慢（我はいるという思い上がり）・渴愛を特徴とする四つの煩惱と相応しているものである¹⁶。

¹⁵ āśrayabhāva については、Schmithausen [1987 : 43] 参照。

アーラヤ識と拠り所であるもの（身体）との関係について、ここでは、アーラヤ識は拠り所であるものを備えていると同時に、拠り所であるものに依存してもいるという相互共存の関係を説明している。

サンスクリットテキストでは、sarvabījopagatam āśrayabhāvopagatam の中に二つの upagatam がある。漢訳では「一切種子所隨，依止性所隨」（一切の種子によって随われているものであり、拠り所となるものによって随われているものであり）となっており、「所隨」は upagatam の訳語と考えられる。すなわち、サンスクリットテキストと漢訳は一致している。一方、チベット語訳では、sa bon thams cad dang ldan pa dang/ gnas kyi dngos por gyur pa dang/（すべての種子を有するもの、拠り所としてのものになったもの）となっており、ldan pa と gyur pa という異なる語で訳されている（Text A-chi, Text A-tib 2.1.1 参照）。

¹⁶ マナスは常に四つの煩惱と相応するという点について、サンスクリットテキストとチベット語訳とは一致しているが、漢訳には対応する記述が見られない。この箇所に関し、勝呂 [2009 : 26] は、漢訳が依拠したサンスクリットテキストの方が古く、現存サンスクリット本とチベット語訳は後世に修正されたものと推察している。

2.1.3 (MS 3b3m; Bh-ed 11, 8)

vijñānaṃ katamat |²⁰¹ yad ālambanavijñaptau pratyupasthitam ||

2.2 (MS 3b3r; Bh-ed 11, 9)

āśrayaḥ katamaḥ |²⁰² samanantarāśrayo manaḥ |²⁰³ bijāśrayaḥ pūrvavad eva²⁰⁴ sarvabījakam
ālayavijñānam ||

2.3 (MS 3b4l; Bh-ed 11, 11)

ālambanaṃ katamat |²⁰⁵ (²⁰⁶sarvadharmā ālambanam |²⁰⁶) niškevalam²⁰⁷ tu vedanāskandhaḥ
saṃjñāskandhaḥ saṃskāraśkandho²⁰⁸ 'saṃskṛtam cānidarśanam apratigham ca rūpaṃ śaḍāyatanam
sarvabījāni ca ||

2.4 (MS 3b4m; Bh-ed 11, 14)

sahāyaḥ katamaḥ |²⁰⁹ tadyathā²¹⁰ manaskāraḥ sparśo vedanā saṃjñā cetanā chando 'dhimokṣaḥ
smṛtiḥ samādhiḥ prajñā śraddhā hrīr apatrāpyam²¹¹ alobho 'dveṣo 'moho vīryam prasrabdhir
apramāda upekṣāhimsā rāgaḥ pratigho 'vidyā²¹² māno dṛṣṭir vicikitsā krodha upanāho mrakṣaḥ
pradāśa īrṣyā mātsaryam māyā śāṭhyaṃ mado vihiṃsāhrīkyam²¹³ anapatrāpyam styānam auddhatyam
āśraddhyaṃ kausīdyaṃ pramādo (²¹⁴muṣitasmrītā vikṣepo²¹⁴) 'samprajanyaṃ (²¹⁵kaukṛtyam
middham²¹⁵) vitarko vicāraś cety evambhāgīyāḥ sahabhūsamprayuktāś²¹⁶ caitasā dharmāḥ sahāya ity
ucyante ||²¹⁷ ekālambanā anekākārāḥ sahabhuva ekaikavṛttayaḥ svabījanirjātāḥ²¹⁸ samprayuktāḥ
sākārāḥ sālambanāḥ sāsrayāḥ ||

²⁰¹ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

²⁰² °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

²⁰³ || MS; | Bh-ed, em.

²⁰⁴ eva MS; eva | Bh-ed.

²⁰⁵ °mat MS; °mat | Bh-ed, em.

²⁰⁶ sadharmālambanam MS; sarvadharmā ālambanam | Bh-ed, em. cf.: 一切法如其所應 YBh-c; chos thams
cad ni gmigs pa ste YBh-t.

²⁰⁷ niškevalam MS; kevalam Bh-ed. cf.: 不共者 YBh-c; 'ba' zhiḡ gi YBh-t.

²⁰⁸ saṃskārā° MS; saṃskāra° Bh-ed, em. cf.: 行蘊 YBh-c; 'du byed gyi phung po YBh-t.

²⁰⁹ °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

²¹⁰ °thā MS; °thā | Bh-ed.

²¹¹ apatrāpyam MS; apatrāpyam Bh-ed, em. cf.: 愧 YBh-c; khrel yod pa dang YBh-t.

²¹² 'vidya MS; 'vidyā Bh-ed, em.

²¹³ vihiṃsā ahrīkyāṃ MS; vihiṃsāhrīkyam Bh-ed, em. cf.: 害、無慚 YBh-c; mnam par 'tshe ba dang/ ngo tsha
med pa dang YBh-t.

²¹⁴ °smṛtitā vikṣepa MS; °smṛtitādhikṣepo Bh-ed; °smṛtitā vikṣepo em. cf.: 忘念、散亂 YBh-c; brjed ngas pa
dang/ rnam par g.yeng ba dang YBh-t.

²¹⁵ kaukṛtyam middham MS; kaukṛtyamidham Bh-ed. cf.: 惡作、睡眠 YBh-c; 'gyod pa dang/ gnyid dang
YBh-t.

²¹⁶ °samprayuktāś MS; °sampreyuktāś Bh-ed.

²¹⁷ °te || MS; °te Bh-ed.

²¹⁸ °nirjātāḥ MS; °niyatāḥ Bh-ed. cf.: 各自種子所生 YBh-c; rang gi sa bon las nges par 'byung ba YBh-t.

2.1.3 [識]

識とは何か. それは所縁を認識させる時に現前しているものである¹⁷.

2.2 [意地の抛り所]

抛り所とは何か. 直前の抛り所は意である. 種子の抛り所は前（眼識の場合など）と全く同じ, すべての種子を有するアーヤ識である.

2.3 [意地の所縁]

所縁とは何か. すべての法は所縁である. 一方, 特有の〔所縁〕は, 受蘊・想蘊・行蘊, 〔および〕無為と, 見えない, 抵触のない色¹⁸と, 六内処, 〔および〕すべての種子である.

2.4 [意地の随行するもの]

随行するものとは何か. すなわち, 作意・触・受・想・思, 欲・勝解・念・三摩地・慧, 信・慚・愧・無貪・無瞋・無痴・精進・軽安・不放逸・捨・不害, 貪・瞋・無明・慢・見・疑, 忿・恨・覆・惱・嫉・慳・誑・諂・諂・害・無慚・無愧・昏沈・掉挙・不信・懈怠・放逸・忘念・散乱・不正知, 悪作・睡眠・尋・伺という¹⁹. 以上のような類に属するものは〔意地と〕同時に存在し相応する心所法であり, 随行するものと呼ばれる. 〔意地と〕同一の所縁を有し, 異なる様相を有し, 〔すなわち意地と〕「同時に存在するもの」であり, それぞれに活動を有し, 固有の種子から生じ, 〔すなわち意地と〕「相応するもの」である. 様相を有し, 所縁を有し, 抛り所を有するものである.

¹⁷ サンスクリットテキストは「所縁を認識させる時に現前しているものである」となっているが, 漢訳とチベット語訳ではそれぞれ異なる理解を示している. 漢訳では, 「現前了別所縁境界」(現前している, 所縁としての境界を了別するものである)となっている. チベット語訳では, *dmigs pa rnam par rig par byed pas nye bar gnas pa gang yin pa'o* (所縁を認識させることによって現前しているものである)となっている (Text A-chi, Text A-tib 2.1.3 参照).

一方, YBhVy では, 次に示すように, サンスクリットテキストの理解と類似した解釈をしている.

YBhVy (D 84a7; P 102a8): *dmigs pa rnam par rig par byed pas nye bar gnas pa gang yin pa'o (pa'o D; pa'o // P) zhes bya ba ni dmigs pa rnam par rig par byed pa 'byung ba la bya ste/* (【訳】「所縁を認識させることによって現前しているものである」とは, 所縁を認識させることが起こる時にという.)

ここでは, サンスクリットテキストの文章通りに解釈する.

¹⁸ 注 3 参照.

¹⁹ 漢訳では, 「放逸」と「忘念」の間に「邪欲」と「邪勝解」(280b17-18) の二つが挟まれているが, それに対応するものはサンスクリットテキストとチベット語訳には見られない. 注 27 参照.

2.5 (MS 3b6m; Bh-ed 12, 1)

karma katamat | svaparaviṣayālabhanavijñaptiḥ prathamam karma |²¹⁹ punaḥ
 svasāmānyalakṣaṇavijñaptiḥ |²²⁰ punar atītānāgatapratyutpannakālavijñaptiḥ |²²¹ punaḥ
 kṣaṇaprabandhavijñaptiḥ |²²² punaḥ pravartanānuvartanā śubhāśubhānām²²³ dharmāṇām karmaṇām²²⁴
 ca |²²⁵ punar iṣṭāniṣṭaphalaparigrahas tadanyeṣām ca vijñānakāyānām taddhetuniṣyandasamutthāpanā
 ||²²⁶

²¹⁹ °ma MS; °ma | Bh-ed, em.

²²⁰ || MS; | Bh-ed, em.

²²¹ °pratyutpannākāla° MS; °pratyutpannakāla° | Bh-ed, em. cf.: 能了別去、來、今世 YBh-c; 'das pa dang/ ma 'ongs pa dang/ da ltar byung ba'i dus rnam par rig par byed pa YBh-t.

²²² °prabandhah vijñaptiḥ MS; °prabandhavijñaptiḥ | Bh-ed, em. cf.: 刹那了別、或相續了別 YBh-c; skad cig pas rgyu rnam par rig par byed pa YBh-t.

²²³ śubhāśubhānām MS; śuddhāśuddhānām Bh-ed.

²²⁴ karmaṇās MS; karmaṇām Bh-ed, em. cf.: 一切法業 YBh-c; chos rnam dang/ las rnam YBh-t.

²²⁵ ca MS; ca | Bh-ed, em.

²²⁶ °nā MS; °nā || Bh-ed, em.

2.5 [意地のはたらき]

はたらきとは何か。最初のはたらきは、それ自体の〔対象物〕と他の〔識の〕対象物を所縁として認識させることである²⁰。次に、自〔相〕(固有の特徴)と共相(共通の特徴)を認識させることである²¹。次に、過去・未来・現在の時間〔にある対象〕を認識させることである。次に、〔対象の〕刹那と連続(kṣaṇaprabandha)を認識させることである²²。次に、清浄・不浄なる諸々の法と業を活動させることや、〔清浄・不浄なる諸々の法と業を、ほかの識が意識に〕随って活動させること(pravartanānuvartanā)である²³。次に、望ましい〔果報〕と望ましくない果報を取ることと、ほかの諸々の識身を、それ(意地)を因とする等流〔果〕

²⁰ svaparaviṣaya に対応するチベット訳は bdag dang gzhan gyi yul gyi dmigs pa mnam par rig (rig DCPG; rig/ N) par byed pa (それ自体の〔対象物〕と他の〔識の〕対象物という所縁を認識させること) となっており、サンスクリットテキストと一致している。これに対して、漢訳は「能了別自境所縁」(「それ自体の対象としての所縁を了別することができる」となっている。つまり、漢訳では、意識の所縁に他の識の対象は含まれない(Text A-chi, Text A-tib 2.5 参照)。

この箇所について、「撰決択分」に解説がある。漢訳(580c11-13)では、「又復意識能縁他境及縁自境。縁他境者、謂縁五識身所縁境界、或頓不頓。縁自境者、謂縁法境」(また、意識は他のものの対象とそれ自体の対象を縁することができる。他のものの対象を縁ずるとは、五識身が縁じている対象を、突然に、あるいは非突然に縁ずるということである。それ自体の対象を縁ずるとは、法という対象を縁ずるということである)となっている。チベット語訳(D 5b5-6; P 6b3-4)も一致している。

つまり、「撰決択分」の解説の漢訳は、「本地分」のサンスクリットテキストおよびチベット語訳と一致しており、意識は自他の対象を所縁とすると述べている。

また、これを「本地分」の中の眼識のはたらきについての説明(§1.1.1.5)と対照して見ると、眼識の場合の svaviṣayāmbanaviṣṇaptiḥ は、漢訳(279b23-24)では「唯了別自境所縁」(「それ自体の対象のみとしての所縁を了別させる」となっており、「唯」(のみ)を付加して訳している。一方、意識の場合は、「能了別自境所縁」と訳しており、「唯」のかわりに「能」(できる)を付加し、眼識の場合と違って積極的なニュアンスを表している。サンスクリット原文では、意識の場合については眼識とは異なる説明をしており、玄奘はそのことを訳文に示そうとしているようである。

この部分は、『略纂』(7c8)の解説では「対象の区別」(「境分齊」となっており、詳しい説明はない。『論記』(319b2)では、「自分の対象を認識する」(「了自境」となっている。玄奘の弟子が見ていた漢訳も「自境所縁」となっていたと想定される。

以上に基づいて、「本地分」の漢訳「能了別自境所縁」の「自境」は、玄奘が見ていたサンスクリット原文では逐語的に svaviṣaya- となっていたわけではないと考えられる。玄奘訳では眼識の場合と異なる訳し方をしているが、訳文の中に不自然さが残る。翻訳の過程で何らかの理由によりこのような文になったのかもしれない。

²¹ 五識は固有の特徴(自相)のみを認識するのに対して、意識は、固有の特徴と共通の特徴、すなわち、直接知覚対象と、それらの対象の共通の特徴を認識する。

²² この一文は、漢訳では、「復刹那了別、或相續了別」(また、刹那的に了別する、あるいは連続的に了別する)となっている。それに対して、チベット語訳のデルゲ版・チョネ版では、yang skad cig pas rgyu mnam par rig par byed pa'o (また、刹那的なものによって原因を認識させる)、北京版・ナルタン版・ゴールデン版では yang skad cig pa'i mnam par rig par byed pa'o (また、刹那的なものの〔もの〕を認識させる)となっており、サンスクリット原文の prabandha (漢訳では「相續」に該当する)に対応するものが見られない(Text A-chi, Text A-tib 2.5 参照)。このうち、デルゲ版・チョネ版の中の rgyu は rgyun の誤植である可能性がある。そうであれば、デルゲ版・チョネ版に基づけば、チベット語訳の解釈は、「また、刹那的なものによって連続を認識させる」であるかもしれない。また、北京版・ナルタン版・ゴールデン版の場合、skad cig pa'i の直後に、rgyun が脱落した可能性もある。この想定に基づいて読むと、「また、刹那的なものの連続を認識させる」になる。いずれにせよ、チベット語訳では、漢訳と異なり、kṣana と prabandha を並列的なものとしては理解していないことが分かる。

²³ 「清浄・不浄なる諸々の法と業を活動させること」(pravartana) は意識の場合について述べており、「〔清浄・不浄なる諸々の法と業を、ほかの識が意識に〕随って活動させること」(anuvartana) は五識身の場合について述べている。§1.1.1.5 参照。

[Part 3, manobhūmidvitīyā 2]

3.1 (MS 7b4l; Bh-ed 24, 1)

tatra samraktayor mātāpitros tivrāvasthāgate rāge ⁽²²⁷⁾sarvapaścād ghanam⁽²²⁷⁾ śukram mucyate | tadante cāvaśyam ubhayoḥ śukraśoṇitabinduḥ⁽²²⁸⁾ prādurbhavati | dvayor api ca tau śukraśoṇitabindū mātur eva yonau miśrībhūtau śaram baddhā tiṣṭhata⁽²²⁹⁾ ekapiṇḍībhūtau tadyathā pakvaṃ payaḥ śītībhāvam⁽²³⁰⁾ āpadyamānam |⁽²³¹⁾ yatra⁽²³²⁾ sarvabījakam vipākasamgrhītam⁽²³³⁾ āśrayopādātṛ⁽²³⁴⁾ ālayavijñānam sammūrchatī ||⁽²³⁵⁾

3.2

3.2.0 (MS 7b5l; Bh-ed 24, 6)

katham punaḥ sammūrchatī |⁽²³⁶⁾

3.2.1 (MS 7b5l; Bh-ed 24, 6)

tena samjātaśareṇa śukraśoṇitapiṇḍena saha ⁽²³⁷⁾tadviparyastālambano 'ntarābhavo nirudhyate⁽²³⁷⁾ | tannirodhasamakālam ca tasyaiva ⁽²³⁸⁾sarvabījasya vijñānasya⁽²³⁸⁾ sāmartyāt ⁽²³⁹⁾tadanyasūksmendriyamahābhūtavayatimiśro 'nyas⁽²³⁹⁾ tatsabhāgaḥ śukraśoṇitapiṇḍo jāyate⁽²⁴⁰⁾ sendriyaḥ |⁽²⁴¹⁾

tasyām cāvasthāyām pratiṣṭhitam vijñānam ⁽²⁴²⁾bandhaḥ pratisamdhir⁽²⁴²⁾ ity ucyate | sā cāsau kalalāvasthā |⁽²⁴³⁾

²²⁷ sarvapaścād ghanam MS; [*'vasāne*] Bh-ed. cf: 最後決定各出一滴濃厚精血，二滴和合 YBh-c; mjug kho nar khu ba ska ba 'byung bar 'gyur ro// de'i rjes la gnyi ga las khu ba dang khrag gi thigs pa gnyis gdon mi za bar 'byung bar 'gyur te/ YBh-t.

²²⁸ śoṇitabinduḥ MS; [*śukra*]śoṇitabinduḥ Bh-ed; śukraśoṇitabinduḥ em. cf: ibid.

²²⁹ tiṣṭhataḥ MS; tiṣṭhata Bh-ed, em.

²³⁰ śītī° MS; śīta° Bh-ed. cf.: 凝結 YBh-c; grangs pa'i spris ma YBh-t.

²³¹ 'nam MS; 'nam | Bh-ed, em.

²³² yatrata MS; [*tatra*] Bh-ed; yatra em.

²³³ 'tam | MS; 'tam Bh-ed, em.

²³⁴ āśrayopādātṛ MS; āśrayopādānād Bh-ed. cf.: 執受所依 YBh-c; lus len par byed pa YBh-t.

²³⁵ | MS; || Bh-ed, em.

²³⁶ °ti MS; °ti | Bh, em.

²³⁷ 'ālabanaḥ | antarābhavo nirudhyate MS; 'ālabanato 'ntarābhavo nirudhyate Bh-ed; 'ālabano 'ntarābhavo nirudhyate em. cf: 與顛倒緣中有俱滅 YBh-c; phyin ci log tu dmigs pa bar ma do'i srid pa de 'gag par 'gyur la YBh-t.

²³⁸ sarvabījasya vijñānasya MS; sarvabīja[ka]sya Bh-ed. cf: 一切種子識 YBh-c; rnam par shes pa sa bon thams cad pa de'i YBh-t.

²³⁹ 'miśronyas MS; 'miśro 'nyas Bh-ed, em.

²⁴⁰ °te | MS; °te Bh-ed, em.

²⁴¹ °yaḥ MS; °yaḥ | Bh-ed, em.

²⁴² bandhaḥ | pratisamdhir MS; pratisamdhir Bh-ed; bandhaḥ pratisamdhir em. cf: 結生相續 YBh-c; nying mtshams sbyor ba YBh-t.

²⁴³ °sthā MS; °sthā | Bh-ed, em.

として発動することである。

[Part 3 意地その 2]

3.1 [アーラヤ識がカララに凝集する]

また、激情に溺れている父母の愛欲が甚だしい段階に達したとき、すべての後で、濃稠な精液が放出される。そしてその終わりに、二人には、必ず〔各々〕精と血の滴が現れる。さらにまた、二人のその〔精と血の滴〕がほかならぬ母の子宮において混合し、凝結したものが凝乳状のものにとどまり、一つの塊となった。加熱した牛乳が冷たくなりかけているように。そのところに、すべての種子を有する、異熟に包摂される、抛り所（身体）を執持する主体であるアーラヤ識が凝集する（sammūrchati）。

3.2 [凝集することについての詳説]

3.2.0 [設問]

また、どのように凝集するのか。

3.2.1 [カララの形成過程]

その生成された凝乳状のものである精と血の塊と伴って、それと顛倒した所縁をもっている中有（有情の前世での死の瞬間から次の生存を受けるまでの中間の生存）²⁴が滅する。そして、その〔中有〕の滅と同時に、ほかならぬそのすべての種子を有する識の能力によって、それ（凝乳状のものである精と血の塊）とは別な、微細な根（感覚機能を有するもの）〔を形成するため〕の元素と混合している、それ（凝乳状のものである精と血の塊）と類似した、根を有する別の精と血の塊が生じる。

そして、その段階にとどまっている識は結生と言われる。そして、ほかならぬそれはカララの段階²⁵である。

²⁴ この箇所先んじて、中有の顛倒した見解について説明がある。つまり、中有は、性行為中の父母に対し、片方を自分として誤って捉えており、行為の対象に愛着が生じる。YBh 23, 2-5 参照。

²⁵ 『瑜伽論』では、胎児の形成過程を八つの段階に区分して説明する。カララはその最初の段階である。本論第 3 章注 19 参照。

3.2.2 (MS 7b6m; Bh-ed 24, 10)

tāni ca tasya kalalasyendriyamahābhūtāni kāyendriyeṇaiva sahotpadyante |
indriyādhiṣṭhānamahābhūtāni²⁴⁴ ca tair evendriyamahābhūtaiḥ kāyendriyeṇa ca sahotpadyante²⁴⁵ |
tatas tānīndriyamahābhūtāny²⁴⁶ upādāya cakṣurādīnīndriyāṇi krameṇa niṣpadyante |⁽²⁴⁷⁾ tāni
cendriyādhiṣṭhānamahābhūtāni upādāya krameṇa indriyādhiṣṭhānāny api niṣpadyante |⁽²⁴⁷⁾
indriyāṇām²⁴⁸ tadadhiṣṭhānānām ca prādurbhāvāt kṛtsna āśrayo niṣpanno bhavati pratilabdhaḥ
|²⁴⁹

3.2.3 (MS 8a1m; Bh-ed 24, 14)

tat punaḥ kalalarūpaṃ taiś cittacaitasair²⁵⁰ dharmair anyonyayogakṣematayā²⁵¹ sammūrchitam
ity ucyate | cittavaśena ca tan na pariklidyate |²⁵² tasya cānugrahopaghātāc²⁵³ cittacaittānām²⁵⁴
anugrahopaghātāḥ |²⁵⁵ tasmāt tad anyonyayogakṣemam ity ucyate ||²⁵⁶

²⁴⁴ °indriyādhiṣṭhāna° MS; indriyādhiṣṭhāna° Bh-ed, em. cf.: 根所依處大種 YBh-c; dbang po'i rten gyi 'byung ba chen po rnams YBh-t.

²⁴⁵ sahabhūtāny utpadyante MS; sahotpadyante Bh-ed, em. cf.: 俱生 YBh-c; lhan cig tu 'byung bar 'gyur ro YBh-t.

²⁴⁶ °mahā·tāny MS; °mahākabhūtāny Bh-ed; °mahābhūtāny em. cf.: 大種 YBh-c; 'byung ba chen po de dag YBh-t.

²⁴⁷ tāni cendriyādhiṣṭhānamahābhūtāni upādāya krameṇa indriyādhiṣṭhānāny api niṣpadyante MS; om. Bh-ed; tāni cendriyādhiṣṭhānamahābhūtāni upādāya krameṇa indriyādhiṣṭhānāny api niṣpadyante | em. cf.: 又由此身根俱生根所依處大種力故，諸根依處次第當生 YBh-c; dbang po'i rten gyi 'byung ba chen po de dag kyang rgyur byas nas rim gyis dbang po'i rten rnams kyang 'grub par 'gyur ro YBh-t.

²⁴⁸ indriṇā MS; indriyāṇām Bh-ed, em. cf.: 諸根 YBh-c; dbang po rnams YBh-t.

²⁴⁹ °dhaḥ MS; °dhaḥ | Bh-ed, em.

²⁵⁰ cittacaitasair MS; cittacaitasikair Bh-ed.

²⁵¹ anyonyakṣematayatā MS; anyonya[yoga]kṣematayā Bh; anyonyayogakṣematayā em. cf.: §3.2.3; 安危共同 YBh-c; gcig la gcig grub pa dang bde bas YBh-t.

²⁵² °te MS; °te | Bh-ed, em.

²⁵³ °opaghātāḥ MS; °opaghātāc Bh-ed, em. cf.: 損益故 YBh-c; phan pa dang gnod pa las YBh-t.

²⁵⁴ °caittānām MS; °caitasikānām Bh-ed.

²⁵⁵ °taḥ MS; °taḥ | Bh-ed, em.

²⁵⁶ | MS; || Bh-ed, em.

3.2.2 [カララから諸根を有する身体の形成]

また、そのようなカララの根〔を形成するため〕のそれら諸元素は、ただ身根のみと共に生じる。そして、根の基体（感覚機能を有するものの物質的、すなわち肉体的基体）〔を形成するため〕の諸元素²⁶は、ほかならぬそれら根〔を形成するため〕の諸元素と身根と共に生じる。それから、それら根〔を形成するため〕の諸元素によって、眼などの諸根が順次に完成する。そして、それら根の基体〔を形成するため〕の諸元素によって、諸々の根の基体も順次に完成する。

諸々の根と、それら〔根〕の基体が現れることによって、完全なる拠り所（身体）が完成され、獲得された。

3.2.3 [カララと心・心所の相互共存]

さらにまた、カララの色（精と血の塊）は、それら心・心所の法と相互に共存していることによって、凝集したものと呼ばれる。〔すなわち〕心の力によってその〔カララの色〕は腐敗しない。そして、その〔カララの色〕の受益・被害によって、心・心所の受益・被害がある。したがって、その〔カララの色〕は〔心・心所の法と〕相互に共存していると呼ばれる。

²⁶ ここで、根の形成と、根の基体の形成について述べている。根を形成するための諸元素と、根の基体を形成するための諸元素を異なるものとしているが、その区別を示していない。この箇所について、YBhVy や、『略纂』などではそれぞれ異なる解釈を示している。

YBhVy では、眼・耳・鼻・舌の四つの根を形成する元素と身根を形成する元素との関係について説明するが、根と根の基体の区別については論じていない。

YBhVy (D 92b2-3; P 112b2-4) : *dbang po'i rten gyi 'byung ba chen po rnams zhes bya ba ni dper na mig gi 'bras bu dkar po'i 'byung ba chen po dag lta bu ste/ de bzhin du gzhan dag la yang ci rigs su sbyar ro// lus kyi ni gzhan dag gi rten po'i 'byung ba chen po dag ma gtogs par rten gyi 'byung ba chen po dag gud na med pa kho na yin no//* (【訳】「根の基体〔を形成するため〕の諸元素」とは、例えば、清澄な目〔を形成するため〕の諸元素のように、同様に、ほかのもの（耳・鼻・舌）の場合にも適宜に組み合わせている。身体〔を形成するための諸元素〕は、ほかのもの（眼・耳・鼻・舌）の基体〔を形成するため〕の諸元素を除いて、別に存在するのではない基体〔を形成するため〕の諸元素のみである。）

一方、『略纂』も眼などの四つの根を形成する元素と身根を形成する元素との関係について述べている。その解説において、「諸根大種」と「諸根扶根大種」という表現を用いている。

『略纂』(11c24-12a10) : 「此羯邏藍中有諸根大種等者，初位之時，眼等四根時猶未有，已有造彼能造四大據其處所。（中略）今説：初有諸根大種，并有諸根扶根大種者，即説造身大種及造扶身塵大種為造餘四根大種等，非更別有，相依而有，是造義故。」(【訳】「このカララには根〔を形成するため〕の諸大種（諸元素）がある」云々とは、最初の段階において、眼などの四つの根はその時に未だに存在していないが、それらを構成する能力を有する四大種がすでに存在し、その場所を占めている。（中略）ここで〔次のように〕解説する。初めに根〔を形成するため〕の諸大種があり、そして諸々の根にとって、根を支える大種があるとはすなわち、身〔根〕を構成する大種と、身〔根〕を支える塵（対象）を構成する大種は、ほかの四つの根（眼・耳・鼻・舌）を構成する大種とは等しいものであり、さらに別にあるものではなく、互いに依存して存在する。これは構成することの意味であるから。）

また、『瑜伽論記』では、上記の『略纂』の解説を援用して、さらに次のように述べる。

『瑜伽論記』(T42, 323c14-16) : 「問曰。文説及根所依處大種俱生，所依及處有何異耶。解云。若直言所依，即是造根四大。若言所依處，處即是根所依四塵。」(【訳】問う。〔瑜伽論の〕本文は「根の所依処（基体）〔を形成するため〕の大種と共に生じる」と述べているが、「所依」と「処」には何の違いがあるのか。答える。「所依」と直接述べる場合、それはすなわち根を構成する四大種である。「所依処」と述べる場合、「処」はすなわち根が依存している四つの塵（色、香、味、觸という四つの対象）である。）

つまり、『略纂』と『瑜伽論記』では、「根の基体」を、根を支える感覚対象（「扶根塵」）と理解している。

3.2.4 (MS 8a2m; Bh-ed 24, 18)

yatra ca kalaladeśe tad vijñānaṃ sammūrchitaṃ ⁽²⁵⁷⁾so 'sya⁽²⁵⁷⁾ bhavati |⁽²⁵⁸⁾ tasmin samaye
hṛdayadeśaḥ |⁽²⁵⁹⁾ evaṃ hi tad vijñānaṃ yasmād eva deśac cyavate |⁽²⁶⁰⁾ tasminn eva deśe tat
prathamataḥ sammūrchatī ||⁽²⁶¹⁾

[Part 4, manobhūmidvitīyā 3]

4.1

4.1.1 (MS 16b7m; Bh-ed 57, 8)

tatra cittacaitasikakalāpe⁽²⁶²⁾ cittaṃ copalabhyate |⁽²⁶³⁾ caitasās ca tripañcāśad upalabhyante |⁽²⁶⁴⁾
tadyathā manaskārādayo vitarkavicāraparyavasānā⁽²⁶⁵⁾ yathā nir⁽²⁶⁶⁾diṣṭāḥ ||

4.1.2 (MS 16b7r; Bh-ed 57, 10)

eṣāṃ caitasānāṃ dharmāṇāṃ kati sarvatra citta utpadyante sarvabhūmike sarvadā sarve ca |⁽²⁶⁷⁾
āha |⁽²⁶⁸⁾ pañca manaskārādayaś⁽²⁶⁹⁾ cetanāparyavasānāḥ |⁽²⁷⁰⁾
kati sarvatrotpadyante⁽²⁷¹⁾ sarvabhūmike na ca sarvadā na sarve |⁽²⁷²⁾ pañcaiva chandādayaḥ⁽²⁷³⁾
prajñāparyavasānāḥ |⁽²⁷⁴⁾

²⁵⁷ *sosya* MS; *so 'sya* Bh-ed, em.

²⁵⁸ [°]*ti* | MS; [°]*ti* Bh-ed.

²⁵⁹ [°]*śaḥ* MS; [°]*śaḥ* | Bh-ed, em.

²⁶⁰ [°]*te* | MS; [°]*te* Bh-ed.

²⁶¹ [°]*ti* MS; [°]*ti* | Bh-ed; [°]*ti* || em.

²⁶² [°]*caitasikakalāpe* MS; [°]*caitasakalāpe* Bh-ed. cf.: 於心、心所品中 YBh-c; sems dang sems las byung ba'i tshogs la YBh-t.

²⁶³ [°]*te* | MS; [°]*te* Bh-ed.

²⁶⁴ [°]*nte* MS; [°]*nte* | Bh-ed, em.

²⁶⁵ [°]*vitarkavicāra* ° MS; *vitarkavicāra* ° Bh-ed, em. cf.: 尋伺 YBh-c; rtog pa dang dpyod pa YBh-t.

²⁶⁶ *nir⁽²⁶⁶⁾diṣṭā* || MS; *nir⁽²⁶⁶⁾diṣṭāḥ* | Bh-ed; *nir⁽²⁶⁶⁾diṣṭāḥ* || em. cf.: 如前說 YBh-c; ji skad smos pa YBh-t.

²⁶⁷ *ca* MS; *ca* | Bh-ed, em.

²⁶⁸ *aha* MS; *āha* | Bh-ed, em. cf.: 答 YBh-c; smras pa YBh-t.

²⁶⁹ *manaskārādyāś* MS; *manaskārādyāś* Bh-ed; *manaskārādayaś* em. cf.: 作意等 YBh-c; yid la byed pa la sogs pa nas YBh-t.

²⁷⁰ *cetanā(pa)ryavasānānāḥ* MS; *cetanāparyavasānāḥ* | Bh-ed, em. cf.: 思為後邊 YBh-c; sems pa la thug pa yan chad YBh-t.

²⁷¹ [°]*te* | MS; [°]*te* Bh-ed, em.

²⁷² [°]*rve* MS; [°]*rve* | Bh-ed, em.

²⁷³ *chandādayaḥ* | MS; *śraddhādayaḥ* Bh-ed; *chandādayaḥ* em. cf.: 欲等 YBh-c; 'dun pa nas YBh-t.

²⁷⁴ *prajñāparyavasā⁽²⁷⁴⁾na>ḥ* || MS; *prajñāvasānāḥ* | Bh-ed; *prajñāparyavasānāḥ* | em. cf.: 慧為後邊 YBh-c; shes rab la thug pa yan chad do YBh-t.

3.2.4 [識が凝集する位置]

また、カララの中のある場所にその識が凝集するならば、その場所はその〔識〕が保有するものとなる。その時に、〔その場所は〕心臓という場所〔である〕。なぜなら、このように、その識が最初に凝集するほかならぬその場所、〔死に際して〕その場所から〔その識〕が離れるのであるから。

[Part 4 意地その 3]

4.1 [心と心所法]

4.1.1 [心所法の総説]

また、心と心所の束 (*kalāpa*) の中に、心が認識される。また、五十三²⁷の心所が認識される。すなわち、〔随行するものの場合に〕述べられた通りの、作意を始めとし、尋 (思考) と伺 (考察) を終わりとするものである。

4.1.2 [心所法の区分]

これら心所法の中で、すべての状態 (善、染汚など) の心において生じ、すべての地にいるものにおいて [生じ]、すべての時に [生じ]、すべてが [生じる] ものとはどれか²⁸。答える。五つ、すなわち作意を始めとして、思を終わりとするものである。

すべての状態 [の心] において生じ、すべての地にいるものにおいて [生じるが]、しかし、すべての時に [生じる] ではなく、すべてが [生じる] で [も] ないものとはどれか。同じく五つ、すなわち、欲を始めとして、慧を終わりとするものである。

²⁷ 五十三の心所に関して、「意地」のほかの箇所 (YBh 68, 13) では、*manaskārādayo vitarkavicāraparyavasānās caitasās tripañcāsat* (作意を始めとして、尋・伺を終わりとする五十三の心所がある) と説明しており、心所を作意から尋・伺までとしている。これは、§2.4 に挙げている意地の随行するものの説明と一致している。したがって、五十三という心所の総数は、§2.4 に挙げている意地の随行するものの合計であることが分かる。

しかしながら、§2.4 では五十一の心所を挙げており、「五十三」とは一致しない。チベット訳では、「五十三」に該当する箇所 (D 28b6; P 32a3) は五十一、§2.4 に対応する箇所も計五十一の心所となっている。それに対して、漢訳ではサンスクリットテキストと同様に「五十三」となっており、§2.4 に対応する箇所も計五十三の心所となっている (五十一に邪欲・邪勝解が加えられている、注 19 参照)。水野 [1964 : 319–322] は、「本地分」では最初は五十三の心所としていたが、「撰決撰分」では邪欲・邪勝解の二つを除く五十一となり、後世の瑜伽行派はその五十一という数を採用した、と推測している。§2.4 のサンスクリットテキストに邪欲・邪勝解の二つがないのはその結果であると考えられる。

ここでは、サンスクリットテキストに従って訳す。

²⁸ *sarvatra citta, sarvabhūmika, sarvadā, sarve* については本論第 2 章第 2.1.2.1 節参照。

この一文は、漢訳では「如是諸心所，幾依一切處心生，一切地，一切時，一切耶」（これら諸心所の中で、すべての状態の心に依って生じ、すべての地において [生じ]、すべての時に [生じ]、すべてが [生じる] ものは幾つなのか）となっており、サンスクリット原文と一致している (Text A-chi 4.1.2 参照)。

一方、チベット語では、*sems las byung ba'i chos de dag las/ du zhig sa (sa DC; pa PNG) thams cad pa/ sems can thams (thams DCPG; ill. N) cad du/ dus thams cad du/ thams cad 'byung zhe na/* (これら心所法の中で、すべての地に属するものであり、すべての有情に [生じ]、すべての時に [生じ]、すべてが生じるものは幾つなのかというならば) と訳されている (Text A-tib 4.1.2 参照)。ここには二つの相違が見られる。まず、*sa thams cad pa* (すべての地に属するもの、**sarvabhūmike*) が先に述べられている。また、*sarvatra citta* の該当箇所は *sems can thams cad du* (すべての有情に) となっている。YBhVy の解説では *sems thams cad du* (すべての心に) と引用していることから、チベット語訳『瑜伽論』のこの箇所は誤植である可能性が高い。

kati kuśala eva na sarvatra |²⁷⁵ api tu sarvabhūmike na sarvadā na sarve |²⁷⁶
śraddhādayo 'hiṃsāparyavasānāḥ²⁷⁷ |

kati kliṣṭa eva na sarvatra na sarvabhūmike na sarvadā na sarve |²⁷⁸
(²⁷⁹rāgādayo 'samprajanyaparyavasānāḥ |²⁷⁹)

kati sarvatra no tu sarvabhūmike²⁸⁰ na sarvadā na sarve |²⁸¹ kauṣṭhyādayo vicāraparyavasānāḥ
||²⁸²

4.2

4.2.0 (MS 17a1r; Bh-ed 57, 18)

tatrendriyam aparibhinnaṃ bhavati | viśaya ābhāsagato bhavati | tatas tajje²⁸³ manaskāre
pratyupasthite²⁸⁴ vijñānasyotpādo bhavati ||²⁸⁵

4.2.1 (MS 17a2l; Bh-ed 57, 19)

katham indriyam aparibhinnaṃ bhavati | dvābhyāṃ kāraṇābhyāṃ |²⁸⁶
(²⁸⁷avināśato 'mandībhāvataś²⁸⁷) ca ||²⁸⁸

²⁷⁵ °tra MS; °tra | Bh-ed, em.

²⁷⁶ °rve MS; °rve || Bh-ed; °rve | em.

²⁷⁷ °paryavasānā MS; °paryavasānāḥ Bh-ed, em.

²⁷⁸ °rve MS; °rve | Bh-ed, em.

²⁷⁹ rāgādayo 'samprajanyaparyavasānāḥ | MS; rāgādayaḥ samprajanyaparyavasānāḥ || Bh-ed. cf.: 貪等, 不正
知為後邊 YBh-c; 'dod chags la sogs pa nas/ shes bzhin ma yin pa la thug pa yan chad do YBh-t.

²⁸⁰ sarvabhūmike MS; sarvebhūmike Bh-ed.

²⁸¹ °rve MS; °rve | Bh-ed, em.

²⁸² | MS; || Bh-ed, em.

²⁸³ teje MS; tajje Bh-ed, em.

²⁸⁴ pratyupasthite | MS; pratyupasthite Bh-ed, em. cf.: 正起, 爾時 YBh-c; nye bar gnas par gyur na YBh-t.

²⁸⁵ | MS; || Bh-ed, em.

²⁸⁶ °bhyāṃ MS; °bhyāṃ | Bh-ed, em.

²⁸⁷ avināśataḥ | 'mandībhāgataś MS; avināśato 'mandībhāvataś Bh-ed, em. cf.: 一不滅壞故, 二不羸劣故
YBh-c; ma rung bar ma gyur pa dang/ rtul ba'i rang bzhin ma yin pas so YBh-t.

²⁸⁸ | MS; || Bh-ed, em.

すべての状態〔の心において生じる〕ではなく、善〔心〕のみに〔生じる〕、しかし、すべての地にいるものにおいて〔生じるが〕、すべての時に〔生じる〕ではなく、すべてが〔生じる〕で〔も〕ないものとはどれか。信を始めとして、不害を終わりとするものである。

すべての状態〔の心において生じる〕ではなく、染汚〔心〕のみに〔生じる〕、すべての地にいるものにおいて〔生じる〕で〔も〕なく、すべての時に〔生じる〕で〔も〕なく、すべてが〔生じる〕で〔も〕ないものとはどれか。貪を始めとして、不正知を終わりとするものである。

すべての状態〔の心において生じる〕が、しかし、すべての地にいるものにおいて〔生じる〕ではなく、すべての時に〔生じる〕で〔も〕なく、すべてが〔生じる〕で〔も〕ないものとはどれか。悪作（後悔）^{おき}を始めとして、伺（考察）を終わりとするものである。

4.2 〔意識の生起の三要因〕

4.2.0 〔総説〕

さて、感官が壊れておらず、対象が顕現している。そして、それ（識の生起）に相応する作意が起ころうとしている場合、識の生起はある²⁹。

4.2.1 〔感官の不壊について〕

如何にして感官が壊れていないのか。二つの原因によってである。すなわち、消滅していないから、また、鈍い状態になっていないから〔、感官が壊れていない〕。

²⁹ この一文の解釈については第4章参照。

4.2.2 (MS 17a2m; Bh-ed 57, 21)

kathaṃ viṣaya ābhāsagato bhavati | tadyathā²⁸⁹ adhiṣṭhānato vā svabhāvato vā deśato vā kālato vā vyaktāvyaktato vā sakalavastvekadeśato vā²⁹⁰ sa cec caturbhir āvaraṇair anāvṛto bhavati | na ca viprakṣṭaḥ²⁹¹ avacchādanīyenāvaraṇenāntardhāpanīyenābhībhavanīyena²⁹² sammohanīyena ca dvābhyāṃ viprakarṣābhyāṃ²⁹³ deśaviprakarṣato 'pacayaviprakarṣataś²⁹³ ca ||²⁹⁴

²⁸⁹ °thā MS; °thā | Bh-ed.

²⁹⁰ °vā MS; °vā | Bh-ed, em.

²⁹¹ °ṣṭaḥ MS; °ṣṭaḥ | Bh-ed, em.

²⁹² avacchādanīyenāvaraṇena antardhāpanīyena <(a)bh(i)bhavanīyena> MS; avacchādanīyenāvaraṇena antardhāpanīyena abhībhavanīyena Bh-ed; avacchādanīyenāvaraṇenāntardhāpanīyenābhībhavanīyena em. cf.: 覆蔽障、隱沒障、映奪障 YBh-c; sgrib g.yog gi sgrib pa dang/ mi snang bar byed pa dang/ zil gyis non pa dang YBh-t.

²⁹³ °viprakarṣataḥ | apacaya° MS; °viprakarṣato 'pacaya° Bh-ed, em.

²⁹⁴ ca MS; ca || Bh-ed, em.

4.2.2 [対象の顕現について]

如何にして対象が顕現しているのか。すなわち、拠り所 (adhiṣṭhāna) という点で、本質という点で、方向という点で、時間という点で、明瞭や不明瞭という点で、全体的なものや一部 [のもの] という点で [対象が顕現している]³⁰。もしその [対象] が四つの障礙によって遮られておらず、かつ遠く離れていないならば、[顕現] する。[すなわち、] 朦朧とさせることにかかわる (avacchādanīya) 障礙によって、隠して見えなくする (知覚されないようにする) ことにかかわる (antardhāpanīya) [障礙] によって、圧倒することにかかわる (abhibhavanīya) [障礙] によって、幻惑させることにかかわる (sammohanīya) [障礙] によって [遮られておらず]³¹、かつ二つの遠離から、[すなわち] 空間的な遠離と、微細化 (apacaya)

³⁰ この六つの点に関して、「撰決択分」では、「六つの活動領域」として詳しく解説している。Text B, Text C 3.2.2 参照。

³¹ 『瑜伽論』「本地分中間所成地」では、直接知覚に関する説明の中で、四つの障礙について以下のように解説している。

ŚrutamayīBh 6, 20-7, 17: anāvāraṇaṃ katamat. tad api caturbhir ākārair veditavyam. avacchādanīyenāvāraṇenāntardhāpanīyenābhibhavanīyena sammohanīyenāvāraṇena yad anāvṛtaṃ tad anāvṛtam ity ucyate.

avacchādanīyam āvaraṇaṃ katamat. tad yathā tamo'ndhakāraṃ avidyāndhakāraṃ rūpāntaraṃ cānaccham.

antardhāpanīyam āvaraṇaṃ katamat. tad yathā, auśadhibalaṃ vā mantrabalaṃ varddhyanubhāvabalaṃ vā.

abhibhavanīyam āvaraṇaṃ katamat. tad yathā parītaṃ prabhūtenābhibhūtaṃ nopalabhyate, bhōjane pāne vā viṣaṃ keśāgraṃ vā. yad vā punar anyad evambhāgīyam, tad yathā parītatejā ugratejasābhibhūto nopalabhyate, ādītyena vā candramasā vā tārakarūpāni, tad yathā vipakṣeṇa pratipakṣo 'bhibhūto nopalabhyate, aśubhāmanaskāreṇa vā śubhatā, anityaduḥkhānātmamanaskāreṇa vā sukhatā, animittamanaskāreṇa vā sarvanimittāni.

sammohāvaraṇaṃ katamat. tad yathā māyākarma rūpanimittaviśeṣo vānusādṛśyaṃ vādhyātmaṃ vā pratyātmaṃ taimirikaṃ ca svapno mūrchā madaḥ pramāda unmādaś ceti. yad vā punar anyad apy evambhāgīyam āvaraṇam. idam ucyate sammohāvaraṇam.

〔訳〕 障礙がないものとは何か。それもまた四つの様相によって知られるべきである。[すなわち] 朦朧とさせることにかかわる障礙によって、隠して見えなくする (知覚されないようにする) ことにかかわる [障礙] によって、圧倒することにかかわる [障礙] によって、幻惑させることにかかわる障礙によって遮られていないもの、それは遮られていないものと言われる。

朦朧とさせることにかかわる障礙とは何か。それはすなわち、暗黒という闇と、無明という闇と、そのほかの不明瞭なものとのである。

隠して見えなくする (知覚されないようにする) ことにかかわる障礙とは何か。それはすなわち、葉草の力、あるいは呪術の力、あるいは神通の威力である。

圧倒することにかかわる障礙とは何か。それはすなわち、微小なものは多数の [ほかの] ものに制圧されて、知覚されない。[例えば] 食物や飲物の中に、毒や毛先がある。あるいはまた、ほかのものはこのような類に属するものであり、それはすなわち、微小な光は強い光によって制圧されて、知覚されない。[例えば] 日や月によって、諸々の星のかたちは [知覚されない]。[あるいは] それはすなわち、対治されるものによって、対治するものは制圧されて、知覚されない。[例えば] 不浄に対して [正しく] 作意しないことによって、清浄であることは [制圧されて、知覚されない]。あるいは、無常・苦・無我に対して [正しく] 作意することによって、楽であることは [制圧されて、知覚されない]。あるいは、無相に対して [正しく] 作意することによって、すべての相は [制圧されて、知覚されない]。

幻惑させること [にかかわる] 障礙とは何か。それはすなわち、幻術のはたらきである特殊な色かたちの相、あるいは、類似したもの、あるいは、内的なもの、[すなわち] 各自のものである翳病・夢・幻覚・興奮・酔狂・狂気という。あるいはまた、ほかのものもこのような類に属する障礙である。以上のものは幻惑させること [にかかわる] 障礙と言われる。

4.2.3 (MS 17a3l; Bh-ed 58, 5)

kathaṃ tajjasya manaskārasya prādurbhāvo²⁹⁵ bhavati | caturbhiḥ²⁹⁶ kāraṇaiḥ²⁹⁷ chandabalena smṛtibalena viṣayabalenābhyāsabalena ca ||²⁹⁸

4.2.3.1 (MS 17a3m; Bh-ed 58, 6)

kathaṃ chandabalena |²⁹⁹ yatrānunayo bhavati |³⁰⁰ cetasaṣ tatrābhogo bahutaram utpadyate |

4.2.3.2 (MS 17a3m; Bh-ed 58, 7)

kathaṃ smṛtibalena |³⁰¹ yatra sūdgrhītaram³⁰² nimittam bhavati | suṣṭhutam ca citrīkṛtam bhavati |³⁰³ tatrābhogo bahutaram³⁰⁴ utpadyate |³⁰⁵

4.2.3.3 (MS 17a4l; Bh-ed 58, 9)

kathaṃ viṣayabalena |³⁰⁶ yatra viṣaya audārikataro vā manāpataro vā pratyupasthito bhavati |³⁰⁷ tatrābhogo bahutaram³⁰⁸ utpadyate |³⁰⁹

4.2.3.4 (MS 17a4m; Bh-ed 58, 10)

kathaṃ abhyāsabalena |³¹⁰ yat samstutataram bhavati³¹¹ paricitataram tatrābhogo bahutaram³¹² utpadyate |³¹³

²⁹⁵ *prādur*° MS; *prārdu*° Bh-ed.

²⁹⁶ *caturbhi* MS; *caturbhiḥ* Bh-ed, em. cf.: 由四 YBh-c; bzhis YBh-t.

²⁹⁷ *ṅaiḥ* MS; *ṅaiḥ* | Bh-ed, em.

²⁹⁸ *ca* MS; *ca* || Bh-ed, em.

²⁹⁹ *ṅna* MS; *ṅna* | Bh-ed, em.

³⁰⁰ *ṅti* | MS; *ṅti* Bh-ed.

³⁰¹ *ṅna* MS; *ṅna* | Bh-ed, em.

³⁰² *sūdgrhītataram* MS; *...taram* Bh-ed. cf.: 已善取其相 YBh-c; shin tu mtshan ma bzung ba YBh-t.

³⁰³ *ṅti* MS; *ṅti* | Bh-ed, em.

³⁰⁴ *bahutara* MS; *bahutara* Bh-ed; *bahutaram* em. cf.: §4.2.3.1.

³⁰⁵ | MS; || Bh-ed.

³⁰⁶ *ṅna* MS; *ṅna* | Bh-ed, em.

³⁰⁷ *ṅti* MS; *ṅti* Bh-ed; *ṅti* | em. cf.: §4.2.3.1.

³⁰⁸ *bahutara* MS; *bahutara* Bh-ed; *bahutaram* em. cf.: §4.2.3.1.

³⁰⁹ | MS; || Bh-ed.

³¹⁰ *ṅna* MS; *ṅna* | Bh-ed, em.

³¹¹ *ṅti* | MS; *ṅti* Bh-ed, em.

³¹² *bahutara* MS; *bahutara* Bh-ed; *bahutaram* em. cf.: §4.2.3.1.

³¹³ *ṅte* MS; *ṅte* | Bh-ed, em.

による遠離という点で〔遠く離れていないものであるならば、顕現する〕³²。

4.2.3 [それ（識の生起）に相応する作意が現れることについて]

如何にしてそれ（識の生起）に相応する作意が現れるのか、四つの原因（*kāraṇa*）によって、〔すなわち〕意欲の力と、憶念の力と、対象の力と、習熟の力によって〔現れる〕。

4.2.3.1

如何にして意欲の力によって〔現れる〕のか、あるものに対して愛着があるとき、それに対して心に向かわせることがより多く生じる。

4.2.3.2

如何にして憶念の力によって〔現れる〕のか、あるものにおいて、〔その〕特徴（*nimitta*）がよりよく捉えられており、そしてより適正に具象化されているとき、それに対して〔心を〕向かわせることがより多く生じる。

4.2.3.3

如何にして対象の力によって〔現れる〕のか、ある対象に対して、より粗大な〔それ（識の生起）に相応する作意〕、あるいは、より好ましい〔それ（識の生起）に相応する作意〕が起ころうとしているとき、その〔対象〕に対して〔心を〕向かわせることがより多く生じる。

4.2.3.4

如何にして習熟の力によって〔現れる〕のか、あるものがより慣れ親しんだもの、〔すなわち〕より馴染んだものであるとき、それに対して〔心を〕向かわせることがより多く生じる。

³² *apacayaviprakarṣa* について、YBhVy と『略纂』ではそれぞれ、次のように解説している。

YBhVy (D 106a7; P 130a2): *chung ngus bskal pa zhes bya ba ni ma bsgribs kyang skye ba po phra mo la sog pa dag lta bu'o//* (【訳】「微細による極めて離れていること」とは、遮られていないけれども、微細な生物など〔は目に見えない〕ように。)

『略纂』(21a11-12): 「損減極遠者、謂先成麤色、雖近現前、損減至細、名損減遠。即磨麥成麪等。」 (【訳】「損減という極めて遠いであること」とは、〔あるものは〕以前は粗大なものとなっていた。〔現在、〕近くに顕現しているけれども、損減して微細なものになり〔、認識対象にならない〕。〔これを〕損減という極めて遠いであることと名付ける。すなわち、小麦を麦粉に磨るなど〔のよう〕に。)

つまり、YBhVy では、*apacayaviprakarṣa* とは、微生物など、元々微細で見えないものであると理解している。一方、『略纂』では、本来粗大で見えるものが何らかの原因によって、微細なものとなって見えなくなるものと理解している。

「摂決択分」では、三つの微細性に関する説明の中で、次のように述べている。

漢訳 (597c8-9): 「損減微細性者、謂分析諸色至最細位、名曰極微。」 (【訳】損減微細性とは、諸々のものを最も微細な状態に細かく分けることであり、すなわち極微と呼ばれる。)

チベット語訳 (D 49b3; P 52a6): *de la 'bri ba cha phra ba nyid kyis ni rdul phra rab cha phra ba bstan to//* (【訳】それら〔三つの微細性〕の中で、損減微細性によってとは、微細な極微を述べている。)

「摂決択分」のこの記述から、*apacayaviprakarṣa* については『略纂』の理解が妥当であると考えられる。したがって、「微細化による遠離」と解釈した。

ちなみに、『瑜伽論』「本地分中間所成地」では、空間的な遠離と減縮の遠離に時間的な遠離を加えて、三種の遠離を述べている (*ŚrutamayīBh* 7, 18-20 参照)。

4.2.3.5 (MS 17a4m; Bh-ed 58, 12)

anyathā tv ekasminn ālambana ekaparakāryaiva manaskārya nityakālam utpattiḥ syāt ||³¹⁴

4.3

4.3.1 (MS 17a4r; Bh-ed 58, 13)

na cāsti pañcānām⁽³¹⁵⁾ vijñānakāyānām anusahitaṃ dvayoḥ⁽³¹⁵⁾ kṣaṇayor utpattiḥ |⁽³¹⁶⁾ nāpy anyonyasamanantaram anyonyotpattiḥ | ekakṣaṇotpannānām⁽³¹⁷⁾ pañcānām vijñānakāyānām⁽³¹⁷⁾ anantaram manovijñānam avaśyam utpadyate | tad anantaram kadācid vikṣipyate | tataḥ śrotravijñānam vānyatamānyatamad vā pañcānām vijñānakāyānām |⁽³¹⁸⁾ sacen na vikṣipyate | tato manovijñānam eva dviṭīyaṃ⁽³¹⁹⁾ niścitaṃ nāma | tābhyāṃ ca niścitaparyeṣakābhyāṃ⁽³²⁰⁾ manovijñānābhyāṃ sa viśayo vikalpyate ||⁽³²¹⁾

4.3.2 (MS 17a6l; Bh-ed 59, 1)

tatra dvābhyāṃ kāraṇābhyāṃ kliṣṭasya vā kuśalasya vā dharmasyotpattir bhavati | vikalpataḥ pūrvāvedhataḥ ca | tatra manovijñāne dvābhyāṃ kāraṇābhyāṃ |⁽³²²⁾ pañcasu punar vijñānakāyeṣu pūrvāvedhata eva |⁽³²³⁾ kliṣṭakuśalamanovijñānāvedhāt samanantare cakṣurādivijñāne kliṣṭakuśaladharmotpattir⁽³²⁴⁾ na tu vikalpāt | teṣāṃ avikalpatvāt⁽³²⁵⁾ | ata eva cakṣurādīni vijñānāni manovijñānasyānuvartakānīty ucyate ||⁽³²⁶⁾

³¹⁴ *syāt* MS; *syāt* | Bh-ed; *syāt* || em.

³¹⁵ *°kāyānām anusahitadvayoḥ* MS; *°kāyānām saha dvayoḥ* Bh-ed; *°kāyānām anusahitaṃ dvayoḥ* em. cf.: 五識身有二刹那相隨俱生 YBh-c; rnam par shes pa'i tshogs lnga'i skad cig gnyis lhan cig tu 'byung ba YBh-t; Takatsukasa [2014] .

³¹⁶ *°tīḥ* | MS; *°tīḥ* Bh-ed.

³¹⁷ *pañcānāvijñānakāyānām* MS; *pañcānām kāyavijñānānām* Bh-ed; *pañcānām vijñānakāyānām* em. cf.: 五識身 YBh-c; rnam par shes pa'i tshogs lnga po YBh-t.

³¹⁸ *°nām* MS; *°nām* | Bh-ed, em.

³¹⁹ *dviṭīyaṃ* MS; om. Bh-ed. cf.: 第二 YBh-c; gnyis pa YBh-t.

³²⁰ *°parye<ṣa>kābhyāṃ* MS; *°paryeṣakābhyāṃ* Bh-ed, em. cf.: 尋求、決定 YBh-c; tshol ba dang/ nges pa YBh-t.

³²¹ | MS; || Bh-ed, em.

³²² *°bhyāṃ* MS; *°bhyāṃ* | Bh-ed, em.

³²³ *eva* MS; *eva* | Bh-ed, em.

³²⁴ *°(dha)rmotpattir* MS; *°dharmotpattir* Bh-ed, em. cf.: 染汚及善法生 YBh-c; nyon mongs pa can dang/ dge ba'i chos 'byung bar 'gyur YBh-t.

³²⁵ *avikalpatvāt* MS; *avikalpāt* Bh-ed. cf.: 無分別故 YBh-c; rnam par mi rtog pa'i phyir ro YBh-t.

³²⁶ | MS; || Bh-ed, em.

4.2.3.5

一方、そうでなければ、一つの所縁に対して、ただ一種だけの作意が常に生じることになってしまうであろう³³。

4.3 [意識と五識の相互作用]

4.3.1 [生起の刹那]

また、五識身は、二つの刹那において隣接して生起することがない。互いの直後に互いを生起することもない³⁴。[すなわち、]一刹那に生じた五識身の直後に、意識は必ず生じる。それ（意識）は直後に散乱する場合がある。そうすると、耳識、あるいは五識身のどれか一つ [が生じる]。もし [意識] が散乱しないならば、そうすると、ほかならぬ意識は二番目の確定されたものと名付ける。そして、それら二つ、[すなわち] 確定された [意識] と探求する意識によって、その対象が分別される (vikalpyate)。

4.3.2 [識における染汚法と善法の生起]

また、二つの原因によって、染汚なる (kliṣṭa) [法]、あるいは善なる (kuśala) 法が生起する。[すなわち] 分別によってと、先行するものの慣性 (pūrvāvedha) によってである。そのうち、意識の場合、[この] 二つの原因によって [染汚なる法、あるいは善なる法が生起する]。次に、五識身の場合、ただ先行するものの慣性のみによって [染汚なる法、あるいは善なる法が生起する]。[すなわち] 染汚・善なる意識の慣性によって、直後の眼などの識において染汚・善なる法が生起するが、[それら自体の] 分別によってではない。それら (五識身) が分別を有しないものであるから。まさにそれ故に、眼などの [五] 識は意識に随って活動するもの (anuvartaka) と言われる。

³³ この一文について、YBhVy と『略纂』ではそれぞれ次のように解説している。

YBhVy (D 106b2-3; P 130a6-7) : *dmigs pa gcig la (la P; la/ D) rtag tu yid la byed pa rnam pa gcig pu 'byung bar 'gyur ro zhes bya ba ni gzhan la 'byung ba'i rgyu med pa'i phyir dmigs pa dang po kho na rgyu nye bar gyur pa'i phyir ro//* (【訳】「一つの所縁に対して、常に一種の作意が生じることになってしまうであろう」というのは、[この四つ] 以外に、[作意が] 生じる原因がないから、最初の所縁だけが近接している原因であるから。)

『略纂』(21a16-18) : 「若異此者、應於一所縁境唯一作意一切時生者、若異前説四力生作意者、應於一境一作意恒生。由此故知必由四力。」(【訳】「それと異なる場合、一つの所縁としての対象に対して、ただ一つの作意が常時に生じることになってしまう」とは、直前に述べた、四つの力によって作意を生じさせると異なる場合、一つの対象に対して、一つの作意が常に生じることになってしまう。それ故に、必ず四つの力によって [作意が生じる] と知る。)

³⁴ Takatsukasa [2014 : 184] によると、過去の一部の研究は、Bh-ed の読み方 (【筆者注】 *na cāsti pañcānām vijñānakāyānām saha dvayoḥ kṣaṇayor utpattiḥ* 【筆者訳】「また、五識身は、二つの刹那において共に生起することがない」) に依拠しつつ、この箇所について、六識の同時生起という問題を論じた。しかし、Bh-ed で *saha dvayoḥ kṣaṇayor* となっている箇所は、写本では *anusahitaṃ dvayoḥ kṣaṇayor* となっている。この一文の意味は、“A pentad of sensory cognitions cannot arise continuously (*anusahitaṃ*) in two moments.” (Takatsukasa [2014 : 185]) (【筆者訳】「また、五識身は、二つの刹那において継続的に生起することがない。’)となる。Takatsukasa [2014] は、写本の読み方に基づいて、この一文は識の同時生起を説明しているのではなく、識の継起を扱っている、と主張している。

写本の読みは *anusahitadvayoḥ kṣaṇayor* となっているが、Takatsukasa [2014 : 188(n. 7)] は、それを *anusahitaṃ dvayoḥ kṣaṇayor* に修正して読んでいる。筆者はこの訂正に同意する。漢訳 (「二刹那相隨俱生」) とチベット語訳 (*skad cig gnyis lhan cig tu 'byung ba*) を参照すると、該当箇所はともに副詞となっているため、*anusahita* を *anusahitaṃ* に修正して読むのが妥当であると考えられる。

また、§4.3 全体の内容は難解であるが、紙幅の都合上、本研究では扱わない。

4.3.3 (MS 17a7m; Bh-ed 59, 7)

yad ucyate |³²⁷ ekacittaṃ |³²⁸ taduttarāṇi veti³²⁸ | katham ekasya cittasya vyavasthānaṃ bhavati |
vyāvahārikena cittakṣaṇena |³²⁹ no tu pravṛttikṣaṇena |³²⁹

³²⁷ °te | MS; °te Bh-ed.

³²⁸ ekacittaṃ taduttarāṇi ceti MS; ekacittaṃ taduttarāṇi [vijñānāni] ceti Bh-ed; ekacittaṃ taduttarāṇi veti em.
cf.: 如經言：起一心，若衆多心 YBh-c; gang sems gcig gam/ de'i phyi ma nam shes bya ba YBh-t.

³²⁹ no tu pravṛtti | lakṣaṇena MS; no tu pravṛttikṣaṇena | Bh-ed, em. cf.: 非生起刹那 YBh-c; 'jug pa'i skad cig
ni ma yin YBh-t.

4.3.3 [一つの心の設定]

次のものが言われる。「一つの心、もしくは、それに続く諸々の〔心〕」と³⁵。如何にして一つの心を設定することがあるのか。言語習慣に従うもの (vyāvahārika) としての心の刹那

³⁵ Bh-ed では、チベット語訳 (ナルタン版) の中の rnam pa という表現に依拠して、taduttarāṇi の後に vijñānāni を加え、ekacittam taduttarāṇi [vijñānāni] ceti (一心と、その次の諸識 [がある]) と修正している。しかし、筆者が確認した限り、ナルタン版を含むチベット語訳の諸版本の読みは全て、gang sems gcig gam/ de'i phyi ma rnam shes bya ba となっている。つまり、rnam pa (識) とはなっていない。この一節に該当する部分は漢訳は「起一心、若衆多心」となっており、「識」に該当する表現も見られない (Text A-chi, Text A-tib 4.3.3 参照)。これに対して、YBhVy (D 107a2; P 131a1) の場合、この一節を引用している箇所は、北京版では de'i phyi ma rnam zhes bya ba、デルゲ版では de'i phyi ma rnam par zhes bya ba となっている。要するに、『瑜伽論』の漢訳、チベット語訳、YBhVy の北京版はいずれも、vijñānāni を加える訂正を支持するものではない。ここでは、写本の読みに従う。

また、写本と Bh-ed の ca は、漢訳では「若」(また、もしくは)、チベット語では gam (また) となっており、サンスクリット原語は vā であることを示している。したがって、ここでは、ca を vā に訂正した。

「一つの心」について、「撰決択分」では次のように解釈している。

漢訳 (601b8-15) : 「如本地分立一心相, 今先顯示. 如世尊言. 若有衆生於如來所, 但發一心及一言說, 善逝大師! 善逝大師! 如是發心, 我尚說彼於諸善法多有所作, 何況身・語如其心量隨順奉行. 又如是言. 由一淨心, 當往善趣. 如是等類, 當知此中, 依轉所攝相續一心, 由世俗道, 名發一心. 又依世俗相續道理, 名發一語及發身業。」【訳】例えば、「本地分」では「一つの心」の特徴を立てている。ここでは、まず〔その出典〕を示す。例えば、世尊が次のように語る。「ある衆生は如来に対して、『善逝大師よ。善逝大師よ。』と、ただ一つの心と一つの言葉だけを発した。このように心を発した者であれば、その者は諸々の善法を多く作したと私は言う。ましてや身・語においてその心の考えに随って修行する者。」また次のように語る。「清浄なる一つの心によって、まさに善趣に行くべし。」このような類の〔仏説〕などがある。その中で、活動によって包摂されている、相続している一つの心は、世俗の道理によって「一つの心」と呼ばれる。そして、世俗中の相続の道理によって、一つの語〔業〕を発したと、一つの身〔業〕を発したと呼ばれる。」

チベット語訳 (D 57b6-58a3; P 60b8-61a3) : sa'i dngos gzhir sems gcig rnam par gzhas pa bshad pa gang yin pa de las brtsams nas de la dpe ni 'di yin te/ bcom ldan 'das kyis bde bar gshegs pa ni ston pa'o// bde bar gshegs pa ni ston pa'o zhes sems bskyed cing tshig tu yang smra na/ de ltar sems skyed par byed pa yang dge ba'i chos mams la gces spras byed pa yin par nga smra na/ lus dang ngag gis rjes su sgrub pa lta smos kyang ci dgos/ de bzhin du sems 'di snyed kyis (kyis D; kyi P) mngon par rtogs par byed pa dang/ de bzhin du sems dang ba gcig gis ni bde 'gror 'gro bar 'gyur ro (ro D; ro// P) zhes bya ba la sogs pa ji skad gsungs pa ste/ de la 'jug par gtogs pa'i sems kyi rgyun gcig gis ni tha snyad dang ldan pa'i sems gcig kun nas slong bar byed la/ tha snyad dang ldan pa'i rgyun gcig gis ni tshig gcig rjod (gcig rjod D; brjod P) par byed cing lus kyi las kyang kun nas slong bar byed do// 【訳】「本地分」において、「一つの心」を設定することを説明しているもの、それから始まっている。それに対して、例は次のようである。すなわち、世尊は、『善逝は〔天人〕師である、善逝は〔天人〕師である』と心を起こし、言葉にも出して言うとき、このように心を起こすこともまた、諸々の善法を多く作すことである、と私は言う場合、ましてや身・語によって従って修行すること。このように、それだけの心によってよく理解させ、このように、清浄なる一つの心によって、善趣に行くことになる」というなどのお説きになった。その中で、活動に属する一つの心の相続によって、言語習慣に相応する「一つの心」を發動し、言語習慣に相応する一つの相続によって、一つの言葉を言い、また〔一つの〕身業を發動する。」

YBhVy では次のように解説している。YBhVy (D 107a2; P 130b8-131a1): gang sems gcig gam zhes bya ba ni mdo sde dag la (la P; las D) sems gcig skyed (skyed P; bskyed D) pas bde 'gror 'gro'o zhes bya ba la sogs pa (pa P; pa gang D) gsungs pa la bya'o// 【訳】「あるものは、あるいは一つの心」とは、諸々の經典において、「一つの心を發動することによって、善趣に行く」などとお説きになったものに対して述べたのである。これは、「撰決択分」に挙げられている二番目の經典と一致している。

漢訳では yad ucyaṭe を「如経言」と訳している。つまり「一つの心、もしくは、それに続く諸々の〔心〕」という一文は經典由来であることを示唆している。「撰決択分」の解説では、「一つの心」については經典を挙げているが、後半の文の出典に関しては言及がない。この一文全体が經典の引用かどうか不明かではない。

vyāvahārikenaikacittam³³⁰ katamat | ekena padasaṃnīrayeṇaikasmin vastuni yāvatā kālena
vijñaptir utpadyate³³¹ tāvad⁽³³²⁾ ekaṃ cittam |⁽³³²⁾ yac cāpi tatsamānapravāhaṃ tad apy ekam
evocyate³³³ | visadṛśam³³⁴ tu⁽³³⁵⁾ tasmād dviṭīyam⁽³³⁵⁾ iti ||³³⁶

³³⁰ *vyāvahārikenaikacittam* MS; *vyāvahārikam ekacittam* Bh-ed; *vyāvahārikenaikacittam* em. cf.: 世俗言說一心刹那 YBh-c; *tha snyad gdags par sems gcig* YBh-t.

³³¹ *utpadyate* | MS; *upadyate* Bh-ed; *utpadyate* em. cf.: 生 YBh-c; 'byung ba YBh-t.

³³² *ekaṃ cittam* MS; *ekacittam* | Bh-ed; *ekaṃ cittam* | em.

³³³ *evocyete* MS; *evocyate* Bh-ed, em. cf.: 說名 YBh-c; ces bya'o YBh-t.

³³⁴ *visadyaśam* MS; *visadṛśam* Bh-ed, em. cf.: 與第二念極相似故 YBh-c; mi 'dra ba ni de las gnyis pa zhes bya'o YBh-t.

³³⁵ *tasmādvīṭīyam* MS; *tasmād dviṭīyam* Bh-ed, em. cf.: ibid.

³³⁶ *iti* MS; *iti ||* Bh-ed, em.

によって〔一つの心を設定するのであり〕、〔実際の〕活動の刹那によってではない。

言語習慣に従うもの〔としての心の刹那〕によって〔設定される〕「一つの心」とは何か。ことばの同一の拠り所として、同一の物事に対して、ある〔一定の〕時間をかけて認識結果が生じる場合、その間、「一つの心」〔と設定される〕³⁶。そしてまた、ある〔心の刹那〕はその〔「一つの心」〕と同じ相続に属する (*tatsamānapravāha*) 場合、その〔心の刹那〕も同じく「一つの〔心〕」と呼ばれる。一方、似ていないものはその〔心の刹那〕の後の二番目の〔心の刹那〕と〔呼ばれる〕³⁷。

³⁶ *ekena padasaṃniśrayeṇa* (同一の、ことばの拠り所として) はやや解釈が困難である。

チベット語訳では *tshig* (*tshig* DCPG; ill. N) *gcig la brten nas* (同一の語句に依拠して) と訳されており、*eka* を *pada* にかけて理解している (Text A-tib 4.3.3 参照)。この一文について、YBhVy では次のように説明している。

YBhVy (D 107a3-5; P 131a2-4): *tshig gcig la brten nas dngos po gcig la dus ji tsam gyis rnam par rig pa 'byung ba de tsam la sems gcig ces bya ba ni ji skad du bcom ldan 'das kyis bde bar gshegs pa ni ston pa'o// bde bar gshegs pa ni ston pa'o zhes de ltar sems skyed (skyed D; bskyed P) par byed do zhes gsungs pa lta bu'o// de la bde bar gshegs pa ni ston pa'o zhes bya ba de ni tshig gcig yin te/ de la brten nas don nges pa de'i tshig 'dis yongs su bstan to zhes dus ji tsam gyis 'byung ba de ni rnam par rig byed gcig yin te don gcig (yin te don gcig D; om. P) brjod pa 'bras bu yin pa'i phyir ro//* (【訳】「同一の語句に依拠して、同一の物事に対して、どれだけの時間をかけて認識が生じる〔ならば〕、それだけ〔の時間〕を『一つの心』と呼ぶ」とは、すなわち、世尊は、「善逝は〔天人〕師である、善逝は〔天人〕師である、と、このように心を生じさせる」とお説きになったように。その中で、「善逝は〔天人〕師である」とは同一の語句である。それ(同一の語句)に依拠して、決まった対象がそれに関するこの語句によって明示されている、と〔いうことである〕。「ある程度の時間をかけて生じる」〔もの〕、それは同一の認識を生じさせるものである。なぜなら、同一の対象を表現することを結果とするものであるから。)

言い換えれば、YBhVy では、同一の語句に依拠して、同一の物事に対する認識が存続している時間を「一つの心」と呼ぶ、とされている。しかし、『瑜伽論』の記述は、認識作用における心の刹那の相続を論じている。この認識作用は、必ずしも発話、あるいは言語を伴わないと思われる。YBhVy の解釈の適切性には疑問がある。

一方、漢訳では、「一處為依止」(「一つの処を拠り所として」となっており、「処」の原語は明確ではない (Text A-chi 4.3.3 参照)。この一節に関して、『略纂』では特に解説していないため、漢訳の意味を捉えるのも難しい。

ここでは、サンスクリットテキストに基づいて訳した。

³⁷ *viśadṣāṃ tu tasmād dvitīyam iti* の一文は、チベット語訳では、*mi 'dra ba ni de las gnyis pa zhes bya'o* (似ていないものはそれから第二のものとして〔呼ばれる〕) となっており、サンスクリットテキストと一致している。一方、漢訳 (291b17) では、「與第二念極相似故」(「第二の念と極めて相似するから」となっており、大きな相違が見られる (Text A-chi, Text A-tib 4.3.3 参照)。この箇所について『略纂』などには解説がない。ここでは、サンスクリットテキストに基づいて解釈した。

4.3.4 (MS 17b1m; Bh-ed 59, 12)

tatra manovijñāne 'nābhogavikṣipte 'saṃstutālabane nāsti chandādīnām³³⁷ pravṛtṭiḥ | tac ca manovijñānam aupanipātikam³³⁸ vaktavyam atītālabanam eva |³³⁹

pañcānām vijñānakāyānām³⁴⁰ samanantarotpannam manaḥ paryeṣakam niścitam vā vartamānaviṣayam⁽³⁴¹⁾ eva vaktavyam |⁽³⁴¹⁾ tac cet tadviṣayālabanam eva tad bhavati ||³⁴²

4.4

4.4.1 (MS 17b2m; Bh-ed 59, 16)

tatra sakalam vastulakṣaṇam vijñānena vijñāpayati | tad evāvijñaptam vijñeyalakṣaṇam ity ucyate | yan manaskāreṇa vijñāpayati | tatraiva śubhāśubhobhayaviparītalakṣaṇam yat³⁴³ sparśena pratipadyate | tatraivānugrahopaghātobhayaviparītalakṣaṇam³⁴⁴ yad³⁴⁵ vedanayā³⁴⁶ pratipadyate | tatraiva vyavahāranimittalakṣaṇam yat saṃjñayā pratipadyate | tatraiva samyamithyobhayaviparītapratipattinimittalakṣaṇam³⁴⁷ yac³⁴⁸ cetanayā pratipadyate |

tasmād ete manaskārādayaś cetanāparyavasānāś caitasāḥ sarvatra sarvabhūmike sarvadā sarve cotpadyante ||³⁴⁹

4.4.2

4.4.2.1 (MS 17b3r; Bh-ed 60, 1)

manaskāraḥ katamaḥ |³⁵⁰ cetasa ābhogaḥ ||³⁵¹

4.4.2.2 (MS 17b3r; Bh-ed 60, 1)

sparśaḥ katamaḥ |³⁵² trikasaṃnipātaḥ ||³⁵³

³³⁷ chandādīnā MS; chandādīnām Bh-ed, em. cf.: 欲等 YBh-c; 'dun pa la sogs pa YBh-t.

³³⁸ aupanidātikam MS; aupanipātikam Bh-ed, em. cf.: §1.2.2; 率爾墮心 YBh-c; nye bar gnas pa las byung ba YBh-t.

³³⁹ eva MS; eva | Bh-ed, em.

³⁴⁰ 'kāyānā MS; 'kāyānām Bh-ed, em. cf.: 五識 YBh-c; rnam par shes pa'i tshogs lnga po dag gi YBh-t.

³⁴¹ evaktavyam MS; eva vaktavyam | Bh-ed, em. cf.: 唯應說 YBh-c; kho na zhes bya'o YBh-t.

³⁴² | MS; || Bh-ed, em.

³⁴³ yat MS; yat [tat] Bh-ed. cf.: gang yin pa de ni YBh-t.

³⁴⁴ 'ṇam | MS; 'ṇam Bh-ed, em.

³⁴⁵ yad MS; yat [tad] Bh-ed. cf.: gang yin pa de ni YBh-t.

³⁴⁶ vedanā MS; vedanayā Bh-ed, em. cf.: 由受 YBh-c; tshor bas YBh-t.

³⁴⁷ 'tinimittalakṣaṇam MS; 'tilakṣaṇam Bh-ed. cf.: 邪、正、俱相違行因相 YBh-c; yang dag pa dang log pa dang/ gnyis ka las bzlog pa'i bsgrub pa'i mtshan ma'i mtshan nyid YBh-t.

³⁴⁸ tac MS; [yat] tac Bh-ed; yac em. cf.: gang yin pa de ni YBh-t.

³⁴⁹ | MS; || Bh-ed, em.

³⁵⁰ 'maḥ MS; 'maḥ | Bh-ed, em.

³⁵¹ 'gaḥ MS; 'gaḥ || Bh-ed, em.

³⁵² 'maḥ MS; 'maḥ | Bh-ed, em.

³⁵³ | MS; || Bh-ed, em.

4.3.4 [意識の対象の時間的区別]

また、意識がよく知らないものを所縁とし、無関心で散乱している場合、欲などの活動がない。したがって、その意識は突発的に起こるものであり、過去のものだけを所縁としていると説かれるべきである。

〔一方、〕五識身の直後に生じた意〔識〕は、探求するものであれ、確定されたものであれ、現在のものだけを対象とすると説かれるべきである。〔すなわち〕もしそれ（意識）がそのような対象を所縁としているものにほかならないならば、そのような〔探求する意識、あるいは確定された意識〕になる³⁸。

4.4 [心所法について]

4.4.1 [作意などの五心所のそれぞれの役割]

さて、識によって、物事 (*vastu*) の特徴を全体的に認識させる (*vijñāpayati*)³⁹。同じその〔物事の特徴〕は、〔まだ〕認識させられていないものが認識されるべき特徴と言われ、それを作意によって認識させる。同じその〔物事の特徴の〕中に、好ましい〔特徴〕と、好ましくない〔特徴〕と、その両者のいずれでもない特徴があり、それを触によって受容する。同じその〔物事の特徴の〕中に、有益の〔特徴〕と、有害の〔特徴〕と、その両者のいずれでもない特徴があり、それを受によって受容する。同じその〔物事の特徴の〕中に、言語表現の発動因 (*nimitta*) たる特徴があり、それを想によって受容する。同じその〔物事の特徴の〕中に、正しい〔行為〕と、誤った〔行為〕と、その両者のいずれでもない行為 (*pratipatti*) の発動因たる特徴があり、それを思によって受容する。

したがって、これらの作意を始めとして、思を終わりとする心所は、すべての状態〔の心〕において〔生じ〕、すべての地にいるものにおいて〔生じ〕、すべての時に〔生じ〕、すべてが生じる。

4.4.2 [作意・触・受・想・思 (いわゆる五遍行) の本質]

4.4.2.1

作意とは何か。心を向かわせること (*ābhoga*) である。

4.4.2.2

触とは何か。〔感官、対象、識の〕三つが結合することである。

³⁸ この一文は、下記の漢訳とチベット語訳を参照して上のように訳した。

漢訳 (Text A-chi 4.3.4) : 「五識無間所生意識、或尋求、或決定、唯應説縁現在境。若此即縁彼境、生。」
〔訳〕五識身の直後に生じた意識、探求するものであれ、確定されたものであれ、現在の対象を所縁とするのみと説かれるべきである。もしこれが同じくその対象を所縁とするならば、生じる。〕

チベット語訳 (Text A-tib 4.3.4) : *rnam par shes pa'i tshogs lnga po dag gi mjug thogs su byung ba'i yid (yid PNG; yid la DC) tshol ba 'am/ nges pa ni gal te (te PNG; te/ DC) de'i yul de'i dmigs pa yin na/ da ltar gyi yul can kho na zhes bya'o//* 〔訳〕五識身の直後に生じた意は探求するもの、あるいは確定されたもの〔である〕とは、もしその対象はその所縁であるならば、現在の対象を有するものだけ〔である〕と説かれるべきである。〕

³⁹ この記述は、物事の全体的な特徴を認識させるのは識であり、物事の個別的な特徴を認識させるのは心所であることを示唆している。

sakalam vastulakṣaṇam の *sakalam* は、一般的には、副詞として、あるいは後の格限定複合語の中の *lakṣaṇam* にかかる形容詞としても読める。二つの読み方に大差はない。漢訳では、「事之總相」(物事の全体的な特徴) となっており、*lakṣaṇam* にかかる形容詞と解釈している。これに対して、チベット語訳では、*dngos po mtha' dag gi mtshan nyid* (全体の物事の特徴) となっており、複合語中の *lakṣaṇam* の前の *dngos po (*vastu)* にかかる形容詞と解釈している (Text A-chi, Text A-tib 4.4.1 参照)。ここでは、*sakalam* を副詞として、上のように訳した。

4.4.2.3 (MS 17b4l; Bh-ed 60, 2)

vedanā katamā |³⁵⁴ anubhavanā ||³⁵⁵

4.4.2.4 (MS 17b4l; Bh-ed 60, 2)

saṃjñā katamā |³⁵⁶ saṃjānanā ||³⁵⁷

4.4.2.5 (MS 17b4l; Bh-ed 60, 2)

cetanā katamā |³⁵⁸ cittābhisamskārah ||³⁵⁹

4.4.3

4.4.3.1 (MS 17b4m; Bh-ed 60, 3)

chandaḥ katamaḥ |³⁶⁰ yad īpsite vastuni tatra tatra tadanugā kartukāmatā ||³⁶¹

4.4.3.2 (MS 17b4m; Bh-ed 60, 4)

adhimokṣaḥ katamaḥ | yan niścite³⁶² vastuni tatra tatra tadanugāvadhāraṇābhaktiḥ ||³⁶³

4.4.3.3 (MS 17b4r; Bh-ed 60, 5)

smṛtiḥ katamā |³⁶⁴ yat saṃstute vastuni tatra tatra tadanugābhilapanā ||³⁶⁵

4.4.3.4 (MS 17b4r; Bh-ed 60, 6)

samādhiḥ katamaḥ |³⁶⁶ yat parīkṣye vastuni (³⁶⁷tatra tatra³⁶⁷) tadanugam upanidhyānasamṇiśritam
cittaikāgryam ||³⁶⁸

4.4.3.5 (MS 17b5l; Bh-ed 60, 7)

prajñā katamā |³⁶⁹ yat parīkṣya³⁷⁰ eva vastuni³⁷¹ tatra tatra tadanugo³⁷² dharmānām³⁷³
pravacayaḥ |³⁷⁴ yogavihitato vāyogavihitato vā naiva yogavihitato nāyogavihitataḥ ||³⁷⁵

³⁵⁴ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

³⁵⁵ °nā MS; °nā || Bh-ed, em.

³⁵⁶ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

³⁵⁷ °nāḥ MS; °nā || Bh-ed, em.

³⁵⁸ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

³⁵⁹ °raḥ MS; °raḥ || Bh-ed, em.

³⁶⁰ °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

³⁶¹ | MS; || Bh-ed, em.

³⁶² yaniścite MS; yan niścite Bh-ed, em.

³⁶³ °āvadhāraṇābhaktiḥ MS; °āvadhāraṇāśaktiḥ || Bh-ed; °āvadhāraṇābhaktiḥ || em. cf.: 印可隨順性 YBh-c; nges par 'dzin nus pa YBh-t.

³⁶⁴ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

³⁶⁵ °nā MS; °nā || Bh-ed, em.

³⁶⁶ °maḥ MS; °maḥ | Bh-ed, em.

³⁶⁷ °ni MS; °ni [tatra tatra] Bh-ed; °ni tatra tatra em. cf.: 彼彼 YBh-c; de dang de la YBh-t.

³⁶⁸ °gryam MS; °gryam || Bh-ed, em.

³⁶⁹ °mā MS; °mā | Bh-ed, em.

³⁷⁰ aparīkṣya MS; parīkṣya Bh-ed, em. cf.: 於所觀察事 YBh-c; brtag pa'i dngos po YBh-t.

³⁷¹ °ni | MS; °ni Bh-ed, em.

³⁷² °anuyo MS; °anugo Bh-ed, em. cf.: 隨彼彼行 YBh-c; de dang de la de'i rjes su 'gro zhing YBh-t.

³⁷³ dharmānām MS; dharmānā Bh-ed.

³⁷⁴ pravacayaḥ | MS; pravacayo Bh-ed.

³⁷⁵ °taḥ MS; °taḥ || Bh-ed, em.

4.4.2.3

受とは何か。経験することである。

4.4.2.4

想とは何か。表象することである。

4.4.2.5

思とは何か。心を作動させることである。

4.4.3 [欲・勝解・念・三摩地・慧（いわゆる五別境）の本質]

4.4.3.1

欲とは何か。〔それはすなわち、〕望まれた物事それぞれに対して、その〔物事〕に相当する（*tadanugā*）、しようと欲することである。

4.4.3.2

勝解とは何か。〔それはすなわち、〕確定された物事それぞれに対して、その〔物事〕に相当する、確認することによる信念である。

4.4.3.3

念とは何か。〔それはすなわち、〕習熟された物事それぞれに対して、その〔物事〕に相当する、言い及ぶこと（*abhilapanā*）である。

4.4.3.4

三摩地とは何か。〔それはすなわち、〕観察されるべき物事それぞれに対して、その〔物事〕に相当する、詳しく考察すること（*upanidhyāna*）に依存している、心の専一である。

4.4.3.5

慧とは何か。〔それはすなわち、〕同じ観察されるべき物事それぞれに対して、あるいは道理によって生じたものとして、あるいは道理でないものによって生じたものとして、あるいは道理によって生じたものでもなく道理でないものによって生じたものでもないものとして、その〔物事〕に相当する、諸法の分析（*pravicaya*）である。

4.4.4

4.4.4.1 (MS 17b5r; Bh-ed 60, 10)

tatra manaskāraḥ kiṃkarmakaḥ |³⁷⁶ cittāvarjanakarmakaḥ ||³⁷⁷

4.4.4.2 (MS 17b5r; Bh-ed 60, 10)

sparśaḥ³⁷⁸ kiṃkarmakaḥ |³⁷⁹ vedanāsamjñācetanānām³⁸⁰ samñiśrayadānakarmakaḥ ||³⁸¹

4.4.4.3 (MS 17b6l; Bh-ed 60, 11)

vedanā kiṃkarmikā |³⁸² tṛṣṇotpādopekṣākarmikā ||³⁸³

4.4.4.4 (MS 17b6l; Bh-ed 60, 12)

samjñā kiṃkarmikā | ālambane cittacitrīkāravyavahārakarmikā ||³⁸⁴

4.4.4.5 (MS 17b6m; Bh-ed 60, 13)

cetanā kiṃkarmikā |³⁸⁵ vitarkakāyavākkarmādīsamutthānakarmikā ||³⁸⁶

³⁷⁶ °kaḥ MS; °kaḥ | Bh-ed, em.

³⁷⁷ cittāvarj(ā)karmakaḥ MS; cittāvarja[na]karmakaḥ | Bh-ed; cittāvarjanakarmakaḥ || em. cf.: 引心為業 YBh-c; sems gtod pa'i las byed do YBh-t.

³⁷⁸ sparśa MS; sparśaḥ Bh-ed, em.

³⁷⁹ °kaḥ MS; °kaḥ | Bh-ed, em.

³⁸⁰ °nām | MS; °nām Bh-ed, em.

³⁸¹ samñiśrayadānakarmakaḥ MS; samñiśrayadānakarmakaḥ || Bh-ed, em. cf.: 所依為業 YBh-c; gnas sbyin pa'i las byed do YBh-t.

³⁸² °kaḥ MS; °kā | Bh-ed, em.

³⁸³ | MS; | Bh-ed; || em.

³⁸⁴ °kā MS; °kā || Bh-ed, em.

³⁸⁵ °kā MS; °kā | Bh-ed, em.

³⁸⁶ | MS; | Bh-ed; || em.

4.4.4 [作意・触・受・想・思のはたらき]

4.4.4.1

それで、作意は何のはたらきを有するのか。心を傾けること (*āvarjana*) をはたらきとする。

4.4.4.2

触は何のはたらきを有するのか。受・想・思の拠り所を与えることをはたらきとする。

4.4.4.3

受は何のはたらきを有するのか。貪愛の生起と捨 (*upekṣā*, 平静な状態) [に安定すること] をはたらきとする⁴⁰。

4.4.4.4

想は何のはたらきを有するのか。所縁に対して、心において具象化することと、言語化することをはたらきとする⁴¹。

4.4.4.5

思は何のはたらきを有するのか。尋 (*vitarka*, 思考) と、身 [業] と語業などを発動することをはたらきとする⁴²。

⁴⁰ この文の *ṭṣṇotpādopekṣākarmikā* は解釈が困難である。特に *upekṣā* という表現は不自然で解釈が困難である。この一節のチベット語訳は, *sred (sred PNG; srid D; sri C) pa skye ba dang/ btang snyoms su 'jog pa'i las byed do* (貪愛が生じる [はたらき] と、捨に安定するはたらきをなす) となっている (Text A-tib 4.4.4.3 参照)。チベット語訳の *btang snyoms* は *upekṣā* に相当する表現であると考えられる。

それに対して、漢訳の該当箇所は「謂愛生所依為業」となっている (Text A-chi 4.4.4.3 参照)。漢訳には *upekṣā* に相当する表現が見つからない。漢訳の説明文は教理的に適切であり、一つの合理的な解釈を提供していると考えられる。詳しくは本論第 1 章第 1.3.2.2 節参照。

ここではチベット語訳を参照して、逐語的に訳した。

⁴¹ *cittacitrikāravayavahāraḥkarmikā* に対応するチベット語訳は *sems mtshan mar 'dzin pa'i tha snyad kyi las byed do* (心を、特徴として捉えることの言語化するはたらきを為す) となっている。 *sems mtshan mar 'dzin pa* (心を、特徴として捉えること) は *citrikāra* の訳語であると考えられる。一方、漢訳では「令心發起種種言説」(心に様々な言説を発動させる) となっており、 *citrikāra* に対応する表現が見当たらない (Text A-chi, Text A-tib 4.4.4.4 参照)。

⁴² *vitarka* (尋) は、チベット語訳では *rtog pa* となっており、サンスクリットテキストと一致している。一方、漢訳では、 *vitarka* に対応する箇所は「尋伺」(尋と伺) となっている (Text A-chi, Text A-tib 4.4.4.5 参照)。「伺」(*vicāra*, 考察) は心所の分類における、「尋」(*vitarka*) に関連する概念であり、しばしば *vitarka* とともに言及される。

4.4.5

4.4.5.1 (MS 17b6m; Bh-ed 60, 14)

chandaḥ³⁸⁷ kiṃkarmakaḥ | vīryārambhasaṃjananakarmakaḥ ||³⁸⁸

4.4.5.2 (MS 17b6r; Bh-ed 60, 15)

adhimokṣaḥ kiṃkarmakaḥ | guṇato doṣato nobhayato vāḷambanadhṛtikarmakaḥ ||³⁸⁹

4.4.5.3 (MS 17b7l; Bh-ed 60, 16)

smṛtiḥ kiṃkarmikā |³⁹⁰ ciracintitakṛtabhāṣitasmaraṇānusmaraṇakarmikā ||³⁹¹

4.4.5.4 (MS 17b7l; Bh-ed 61, 1)

samādhiḥ kiṃkarmakaḥ |³⁹² jñānasamṇiśrayadānakarmakaḥ ||³⁹³

4.4.5.5 (MS 17b7m; Bh-ed 61, 1)

prajñā kiṃkarmikā |³⁹⁴ prapañcapracārasaṃkleśavyavadānānukūlasaṃtīraṇakarmikā³⁹⁵ ||

³⁸⁷ chanda MS; chandaḥ Bh-ed, em.

³⁸⁸ °kaḥ MS; °kaḥ || Bh-ed, em.

³⁸⁹ <there is an insert mark here, but relevant akṣara(s) cannot be found in the margin>ā<lam>bana(·)dhṛtikarmakaḥ MS; vāḷambanadhṛtikarmakaḥ || Bh-ed, em. cf.: 任持功德過失為業 YBh-c; yon tan nam nyes pa 'am/ gnyi ga ma yin pas dmigs pa la dga' bar byed pa'i las byed do YBh-t.

³⁹⁰ °kā MS; °kā | Bh-ed, em.

³⁹¹ °kā MS; °kā || Bh-ed, em.

³⁹² °kaḥ MS; °kaḥ | Bh-ed, em.

³⁹³ | MS; || Bh-ed, em.

³⁹⁴ °kā MS; °kā | Bh-ed, em.

³⁹⁵ prapañcapracārasaṃkleśavyavadānānukūlasatīraṇa ° MS; prapañcapracārasaṃkleśavyavadānānukūlasaṃtīraṇa ° Bh-ed, em. cf.: 謂於戲論所行染污清淨隨順推求為業 YBh-c; spros pa rgyu ba dang/ kun nas nyon mongs pa dang/ rnam par byang ba dang/ mthun pa la spyod pa'i las byed do YBh-t.

4.4.5 [欲・勝解・念・三摩地・慧のはたらき]

4.4.5.1

欲は何のはたらきを有するのか. 努力 (vīrya) や企て (ārambha) を生じさせることをはたらきとする.

4.4.5.2

勝解は何のはたらきを有するのか. 功德として, あるいは過失として, あるいはその両者のいずれでもないものとして, 所縁に対して [そのような理解を] 持ち続けること (dhṛti) をはたらきとする.

4.4.5.3

念は何のはたらきを有するのか. 考えたこと・行ったこと・語ったことを長い間に記憶すること (smaraṇa) や思い出すこと (anusmaraṇa) をはたらきとする.

4.4.5.4

三摩地は何のはたらきを有するのか. 智 (jñāna) の拠り所を与えることをはたらきとする.

4.4.5.5

慧は何のはたらきを有するのか. 構想分別 (prapañca) を現わすこと (pracāra) と, 雑染・純淨に従った判断することをはたらきとする.

[Part 1, 『瑜伽師地論』卷 1 「本地分中五識身相應地」]

(T 279a22-280b2, 金 338a7-339c6, 房 2b15-4a23, 麗 466a7-467c6, 磧 399a6-401b12)

1.0

云¹何五識身相應地？謂五識身自性、彼所依、彼所緣、彼助伴、彼作業。如是總名五識身相應地。

1.1

何等名為五識身耶？所謂眼識、耳識、鼻識、舌識、身識。

1.1.1

1.1.1.1

云何眼識自性？謂依眼了別色。

1.1.1.2

彼所依者，俱有依謂眼，等無間依謂意，種子依謂即此一切種子、執受所依、異熟所攝阿賴耶識。如是略說二種所依，謂色、非色。眼是色，餘非色。

眼謂四大種所造，眼識所依淨_{T279b}色，無見有對。

意謂眼識無間過去識。

一切種子識謂無始時來樂著戲論熏習為因所生一切種子異熟識。

1.1.1.3

1.1.1.3.1

彼所緣者，謂色有見有對。

1.1.1.3.2

1.1.1.3.2.0

此復多種，略說有三。謂顯色、形色、表色。

1.1.1.3.2.1

1.1.1.3.2.1.1

顯色者，謂青、黃、赤、白、_{磧 399b}影、光²、明、闇、雲、煙、塵、霧，及空一顯色。

¹ 「云」金，房，麗，T；「本地分中五識身相應地第一云」磧，(T)普徑崇。

² 「影光」金，磧，(T)資普徑崇；「光影」房，麗，T。

[Part 1]

(D2a2–5b2, C2a2–5b5, P2b2–6a7, N2b2–6b7, G3a1–7a6)

1.0

rnam par shes (N2b3) pa'i tshogs lnga dang ldan pa'i (C2a3) sa (P2b3) gang zhe na/ rnam par shes pa'i tshogs lnga ste/ ngo bo nyid dang/ de dag gi gnas dang/ de (G3a2) dag gi dmigs (N2b4) pa dang/ de dag gi (D2a3) grogs dang/ de dag gi las ni mdor na rnam par shes pa'i tshogs (P2b4) lnga dang (C2a4) ldan pa'i sa'o//

1.1

rnam par shes pa'i tshogs lnga (N2b5) gang zhe na/ mig gi rnam par shes pa dang/ rna ba dang/ sna dang/ lce dang/ lus (G3a3) dang/ yid kyi rnam par (D2a4) shes pa'o//

1.1.1

1.1.1.1

mig gi rnam par (P2b5) (N3a1) shes pa gang zhe na/ gang (C2a5) mig la brten nas gzugs so sor rnam par rig pa'o//

1.1.1.2

mig gi rnam par shes pa'i gnas gang zhe na/ (N3a2) mig ni lhan cig 'byung ba'i gnas so// yid ni de ma (G3a4) thag pa'i (P2b6) gnas (D2a5) so// sa bon thams cad (C2b1) pa lus len par byed pa/ rnam par smin pa¹ bsdu pa (N3a3) kun gzhi rnam par shes pa² ni sa bon gyi gnas so// de yang mdor bsdu na gnas rnam pa gnyis su 'gyur te/³ (P2b7) gzugs⁴ can dang gzugs can ma (G3a5) yin (N3a4) pa'o// (D2b1) de la mig ni gzugs can no// de las gzhan pa ni gzugs (C2b2) can ma yin pa'o//

mig gang zhe na/ gang 'byung ba chen po bzhi po dag rgyur (P2b8) byas pa mig gi (N3a5) rnam par shes pa'i rten po gzugs dang ba ste/ bstan du med (G3a6) la thogs pa dang bcas pa'o//

yid gang zhe na/ gang (D2b2) mig gi rnam par shes pa'i sngon rol (N3b1) du 'das ma thag pa'i rnam (C2b3) par (P3a1) shes pa'o⁵//

sa bon thams cad pa'i rnam par shes (G3b1) pa gang zhe na/ sngon gyi spros pa⁶ dga' ba⁷ rgyur gyur pa la brten nas sa bon thams cad pa rnam par smin pa mngon par (N3b2) 'grub pa gang yin pa'o//⁸ (P3a2)

1.1.1.3

1.1.1.3.1

mig gi rnam (D2b3) par shes pa'i dmigs pa gang zhe na/ gzugs gang (C2b4) bstan du yod cing thogs pa dang (G3b2) bcas pa'o//

1.1.1.3.2

1.1.1.3.2.0

de yang rnam pa du ma yod de/⁹ mdor na kha (N3b3) dog dang¹⁰ dbyibs dang rnam par rig¹¹ byed do//

1.1.1.3.2.1

1.1.1.3.2.1.1

kha dog gang (P3a3) zhe na/ 'di lta ste/ sngon po dang/ ser po dang/ dmar po dang/ dkar (D2b4) po dang/¹² grib ma dang/ nyi ma dang/ snang ba dang/ mun pa (N3b4) dang/ (C2b5) (G3b3) sprin dang/ du ba dang/ rdul dang/ khug rna dang/ nam mkha' kha dog gcig pa'o// (P3a4)

¹ pa DC; par PNG.

² pa DCPG; pas N.

³ te/ PNG; rol/ DC.

⁴ gzugs DCPN; gzug G.

⁵ pa'o DCPN; pa'i sngon rol du 'das ma thag pa'i rnam par shes pa'o G.

⁶ pa PNG; pa/ DC.

⁷ ba DC; bar PNG.

⁸ // DCPG; / N.

⁹ del PNG; do// DC.

¹⁰ dang DCNG; dang/ P.

¹¹ rig DC; rig par PNG.

¹² / CPNG; // D.

形色者，謂^{房 3a}長、短、方、圓、僂、細、正、不正、高、下色。^{{金 338b}{麗 466b}}

表色者，謂取、捨、屈、伸³、行、住、坐、臥。如是等色。

1.1.1.3.2.1.2

又顯色者，謂若色顯了，眼識所行。

形色者，謂若色積集，長短等分別相。

表色者，謂即此積集色生滅相續，由變異因，於先生處不復重生，轉於異處，或無間、或有間、或近、或遠差別生，或即於此處變異⁴生。是名表色。

1.1.1.3.2.1.3

又顯色者，謂光、明等差別。

形色者，謂長、短等積集差別。

表色者，謂業、用、為、作⁵、轉動差別。

1.1.1.3.2.2

如是一切顯、形、表色，是眼所行，眼境界，眼識所行，眼識境界，眼識所緣，意識所行，意識境界，意識所緣名之差別。

1.1.1.3.3

又即此色，復有三種。謂若好顯色、若惡顯色、若俱異顯色似色顯現。

1.1.1.4

彼助伴者，謂彼俱有相應諸心所有法。所謂作意、觸、受、想、思，及餘眼識俱有相應諸心所有法。又彼諸法，同一所⁶緣，非⁷一行相，俱有相應，一一而轉。又彼一切，各各從自種子而生。

³ 「伸」金，麗，磧，T；「申」房。

⁴ 「異」麗，磧，T；「異而」金，房。

⁵ 「作」磧，(T)資普徑崇；「依」金，房，麗，T。

⁶ 「所」金，房，麗，磧，T；「切」(T)崇。

⁷ 「非」金，房，麗，磧，T；「不同」(T)天。

dbyibs gang zhe na/ 'di lta ste/ ring po dang/ thung du dang/ lham pa dang/ zlum po dang/ (N3b5) rdul phra mo dang/ (D2b5) rags pa dang/ phyal le ba dang/ phyal le ba ma yin (G3b4) pa dang/ mthon po dang/ dma' (C2b6) ba'o//

rnam par rig byed gang (P3a5) zhe na/ 'di lta ste/ len pa dang/¹³ 'jog pa dang/ bskum (N3b6) pa dang/ brkyang ba dang/ 'greng ba dang/ 'dug pa dang/ nyal ba dang/ 'gro ba dang/ ldog pa dang/ de la (D2b6) sogs pa'o//¹⁴ (G3b5)

1.1.1.3.2.1.2

yang kha dog gang zhe na/ gang gzugs dang (P3a6) 'dra ba mig gi rnam par (C2b7) shes (N4a1) pa'i spyod yul du gyur pa'o//

dbyibs gang zhe na/ gang gzugs rgyas par ring po la sogs par yongs su bcad¹⁵ pa'i rnam pa'o//

rnam par rig byed gang (G3b6) zhe na/ rgyas pa'i gzugs skyes pa (D2b7) (P3a7) 'gags (N4a2) pa de nyid mi mthun pa'i rgyus skyes pa'i phyogs su mi 'byung (C3a1) ba dang/ de las gzhan pa'i phyogs su yang/ bar du ma chod pa 'am/ bar du chod pa dang bcas pa 'am/ nye ba 'am ring bar 'byung (G4a1) ba dang/ phyogs de nyid (P3a8) du (N4a3) yang mi 'gyur ba 'byung ba ni rnam par rig byed ces bya'o//¹⁶

1.1.1.3.2.1.3

de la (D3a1) kha dog ni snang ba (C3a2) dang gsal ba dang zhes bya ba'i rnam grangs su gtogs pa'o//

dbyibs ni rgyas pa dang/ ring¹⁷ po dang/ thung du zhes bya (G4a2) ba la sogs pa'i rnam (N4a4) grangs (P3b1) su gtogs pa'o//

rnam par rig byed ni las dang byed pa dang/ spyod pa dang/¹⁸ g.yo ba (D3a2) dang/ yongs su (C3a3) g.yo ba zhes bya ba'i rnam grangs su gtogs pa'o//

1.1.1.3.2.2

kha dog dang dbyibs dang¹⁹ rnam par rig byed thams (P3b2) cad (G4a3) kyang mig gi (N4a5) spyod yul dang/ mig gi yul dang/ mig gi rnam par shes pa'i spyod yul dang/ mig gi rnam par shes pa'i yul dang/ mig gi (C3a4) rnam par (D3a3) shes pa'i dmigs pa dang/ yid kyi rnam par shes pa'i spyod yul (P3b3) dang/ yid kyi (N4a6) rnam par shes pa'i yul dang/²⁰ (G4a4) yid kyi rnam par shes pa'i dmigs pa zhes bya ba'i rnam grangs su gtogs pa'o//

1.1.1.3.3

yang de nyid kha dog bzang po dang/ kha dog (C3a5) ngan pa dang/ de²¹ gnyi ga'i bar ma (D3a4) dor gnas pa kha dog lta bu'o// (N4b1)

1.1.1.4

grog gang zhe na/ de dang lhan (P3b4) cig 'byung (G4a5) zhing mtshungs par ldan pa sems las byung ba'i chos rnam te/ 'di lta ste/ yid la byed pa dang/ reg pa dang/ tshor ba dang/ 'du shes dang/²² sems (C3a6) pa'o// sems las byung ba'i chos gzhan gang dag (D3a5) mig gi rnam (P3b5) par shes pa (G4a6) dang/²³ lhan cig (N4b2) 'byung²⁴ zhing mtshungs par ldan pa de dag ni/ dmigs pa gcig pa rnam pa du ma ste/ lhan cig 'byung ba dag kyang re re 'byung la/ thams cad kyang rang gi sa bon (C3a7) las nges par 'byung ba/²⁵ mtshungs par²⁶ (P3b6) ldan pa/²⁷ (G4b1) dmigs pa dang bcas pa/ (D3a6) rnam pa dang bcas pa/ gnas dang bcas pa dag go//

¹³ / DC; om. PNG.

¹⁴ // DCNG; / P.

¹⁵ bcad DC; gcad PNG.

¹⁶ // DCNG; om. P.

¹⁷ ring DCPG; ill. N.

¹⁸ spyod pa dang/ DCPN; om. G.

¹⁹ dang DC; dang/ PNG.

²⁰ yid kyi rnam par shes pa'i yul dang/ DCNG; om. P.

²¹ de DCPN; da G.

²² / DC; om. PNG.

²³ dang DC; dang/ PNG.

²⁴ 'byung DCPG; byung N.

²⁵ / DPNG; // C.

²⁶ par DCPG; ill. N.

²⁷ / DPNG; // C.

1.1.1.5

彼作業者，當知有六種。謂{磧 400a}唯了別自境所緣，是名初業。唯了別自相。唯了別現在。唯一刹那了別。復有二業。謂隨意識轉——隨善染轉，隨發業轉。又{金 338c}{麗 466c}復能取愛、非愛果，是第六業。

1.1.2

1.1.2.1

云何耳識自性？謂依耳了別聲。

1.1.2.2

彼所依者，俱有依謂耳，等無間依謂意，種子依謂一切種{T279c}子阿賴耶識。

耳謂四大種所造，耳識所依淨色，無見有對。意及種子如前分別。

1.1.2.3

1.1.2.3.1

彼所緣者，謂聲無見有對。此復多種。

1.1.2.3.2

如螺貝聲、大小鼓聲、舞聲、歌聲、諸音樂聲、俳⁸戲叫聲、女聲、男聲、風林等聲、明了聲、不明了聲、有義聲、無義聲、下中上聲、江河等聲、鬪諍誼雜⁹聲、受持演說聲、論{房 3b}義決擇聲。如是等類，有衆多聲。

1.1.2.3.3

1.1.2.3.3.1

此略三種。謂因執受大種聲、因不執受大種聲、因執受不執受大種聲。初唯內緣聲，次唯外緣聲，後內外緣聲。

⁸ 「俳」金，房，麗，磧，T；「俳」(T)資崇。

⁹ 「諍雜」金，麗，磧，T；「諍」房。

1.1.1.5

las gang zhe na/ de ni rnam pa drug tu blta (N4b3) bar bya²⁸ ste/ thog ma kho nar je²⁹ rang gi yul la dmigs pa rnam (C3b1) par rig pa'i yul las dang/ (P3b7) yang rang gi mtshan nyid rnam par rig pa dang/ yang da (G4b2) ltar gyi dus rnam par rig pa (D3a7) dang/³⁰ yang skad cig gcig nam par rig pa dang/ yang rnam pa gnyis kyi yid kyi rnam par shes pa'i rjes su 'jug pa ste/ dge ba nyon mongs (P3b8) (N4b4) pa³¹ can gyi rjes (C3b2) su³² 'jug pa dang/ las kun las slong (G4b3) ba'i rjes su 'jug pa dang/ yang sdug pa dang mi sdug pa'i 'bras bu yongs (D3b1) su 'dzin pa ste las drug pa'o//

1.1.2

1.1.2.1

rna ba'i rnam par shes pa gang zhe na/ gang rna ba la brten nas (P4a1) sgra so sor rnam par rig pa'o//

1.1.2.2

gnas gang zhe na/ (N4b5) rna ba ni (C3b3) (G4b4) lhan cig 'byung ba'i gnas so// yid ni de ma thag pa'i gnas so// sa bon thams cad pa kun gzhi rnam par shes pa de nyid ni sa bon (P4a2) gyi (D3b2) gnas so//

rna ba gang zhe na/ gang 'byung ba chen po bzhi po dag rgyur byas pa/ rna ba'i rnam par (G4b5) shes pa'i rten po gzugs dang ba (C3b4) ste/ bstan du med (N4b6) la thogs pa dang bcas pa'o// yid dang sa bon gyi (P4a3) rnam par dbye ba ni snga ma bzhin no//³³

1.1.2.3

1.1.2.3.1

dmigs pa gang zhe na/ sgra rnam pa du ma bstan (D3b3) du med la thogs pa dang bcas pa dag ste/

1.1.2.3.2

'di (G4b6) lta ste/ dung gi sgra dang/ rnga bo che'i sgra dang/ rdza rnga'i sgra dang/ gar (C3b5) byed pa'i sgra dang/ (P4a4) glu'i sgra dang/ (N4b7) rol mo'i sgra dang/ rnga bo che'i sgra³⁴ dang/ bud med kyi sgra dang/ skyes pa'i sgra dang/ rlung dang shing gi sgra dang/ gsal ba dang/ mi gsal (D3b4) ba dang/ (G5a1) don dang ldan pa dang/ don med pa dang/ chung ngu dang³⁵ (P4a5) 'bring dang³⁶ chen po dang/ chu klung gi sgra (C3b6) dang/ ca co'i sgra dang/ lung nod pa'i sgra dang/ kha (N5a1) ton byed pa'i sgra dang/ 'chad pa'i sgra dang/ 'bel ba'i gtam dang/ rnam par gtan la (G5a2) 'bebs pa'i sgra dang/ de lta bu (D3b5) (P4a6) dang mthun³⁷ pa'i sgra mang po dag go//

1.1.2.3.3

1.1.2.3.3.1

de yang zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu las byung ba dang/ ma zin (C3b7) pa'i 'byung³⁸ ba chen (N5a2) po'i³⁹ rgyu las byung ba dang/ zin pa dang ma zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu las byung ba'o//⁴⁰ (P4a7) de la dang po (G5a3) ni gang nang⁴¹ rkyen⁴² du gyur pa nyid do//⁴³ gnyis pa ni gang phyi rol rkyen du (D3b6) gyur pa nyid do//⁴⁴ gsum pa ni gang nang dang phyi⁴⁵ rkyen du gyur⁴⁶ pa nyid do//

²⁸ bya DPNG; ba C.

²⁹ je PNG; de DC.

³⁰ yang rang gi mtshan nyid rnam par rig pa dang/ yang da ltar gyi dus rnam par rig pa dang/ DC; yang rang gi mtshan nyid rnam par rig pa dang yang da ltar gyi dus rnam par rig pa dang/ G; om. PN.

³¹ pa DCPN; om. G.

³² su DCNG; ill. P.

³³ // DCPG; / N.

³⁴ sgra DPNG; sga C.

³⁵ dang PNG; dang/ DC.

³⁶ dang PNG; dang/ DC.

³⁷ mthun DC; 'thun PNG.

³⁸ 'byung DPNG; ill. C.

³⁹ po'i DCPG; ill. N.

⁴⁰ ba'o// DC; ba dang/ PG; ba dang// N.

⁴¹ nang DC; na PNG.

⁴² rkyen DCPG; ill. N.

⁴³ // DCPG; / N.

⁴⁴ // DCPG; / N.

⁴⁵ phyi DCPG; ill. N.

⁴⁶ gyur DCPG; ill. N.

1.1.2.3.3.2

此復三種。謂可意聲、不可意聲、俱相違聲。

1.1.2.3.4

又復聲者，謂鳴、音、詞、吼、表彰語等差別之名。

是耳所行，耳境界，耳識所行，耳識{積 400b}境界，耳識所緣，意識所行，意識境界，意識所緣。

1.1.2.4

助伴及業如眼識應知。

1.1.3

1.1.3.1

云何鼻識自性？謂依鼻了別香。

1.1.3.2

彼所依者，俱有依謂鼻，等無間依謂意，種子依謂一切種子阿賴耶識。

鼻謂四{金 339a}{麗 467a}大種所造，鼻識所依淨色，無見有對。意及種子如前分別。

1.1.3.3

1.1.3.3.1

彼所緣者，謂香無見有對。此復多種。

1.1.3.3.2

謂好香、惡香、平等香鼻所嗅。

1.1.3.3.3

如¹⁰根、莖、華、葉、果實之¹¹香。如是等類，有衆多香。

1.1.3.3.4

又香者，謂鼻所聞、鼻所取、鼻所嗅等差別之名。

¹⁰ 「如」金，房，麗；「知」磧，T.

¹¹ 「果實之」金，房，麗，T；「果」磧，(T)資普徑崇.

1.1.2.3.3.2

de yang (C4a1) yid du 'ong ba dang/ (N5a3) yid du mi 'ong ba dang/ de gnyi ga las (P4a8) bzlog pa'o//

1.1.2.3.4

de la sgra dang/ dbyangs dang/ nga ro (G5a4) dang/ nges pa'i tshig⁴⁷ dang/ sgra skad dang/ tshig gi rnam par rig byed⁴⁸ ni rnam grangs su gtogs (D3b7) pa'o//⁴⁹

rna ba'i spyod yul dang/ rna ba'i yul dang/⁵⁰ (C4a2) rna ba'i (P4b1) rnam par shes pa'i spyod yul dang/ rna ba'i (N5a4) rnam par shes pa'i yul dang/ rna ba'i rnam par shes pa'i (G5a5) dmigs pa dang/ yid kyi rnam par shes⁵¹ pa'i spyod yul dang/⁵² yid kyi rnam par shes pa'i yul dang/⁵³ yid kyi (P4b2) rnam par (D4a1) shes pa'i dmigs pa rnams (C4a3) ni⁵⁴ rnam grangs su gtogs pa'o//

1.1.2.4

grog dang las ni mig gi (N5a5) rnam par shes pa'i rang⁵⁵ bzhin du rig (G5a6) par bya'o//

1.1.3

1.1.3.1

sna'i rnam par shes pa gang zhe na/ gang sna la brten nas dri so sor (P4b3) rnam par rig⁵⁶ pa'o//

1.1.3.2

gnas gang zhe na/ sna ni (D4a2) lhan cig 'byung ba'i gnas so// (C4a4) yid ni de ma thag pa'i gnas so// sa bon thams cad pa kun gzhi (N5a6) rnam par shes pa de nyid ni sa (G5b1) bon gyi gnas so//

sna gang zhe na/ (P4b4) gang 'byung ba chen po bzhi po dag rgyur byas pa/⁵⁷ sna'i rnam par shes pa'i rten po gzugs dang ba ste/ bstan du (D4a3) med la thogs (C4a5) pa dang bcas pa'o// yid dang sa bon gyi rnam par dbye ba ni snga ma bzhin no//

1.1.3.3

1.1.3.3.1

dmigs (N5a7) (G5b2) pa (P4b5) gang zhe na/ dri rnam pa du ma bstan du med la thogs pa dang bcas pa dag ste/

1.1.3.3.2

dri zhim pa'am/ dri nga ba'am/ dri mnyam pa bsnam par bya ba

1.1.3.3.3

'di lta ste/ rtsa ba'i dri dang/⁵⁸ (C4a6) snying po'i dri dang/ (D4a4) lo ma'i dri dang/ me tog (P4b6) gi dri dang/ 'bras bu'i dri la sogs pa dri mang⁵⁹ (G5b3) po dag (N5b1) go//⁶⁰

1.1.3.3.4

de la dri dang/⁶¹ bsnam pa dang/ bsnam⁶² par bya ba dang/ kun tu bsnam par bya ba⁶³ la sogs pa ni rnam grangs su gtogs pa'o// (P4b7)

⁴⁷ tshig DCPG; ill. N.

⁴⁸ byed DCNG; ill. P.

⁴⁹ // DCPG; / N.

⁵⁰ / DCPG; om. N.

⁵¹ shes DCPN; shas G.

⁵² / DCPG; // N.

⁵³ / DCPG; om. N.

⁵⁴ ni DPG; de C; ill. N.

⁵⁵ rang DCPG; ill. N.

⁵⁶ rig PNG; reg DC.

⁵⁷ / DCNG; // P.

⁵⁸ / DPNG; om. C.

⁵⁹ mang DCNG; ill. P.

⁶⁰ // DPNG; / C.

⁶¹ / DC; om. PNG.

⁶² bsnam DCPG; ill. N.

⁶³ kun tu bsnam par bya ba DC; kun tu bsnam par bya ba dang/ kun tu bsnam par bya ba PG; kun du bsnam par bya ba dang/ kun tu bsnam par bya ba N.

是鼻所行，鼻境界，鼻識所行，鼻識境界，鼻識所緣，意識所行，意識境界，意識所緣。

1.1.3.4

助伴及業如前應知。

1.1.4

1.1.4.1

云何舌識自性？謂依舌了別味。

1.1.4.2

彼所依者，俱有依謂舌，等無間依謂意，種子依謂一切種子阿賴耶識。

舌謂四大種所造，舌識所依淨色，無見有對。意及種子如前分別。

1.1.4.3

1.1.4.3.1

彼所緣者，謂味無見有對。此復多種。

1.1.4.3.2

謂苦、酢、辛、甘、{T280a}鹹、淡，可意、不可意、若捨處所舌所嘗。

1.1.4.3.3

又味者，謂應{磧 401a}嘗、應吞、應噉、應飲、應舐、應吮、應受用。如是等差別之名。

是舌所行，舌境界，舌識所行，舌識境界，舌¹²識所緣，意識所行，意識境界，意識所緣。

1.1.4.4

助伴及業如前應知。

1.1.5

1.1.5.1

云何身識自性？謂依身了別觸。

¹² 「舌」金，麗，磧，T；「古」房。

sna'i spyod yul dang/ (C4a7) sna'i yul dang/ sna'i rnam par shes pa'i spyod yul (D4a5) dang/ sna'i rnam par (G5b4) shes pa'i yul dang/ (N5b2) sna'i rnam par shes pa'i dmigs pa dang/ yid kyi rnam par shes pa'i spyod yul dang/ yid kyi rnam par (P4b8) shes pa'i yul dang/ yid kyi rnam par shes (C4b1) pa'i dmigs pa ni rnam grangs su gtogs pa'o//

1.1.3.4

grogs dang las ni snga⁶⁴ ma bzhin (G5b5) du rig (D4a6) par bya'o//

1.1.4

1.1.4.1

lce'i rnam par (N5b3) shes pa gang zhe na/ gang lce la⁶⁵ brten nas so sor (P5a1) rnam par rig pa'o//⁶⁶

1.1.4.2

gnas gang zhe na/ lce ni lhan cig 'byung ba'i gnas so// yid ni de ma thag pa'i (C4b2) gnas so// sa bon thams cad pa kun gzhi rnam par shes pa de nyid ni sa bon gyi (G5b6) gnas so// (P5a2)

lce gang (D4a7) zhe na/ gang 'byung (N5b4) ba chen po bzhi po dag rgyur byas pa/⁶⁷ lce'i rnam par shes pa'i rten po⁶⁸ gzugs dang ba ste/ bstan du med la thogs pa dang bcas pa'o// yid dang sa bon gyi rnam (C4b3) par dbye ba ni snga ma bzhin no// (P5a3)

1.1.4.3

1.1.4.3.1

dmigs pa gang zhe na/ ro rnam pa (G6a1) du ma bstan du med la thogs⁶⁹ pa dang bcas (D4b1) (N5b5) pa dag ste/

1.1.4.3.2

de dag kyang ro kha ba dang/ skyur ba dang/ tsha ba dang/ bska ba dang/ lan tshwa'i ro dang/⁷⁰ mngar ba ste/ yid du 'ong ba dang/ yid du mi 'ong (P5a4) ba dang/ btang snyoms (C4b4) kyi gnas myang bar bya ba dag go//

1.1.4.3.3

de (G6a2) la ro dang/ myang bar bya ba dang/ mid par bya ba dang/ bza' ba dang/ (D4b2) (N5b6) btung ba dang/ bldag⁷¹ pa dang/ gzhib⁷² pa dang/ nye bar spyad⁷³ pa la sogs pa ni rnam (P5a5) grangs su gtogs pa'o//

lce'i spyod yul dang/ lce'i yul dang/ lce'i rnam par shes (C4b5) pa'i spyod yul dang/ (G6a3) lce'i rnam par⁷⁴ shes pa'i yul dang/ lce'i rnam⁷⁵ par shes pa'i dmigs pa (N5b7) dang/ yid kyi rnam (D4b3) par (P5a6) shes pa'i spyod yul dang/ yid kyi rnam par shes pa'i yul dang/ yid kyi rnam par shes pa'i dmigs pa ni rnam grangs su gtogs pa'o//

1.1.4.4

grogs dang (C4b6) las (G6a4) ni snga ma bzhin du rig par bya'o//

1.1.5

1.1.5.1

lus kyi rnam par shes pa (P5a7) gang zhe na/ gang lus la (N6a1) brten nas reg bya so sor rnam par rig (D4b4) pa'o//

⁶⁴ snga DPNG; sna C.

⁶⁵ la DCP; om. NG.

⁶⁶ // DCPG; / N.

⁶⁷ pa/ DCPG; la N.

⁶⁸ po DCPG; ill. N.

⁶⁹ thogs DPNG; ill. C.

⁷⁰ / DC; om. PNG.

⁷¹ bldag DC; ldag PNG.

⁷² gzhib DC; bzhib PNG.

⁷³ spyad DPNG; spyod C.

⁷⁴ par DCNG; ill. P.

⁷⁵ rnam DCNG; ill. P.

1.1.5.2

彼所依者，俱有依謂身，等無間依謂意，種_{{金 339b}{麗 467b}}子_{房 4a}依謂一切種子阿賴耶識。身謂四大種所造，身識所依淨色，無見有對。意及種子如前分別。

1.1.5.3

1.1.5.3.1

彼所緣者，謂觸無見有對。此復多種。

1.1.5.3.2

謂地水火風，輕性、重性、滑性、澁性，冷、飢、渴、飽、力劣緩急、病、老、死、蚌¹³、悶、粘、疲、息、軟性¹⁴、勇。如是等類，有衆多觸。

1.1.5.3.3

此復三種。謂好觸、惡觸、捨處所觸身所觸。

1.1.5.3.4

又觸者，謂所摩、所觸、若鞭¹⁵、若軟¹⁶、若動、若煖。如是等差別之名。

是身所行，身境界，身識所行，身識境界，身識所緣，意識所行，意識境界，意識所緣。

1.1.5.4

助伴及業如前應知。

¹³ 「蚌」金，麗，磧，T；「癢」房，(T)天。

¹⁴ 「性」金，房，磧，(T)資普徑崇；「怯」麗，T。

¹⁵ 「鞭」金，房，麗，磧，T；「硬」(T)天；「鞭」(T)崇。

¹⁶ 「軟」金，房，麗，磧，T；「濕」(T)天。

1.1.5.2

gnas gang zhe na/ lus ni lhan cig 'byung ba'i gnas so//⁷⁶ yid ni de ma thag pa'i gnas⁷⁷ so//⁷⁸ sa bon thams⁷⁹ cad pa kun (G6a5) gzhi (C4b7) rnam par (P5a8) shes pa de nyid ni sa⁸⁰ bon gyi gnas so//

lus gang zhe na/ gang 'byung (N6a2) ba chen po bzhi po dag rgyur byas pa lus kyi rnam par shes pa'i rten po (D4b5) gzugs dang ba ste/ bstan du med la thogs pa dang bcas pa'o// yid (P5b1) dang sa bon gyi rnam par dbye ba ni snga ma (G6a6) bzhin no// (C5a1)

1.1.5.3

1.1.5.3.1

dmigs pa gang zhe na/ reg bya rnam pa bstan du med la thogs pa dang (N6a3) bcas⁸¹ pa dag ste/

1.1.5.3.2

'di lta ste/ sa dang/⁸² chu dang/⁸³ me dang/ rlung dang/ yang ba nyid⁸⁴ (D4b6) dang/ lci ba nyid (P5b2) dang/ 'jam pa nyid dang/ rtsub pa nyid dang/ grang ba dang/ bkres pa dang/ skom pa⁸⁵ (C5a2) dang/ (G6b1) ngoms pa dang/ nyams stobs⁸⁶ dang/ nyam chung ba dang/ nad dang/ rga ba dang/ 'chi ba dang/ (N6a4) g.ya' ba dang/ brgyal (P5b3) ba dang/ 'dred pa dang/ ngal ba dang/⁸⁷ ngal sos pa (D4b7) dang/ nem nem po nyid dang/ mdangs bzang ba dang/ de lta bu dang/⁸⁸ mthun⁸⁹ pa'i reg bya (C5a3) rnam pa mang (G6b2) po dag go//

1.1.5.3.3

de yang reg na bde ba dang/ reg⁹⁰ na sdug bsngal ba (P5b4) dang/ btang snyoms kyi⁹¹ gnas kyi reg par bya'o// (N6a5)

1.1.5.3.4

de la reg bya dang/ reg pa dang/ reg par bya ba dang/ rtsub pa dang/ rlan pa dang/ (D5a1) g.yo ba dang/ dro ba la sogs pa ni rnam grangs su (C5a4) gtogs pa'o// (G6b3)

lus kyi spyod (P5b5) yul dang/ lus kyi yul dang/ lus kyi rnam par shes pa'i spyod yul dang/ lus kyi rnam par shes pa'i yul dang/ (N6a6) lus kyi rnam par shes pa'i dmigs pa dang/ (D5a2) yid kyi rnam par shes pa'i spyod yul dang/ yid kyi (P5b6) rnam (C5a5) par shes pa'i (G6b4) yul dang/ yid kyi rnam par shes pa'i dmigs pa ni rnam grangs su gtogs pa'o//

1.1.5.4

grogs⁹² dang las ni snga ma bzhin du rig par bya'o//

⁷⁶ // DCPG; / N.

⁷⁷ gnas DCNG; ill. P.

⁷⁸ // DCPG; / N.

⁷⁹ thams DPNG; ill. C.

⁸⁰ sa DCPN; so C.

⁸¹ bcas DCPG; ill. N.

⁸² / DC; om. PNG.

⁸³ / DC; om. PNG.

⁸⁴ ba nyid DPNG; ill. C.

⁸⁵ skom pa DPNG; skoms C.

⁸⁶ nyams stobs DC; nyam stabs P; nyam stobs NG.

⁸⁷ ngal ba dang/ DCPG; om. N.

⁸⁸ dang DCPG; dang/ N.

⁸⁹ mthun DC; 'thun PNG.

⁹⁰ reg DPNG; rig C.

⁹¹ kyi PNG; kyi DC.

⁹² grogs DCPG; grags N.

1.2

1.2.1

復次，雖眼不壞，色現在前，能生作意若不正起，所生眼識必不得生。
要眼不壞，色現在前，{磧 401b}能生作意正復現起，所生眼識方乃得生。
如眼識¹⁷，乃至身識，應知亦爾。

1.2.2

復次，由眼識生，三心可得。如其次第，謂率爾心、尋求心、決定心。初是眼識，二在意識。

決定心後方有染淨。此後，乃有等流眼識善不善轉，而彼不由自分別力。乃至此意不趣餘境，經爾所時，眼意二識或善或染相續而轉。{金 339c}{麗 467c}

如眼識生，乃至身識，應知亦爾。

1.3

復次，應觀五識所依如往餘方者所乘，所緣如所為事，助伴如同侶，業如自功能。

復{T280b}有差別，應觀五識所依如居家者家，所緣如所受用，助伴如僕使等，業如作用。

[Part 2, 『瑜伽師地論』卷 1 「本地分中意地」]

(T 280b4-26, 金 339c8-340a11, 房 4a25-b18, 麗 467c8-468a11, 磧 401b14-402a18)

2.0

已說五識身相應地。云何意地？此亦五相應知。謂自性故，彼所¹⁸依故，彼所緣故，彼助伴故，彼作¹⁹業故。

2.1

云何意自性？謂心、意、識。

¹⁷ 「識」金，房，磧，(T)資普徑崇；「識生」麗，T。

¹⁸ 「彼所」金，房，麗，T；「所」磧，(T)資普徑崇。

¹⁹ 「彼作」房，麗，磧，T；「作」金。

1.2

1.2.1

de la mig (N6a7) kyang yongs su ma nyams pa dang/ gzugs (P5b7) kyang snang (D5a3) bar gyur du zin kyang/ de dang 'byung ba (C5a6) yid la byed pa (G6b5) yang nye bar gnas par ma gyur na/ de las skyes pa'i mig gi rnam par shes pa 'byung bar mi 'gyur te/

'di ltar mig kyang yongs su ma nyams la/ gzugs kyang (P5b8) (N6b1) snang bar gyur cing/ de dang 'byung ba yid la byed pa yang nye bar gnas (D5a4) par (C5a7) gyur na/ de'i (G6b6) phyir de las skyes pa'i mig gi rnam par shes pa 'byung bar 'gyur ro//

mig gi rnam par shes pa ji lta ba bzhin du/ rna ba dang/ sna dang/ (P6a1) lce dang/ lus kyi rnam par shes pa nmams (N6b2) la yang de bzhin du blta bar bya'o//

1.2.2

de la mig gi rnam par shes (C5b1) pa (G7a1) byung ba na⁹³/ nye bar (D5a5) gnas pa las byung⁹⁴ ba dang/ tshol ba dang/ nges pa'i sems rnam pa (P6a2) gsum rim bzhin du dmigs par 'gyur te/ de la dang po ni mig gi rnam par shes pa nyid do// gnyis ni (N6b3) yid kyi rnam par shes pa'o// (G7a2)

de la nges pa'i sems phan chad nas/ kun nas nyon mongs (C5b2) pa dang/ rnam par (D5a6) (P6a3) byang bar 'gyur bar blta'o// de nas de'i rgyu mthun⁹⁵ pa'i mig gi rnam par shes pa yang/ dge ba dang mi dge bar 'byung bar 'gyur te/ rang gi rtog pa'i dbang⁹⁶ (N6b4) gis (G7a3) ni ma yin no// ji srid du yid de gzhan la rnam par (P6a4) g.yengs par⁹⁷ ma gyur pa de srid du⁹⁸ yid kyi (C5b3) rnam par shes pa dang/ mig gi (D5a7) rnam par shes pa gnyi ga dge ba 'am/ nyon mongs pa can du 'gyur ro//

mig gi rnam par shes pa byung ba na/ ji lta (G7a4) ba bzhin du (P6a5) (N6b5) lus kyi rnam par shes pa'i bar du yang de bzhin du rig par bya'o//

1.3

de la gnas ni yul gzhan du 'gro ba'i bzhon pa (C5b4) bzhin du blta⁹⁹ bar bya'o// rnam par shes (D5b1) pa'i tshogs lnga po dag ni grogs nmams ni 'gron¹⁰⁰ po 'grogs pa (P6a6) (G7a5) lta bu'o// dmigs (N6b6) pa ni bya ba'i don lta bu'o// las ni rang gi nus pa lta bu'o//

rnam grangs gzhan du¹⁰¹ na/ de dag gi gnas ni¹⁰² khyim na gnas pa'i khyim lta bur blta'o// (C5b5) dmigs pa ni longs spyod lta (P6a7) bu'o// (D5b2) grogs ni bran¹⁰³ dang bran mo la sogs (G7a6) pa lta bu'o// las ni rtsol ba (N6b7) lta bu'o//

rnal 'byor spyod pa'i sa las rnam par shes pa'i tshogs lnga dang ldan pa'i sa ste dang po'o// //

[Part 2]

(D5b2–6a6, C5b5–6b3, P6a7–7a6, N6b7–7b4, G7a6–8b1)

2.0

yid kyi sa gang zhe na/ (P6a8) de yang rnam pa lnga kho nar blta bar bya ste/ (C5b6) ngo bo (G7b1) nyid dang/ gnas dang/ (D5b3) dmigs pa dang/ grogs dang/¹⁰⁴ las so//¹⁰⁵

2.1

de la (N7a1) ngo bo nyid gang zhe na/ sems dang yid dang rnam par shes pa gang yin pa'o//

⁹³ na DPNG; ni C.

⁹⁴ byung DCPG; ill. N.

⁹⁵ mthun DC; 'thun PNG.

⁹⁶ dbang DCPG; ill. N.

⁹⁷ g.yengs par DC; g.yeng bar PNG.

⁹⁸ du DC; du/ PNG.

⁹⁹ blta DCNG; ill. P.

¹⁰⁰ 'gron DC; mgron PNG.

¹⁰¹ du DCPG; ill. N.

¹⁰² ni DC; ni/ PNG.

¹⁰³ bran DCPG; dran N.

¹⁰⁴ / DC; om. PNG.

¹⁰⁵ // DPNG; / C.

2.1.1

心謂一切種子所隨，依止性所隨，依附依止²⁰性，體能執受，{房 4b}異熟所攝阿賴耶識。

2.1.2

意謂恒行²¹意，及{磧 402a}六識身無間滅意。

2.1.3

識謂現前了別所緣境界。

2.2

彼所依者，等無間依²²謂意，種子依謂如前說一切種子阿賴耶識。

2.3

彼所緣者，謂一切法，如其所應。若不共者所緣，即受、想、行蘊，無為，無見無對色，六內處，及一切種子。

2.4

彼助伴者，謂作意、觸、受、想、思，欲、勝解、念、三摩地、慧，信、慚、愧、無貪、無瞋、無癡、精進、輕安、不放逸、捨、不害，貪、恚、無明、慢、見、疑，忿、恨、覆、惱、嫉、慳、誑、諂、僞、害、無慚、無愧、昏{金 340a}{麗 468a}沈、掉舉、不信、懈怠、放逸、邪欲、邪勝解、忘念、散亂、不正知，惡作、睡眠、尋、伺。如是等輩俱有相應心所有²³法，是名助伴。同一所緣，不同一²⁴行相，一時俱有，一一而轉，各自種子所生，更互相應，有行相，有所緣，有所依。

²⁰ 「依附依止」房，磧，(T)資普徑崇；「依止」金；「<依附依止>」麗，T。

²¹ 「行」房，麗，T；「行依止性」金，磧，(T)資普徑。

²² 「依」房，麗，T；「依依」金，磧，(T)資普。

²³ 「所有」房，麗，磧，T；「所」金。

²⁴ 「不同一」房，磧，(T)資普徑崇；「不同」金；「非同一」麗，T。

2.1.1

sems gang (P6b1) zhe na/ sa bon thams cad dang ldan pa dang/ gnas kyi dngos por gyur pa dang/ (G7b2) gnas kyi dngos por gnas pa dang/ len (C5b7) par byed pa (D5b4) rnam par smin par bsdu pa kun gzhi (N7a2) rnam par shes pa gang yin pa'o//

2.1.2

yid (P6b2) gang zhe na/ rnam par shes pa'i tshogs drug po dag 'gags ma thag pa gang yin pa dang/ nyon (G7b3) mongs pa can gyi yid ma rig pa dang/ bdag¹⁰⁶ tu lta¹⁰⁷ ba dang/ nga'o snyam pa'i nga rgyal dang/ sred¹⁰⁸ pa'i (D5b5) (C6a1) mtshan nyid kyi nyon (P6b3) mongs pa rnam pa (N7a3) bzhi¹⁰⁹ dang rtag tu ldan pa gang¹¹⁰ yin pa'o//

2.1.3

rnam par shes pa gang zhe na/ dmigs pa rnam par (G7b4) rig par byed pas nye bar gnas pa gang yin pa'o//

2.2

gnas gang zhe na/ yid de ma thag pa'i gnas dang/ (P6b4) snga ma bzhin du sa bon (C6a2) thams cad pa kun gzhi (D5b6) rnam par shes pa¹¹¹ sa bon gyi (N7a4) gnas so//

2.3

dmigs pa gang zhe na/ chos thams cad ni (G7b5) dmigs pa ste/ 'ba' zhig gi tshor ba'i phung po dang/ 'du shes¹¹² kyi phung po dang/ (P6b5) 'du byed kyi¹¹³ phung po dang/ 'dus ma byas dang/ bstan du med cing thogs pa med (C6a3) pa'i gzugs dang/ skye mched (D5b7) drug dang/ sa bon thams cad (N7a5) do//

2.4

grogs gang (G7b6) zhe na/ 'di lta ste/ yid la byed pa dang/ reg pa dang/¹¹⁴ (P6b6) tshor ba dang/ 'du shes dang/ sems pa dang/ 'dun pa dang/¹¹⁵ mos pa dang/ dran pa dang/ ting nge 'dzin dang/ shes rab dang/ dad pa dang/ (C6a4) ngo tsha shes pa dang/ khrel yod pa (D6a1) dang/ ma¹¹⁶ chags pa dang/ (G8a1) (N7a6) zhe (P6b7) sdang med pa dang/ gti mug med pa dang/ brtson¹¹⁷ 'grus dang/ shin tu sbyangs pa dang/ bag yod pa dang/ btang snyoms dang/ rnam par mi 'tshes¹¹⁸ ba dang/ 'dod chags dang/ khong khro¹¹⁹ ba dang/ ma rig pa dang/ (P6b8) nga (G8a2) rgyal (C6a5) dang/¹²⁰ lta (D6a2) ba dang/ the tshom dang/ khro ba dang/ khon du (N7a7) 'dzin pa dang/ 'chab pa dang/ 'tshig pa dang/ phrag dog dang/ ser sna dang/ sgyu dang/ g.yo dang/ rgyags pa dang/ rnam par 'tshes ba dang/ (P7a1) ngo tsha med pa dang/ khrel med pa dang/ rmugs pa dang/ (G8a3) rgod pa dang/ ma dad pa (C6a6) dang/ le lo dang/ (D6a3) bag med pa dang/ brjed ngas (N7b1) pa dang/ rnam par¹²¹ g.yeng ba dang/ shes bzhin ma (P7a2) yin pa dang/ 'gyod pa dang/ gnyid dang/ rtog pa dang/ dpyod pa dang/ de lta bu dang mthun pa sems las byung ba'i chos lhan¹²² (G8a4) cig 'byung zhing mtshungs par ldan pa rnams (C6a7) ni¹²³ grogs zhes bya ste/ dmigs pa (D6a4) gcig (P7a3) la rnam pa du ma (N7b2) dang¹²⁴ lhan cig 'byung ba re re byung ba/ rang gi sa bon las¹²⁵ nges

¹⁰⁶ bdag DCPG; ill. N.

¹⁰⁷ lta DC; blta PNG.

¹⁰⁸ sred DCPG; ill. N.

¹⁰⁹ bzhi DCPG; ill. N.

¹¹⁰ gang DC; yang PNG.

¹¹¹ pa PNG; pas DC.

¹¹² shes DCPG; ill. N.

¹¹³ kyi CPNG; gyi D.

¹¹⁴ / DC; om. PNG.

¹¹⁵ / DC; om. PNG.

¹¹⁶ ma DPNG; ill. C.

¹¹⁷ brtson DCPG; ill. N.

¹¹⁸ 'tshes DCNG; ill. P.

¹¹⁹ khro DCNG; ill. P.

¹²⁰ / DC; om. PNG.

¹²¹ par DCPG; ill. N.

¹²² lhan DCPG; ill. N.

¹²³ ni PNG; kyi DC.

¹²⁴ dang DC; pa PNG.

¹²⁵ las DC; la PNG.

2.5

彼作業者，謂能了別自境所緣，是名初業。復能了別自相、共相。復能了別去、來、今世。復剎那了別，或相續了別。復為轉、隨轉，發淨不淨一切法、業。復能取愛、非愛果。復能引餘識身。又能為因，發起等流識身。

[Part 3, 『瑜伽師地論』卷 1「本地分中意地」]

(T 283a1-20, 金 343b17-c16, 房 8a8-25, 麗 471b17-c16, 磧 408a1-b1)

3.1

爾時，父母貪愛俱極，最後決定各出一滴濃厚精血，二滴和合，住母胎中，合為一段，猶如熟乳凝結之時。當於此處，一切種子、異熟所攝、執受所依阿賴耶識和合依託。

par 'byung ba/ mtshungs par ldan pa/ rnam pa dang bcas pa/ dmigs pa dang bcas (G8a5) pa/ gnas dang bcas pa dag go//

2.5

las gang (C6b1) (P7a4) zhe na/ bdag dang gzhan gyi yul gyi dmigs pa rnam par rig¹²⁶ par byed (D6a5) pa ni las dang po'o¹²⁷ (N7b3) yang rang dang spyi'i mtshan nyid rnam par rig par byed pa'o// yang 'das pa dang/ ma 'ongs pa dang/ da ltar¹²⁸ byung (G8a6) ba'i dus rnam (P7a5) par rig par byed pa'o// yang skad cig pas rgyu¹²⁹ rnam par rig par (C6b2) byed pa'o// yang dge ba dang mi dge ba'i chos rnam dang/ las rnam (D6a6) la 'jug cing rjes¹³⁰ su (N7b4) 'jug par byed do// yang de las gzhan pa'i rnam par shes (P7a6) pa'i tshogs¹³¹ rnam (G8b1) kyi¹³² sdug pa dang/¹³³ mi sdug¹³⁴ pa'i 'bras bu yongs su 'dzin¹³⁵ pa ste/ de'i rgyu las byung ba/ (C6b3) rgyu mthun¹³⁶ pa kun nas slong ba'i phyir ro//

[Part 3]

(D12a3–b5, C12b4–13a5, P13a8–14a2, N13a5–b5, G15b5–16b3)

3.1

de la pha ma gnyis (G15b6) chags par gyur te/ 'dod chags¹³⁷ drag po'i skabs (D12a4) su bab pa ni/ mjug¹³⁸ kho nar khu ba ska¹³⁹ ba 'byung bar 'gyur¹⁴⁰ (C12b5) ro// de'i rjes la gnyi ga las khu ba dang khrag gi (P13b1) thigs pa gnyis gdon mi za bar 'byung bar 'gyur ro//¹⁴¹ (N13a6) gnyis ka'i khu¹⁴² ba (G16a1) dang khrag gi thigs¹⁴³ pa de gnyis ma'i skye gnas su 'dres par gyur nas/ dper na 'o ma bskol (D12a5) ba grangs pa'i spris¹⁴⁴ ma bzhin du spris¹⁴⁵ ma lta bur chags¹⁴⁶ (P13b2) nas 'dus (C12b6) shing 'dug par 'gyur te/ der¹⁴⁷ sa bon thams cad (G16a2) pa rnam par smin par¹⁴⁸ bsdus pa/ lus len par byed pa kun gzhi rnam par shes pa 'jug (N13a7) par 'gyur ro//

¹²⁶ rig DCPG; rig/ N.

¹²⁷ po'o DCPG; ill. N.

¹²⁸ ltar DCPG; ill. N.

¹²⁹ pas rgyu DC; pa'i PNG.

¹³⁰ rjes DCPG; ill. N.

¹³¹ tshogs DCPG; ill. N.

¹³² kyi DCPG; ill. N.

¹³³ / PNG; om. DC.

¹³⁴ sdug DCPG; ill. N.

¹³⁵ 'dzin DCP; 'dzin 'dzin G; ill. N.

¹³⁶ mthun DC; 'thun PNG.

¹³⁷ chags DCPG; chad N.

¹³⁸ mjug DCPN; 'jug G.

¹³⁹ ska DCPG; ill. N.

¹⁴⁰ 'gyur DCNG; ill. P.

¹⁴¹ roll PNG; te/ DC.

¹⁴² khu DCPG; ill. N.

¹⁴³ thigs DCPG; ill. N.

¹⁴⁴ spris DC; pris PNG.

¹⁴⁵ spris DC; pris PNG.

¹⁴⁶ chags DCPG; chad N.

¹⁴⁷ der PNG; des DC.

¹⁴⁸ par PNG; pa DC.

3.2

3.2.0

云何和合依託？謂：

3.2.1

此所出濃厚精血合成一段，與顛倒緣中有俱_{{金 343c}{麗 471c}}滅。與滅同時，即由一切種子²⁵識功能力故，有餘微細根及大種和²⁶合而生，及餘有根同分精血和合搏生。

於此時中，說識已住，結生相續。即此名為羯羅藍位。

3.2.2

此羯羅藍中，有諸根大種，唯與身根及根所依處大種俱生。即由此身根俱生諸根大種力故，眼等諸根次第當生。又由此身根俱生根所依處大種力故，諸根依處次第當生。

由彼諸根及所依處具足生故，名得圓滿依止成就。

3.2.3

又此羯羅藍色與心心所²⁷安危共同，故名依託。由心心所²⁸依託力故，色不爛壞。色損益故，彼亦損益。是故說彼安危共同。

3.2.4

又，此羯羅藍，識最初託處即名肉心。如是，識於此處最初託，即從此處最後捨。

²⁵ 「子」金，方，麗，T；(判読し難い) 磧。

²⁶ 「和」金，方，麗，T；「種」磧。

²⁷ 「所」金，麗，T；「法」磧，(T)資普徑崇。

²⁸ 注 27 と同じ。

3.2

3.2.0

ji¹⁴⁹ ltar 'jug par 'gyur zhe na/

3.2.1

khu ba dang khrag 'dus (P13b3) nas (D12a6) spris¹⁵⁰ ma lta bur gyur ba de dang lhan cig tu ste/ phyin ci log tu (C12b7) dmigs (G16a3) pa bar ma do'i srid pa de¹⁵¹ 'gag¹⁵² par 'gyur la/ de 'gag pa dang dus gcig tu rnam par shes pa sa bon thams¹⁵³ cad pa de'i mthus de las gzhan pa dbang (P13b4) (N13b1) po'i 'byung ba chen po¹⁵⁴ cha phra ba dang 'dres pa/¹⁵⁵ (D12a7) de dang mthun¹⁵⁶ pa'i khu ba dang¹⁵⁷ khrag 'dus pa (G16a4) dbang po dang bcas (C13a1) pa gzhan 'byung bar 'gyur te/

de'i dus¹⁵⁸ skabs¹⁵⁹ su rnam par shes pa gnas par gyur pa ni nying mtshams sbyor ba zhes bya ste/ (P13b5) de ni mer mer po'i dus yin no//

3.2.2

mer mer po¹⁶⁰ de'i dbang po'i 'byung ba chen po de dag (N13b2) kyang (D12b1) lus kyi¹⁶¹ dbang po¹⁶² dang (G16a5) lhan cig 'byung ngo// (C13a2) dbang po'i rten gyi 'byung ba chen po mams dang/ dbang po'i 'byung ba chen po de dag nyid dang/ lus kyi dbang po (P13b6) yang lhan cig tu 'byung bar 'gyur ro// de nas dbang po'i 'byung ba chen¹⁶³ po de dag rgyur byas nas/ mig gi dbang po (D12b2) la (G16a6) sogs¹⁶⁴ pa rim gyis (N13b3) 'grub par 'gyur ro// dbang (C13a3) po'i rten gyi 'byung ba chen po de dag kyang rgyur byas nas rim gyis (P13b7) dbang po'i rten mams kyang 'grub par 'gyur ro//

dbang po mams dang/ de dag¹⁶⁵ gi rten mams 'byung¹⁶⁶ ba las lus thams cad 'grub¹⁶⁷ (G16b1) cing 'thob par 'gyur ro// (D12b3)

3.2.3

mer mer po'i gzugs de yang sems (N13b4) dang sems (C13a4) las byung ba'i chos de (P13b8) dag dang/ gcig la gcig grub pa dang bde bas zhugs pa zhes bya'o// sems kyi¹⁶⁸ dbang gis kyang de rul bar mi 'gyur ro// de'i phan pa dang gnod pa las (G16b2) kyang/ sems dang sems las byung ba (D12b4) mams la phan pa dang/ gnod (P14a1) par 'gyur ro//¹⁶⁹ (C13a5) de bas (N13b5) na gcig la gcig grub pa dang bde ba zhes bya'o//

3.2.4

mer mer po'i phyogs gang du rnam par shes pa zhugs par gyur pa de ni de'i tshe de'i snying gi phyogs yin no// de (G16b3) ltar na rnam par shes (P14a2) pa de ni phyogs gang nas 'chi 'pho ba'i (D12b5) phyogs de nyid du thog ma kho¹⁷⁰ nar 'jug go//

¹⁴⁹ ji DCPG; ill. N.

¹⁵⁰ spris DC; pris PNG.

¹⁵¹ de DCPG; da N.

¹⁵² 'gag DC; 'gags PNG.

¹⁵³ thams DCNG; ill. P.

¹⁵⁴ po PNG; po 'byung ba chen po DC.

¹⁵⁵ / DCPG. om. N.

¹⁵⁶ mthun DC; 'thun PNG.

¹⁵⁷ dang PNG; dang/ DC.

¹⁵⁸ dus DC; om. PNG.

¹⁵⁹ skabs DCPG; ill. N.

¹⁶⁰ mer mer po DC; om. PNG.

¹⁶¹ kyi DCNG; ill. P.

¹⁶² po PNG; po'i DC.

¹⁶³ chen DCNG; ill. P.

¹⁶⁴ sogs DCPG; soḍ N.

¹⁶⁵ dag DCPG; ill. N.

¹⁶⁶ 'byung PNG; byung DC.

¹⁶⁷ cad 'grub DCPG; ill. N.

¹⁶⁸ sems kyi PNG; sems can gyi DC.

¹⁶⁹ ro// DC; tel PNG.

¹⁷⁰ kho DCPG; ill. N.

[Part 4, 『瑜伽師地論』卷3「本地分中意地」]

(T 291a1-c16, 金 359c17-361a10, 房 19b5-20b17, 麗 483a17-484b10, 磧 425a11-427a9)

4.1

4.1.1

復次，於心、心所品中，有心可得，及五十三心所可得。謂作意等，乃至尋、伺為後邊，如前說。

4.1.2

問：如是諸心所²⁹，幾依一切處心生，一切地，一切時，一切耶³⁰？答：五。謂作意等，思為後邊。

幾依一切處心生，一切地，非一切時，非一切耶³¹？答：亦五。謂欲等，慧為後邊。

幾唯依善，{金 360a}{麗 483b}非一切處心生，然一切地，非一切時，非一切耶³²？答：謂信等，不害為後邊。

幾唯依染污，非一切處心生，{磧 425b}非一切地，非一切時，非一切耶³³？答：謂貪等，不正知為後邊。

幾依一切處心生，非一切地，非一切時，非一切耶³⁴？答：謂惡作等，伺為後邊。

4.2

4.2.0

復次，根不壞，境界現前，能生作意正起，爾時從彼，識乃得生。

4.2.1

云何根不壞？謂有二種因。一不滅壞故，二不羸劣故。

²⁹ 「所」金，麗，T；「法」房，磧，(T)資普徑崇。

³⁰ 「耶」麗，磧，T；「俱」金，房。

³¹ 注30と同じ。

³² 「耶」金，麗，磧，T；「俱」房。

³³ 注32と同じ。

³⁴ 注32と同じ。

[Part 4]

(D28b6–31a1, C29a7–31b3, P32a3–34b4, N30a4–32a6, G37b2–40b2)

4.1

4.1.1

de la sems (C29b1) dang sems las byung ba'i tshogs la/ sems kyang dmigs la/ sems las (G37b3) byung ba lnga bcu rtsa gcig po ji (D28b7) skad smos pa (N30a5) 'di lta ste/ yid la byed (P32a4) pa la sogs pa nas/ rtog pa dang dpyod¹⁷¹ pa la thug pa'i bar dag kyang¹⁷² dmigs so//

4.1.2

sems las byung ba'i chos de dag las/ du zhig (C29b2) sa¹⁷³ thams cad pa/ (G37b4) sems can thams¹⁷⁴ cad du/ dus thams (P32a5) cad du/ thams cad 'byung zhe na/ smras pa/ yid la (D29a1) byed pa (N30a6) la sogs pa nas sems pa la thug pa yan chad lnga po rnams so//

du zhig sa¹⁷⁵ thams cad pa/ thams cad du¹⁷⁶ 'byung la/ dus (G37b5) thams (P32a6) cad du ma yin zhing/ thams (C29b3) cad ma yin zhe na/ lnga kho¹⁷⁷ na ste/ 'dun pa nas¹⁷⁸ shes rab la thug pa yan¹⁷⁹ chad do// (D29a2)

du zhig dge ba kho na yin la/ thams cad du (N30a7) ma yin mod kyi¹⁸⁰/ sa thams cad pa yin (P32a7) te/ dus thams cad du ma yin la/ (G37b6) thams cad kyang ma yin zhe na/ dad pa la sogs pa nas/ rnam par mi 'tshe¹⁸¹ ba la (C29b4) thug pa yan chad do//

du zhig nyon mongs can kho na yin la/ thams cad du yang ma (P32a8) yin/¹⁸² sa thams cad pa yang (D29a3) ma yin/ (N30b1) dus thams cad du yang ma yin/ (G38a1) thams cad kyang ma¹⁸³ yin zhe na/ 'dod chags la sogs pa nas/ shes bzhin ma yin pa la thug pa yan chad do// (P32b1)

du zhig thams cad du 'byung la/ (C29b5) sa thams cad pa ma yin/ dus thams cad du ma yin/ thams cad (G38a2) kyang ma yin zhe na/ 'gyod (D29a4) pa la (N30b2) sogs pa nas dpyod¹⁸⁴ pa la thug pa yan chad do//

4.2

4.2.0

de la dbang (P32b2) po¹⁸⁵ yang yongs su ma nyams shing/ yul yang snang bar gyur la/ de'i 'og tu de dang 'byung ba yid la byed pa nye bar (C29b6) gnas par gyur na/ rnam (G38a3) par shes pa 'byung bar 'gyur ro//

4.2.1

dbang po yongs su ma (P32b3) nyams pa ji lta (D29a5) bu yin (N30b3) zhe na/ rgyu gnyis kyis te/ ma rung bar ma gyur pa dang/ rtul ba'i rang bzhin ma yin pas so//

¹⁷¹ *dpyod* DCG; *spyod* P; ill. N.

¹⁷² *kyang* DPG; ill. CN.

¹⁷³ *sa* DC; *pa* PNG.

¹⁷⁴ *thams* DCPG; ill. N.

¹⁷⁵ *sa* DC; *pa* PNG.

¹⁷⁶ *du* DCNG; om. P.

¹⁷⁷ *kho* DCPG; ill. N.

¹⁷⁸ *nas* DCNG; ill. P.

¹⁷⁹ *yan* DPNG; *chan* C.

¹⁸⁰ *kyi* DCPG; *kyis* N.

¹⁸¹ *'tshe* DCNG; ill. P.

¹⁸² *thams cad du yang ma yin/* PNG; om. DC.

¹⁸³ *ma* DCPG; ill. N.

¹⁸⁴ *dpyod* PNG; *spyod* DC.

¹⁸⁵ *dbang po* DPNG; ill. C.

4.2.2

云何境界現前？謂或由所依處故，或由自性故，或由方故，或由時故，或由顯了、不顯了故，或由全分及一分故。若四種障所不障礙，亦非極遠——謂覆蔽障、隱沒障、映奪障、幻惑障。極遠有二種。謂處所極遠、損減極遠。

4.2.3

云何能生作意正起？由四因故。一由欲力，二由念力，三由境界力，四由數習力。

4.2.3.1

云何由欲力？謂若於是處心³⁵有愛著³⁶，心則於彼多作意生。

4.2.3.2

云何由念力？謂若於彼已善取其相，已極作想，心則³⁷於彼多作意生。

4.2.3.3

云何由境界力？謂若彼境界，或極廣大，或極可意，正現在前，心則於彼多_{房 20a}作意生。

4.2.3.4

云_{{金 360b}{麗 483c}}何由數習力？若於彼境界已極串習，已極諳悉，心即於彼_{磧 426a}多作意生。

4.2.3.5

若異此者，應於一所緣境，唯一作意一切時生。

³⁵ 「處心」金，房，麗，磧，T；〔處〕(T)倉。

³⁶ 「著」金，麗，磧，T；「若」房。

³⁷ 「則」金，房，麗，磧，T；「即」(T)倉。

4.2.2

yul snang bar gyur pa ji lta bu yin zhe na/ 'di lta ste/ rten (G38a4) tam/ ngo bo nyid (C29b7) dam/ (P32b4) yul lam/ dus sam/ gsal ba'am/ mi gsal ba'am/ dngos po mtha' dag gam¹⁸⁶ (D29a6) phyogs gcig (N30b4) kyang rung¹⁸⁷ ste/ gal te sgrib pa¹⁸⁸ bzhi po dag gis ma bsgribs¹⁸⁹ pa dang/ ma bskal¹⁹⁰ pa yin (P32b5) te/ sgrib g.yog gi (G38a5) sgrib pa dang/ mi snang bar byed pa dang/ zil gyis non (C30a1) pa dang/ mig slu bar byed pas ma bsgribs shing/¹⁹¹ yul gyis bskal pa dang/ chung ngus bskal (D29a7) pa gnyis kyis¹⁹² (N30b5) ma (P32b6) bskal pa'o//

4.2.3

de dang 'byung ba yid¹⁹³ la byed pa ji¹⁹⁴ lta 'byung (G38a6) bar 'gyur zhe na/ rnam pa bzhis 'gyur te 'dun pa'i stobs dang/¹⁹⁵ (C30a2) dran pa'i stobs dang/ yul gyi stobs dang/ goms pa'i¹⁹⁶ stobs kyis (P32b7) 'byung bar 'gyur ro//

4.2.3.1

'dun pa'i stobs kyis ji lta bu zhe na/ gang du¹⁹⁷ (D29b1) rjes¹⁹⁸ (N30b6) su chags pa der sems (G38b1) shas cher 'jug pa 'byung ba'o//

4.2.3.2

dran pa'i stobs kyis ji lta bu zhe na/ gang du¹⁹⁹ shin tu mtshan (C30a3) ma bzung ba (P32b8) dang/ shin tu rab tu bkra bar bzung ba²⁰⁰ der sems shas²⁰¹ cher 'jug pa 'byung ba'o//

4.2.3.3

yul gyi²⁰² stobs kyis ji lta bu zhe na/ gang (G38b2) na yul cher²⁰³ (D29b2) (N30b7) rags pa'am/ ches yid du 'ong ba nye bar gnas pa der (P33a1) sems shas cher 'jug pa 'byung ba'o//

4.2.3.4

goms pa'i (C30a4) stobs kyis ji lta bu zhe na/ shin tu²⁰⁴ 'dris²⁰⁵ shing/ shin tu²⁰⁶ yongs su 'dris²⁰⁷ par gyur²⁰⁸ pa gang yin pa der (G38b3) sems shas cher (P33a2) 'jug pa 'byung ba'o//

4.2.3.5

de lta ma yin na (D29b3) dmigs²⁰⁹ (N31a1) pa gcig la rtag tu yid la byed pa rnam pa²¹⁰ gcig pu 'byung bar 'gyur ro//

¹⁸⁶ gam DPNG; gam/ C.

¹⁸⁷ rung DPNG; ill. C.

¹⁸⁸ pa DPNG; ill. C.

¹⁸⁹ bsgribs DC; sgribs PNG.

¹⁹⁰ bskal DPNG; ill. C.

¹⁹¹ / DPNG; ill. C.

¹⁹² kyis DCPG; ill. N.

¹⁹³ yid PNG; yin DC.

¹⁹⁴ ji DCPG; ill. N.

¹⁹⁵ / DPNG; // C.

¹⁹⁶ pa'i DCPN; om. G.

¹⁹⁷ du PNG; om. DC.

¹⁹⁸ rjes DCPG; ill. N.

¹⁹⁹ du DC; om. PNG.

²⁰⁰ ba DPNG; bar C.

²⁰¹ shas DCPG; ill. N.

²⁰² gyi DPNG; kyi C.

²⁰³ cher DCPG; ill. N.

²⁰⁴ tu DCPG; du N.

²⁰⁵ 'dris DC; 'dres PNG.

²⁰⁶ tu DCPG; du N.

²⁰⁷ 'dris DCNG; ill. P.

²⁰⁸ gyur DCPG; ill. N.

²⁰⁹ dmigs DCPG; dmiḍ N.

²¹⁰ rnam pa DC; rnamṣ PNG.

4.3

4.3.1

又_{T291b}非五識身有二刹那相隨俱生，亦無³⁸展轉無間更互而生。又一刹那五識身生已，從此無間，必意識生。從此無間，或時散亂，或耳識生，或五識身中隨一識生。若不散亂，必定意識中第二決定心生。由此尋求、決定二意識故，分別境界。

4.3.2

又由二種因故，或染污，或善法生。謂分別故，及³⁹先所引故。意識中所有，由二種因。在五識者，唯由先所引故。所以者何？由染污及善意識力所引故，從此無間，於眼等識中，染污及善法生，不由分別。彼無分別故。由此道理，說眼等識隨意識轉。

4.3.3

如經言⁴⁰：起一心，若⁴¹衆多心。云何安⁴²立此一心耶？謂世俗言說一心刹那，非生起刹那。

云何世俗言說一心刹那？謂一處為依止，於一境界事，有爾所了別生。總爾所時，名一心刹那。又相似相續，亦說名一。與第二念極相似故。

³⁸ 「無」金，房，麗，磧，T；「非」(T)倉。

³⁹ 「及」金，房，麗，磧；「又」T。

⁴⁰ 「言」金，房，麗，T；「有」磧，(T)資普。

⁴¹ 「若」金，房，麗，T；「苦」磧，(T)普。

⁴² 「安」金，房，麗，T；「緣」磧。

4.3

4.3.1

rnam par shes pa'i (C30a5) tshogs²¹¹ lnga'i skad cig gnyis lhan cig tu 'byung²¹² ba yang med (P33a3) la/²¹³ (G38b4) phan tshun gyi²¹⁴ mjug thogs su phan tshun 'byung bar 'gyur ba yang med do²¹⁵// skad cig gcig la byung²¹⁶ (N31a2) ba'i rnam (D29b4) par shes pa'i tshogs lnga po de²¹⁷ dag gi mjug²¹⁸ thogs²¹⁹ su/ yid²²⁰ kyi rnam par shes (P33a4) pa (C30a6) nges par 'byung bar 'gyur ro²²¹// (G38b5) de ma thag tu gal te rnam par g.yeng bar gyur²²² na ni/ de'i 'og tu rnam par shes pa'am/ rnam par shes pa'i tshogs lnga po dag las gang yang²²³ rung ba zhis 'byung (N31a3) bar (D29b5) (P33a5) 'gyur ro// gal te rnam par g.yeng bar ma gyur na ni/ de'i (G38b6) 'og (C30a7) tu nges pa zhes bya ba yid kyi rnam par shes pa gnyis pa 'byung bar 'gyur ro// yid kyi rnam par shes pa tshol ba dang/ nges pa de gnyis (P33a6) kyis²²⁴ kyang de la rnam par rtog par byed do//

4.3.2

de la nyon mongs pa can nam/ dge (D29b6) (N31a4) ba'i chos (G39a1) ni rgyu gnyis po rnam par rtog pa dang/ (C30b1) sngon gyi 'phen²²⁵ pas 'byung bar 'gyur te/ de la yid kyi rnam par shes pa la ni rgyu (P33a7) gnyis kas 'byung ngo// rnam par shes pa'i tshogs lnga po dag la ni sngon gyi 'phen pa kho (G39a2) nas 'byung ngo// nyon mongs pa can dang/ dge ba'i yid (N31a5) kyi rnam par (D29b7) shes pa'i 'phen pas/²²⁶ de ma thag tu²²⁷ mig (P33a8) la (C30b2) sogs pa'i rnam par shes²²⁸ pa la nyon mongs pa can dang/ dge ba'i chos 'byung bar 'gyur gyi rnam par rtog pas ni (G39a3) ma yin te/ de dag ni rnam par mi rtog pa'i phyir ro// de nyid kyi phyir mig la sogs (P33b1) pa'i rnam (N31a6) par shes pa rnam ni/ yid (D30a1) kyi rnam par shes pa'i rjes su 'jug pa (C30b3) zhes bya'o//

4.3.3

gang sems gcig gam/ de'i phyi ma rnam shes (G39a4) bya ba de la²²⁹/ sems gcig tu ji ltar bzhas ce na/ tha snyad (P33b2) gdags pa'i sems kyi skad cig gis bzhas²³⁰ gi 'jug pa'i skad (N31a7) cig gis²³¹ ni ma yin (D30a2) no//

tha snyad gdags par sems gcig gang zhe na/ tshig²³² gcig la (C30b4) brten nas (G39a5) dngos po gcig la dus ji tsam gyis rnam par (P33b3) rig pa 'byung ba de tsam la sems gcig ces bya'o// de dang 'dra bar rgyu ba de la yang gcig ces bya'o// mi 'dra (N31b1) ba ni de las gnyis pa zhes (D30a3) bya'o//

²¹¹ tshogs DCNG; ill. P.

²¹² 'byung DCPG; byung N.

²¹³ / DCPG; om. N.

²¹⁴ gyi DCNG; ill. N.

²¹⁵ ba yang med do PNG; bar yang ma nges so DC.

²¹⁶ byung DC; 'byung PNG.

²¹⁷ de PNG; om. DC.

²¹⁸ mjug DPNG; 'jug C.

²¹⁹ thogs DCNG; ill. P.

²²⁰ yid DCNG; ill. P.

²²¹ 'gyur ro DCPG; ill. N.

²²² gyur DCPG; 'gyur N.

²²³ yang DCNG; ill. P.

²²⁴ kyis DC; om. PNG.

²²⁵ 'phen DCNG; 'pen P.

²²⁶ pas/ PNG; pa las DC.

²²⁷ tu DCNG; ill. P.

²²⁸ shes DCPG; ill. N.

²²⁹ de la DPNG; des C.

²³⁰ bzhas DC; gzhag PNG.

²³¹ gis PNG; om. DC.

²³² tshig DCPG; ill. N.

4.3.4

又意識任運散亂，緣不串習_{{金 360c}{麗 484a}}境時，無欲等生。_{磧 426b}爾時意識，名率爾墮心，唯緣過去境。

五識無間所生意識，或尋求，或決定，唯應說緣現在境。若此即緣⁴³彼境，生。

4.4

4.4.1

又識能了別事之總相。即此所未了別所了境相，能了別者，說名作意。即此可意、不可意、俱相違相，由觸了別。即此攝受損、益⁴⁴、俱相違相，由受了別。即此言說因相，由想了別。即此邪、正、俱相違行因相，由思了別。

是故，說彼作意等，思為後邊，名心所有法遍一切處、一切地、一切時、一切生。

4.4.2

4.4.2.1

作意云何？謂心迴轉。

4.4.2.2

觸_{房 20b}云何？謂三和合。

4.4.2.3

受云何？謂領納。

4.4.2.4

想云何？謂了像。

4.4.2.5

思云何？謂心造作。

⁴³ 「緣」金，房，麗，磧，T；「終」(T)資。

⁴⁴ 「益」金、房；「害」麗，磧，T。

4.3.4

de la yid kyi rnam par shes pa (G39a6) rtsol ba med cing²³³ rnam par (C30b5) (P33b4) g.yeng bar gyur²³⁴ pa dang/ dmigs pa ma 'dris pa la ni 'dun pa la sogs pa 'jug pa med do// yid kyi rnam par shes pa de ni nye bar gnas pa las byung ba zhes brjod par bya ste²³⁵/ 'das pa la (N31b2) dmigs (G39b1) pa (P33b5) kho (D30a4) na'o//

rnam par shes pa'i tshogs lnga po dag gi mjug (C30b6) thogs su byung ba'i yid²³⁶ tshol ba 'am/ nges pa ni gal te²³⁷ de'i yul de'i dmigs pa yin na/ da ltar gyi yul can kho na zhes bya'o//

4.4

4.4.1

de la rnam par shes (P33b6) pas ni (G39b2) dngos po mtha' dag gi mtshan nyid rnam par shes par (N31b3) byed do// (D30a5) de nyid rnam par rig par ma gyur pa ni/ rnam par (C30b7) shes par²³⁸ bya ba'i mtshan nyid ces bya ste/ de ni yid la byed pas rnam par shes par byed do// (P33b7) de nyid la sdug pa (G39b3) dang mi sdug pa dang gnyis ka las bzlog pa'i mtshan nyid gang yin pa de ni reg pas rig par byed do// (N31b4) de²³⁹ nyid la²⁴⁰ phan pa (D30a6) dang gnod pa dang/ gnyis ka las (C31a1) bzlog pa'i mtshan nyid²⁴¹ gang yin pa de ni²⁴² (P33b8) tshor bas rig par byed (G39b4) do// de nyid la tha snyad kyi mtshan ma'i mtshan nyid gang yin pa de²⁴³ ni 'du shes kyi rig par byed do// de nyid la yang dag pa dang log pa dang/²⁴⁴ gnyis ka²⁴⁵ las (N31b5) bzlog pa'i bsgrub²⁴⁶ pa'i mtshan²⁴⁷ (P34a1) ma'i (D30a7) (C31a2) mtshan nyid gang yin pa de ni sems (G39b5) pas rig par byed de/

de lta bas na sems las byung ba yid la byed pa la sogs pa nas/ sems pa la thug²⁴⁸ pa de dag ni sa thams (P34a2) cad pa/ thams cad la dus thams cad du thams cad 'byung (N31b6) bar 'gyur ro//

4.4.2

4.4.2.1

yid la byed pa gang (C31a3) zhe na/ (G39b6) sems kyi (D30b1) 'jug pa'o//

4.4.2.2

reg²⁴⁹ pa gang zhe na/ gsum 'dus pa'o//

4.4.2.3

tshor ba gang zhe na/²⁵⁰ (P34a3) myong ba'o//

4.4.2.4

'du shes gang zhe na/ kun shes pa'o//

4.4.2.5

sems pa gang zhe na/ sems mngon par 'du byed pa'o/²⁵¹

²³³ / DC; om. PNG.

²³⁴ gyur DCPG; 'gyur N.

²³⁵ bya ste PNG; byas te DC.

²³⁶ yid PNG; yid la DC.

²³⁷ te PNG; te/ DC.

²³⁸ par DPNG; pa las C.

²³⁹ de DCPG; ill. N.

²⁴⁰ la DCPG; ill. N.

²⁴¹ nyid DPNG; ill. C.

²⁴² ni DC; ni/ PNG.

²⁴³ de C; om. DPNG.

²⁴⁴ / PNG; om. DC.

²⁴⁵ gnyis ka DC; gnyi ga PNG.

²⁴⁶ bsgrub DC; bsgrubs PNG.

²⁴⁷ mtshan DPNG; mchan C.

²⁴⁸ thug DPNG; ill. C.

²⁴⁹ reg PNG; rig DC.

²⁵⁰ / PNG; om. DC.

²⁵¹ // DPNG; / C.

4.4.3

4.4.3.1

欲云何？謂於可⁴⁵樂_{T291c}事，隨彼彼行，欲有所作性。

4.4.3.2

勝解云何？謂於決定事，隨彼彼行，印⁴⁶可隨順性。

4.4.3.3

念云何？謂於串習事，隨彼彼行，明了記憶性。

4.4.3.4

三摩地云何？謂於所觀察事，隨彼彼行，審慮所依心一境性。

4.4.3.5

慧云何？謂即於所觀察事，隨彼彼行，簡擇諸法性。或由如理所引，或由不如理所引，或由非如理非不如理所引。_{磧 427a}

4.4.4

4.4.4.1

又作意作何業？謂引心為業。

4.4.4.2

觸作何_{{金 361a}{麗 484b}}業？謂受、想、思所依為業。

4.4.4.3

受作何業？謂愛生所依⁴⁷為業。

4.4.4.4

想作何業？謂於所緣，令心發起種種言說為業。

4.4.4.5

思作何業？謂發起尋伺、身語業等為業。

⁴⁵ 「可」金，麗，磧，T；「云」房。

⁴⁶ 「印」金，房，麗，磧，T；「即」(T)徑崇。

⁴⁷ 「愛生所依」麗，T；「愛生所持」金，磧，(T)資普；「愛生所持」(T)徑崇；「生愛」房。cf.：「愛生所依」(『略纂』199a8，『瑜伽論記』640a12)

4.4.3

4.4.3.1

'dun²⁵² pa gang zhe na/ gang 'dod (G40a1) pa'i (N31b7) dngos po de dang de la²⁵³ de'i rjes su 'gro zhing (C31a4) byed (P34a4) 'dod (D30b2) pa'o//

4.4.3.2

mos pa gang zhe na/ gang nges pa'i dngos po de dang de la de'i rjes su 'gro zhing nges par 'dzin nus pa'o//

4.4.3.3

dran pa gang zhe na/ gang 'dris pa'i (G40a2) dngos²⁵⁴ po de dang de la de'i rjes su 'gro zhing mngon par brjod (P34a5) pa'o//

4.4.3.4

ting (N32a1) nge 'dzin²⁵⁵ gang zhe na/ gang brtag pa'i dngos po (C31a5) de dang de la (D30b3) de'i rjes su 'gro zhing nges par sems pa la brten nas sems rtse²⁵⁶ gcig pa'o//

4.4.3.5

shes rab gang (G40a3) zhe na/ gang brtag pa'i dngos po nyid de (P34a6) dang de la de'i rjes su 'gro zhing/ chos nmams la rab (N32a2) tu rnam²⁵⁷ par 'byed pa ste²⁵⁸ rigs pas bskyed pa 'am/ rigs pa ma (C31a6) yin pas bskyed pa 'am/ (D30b4) rigs pas bskyed²⁵⁹ pa yang ma yin (G40a4) rigs²⁶⁰ pa²⁶¹ ma (P34a7) yin pas bskyed pa yang ma yin pa'o//

4.4.4

4.4.4.1

de la yid la byed pa las ci byed ce na/ sems (N32a3) gtod pa'i las byed do//

4.4.4.2

reg pa las ci byed ce na/ tshor²⁶² ba dang²⁶³ 'du shes dang/ sems pa nmams²⁶⁴ (C31a7) kyi gnas (P34a8) sbyin pa'i las byed do// (D30b5) (G40a5)

4.4.4.3

tshor ba las ci byed ce na/ sred²⁶⁵ pa skye ba dang/ btang snyoms su 'jog pa'i las byed do//

4.4.4.4

'du shes las ci byed ce na/ dmigs pa la sems (N32a4) mtshan mar 'dzin pa'i tha (P34b1) snyad kyi las byed do//

4.4.4.5

sems pa las ci byed ce na/ rtog (G40a6) pa dang²⁶⁶ (C31b1) lus dang²⁶⁷ ngag gi las²⁶⁸ la sogs (D30b6) pa slong ba'i las byed do//

²⁵² 'dun PNG; 'dus DC.

²⁵³ de la DCPN; de la da la (above da la there is some sign (?) which might be understood as cancellation) C.

²⁵⁴ dngos DPNG; ill. C.

²⁵⁵ 'dzin DCPG; ill. N.

²⁵⁶ rtse DCPG; ill. N.

²⁵⁷ rnam DCNG; ill. P.

²⁵⁸ / DCPG; // // N.

²⁵⁹ bskyed DCNG; ill. P.

²⁶⁰ yin rigs DC; yin/ rig PNG.

²⁶¹ pa DPNG; pa yang C.

²⁶² tshor DCPG; ill. N.

²⁶³ / DCN; om. PG.

²⁶⁴ rnams DCNG; ill. P.

²⁶⁵ sred PNG; srid D; sri C.

²⁶⁶ / DPNG; om. C.

²⁶⁷ dang PNG; dang/ DC.

²⁶⁸ las DC; om. PNG.

4.4.5

4.4.5.1

欲作何業？謂發勤為業。

4.4.5.2

勝解作何業？謂於所緣，任⁴⁸持功德、過失為業。

4.4.5.3

念作何業？謂於久⁴⁹所思、所作、所說憶念為業。

4.4.5.4

三摩地作何業？謂智所依為業。

4.4.5.5

慧作何業？謂於戲論所行染污清淨隨順推⁵⁰求為業。

⁴⁸ 「任」金，房，麗，T；「住」磧，(T)資。

⁴⁹ 「久」金，磧，(T)資普徑崇；「久遠」麗，T；「久來遠」房。

⁵⁰ 「推」金，房，磧，T；「椎」麗。

4.4.5

4.4.5.1

'dun pa las ci byed ce na/ brtson 'grus rtsom pa skyed pa'i las byed do// (P34b2)

4.4.5.2

mos pa las ci byed ce na/ yon tan²⁶⁹ nam nyes pa 'am/ (N32a5) gnyi ga ma yin pas (G40b1) dmigs pa la dga' bar byed pa'i las byed do//

4.4.5.3

dran pa (C31b2) las ci byed ce na/ yun ring po nas (D30b7) bsams pa dang/ byas (P34b3) pa dang/ smras pa dang/ dran pa las rjes su dran pa'i las byed do//

4.4.5.4

ting nge 'dzin las ci byed ce na/ ye shes (G40b2) kyi gnas sbyin pa'i las byed do// (N32a6)

4.4.5.5

shes rab las ci byed ce na/ spros pa rgyu ba dang/ (P34b4) kun nas nyon mongs (C31b3) pa dang/ rnam par byang ba dang/ mthun (D31a1) pa la spyod pa'i las byed do//²⁷⁰

²⁶⁹ *tan* DCNG; *ten* P.

²⁷⁰ // DCNG; / P.

Text B

『瑜伽師地論』「撰決撰分」の漢訳における 「五遍行」関連の抜粋テキスト及び和訳

◇ 使用したテキストの説明

1. Text B は、「撰決撰分」の「本地分中五識身相応地・意地」に対する解説における該当内容の漢訳の校訂テキスト (Text B) と、その和訳 (Text B-tr) である。

2. 校訂にあたって、『大正蔵』と、『大正蔵』に収録されていない趙城金蔵などの四つの版本を使用した。版本および略号を以下に示す。

T : 『大正新脩大蔵経』第 30 冊

(T)資 : 資福蔵 (T : 「宋」)

(T)普 : 普寧蔵 (T : 「元」)

(T)径 : 径山蔵 (T : 「明」)

(T)崇 : 崇寧蔵 (T : 「宮」)

(T)倉 : 正倉院聖語蔵本 (T : 「聖」)

(T)知 : 知恩院本 (T : 「知」)

金 : 趙城金蔵, 『中華大蔵経』第 27 冊 (北京, 中華書局 1984-1996 年刊)

房 : 房山石経, 『房山石経』第 18 冊 (北京, 華夏出版社 2000 年刊)

麗 : 高麗蔵, 『高麗再雕版大蔵経』第 15 冊 (ソウル, 東国大学校 1957-1976 年刊)

磧 : 磧砂蔵, 『磧砂大蔵経』北京本第 47 冊 (北京, 綫装書局 2005 年刊)

◇ Editorial Policy

1. Taisho edition is used as the basic text.

2. The division into paragraphs is editorial.

3. Line numbers of the editions are given at the beginning of each partition. e.g., “T580a29” means the text starts at page 580, upper column, line 29 in the Taisho edition.

4. Chinese character variants are not reported, e.g., 無 written as 无, 蘊 written as 蕴, 礙 written as 碍, 總 written as 摠.

5. Modern Chinese punctuation marks as follows are used. “,” (comma), “、” (enumeration comma), “:” (colon), “。” (full stop), “?” (question mark), “!” (exclamation mark).

Text B

[Part 1]

『瑜伽師地論』卷 51 「攝決擇分中五識身相應地意地之一」

(T 579c23-580b8, 金 861b20-862b1, 房 448a15-448b25, 麗 902c20-903c1, 磧 429a9-430a14)

1.0

復次，唵陀¹南曰：

所緣若相應，更互為緣性，
與識等俱轉，雜染污還滅。

若略說，阿賴耶識由四種相建立流_{{金 861c}{麗 903a}}轉，由一種相建立還滅。

云何四相建立流轉？當知建立所緣轉故，建立相應轉故，建立互為緣性轉故，建立識等俱轉轉故。云何一_{T580a}相建立還滅？謂由建立雜染轉故，及由建立彼還滅故。

1.1

1.1.0

云何建立所緣轉相？

1.1.1

1.1.1.0

謂若略說，阿賴耶識由於二種所緣境轉。一由了別內執受故，二由_{磧 429b}了別外無分別器相故。

¹ 「陀」麗, T; 「陀」房, 磧, (T)資普徑崇; 「牛*它」金.

Text B の和訳

[Part 1 アーラヤ識の所縁とアーラヤ識と相応するものについて]

1.0 [総説]

次に、ウダーナに言う¹。

所縁と、相応するもの [と]、互いに縁となること [と]、
識などと共に活動すること [と]、雑染が還滅すること。

要約して言うならば、アーラヤ識について、四つの様相に基づいて流転することを設定し、一つの様相に基づいて還滅することを設定する。

如何にして四つの様相に基づいて流転することを設定するのか。所縁によって活動することを設定することに基づいて、相応するものによって活動することを設定することに基づいて、〔転識と〕互いに縁となることによって活動することを設定することに基づいて、〔転〕識などと共に活動することによって活動することを設定することに基づいて、と知られるべきである。如何にして一つの様相に基づいて還滅することを設定するのか。雑染によって活動することを設定することに基づいて、およびその〔雑染〕が還滅することを設定することに基づいて、と〔知られるべきである〕。

1.1 [アーラヤ識の所縁]

1.1.0

如何にして所縁によって活動するという様相を設定するのか。

1.1.1

1.1.1.0

要約して言うならば、アーラヤ識は二種の所縁としての対象に基づいて活動する。〔すなわち、〕一に、内の執受を認識することによって〔活動する〕。二に、外の、分断されていない

¹ 『瑜伽論』「撰決択分中五識身相応地意地」は、『瑜伽論』「本地分中五識身相応地」と「本地分中意地」の内容をまとめてさらに解明するものである。その冒頭部分では、八つの論証によってアーラヤ識の存在を証明し、さらに流転と還滅の両側面からアーラヤ識の様相を詳説している。アーラヤ識が作意などの五心所に相応していることは流転の側面（流転分）の説明において述べられている。この流転分と還滅分についてはすでに様々な研究がなされている。そのうち、袴谷 [1979] は、チベット語訳を、玄奘訳『瑜伽論』・真谛訳『決定藏論』と対照して提示し、チベット語訳の和訳および諸訳の比較考察を施した（真谛（499-569）訳『決定藏論』（3巻）は玄奘訳『瑜伽論』「撰決択分」の初頭部分に相当する）。また、横山 [1979]、Schmithausen [1987] では、流転分と還滅分の内容が詳細に論じられている。

ここでは、本研究に最も関連しているものとして、流転分における最初の二つ、すなわち、アーラヤ識の所縁とアーラヤ識と相応するもの（五遍行）を取り上げる。

1.1.1.1

了別內執受者，謂能了別遍計所執自性妄執習氣，及諸色根、根所依處。此於有色界。若在無色，唯有習氣執受了別。

1.1.1.2

了別外無分別器相者，謂能了別依止緣內執受阿賴耶識故於一切時無有間斷_{房 448b}器世間相。

器〔世間〕（有情が生きる物質的な環境）の様相を認識することによって〔活動する〕²。

1.1.1.1

内の執受を認識するとは、遍計所執性に対する誤った執着の習気³、および諸々の色根（身体感覚機能）と根の基体（感覚機能の物質的、すなわち肉体的基体）⁴を認識するということである。これは有色界（物質的な生存領域、すなわち欲界と色界）の場合である。

無色〔界〕の場合は、ただ習気という執受だけを認識する。

1.1.1.2

外の、分断されていない器〔世間〕の様相を認識するとは、内の執受を縁じるアーラヤ識に依拠しているから、いかなる時にも間断のない器世間の様相を認識するということである。

² 「了別外無分別器相」は解釈が困難である。特に「無分別」の意味は明らかではない。この一文の原文は安慧の『三十頌釈』において、次のように抜粋された形で引用されている（袴谷 [1979 : 7]、横山 [1979 : 176] 参照）。

TrBh 52, 1-5: yasmād ālayavijñānaṃ dvidhā pravartate | adhyātmam upādānavijñaptito
bahirdhā 'paricchinākārabhājanavijñaptitāś ca | tatrādhyātmam upādānaṃ
parikalpitasvabhāvābhīniveśavāsanā sādhiṣṭhānam indriyarūpaṃ nāma ca |

横山 [1979 : 176] によれば、bahirdhā 'paricchinākārabhājanavijñaptitāś が「由了別外無分別器相故」に相当する表現であり、「無分別」の原語は *aparicchinna* であると分かる、という。

この **aparicchinna* については、袴谷 [1979]、横山 [1979]、Schmithausen [1987] などにおいて考察されている。しかし、これらの考察ではまだ不明瞭な点が残る。本研究の付録 III において、『瑜伽論』のこの一節、特に **aparicchinna* という表現について考察した。結論をここで述べると、「本地分」の関連する記述から、この一節は、有情の内の執受との対比で、外の器世間に関して **aparicchinna* という特徴を述べていることが分かる。すなわち、内の執受において、感覚機能と感覚機能の肉体的基体は死と再生によって分断されており、連続しているものではない。それに対して、器世間は一定の期間にわたって存続するものであり、分断されていない。**aparicchinna* はこの特徴を表すものとして用いられているのである。詳しくは「付録 III アーラヤ識の所縁としての器世間の説明における **aparicchinna* 再考」参照。

³ 「遍計所執自性妄執習気」の原語は、『三十頌釈』と『五蘊論釈』の引用文から、*parikalpitasvabhāvābhīniveśavāsanā* であると想定される（注 2 参照）。

この複合語に関して、横山 [1979 : 142, 149] は、漢訳の「遍計所執自性妄執習気」について「遍計所執自性に妄執する習気」と解釈している。袴谷 [1979 : 54] は、該当のチベット語訳 *kun brtags pa'i ngo bo nyid la mngon par zhen pa'i bag chags* について「判断されたものという性質に執着する潜在余力」と解釈している。

一方、Schmithausen [1987 : 76] は、*parikalpitasvabhāvābhīniveśavāsanā* について、“Impression(s) of Sticking to the Imagined Character”（分別された性質に対する執着の習気）と解釈している。

また、同じ『瑜伽論』「撰決択分中五識身相応地意地」の中の、種子を設定することについて説明する箇所、以下に示すような関連する表現が見られる。

漢訳 (589a10-11) : 「云何略説安立種子。謂於阿頼耶識中，一切諸法遍計自性妄執習氣，是名安立種子。」

チベット語訳 (D 27b1-2; P 30a5-6) : sa bon mdor bsdus pa'i rnam par gzhas pa gang zhe na/ **chos thams cad kyi** (*kyi* D; ill. P) **kun brtags pa'i ngo bo nyid la mngon par zhen pa'i bag chags kun gzhi** (*gzhi* D; *gzhi'i* P) **rnam par shes pa la yod pa gang yin pa ste/**

山部 [1990 : 67-68] は、この箇所を「アーラヤ識に於ける、全ての存在の、構想された本質への執着（により生成された）習気」と解釈している。

Schmithausen [1987] と山部 [1990] の理解を参照して、ここでは「遍計所執性に対する誤った執着の習気」と解釈した。また、上記の『瑜伽論』の種子についての説明に基づけば、この「遍計所執性に対する誤った執着の習気」は、一切の世間法を生み出すものであるが、出世間法を生み出すものではないと理解できる（山部 [1990 : 64-73] 参照）。

⁴ 色根と根の基体については Text A 3.2.1, 3.2.2 参照。

1.1.1.3

譬如燈焰生時，內執²膏炷，外發光明。如是阿賴耶識緣內執受、緣外器相生起道理應知亦爾。

1.1.2

復次，阿賴耶識緣境微細，世聰慧者亦難了故。

1.1.3

復次，阿賴耶識緣境，無廢時，無變易。從初執受剎那乃至命終，一味了別而轉故。

² 「執」金，房，麗，磧，T；「熱」(T)倉。

1.1.1.3

例えば、灯火が生じる時、内には油と芯を持ち、外には明かりを放つ。このように、アーラヤ識は内には執受を縁じ、外には器〔世間〕の様相を縁じて生起するという道理も同様であると知られるべきである。

1.1.2

また、アーラヤ識が対象を縁じること⁵は、世間の聡明な者でさえ了知し難いから、微細である。

1.1.3

また、アーラヤ識が対象を縁じるとは、止む時がなく、変異すること〔も〕ない⁶。最初に〔執られているものを〕執る刹那から命が尽きるまで、ひたすらに〔所縁を〕認識させて活動するから。

⁵ 『五蘊論釈』には、次のような説明が見られる（この記述の中の *aparicchinna* を「明確に識別されない」と解釈する理由については付録 III 第 2.2 節参照）。

PSV 92, 13–15: *etac cālambanaṃ sūkṣmatvāl (MS: sūkṣmāt) lokapaṇḍitair api duravadhāram ity ato 'paricchinnāmbanākāram ity ucyate*¹ na punar anālambanam eva || (【訳】「また、この *ālambana* は、微細なものであるため、世間の有智者たちでさえ知覚し難い」ということから、『五蘊論』において「明確に識別されない所縁と様相をもつものである」と言われる。一方、ただ所縁をもたないものと〔は言われない。〕)

『五蘊論釈』の *etac cālambanaṃ sūkṣmatvāl lokapaṇḍitair api duravadhāram* は『瑜伽論』のこの箇所の内容と一致しており、『瑜伽論』から引用したものである可能性が高い。

§1.1.2, §1.1.3 の「阿頼耶識縁境」は、チベット語訳ではともに *dmigs pa de*、真諦訳『決定藏論』の該当箇所では「此境界」と「此境」となっている。これらを踏まえると、その原語は **etad ālambanam* であると想定される。

玄奘訳の「縁境」に対して、横山 [1979 : 178] では「阿頼耶識の縁ずる境」、すなわち、アーラヤ識の対象と解釈されている。しかし、玄奘訳では、*ālambana* を識の対象と理解する場合、基本的に「所縁」という訳語が用いられる（漢文の韻律、すなわち四文字の文を作るために三文字の節が必要とされるとき、「所縁境」と訳出したりすることもある）が、ここではわざわざ「縁境」と訳出している。「縁境」は「対象を縁じること」とも解釈しうる。それゆえ、この「阿頼耶識縁境」は「アーラヤ識が対象を縁じること」と理解しうる。§1.1.2, §1.1.3 の説明と照らして合わせても、この解釈は成り立つ。すなわち、アーラヤ識がその対象を縁じるといふ働きは世間の有智者でさえも知覚し難く、微細である (§1.1.2)。そして、この働きは止む時がなく、変異することもない (§1.1.3 の玄奘訳の理解。玄奘訳と真諦訳の相違については注 6 参照)。

これに対して、「阿頼耶識縁境」を「アーラヤ識の所縁」と解釈する場合には疑問が生じる。世間の有智者はアーラヤ識の所縁を知覚し難いというならば、色根や器世間は、一般人でも知覚できるので、微細とは言えない。そうすると、§1.1.2 に述べる微細という特徴は、習気という所縁には適用できるが、色根や器世間という所縁には適用できないことになる。また、習気、色根、器世間はいずれも変異するものであるので、§1.1.3 の説明に適合していない。

以上のことから、ここでは「阿頼耶識縁境」を「アーラヤ識が対象を縁じること」と解釈した。チベット語訳の理解については Text C-tr 注 5 参照。

⁶ 真諦訳『決定藏論』の対応する箇所では、次に示すように、アーラヤ識の対象は、常であるが、異なるものであるとなっており、玄奘訳の「無廢時、無變易」（止む時がなく、変異すること〔も〕ない）と異なる。袴谷 [1979 : 27, 72(n. 18)] 参照。

『決定藏論』(T30, 1019b8–9) : 「此境是恒而有異，云何無異。從初一念來被持境，乃至於死，生一味事。」(【訳】この対象は常ではあるが異なるものであり、どうして異ならないものであるのか。最初の瞬間に把握された対象から死まで、一様なものが生じる。)

また、この文のチベット語訳も意味が不明瞭であり、袴谷 [1979] と Schmithausen [1987] の解釈は異なっている。袴谷 [1979 : 72(n. 18)] は、玄奘訳よりも真諦訳の方が内容上チベット語訳に近いと解釈している。(Text C-tr 注 6 参照)。

1.1.4

復次，阿賴耶識於所緣境念念生滅。{金 862a}{麗 903b}當知剎那相續流轉，非一非常。

1.1.5

復次，阿賴耶識當言於欲界中，緣狹小執受境。

於色界中，緣廣大執受境。

於無色界、空無邊處、識無邊處，緣無量執受境。

於無所有處，緣微細執受境。

於非想非非想處，緣極微細執受境。{磧 430a}

1.1.6

如是，了別二種所緣故，於所緣境微細了別故，相似了別故，剎那了別故，了別狹小執受所緣故，了別廣大執受所緣故，了別無量執受所緣故，了別微細執受所緣故，了別極微細執受所緣故，應知建立阿賴耶識所緣轉相。

1.2

1.2.0

云何建立相應轉相？

1.2.1

謂阿賴耶識與五遍行{T580b}心相應法³恒共相應，謂作意、觸、受、想、思。

1.2.2

如是五法亦唯異熟所攝。最極微細，世聰慧者亦難了故。亦常一類緣境而轉。

1.2.3

又，阿賴耶識相應受一向不苦不樂，無記性攝。

當知餘心所⁴行相亦爾。

1.2.4

如是，遍行心所⁵相應故，異熟一類相應故，極微細轉相應故，恒常一類緣境而轉相應故，不苦不樂相應故，一向無記相應故，應知建{金 862b}{麗 903c}立阿賴耶識相應轉相。

³ 「法」房，磧，(T)資普徑崇倉；「所」金，麗，T.

⁴ 「所」金，磧，(T)資普徑崇；「法」房，麗，T.

⁵ 「所」金，麗，磧，T；「法」房.

1.1.4

また、アーラヤ識は所縁としての対象に対して、刹那ごとに生じては滅する。刹那的なものが連続して流転する〔ので〕、同一のものではなく、常住のもので〔も〕ないと知られるべきである。

1.1.5

また、アーラヤ識は、欲界の場合、狭小な執受という対象を縁じると説かれるべきである。色界の場合、広大な執受という対象を縁じると説かれるべきである。

無色界・空無辺処・識無辺処の場合、無量の執受という対象を縁じると説かれるべきである。

無所有処の場合、微細な執受という対象を縁じると説かれるべきである。

非想非非想処の場合、極めて微細な執受という対象を縁じると説かれるべきである。

1.1.6

以上のように、二種の所縁を認識することに基づいて、所縁としての対象を微細に認識することに基づいて、〔所縁としての対象を途切れずに〕同様に認識することに基づいて、〔所縁としての対象を〕刹那的に認識することに基づいて、狭小な執受という所縁を認識することに基づいて、広大な執受という所縁を認識することに基づいて、無量の執受という所縁を認識することに基づいて、微細な執受という所縁を認識することに基づいて、極めて微細な執受という所縁を認識することに基づいて、アーラヤ識が所縁によって活動するという様相を設定すると知られるべきである。

1.2 [アーラヤ識と相応するもの]

1.2.0

如何にして相応するものによって活動するという様相を設定するのか。

1.2.1

アーラヤ識は五つの遍行する心相応法、すなわち作意・触・受・想・思と常にともに相応しているということである。

1.2.2

この五つの法もまた、ただ異熟のみに包摂される。世間の聡明な者でさえ了知し難いから、最も微細なものである。また、常に〔アーラヤ識と〕同一の類の所縁を対象として活動する。

1.2.3

また、アーラヤ識に相応する受はひたすら不苦不楽であり、無記（〔善悪に〕区別がない）性によって包摂される。

残りの〔四つの〕心所の様相も同様であると知られるべきである。

1.2.4

以上のように、遍行する心所と相応することに基づいて、異熟と同一の類のものと相応することに基づいて、極めて微細に活動するものと相応することに基づいて、常に〔アーラヤ識と〕同一の類の所縁を対象として活動するものと相応することに基づいて、不苦不楽のものと相応することに基づいて、ひたすら無記であるものと相応することに基づいて、アーラヤ識が相応するものによって活動するという様相を設定すると知られるべきである。

[Part 2]

『瑜伽師地論』卷 53 「攝決擇分中五識身相應地意地之三」

(T 593b6-594c17, 金 885a7-887a15, 房 467b8-469b13, 麗 922c7-924c15, 磧 460b5-464a3)

2.0

如是已說六種善巧。謂蘊善巧，乃至根善巧。云何應知是諸善巧廣建立義？復次，嗚柁南曰：

自性、義、差別、次第、攝、依止。

2.1

2.1.1

2.1.1.0

問：何等是色自性？

2.1.1.1

答：略有十一。謂眼等十色處，及法處所攝色。

2.1.1.2

又總有二。謂四大種，及所造色。

[Part 2 蘊に精通することについて]

2.0 [総説]

このように六種の精通すること、すなわち、[五] 蘊について精通すること、ないし根について精通することを説き終わった⁷。これらの精通することを詳しく設定することを如何にして知るべきなのか。次に、ウダーナに言う。

本質と、意味と、区別と、順序と、包摂〔関係〕と抛り所⁸。

2.1 [蘊の本質]

2.1.1 [色蘊の本質]

2.1.1.0

問う。色〔蘊〕(物質の集積)の本質は如何なるものか。

2.1.1.1

答える。要約して言えば、十一がある。すなわち、眼などの十の色処(物質的な領域)と、法処所摂色(意識の対象としての法という領域に包摂される物質)である⁹。

2.1.1.2

また、総じて二つある。すなわち、四大元素と、[四大元素によって]構成される色である。

⁷ 「本地分意地」では、本質、抛り所などの五つの点から六識身を詳説し終わった後に、次に示すように、蘊、界、処、縁起、処(道理に適うもの)・非処(道理に適わないもの)、根についての六つの精通に言及している。しかし、名称の提示にとどまる。

YBh 71, 9–11: skandhakaṣālyam api saṃgrhītaṃ veditavyaṃ | dhātukaṣālyam āyatanakaṣālyam pratīyasamutpādakaṣālyam sthānānāsthānam indriyakaṣālyam api veditavyaṃ || (【訳】包摂されている蘊の精通も理解されるべきである。界の精通、処の精通、縁起の精通、処(道理に適うもの)・非処(道理に適わないもの)[の精通]、根の精通も理解されるべきである。)

「摂決択分」の該当箇所では、これら六つの精通について詳細に説明している。

⁸ 「次第攝依止」の「攝」は、ここでは「包摂すること」を意味する名詞として訳す。この文のチベット語訳は「go rims dang ni bsdu dang brten」となっている。この訳文の構造も明瞭ではないが、「攝」に対応していると思われる bsdu は名詞であると考えられる。(Text C 2.0 参照)

⁹ 色蘊は十の色処と法処所摂色から成るということは、有部(櫻部 [1979 : 70–71, 97] 参照)と瑜伽行派が共通して認めている。十の色処とは、眼・耳・鼻・舌・身体(五)の五つの感覚機能と、色かたち・音声・におい・味・触覚対象の五つの対象である。法処所摂色は、有部では無表色とされているが、瑜伽行派では異なる説明をしている。例えば、『瑜伽論』「本地分中意地」(YBh 68, 13–14)では、次のような二種類の法処所摂色について述べている : dharmāyatanaparyāpanam |

saṃvarāsaṃvarasaṃgrhītaṃ rūpaṃ samādhigocaraṇ ca rūpaṃ... (【訳】法処によって包摂されるもの、すなわち、律儀と非律儀によって包摂される色と、三摩地の活動領域たる色である(後略))。そのほか、『集論』では五種類を挙げている(斎藤ほか [2014 : 213] 参照)。

また、『瑜伽論』には、十一の色法とは、清浄な色(五根)と、清浄なものによって捉えられる色(五根の対象)と、意によって捉えられる色であると解説している箇所もある(注 15 参照)。

2.1.1.3

如是一切皆變礙相。

2.1.2

2.1.2.0

問：何等是受自性？

2.1.2.1

答：略有六種。謂依眼等六觸所生。

2.1.2.2

2.1.2.2.1

此復二種。若色為依，名身受。無色為依，名心受。何以故？由前五根皆色性故。

2.1.2.2.2

2.1.2.2.2.1

問：若前五根皆是色性，依眼等受名身受者，何故眼等非唯是身？

答：由相異故。所以者何？眼等五根展轉相異。

2.1.2.2.2.2

問：若眼等根其相異故，非皆身相，依彼諸受_{積 461a}由是因緣應非身受。

答：餘有色根不離身故，就_{{金 885b}{麗 923a}}彼為名，此復何過！

2.1.1.3

これらすべてはみな変壞する相〔をもつ〕¹⁰。

2.1.2 [受蘊の本質]

2.1.2.0

問う。受〔蘊〕の本質は如何なるものか。

2.1.2.1

答える。要約して言えば、六種がある。すなわち眼〔の接触〕などの六触によって生じたものである。

2.1.2.2

2.1.2.2.1

また、それ（受）は二種である。物質的なものを拠り所とするものであるならば、身受と名づける。非物質的なものを拠り所とするもの〔であるならば〕、心受と名づける。なぜなら、前の五根（眼・耳・鼻・舌・身）はすべて物質的なものであるから。

2.1.2.2.2

2.1.2.2.2.1

問う。もし、前の五根はすべて物質的なものである〔から〕、眼などを拠り所とする受を身受と名づけるというならば、どうして眼などはただ身〔根〕であることにならないのか。答える。相が異なるから。なぜなら、眼などの五根は相互に相が異なるから。

2.1.2.2.2.2

問う。もし、眼などの五根の相が異なるから、すべてが身〔根〕の相であるわけではないというならば、この理由に基づいて、それら〔眼など〕を拠り所とする諸々の受は身受ではないはずではないか。答える。〔身根〕以外の物質的な根は身体から離れていないから、それ（身体）に基づいて名付けたのである。これに何の過失があるのか。

¹⁰ 「変礙」の意味は、『俱舍論』「界品」の色蘊を説明する箇所解説されている。サンスクリット原文と玄奘訳との対比により、「変礙」の原語は rūpaṇa か rūpyate であると考えられる。ただし、次に示すように、ここでは様々な異説が挙げられており、玄奘は場合に応じて、rūpaṇa を「変壞」（以下①）もしくは「変礙」（以下②）と訳し分けしている。

『俱舍論』「界品」（AKBh 9, 10-20）：①kasmāt punar ayam avijñaptiparyanto rūpaskandha ity ucyate / rūpaṇāt / uktaṃ bhagavatā "rūpyate rūpyata iti bhikṣavas tasmād rūpopādānaskandha ity ucyate /..." iti vistarah / rūpyate bādhyata ity arthaḥ / ... ②pratighāto rūpeṇety apare / paramānurūpaṃ tarhi rūpaṃ na prāpnoty arūpaṇāt / ...āśrayabhūtarūpaṇād ity apare... 【訳（櫻部 [1979 : 162-163]）】①次に、何ゆえに〔五根を始めとし〕無表色を終りとすこ〔の十一種の法〕を色蘊と呼ぶのか。壊れるからである。世尊によって説かれている——「あれもこれも壊れる（rūpyate）。比丘らよ、だから色（rūpa）取蘊と呼ばれる。（中略）云々、」と。壊れるとは害されるという意味である。（中略）②〔また、他の〕色と牴触〔しその生起を障碍〕することである、と他の人々は〔いう〕。それならば、極微としての色は、〔他の色と〕牴触することがないから、色でないことになる。（中略）他の人々は、「〔無表の〕依りどころとなっている〔四大種〕が〔他の色と〕牴触するから〔無表も亦そうである〕、」という。（後略）

『俱舍論』「界品」玄奘訳（3b22-c9）：「①何故此蘊無表為後説為色耶？由變壞故。如世尊説：「苾芻當知由變壞故名色取蘊（後略）」、乃至廣説。變壞即是可惱壞義。（中略）②有説變礙故名為色。若爾、極微應不名色、無變礙故。（中略）有釋所依大種變礙故。（後略）」

色の中の法処所摂色は、前注 9 に示した、有部の理解に基づいて解釈する場合でも、『瑜伽論』の理解に基づいて解釈する場合でも、牴触のない色であると考えられる。したがって、「②変異し牴触する」という解釈には難点がある。この文脈の中の「変礙」（rūpaṇa）は、色の一般的な特徴である「①変壞すること」（変化して最終的に壊れること）として理解するのが妥当と考えられる。

2.1.2.2.2.3

問：若不離身故無過者，意根亦爾，不離身轉，依意根受應名身受。是即一切皆是身受，無心受耶？

答：諸有色根定不離身，意即不爾，故無有過。所以者何？生無色界有情意根離身而轉。是故五根所生諸受合名身受，唯依意者獨名心受。

2.1.2.2.2.4

故總說二，謂身心受。

2.1.2.3

又一切受皆領納相。

2.1.3

2.1.3.0

問：何等是想自性？

2.1.3.1

答：此亦六種，如前_{房 468a}應知。

2.1.3.2

2.1.3.2.1

又想有六。一有相想，二無相想，三狹小想，四廣大想，五無_{T593c}量想，六無所有想。

2.1.3.2.2

又略有二。一世間想，二出世⁶想。

2.1.3.2.3

狹小想者，謂欲塵⁷想。廣大想者，謂色塵*想。無量想者，謂空識無邊處塵*想。無所有想者，謂無所有處塵*想。即此一切名有相想。

無相想者，謂有頂想，及一切出世間學、無學想。

2.1.3.3

又一切想皆等了相。

2.1.4

2.1.4.0

問：何等是行自性？

2.1.4.1

答：此亦六種，如前應知。

2.1.4.2

又_{磧 461b}此行相由五種類令心造作。一為境隨與，二為彼合會，三為彼別離，四能發雜染業，五令心自在轉。

⁶ 「世」金，房，麗，T；「世間」磧，(T)資普徑。

⁷ 「塵」金，房，麗，T；「纏」磧，(T)普徑。*同じ。

2.1.2.2.2.3

問う。もし、身体から離れていないから、過失がないというならば、意根も同じく身体から離れず活動するものである〔から〕、意根を拠り所とする受を身受と名付けるべきではないか。そうすれば、すべてがみな身受であり、心受はないのではないか。答える。物質的な根は決して身体から離れないが、意根はそうではないから、過失はない。なぜなら、無色界に生まれる有情の意根は身体から離れて活動する。それゆえに、五根によって生じた諸々の受を合わせて身受と名付け、意を拠り所とする〔受〕のみを心受と名付ける。

2.1.2.2.2.4

したがって、総じて二つ、すなわち身受・心受と説くのである。

2.1.2.3

また、すべての受はみな領納の相〔をもつ〕。

2.1.3 [想蘊の本質]

2.1.3.0

問う。想〔蘊〕の本質は如何なるものか。

2.1.3.1

答える。これも前のように六種があると知られるべきである。

2.1.3.2

2.1.3.2.1

また、想には六つがある。一は有相の想、二は無相の想、三は狭小な想、四は広大な想、五は無量なる想、六は無所有の想である。

2.1.3.2.2

また、要約して言えば、二つがある。一は世間の想、二は出世間の想である。

2.1.3.2.3

狭小な想とは、欲〔界〕に縛られる者の想である¹¹。広大な想とは、色〔界〕に縛られる者の想である。無量なる想とは、空〔無辺処〕と識無辺処に縛られる者の想である。無所有の想とは、無所有処に縛られる者の想である。これらすべてを有相の想と名付ける。

無相の想とは、有頂（非想非非想処）の想、およびすべての出世間の有学と無学の想である。

2.1.3.3

また、すべての想はみな等了の相〔をもつ〕。

2.1.4 [行蘊の本質]

2.1.4.0

問う。行〔蘊〕の本質は如何なるものか。

2.1.4.1

答える。これも前のように六種があると知られるべきである。

2.1.4.2

また、この行〔蘊〕の相は、五種類によって心を造作させる。一は、対象の随与をなすこと、二は、それ（対象）の合会をなすこと、三は、それ（対象）の別離をなすこと、四は、雑染の行為を発することができること、五は、心を自在に転じさせることである。

¹¹ 玄奘訳では、kāmāvacara（欲界）を「欲纏（/塵）」（欲〔界〕に縛られるもの）と訳すことが多い（『俱舍論』T29, 26c5（AKBh 74, 16 に対応）、『瑜伽論』442b3（ŚrBh-S 307, 12-13 に対応）参照）。

2.1.4.3

又此行相略有三種。一者善行，二不善_{{金 885c}{麗 923b}}行，三無記行。

2.1.4.4

又一切行皆造作相。

2.1.5

2.1.5.0

問：何等是識自性？

2.1.5.1

答：略有六種。所謂眼識乃至意識，是識自性差別。

2.1.5.2

2.1.5.2.1

又，識有三種。一領受差別，二採⁸境差別，三分位差別。

2.1.5.2.2

領受差別有三，採⁹境差別有六，分位差別有三。

2.1.5.3

如是識蘊差別總有十八自性。

2.1.6

應知是名諸蘊自性。

⁸ 「採」金，麗，磧，T；「采」房。

⁹ 注8と同じ。

2.1.4.3

また、この行〔蘊〕の相は、要約して言えば、三種がある。一は善行、二は不善行、三は無記行である。

2.1.4.4

また、すべての行はみな造作の相〔をもつ〕。

2.1.5 [識蘊の本質]

2.1.5.0

問う。識〔蘊〕の本質は如何なるものか。

2.1.5.1

答える。要約して言えば、六種がある。すなわち、眼識から意識までであり、〔それ〕は識〔蘊〕の本質の区別である。

2.1.5.2

2.1.5.2.1

また、識には三種がある。一は感受することの区別、二は対象をとることの区別、三は、位相の区別である。

2.1.5.2.2

感受することの区別には三つがあり、対象をとることの区別には六つがあり、位相の区別には三つがある¹²。

2.1.5.3

以上のように、識〔蘊〕の区別は総じて十八の本質がある。

2.1.6 [まとめ]

以上のものを、諸蘊の本質と名付けると知られるべきである。

¹² この三種の区別については詳しい説明がなされていないため、具体的な内容は不明である。『瑜伽論記』(T42, 622b24-c1)には次のような解釈が見られる：「識自性中領受差別有三者，謂三受相應識。二採境差別有六者，想能採境，故約之取相應六識也。(中略)分位差別有三者，泰云：隨三受起，分位有三也，亦可隨行思，分位為三性。景云：三世識亦可三性識也。」(【訳】識の自性の内、感受することの区別には三つがあるとは、三つの受に相應する識である。二番目の対象をとることの区別には六つがあるとは、想は対象をとることができるので、それが相應する六識〔の対象〕を捉えることをまとめるのである。(中略)位相の区別には三つがあるということについて、泰〔師〕は、「三つの受に随って起こる〔ので〕、位相には三つがある。思に随って、位相を〔善・不善・無記の〕三性とすることもできる」と解説する。景〔師〕は、「〔過去・現在・未来の〕三世の識を三性の識とすることもできる」と解説する。)

2.2

2.2.0

復次，蘊義云何？為顯何義建立諸蘊？

2.2.1

謂所有色，若去來今，乃至遠近。如色，乃至識亦爾。

如是總略攝一切蘊。積聚義是蘊義。

2.2.2

又由諸蘊唯有種種名，性諸行，當知為顯無我性義建立諸蘊。

2.3

2.3.1

2.3.1.0

復次云何色蘊差別？

2.3.1.1

2.3.1.1.0

略由六種。一由事故，二由相故，三由識執不執故，四由識空不空故，五由想所行故，六由邊際故。

2.2 [蘊の意味]

2.2.0

また、蘊の意味は如何なるものか。何の意味を示すために諸蘊を設定するのか。

2.2.1

それはすなわち、あらゆる色（物質）、[すなわち] 過去の [色]、未来の [色]、現在の [色] から、遠い [色]、近い [色] までである。色と同様に、[受から] 識までもそうである¹³。

このように総括するとすべての蘊を包摂している。集積の意味が「蘊」の意味である。

2.2.2

また、諸蘊はただ様々な名称を性質としてもつ諸行であるので¹⁴、無我性の意味を示すために諸蘊を設定するのであると知られるべきである。

2.3 [蘊の区別]

2.3.1 [色蘊の区別]

2.3.1.0

また、色蘊の区別は如何なるものか。

2.3.1.1

2.3.1.1.0

要約して言えば、六種に基づく。一は事という点で、二は相という点で、三は識が執るもの・執らないものという点で、四は識を欠いているもの・欠いていないものという点で、五

¹³ ここでは、色蘊と、受蘊から識蘊までの四蘊について、共通に「若去來今、乃至遠近」と簡略に述べている。過去のものから近いものまでの列挙には、九項目と十一項目の二つのパターンが見られる。第一に、『瑜伽論』「本地分」では、眼の認識対象である色（色かたち）の分類に一種から十種までであることを説明しており、その中で、九種の色について次のように述べている。

『瑜伽論』「本地分中意地」（YBh 65, 13-66, 3）：ekavidham rūpaṃ cakṣurgocarārthena | dvididham ādhātmiṅkaṃ bāhyaṃ ca | ... navavidham aṭṭham anāgataṃ pratyutpannam audarikaṃ vā sūkṣmaṃ vā hīnaṃ vā praṇītaṃ vā yad vā dūre yad vāntike | (【訳】 眼の活動領域という意味で、色は一種である。[色は] 二種、[すなわち] 内的なものと外的なものである。(中略) [色は] 九種、[すなわち] 過去・未来・現在のもの、あるいは粗大・微細なもの、あるいは劣った・優れたもの、あるいは遠くにあるもの・近くにあるものである。) 漢訳 (292c23-293a7) は「或立一種色、謂由眼所行義故。或立二種、謂内色外色。(中略) 或立九種、謂若過去、若未來、若現在、若僂、若細、若劣、若妙、若遠、若近」(【訳】 あるいは、一種の色を設定する。すなわち眼の活動領域という意味に基づいてである。あるいは、二種 [の色] を設定する。すなわち内的な色と外的な色である。(中略) あるいは、九種 [の色] を設定する。[すなわち] 過去 [のもの]、未来 [のもの]、現在 [のもの]、粗大 [なもの]、微細 [なもの]、劣った [もの]、優れた [もの]、遠い [もの]・近い [もの] である) となっている。

第二は、初期經典において五蘊を説明する際の定型表現である。例えば、

『雜阿含』1.22 經 (T2, 4c26-5a3. SN 22.124. Vol. 3, p. 169 対応)：「當觀知諸所有色、若過去、若未來、若現在、若内、若外、若僂、若細、若好、若醜、若遠、若近、彼一切悉皆無常。(中略) 如是、觀受想行識、若過去、若未來、若現在、若内、若外、若僂、若細、若好、若醜、若遠、若近、彼一切悉皆無常。」(【訳】 すべての色、過去のものであれ、未来のものであれ、現在のものであれ、内的なものであれ、外的なものであれ、粗大なものであれ、微細なものであれ、美しいものであれ、醜いものであれ、遠いものであれ、近いものであれ、それらすべてはみな無常であると観察して知るべきである。(中略) 同様に、受・想・行・識、過去のものであれ、未来のものであれ、現在のものであれ、内的なものであれ、外的なものであれ、粗大なものであれ、微細なものであれ、美しいものであれ、醜いものであれ、遠いものであれ、近いものであれ、それらすべてはみな無常であると観察する [べきである].)

文脈においても、内容においても、上の蘊の説明は明らかに、第二のパターンにより近い。したがって、「若去來今、乃至遠近」の具体的な内容は、過去・未来・現在・内・外・粗・細・美・醜・遠・近という十一の具体例の列挙であることが分かる。

¹⁴ Text C-tr 注 13 参照。

2.3.1.1.1

事者，謂所有諸色皆是四大種及四大種所造。

2.3.1.1.2

2.3.1.1.2.1

相者，略有三{礦 462a}種。一清淨色，二清淨所取色，三意所取色。

2.3.1.1.2.2

又變礙相是色共相。

2.3.1.1.3

2.3.1.1.3.1

2.3.1.1.3.1.1

識執不執者，若識依執，名執受色。

2.3.1.1.3.1.2

此復云何？謂識所託，{T594a}安危事同，和合生長。又此為依，能生諸受。

2.3.1.1.3.2

與此相違，非執受色。{房 468b}

は想の活動領域という点で、六は際限という点で [ということである].

2.3.1.1.1

事とは、すべての色はみな、四大元素、あるいは四大元素によって構成されるものであるということである。

2.3.1.1.2

2.3.1.1.2.1

相とは、要約して言えば、三種がある。一は、清浄な色（五根）である。二は、清浄なものによって捉えられる色（五根の対象）である。三は、意によって捉えられる色（法処所撰色）である¹⁵。

2.3.1.1.2.2

また、変壊するという相は色の共相である。

2.3.1.1.3

2.3.1.1.3.1

2.3.1.1.3.1.1

識が執るもの・執らないものとは、識が [その色に] 依存してかつ執っている場合、執られている色と名付ける。

2.3.1.1.3.1.2

これはまた何なのか。[その色は] 識によって頼られており、安全・危険な事を共に [経験し]、和合して生長するということである。また、この [色] を拠り所として、諸々の受を生じさせることができる。

2.3.1.1.3.2

これと異なるものは、執られている色ではない。

¹⁵ 『瑜伽論』の別の箇所では、同様の三種の色に言及した後、さらに次のように解説している。

『瑜伽論』「撰決択分中思所成慧地」の漢訳 (660c5-12) : 「諸色自相復有三種。一清浄色、二清浄所取色、三意所取色。謂四大種所造五識所依五清浄色眼等處攝、名清浄色。色等五境、同分清浄色之境、名清浄所取色。(中略) 三摩地所行影像等色、名意所取色。」【訳】 諸々の色の自相にもまた三種がある。一は、清浄な色である。二は、清浄なものによって捉えられる色である。三は、意によって捉えられる色である。すなわち、四大元素によって構成される、五識が依存する、五つの清浄な色である眼などの [内] 処に包摂されるものを、清浄な色と名付ける。[眼の対象である] 色かたちなどの五つの対象、[すなわち] 同分の清浄な色の対象を、清浄なものによって捉えられる色と名付ける。(中略) 三摩地の活動領域である影像などの色 (法処所撰色) を、意によって捉えられる色と名付ける。)

チベット語訳 (D zhi 203a5-b1; P zi 212a8-b4) : gzugs kyi rang gi mtshan nyid ni nam pa gsum ste/ dang ba dang/ (/ P; om. D) dang ba'i gzung ba dang/ yid kyi gzung ba'o// de la 'byung ba chen po bzhi rgyur byas pa mig la sogs pa'i skye mched du gtogs pa nam par shes pa lnga'i rten gyi gzugs dang ba nam pa lnga ni gzugs dang ba zhes bya'o// mtshungs pa'i gzugs dang ba lnga po dag gi yul gzugs la sogs pa yul lnga po dag ni dang bas gzung ba'i gzugs zhes (zhes D; zhe P) bya'o//... ting nge 'dzin gyi spyod yul gyi gzugs brnyan gyi gzugs ni yid kyi spyod yul gyi gzugs zhes bya'o// 【訳】 色の固有の特徴は三種である。すなわち、清浄なもの、清浄なもののお対象と、意のお対象である。その中で、四元素を原因とするものであり、眼などの [内] 処に属するものであり、五識の拠り所である五種の清浄な色は清浄な色と呼ばれる。類似した五つの清浄な色のお対象である色かたちなどの五つの対象は、清浄なものによって捉えられる色と呼ばれる。(中略) 三摩地の活動領域である影像の色は、意の活動領域の色と呼ばれる。)

また、『顯揚論』(504a5-7) : 「十八清浄色謂五内處。十九清浄所取色謂五外處。二十意所取色謂法處所攝色」【訳】 十八、清浄色とは五内処である。十九、清浄によって捉えられる色とは五外処である。二十、意によって捉えられる色とは法処所撰色である)、および『論記』(622c5-6) : 「色蘊差別中清浄色等三者、即根、塵、及法處中色也」【訳】 色蘊の區別の中の「清浄色」などの三つとは、[順次に] 根、対象、および法処の中の色である) の解説もほぼ同様である。

2.3.1.1.4

2.3.1.1.4.1

識空不空者，若識不空，名同分色。由此與識_{{金 886a}{麗 923c}}等義轉故。

2.3.1.1.4.2

若識空者，名彼同分色。似自相續而隨轉故。

2.3.1.1.4

2.3.1.1.4.1

識を欠いているもの・欠いていないものとは、〔五根が〕識を欠いていない場合、「同分色」と名付ける。この〔五根〕は識と等しい対象をもって活動するから。

2.3.1.1.4.2

〔五根が〕識を欠いている場合、「彼同分色」と名付ける。自相続と類似したものとして継続して活動するから¹⁶。

¹⁶ 「同分」(sabhāga)と「彼同分」(tatsabhāga)は一对の概念である。『瑜伽論』では、次に示すように、十八界の中の眼根から身根までの五根が、識の作用を伴って対象を認識するものとして活動する場合、これを同分色という。一方、識の作用を伴わず、すなわち対象を認識せず、独自に存続する五根は彼同分という。

『瑜伽論』「撰決択分中五識身相応地意地」の漢訳(609c3-6):「問:此十八界幾是同分,幾彼同分。答:有識眼界名為同分,所餘眼界名彼同分。如眼界,乃至身界亦爾。唯根所攝諸內界中思量同分及彼同分,非於色等外諸界中。」(【訳】問う。この十八界,幾つが同分,幾つが彼同分なのか。答える。識を有する眼界を同分と名付け,それ以外の眼界を彼同分と名付ける。眼界の同様に,身界までもそうである。根に包摂される内的な界(内処)のみに対して,同分・彼同分を考えるが,色かたちなどの外的な界に対して〔考える〕わけではない。)

チベット語訳(D 78b1-3; P 82a3-4): bco bryad po de dag las du ni mtshungs pa yin/ (/D; om. P) du ni de dag dang mtshungs pa yin zhe na/ smras pa/ mig gi khams rnam par shes pa dang bcas pa ni mtshungs pa yin no// de las gzhan pa ni de dag dang mtshungs pa yin no// (de las gzhan pa ni de dag dang mtshungs pa yin no// D; om. P) mig gi khams la ji lta ba bzhin du lus kyi khams kyi bar du yang de bzhin no// mtshungs pa dang (dang P; om. D) de dag dang mtshungs pa ni dbang pos zin pa'i nang gi khams rnam la bsams pa yin gyi gzugs la sogs pa phyi rol gyi dag la ni med do// (【訳】それら十八の〔界〕のうち,幾つは類似したもの,幾つはそれら〔自体〕と類似したものなのか。答える。識を伴う眼界は類似したものである。それ以外のものはそれら〔自体〕と類似したものである。眼界の場合のように,身界までも同様である。類似したものと,それら〔自体〕と類似したものは,根によって包摂される内的な界(内処)に対して考えられたのであるが,色かたちなどの外的なものに対しては〔考えられたこと〕がない。)

『瑜伽論』「撰決択分中思所成慧地」の漢訳(660c9-11):「若與識俱,諸清淨色與識同境,故名同分。若離於識,諸清淨色前後*自類相續而轉,名彼同分色。」(【訳】識と同時にある場合,諸々の清淨な色は識と同じ対象をもつので,〔それを〕同分〔色〕と名付ける。識を離れた場合,諸々の清淨な色は前後において自類の相続として活動する〔ので〕,〔それを〕彼同分色と名付ける。*「自類相續」(自類の相続)という訳語については不明な点がある。本文中の「似自相續」と,下記のチベット語訳に見られる rang gi rgyun dang 'dra bar という表現はいずれも自相続と類似したもの,すなわち「類自相續」を意味している。ここでは漢訳を逐語的に訳した。)

チベット語訳(D 203a6-7; P 212b3-4): de la rnam par shes pa dang bcas pa'i gzugs dang ba rnam ni rnam par shes pa rnam dang yul mtshungs pa'i phyir mtshungs pa rnam zhes bya'o// rnam par shes pa dang bral ba gang dag yin pa de dag ni rim gyis rang gi rgyun dang 'dra bar 'gyur ('gyur D; 'byung P) ba'i phyir de dag dang mtshungs pa rnam zhes bya'o// (【訳】そ〔の清淨な色と清淨なものによって捉えられる色〕の中で(注15参照),識を伴う諸々の清淨な色は,諸識と類似した対象をもつので,類似したものと呼ばれる。識を離れた諸々の〔清淨な色〕が何であれ,それらは順序をもって自相続と同様なものとして生じるので,それら〔自体〕と類似した〔色〕と呼ばれる。)

一方,宮下[1987]によると,有部も同分・彼同分を述べるが,両概念の定義,十八界の中の五根以外のものに対しても適用されること,三世実有説に基づく応用などの点で,瑜伽行派とは異なった理解をしている。

また,「由此與識等義轉故」の中の「與識等義轉」に該当するチベット語訳は, rnam par shes pa dang mtshungs par don la 'jug pa nyid (識と類似したものとして,対象に対して活動する)となっている。「義」, don とも,サンスクリット語の artha の訳語と想定される。すでに示したように,『瑜伽論』「撰決択分中思所成慧地」の漢訳は「諸清淨色與識同境,故名同分」(諸々の清淨な色は識と同じ対象をもつので,〔それを〕同分〔色〕と名付ける)となっており,チベット語訳と一致している。したがって,この「義」を対象と解釈した。

2.3.1.1.5

2.3.1.1.5.0

想所行者，謂緣色想。

2.3.1.1.5.1

2.3.1.1.5.1.0

略有三種。一者色想，二有對想，三別異想。

2.3.1.1.5.1.1

色相¹⁰亦三。一有光影相，二據方處相，三積集住相。如是三相，隨其次第，三想所行。取青等相，名為色想。能取行礙，名有對想。能取男女舍田等假，名別異想¹¹。

2.3.1.1.5.2

是名想所行差別。

2.3.1.1.6

2.3.1.1.6.1

邊際者，謂色邊際。略有二種。一墮下界，謂欲塵*色。二墮中界，謂色塵*色。

2.3.1.1.6.2

當知此中，就業增上所生諸色說無色界無有諸色，非就勝定自在色說。何以故？由彼勝定於一切色皆得自在，諸定加行令現前故。當知此色名極微細定所生色。

2.3.2

2.3.2.0

復次，云何受蘊差別？

2.3.2.1

2.3.2.1.0

略由五種。一由事故，二{磧 462b}由相故，三由生故，四由觀察故，五由出離故。

2.3.2.1.1

事者，謂領納及順領納法。

2.3.2.1.2

2.3.2.1.2.0

相者，謂自相及共相。

2.3.2.1.2.1

自相有三。樂受、苦受、不苦不樂受。

¹⁰ 「相」金，磧，(T)資普徑崇；「想」房，麗，T.

¹¹ 「想」金，磧，房，麗；「相」T.

2.3.1.1.5

2.3.1.1.5.0

想の活動領域とは、色を縁じる想である。

2.3.1.1.5.1

2.3.1.1.5.1.0

要約して言えば、三種がある。一は色に対する想、二は抵触のあるものに対する想、三は区別に対する想である。

2.3.1.1.5.1.1

また、色の相にも三〔種がある〕。一は光と影を伴う相、二は方向と場所を占める相、三は集積されたものがとどまる相である。これら三つの相は、順次に、三つの想の活動領域である。

青などの相を捉えるものを色に対する想と名付ける。動きや妨げを捉えるものは抵触のあるものに対する想である。男・女や舎・畑などの〔集積された〕仮有を捉えるものを区別に対する想と名付ける。

2.3.1.1.5.2

以上のものを、想の活動領域〔に基づく〕区別と名付ける。

2.3.1.1.6

2.3.1.1.6.1

際限とは、色の際限である。要約して言えば、二種がある。一は下の界に属するもの、すなわち欲〔界〕に縛られる者の色である。二は、中間の界に属するもの、すなわち色〔界〕に縛られる者の色である。

2.3.1.1.6.2

ここでは、業の増上によって生じた色に関して、無色界において色がないと述べるのであり、勝れた静慮によって〔得られた〕自在な色に関して〔述べるの〕ではないと知られるべきである。なぜなら、その勝れた静慮〔に入ったもの〕は、すべての色に関して自在を得、諸々の静慮の修行によって〔色を〕現前させるから。このような色を、極めて微細な静慮によって生じた色と名付けると知られるべきである。

2.3.2 [受蘊の区別]

2.3.2.0

また、受蘊の区別は如何なるものか。

2.3.2.1

2.3.2.1.0

要約して言えば、五種に基づく。一は事という点で、二は相という点で、三は生起という点で、四は観察という点で、五は出離という点で〔ということである〕。

2.3.2.1.1

事とは、領納すること、および領納することに相応しい法である。

2.3.2.1.2

2.3.2.1.2.0

相とは、自相と共相である。

2.3.2.1.2.1

自相には三つ、すなわち、楽受・苦受・不苦不楽受がある。

2.3.2.1.2.2

樂受壞苦故苦，苦受苦苦故苦，不苦不樂受行苦故苦¹²。由此因緣，諸所有受皆說名苦。是名受共相。

2.3.2.1.3

2.3.2.1.3.0

生者，謂一切受十六觸_{{金 886b}{麗 924a}}所生。

2.3.2.1.3.1

何等十六？謂眼觸、耳觸、鼻觸、舌觸、身觸、意觸，有對觸，增語觸，順樂受觸、順苦受觸、順不苦不樂受觸，愛觸、恚觸、明觸、無明觸、非明非無明觸。

2.3.2.1.3.2

由所依及所取境故，建立六觸及有對觸。由分別境故，建立增語觸。由領納境故，建立順樂受等觸。由染淨故，建立愛、恚、明、無明、非明非無明觸。

2.3.2.1.3.3

是名受生差別。

2.3.2.1.4

2.3.2.1.4.1

觀_{T594b}察差別者，一切如來應正等覺出現世間，皆於諸受起八種觀。謂受有幾種，誰為受集，誰是受滅，誰是受_{房 469a}集趣行，誰是受滅趣行，誰是受愛味，誰是受過患，誰是受出離。如是觀時，如實了知受有三種，觸集故受集。應知如經分別廣說。

¹² 「苦」金，房，麗，T；「若」磧，(T)普徑。

2.3.2.1.2.2

楽受は、壊苦（変壊するという苦）があるから苦である。苦受は、苦苦（苦痛という苦）があるから苦である。不苦不楽受は、行苦（形成されたものという苦）があるから苦である。それ故に、すべての受はみな苦と称される。以上が受の共相である。

2.3.2.1.3

2.3.2.1.3.0

生起とは、すべての受は十六の触によって生じることである。

2.3.2.1.3.1

十六とはどれか。それはすなわち、眼の触・耳の触・鼻の触・舌の触・身体の触・意の触、〔五根に属する〕抵触のある触、〔意に属する〕増語触¹⁷、楽受に相応しい触・苦受に相応しい触・不苦不楽受に相応しい触、渴愛〔に相応する〕触・瞋恚〔に相応する〕触・明（知）〔に相応する〕触・無明〔に相応する〕触・明でも無明でもないもの〔に相応する〕触である。

2.3.2.1.3.2

抛り所と、捉えられる対象に基づいて、〔眼から意までの〕六触と、抵触のある触を設定する。対象を分別することに基づいて、増語触を設定する。対象を領納することに基づいて、楽受に相応しい触など〔の三つ〕を設定する。雑染・清浄に基づいて、渴愛・瞋恚・明・無明・明でも無明でもないもの〔に相応する〕触を設定する。

2.3.2.1.3.3

以上のものを、受の生起〔に基づく〕区別と名付ける。

2.3.2.1.4

2.3.2.1.4.1

観察の区別とは、すべての、如来であり・〔供養される〕べきものであり・正等覚を得たものである〔仏〕たちは世間において現れようとする〔とき〕、諸々の受に対して八種の観察を生起させる。すなわち、受には何種類があるのか、受の集合とは何か、受の消滅とは何か、受の集合に導く道¹⁸とは何か、受の消滅に導く道とは何か、受の好ましい味とは何か、受の患いとは何か、受の出離とは何か〔と〕。このように観察する時、受には三種がある、〔また〕触の集合があるから受の集合がある、と如実に知る。経典の中に詳しく述べたように知られるべきである¹⁹。

¹⁷ 「増語触」について、『論記』（623a18-19）では、「合前五名有對觸，第六識相應觸名増語觸」（【訳】前の五つを合わせて抵触のある触と名付ける。第六の〔意〕識に相応するものを増語触と名付ける）と解説する。『俱舍論』にも同様の説明が見られる（AKBh 143, 21-144, 1 参照）。

また、「増語触」（*adhivacana(sam)sparśa*）の中の *adhivacana* は基本的に「名称」を意味するが、この複合語は多重の意味を有するため（横山 [1976] 参照）、訳語は確定し難い。ここでは玄奘訳の「増語触」を用いる。

¹⁸ 阿含・ニカーヤとの対比により、「受集趣行」に対応するパーリ語は *vedanāsamudayagāminī patipadā* であると想定される。『雑阿含』では「受集道跡」と訳している（Text C-tr 注 17 参照）。「道」は「行」という字の本義である。上記の訳文はこれを前提とする。

¹⁹ 『雑阿含』17.475 経（121b26-c12. *Pubbeñāṇam* (SN 36.24. Vol. 4, p. 233, 13-24) に対応）。Text C-tr 注 17 参照。

2.3.2.1.4.2

如是八種觀_{磧 463a}察諸受，當知略顯自相觀、現法轉因觀、彼滅觀、後法轉因觀、彼滅觀、彼二轉因觀、彼二轉滅因觀及清淨觀。

2.3.2.1.4.3

是名觀察差別。

2.3.2.1.5

出離者，謂初靜慮出離憂根，第二靜慮出離苦根，第三靜慮出離喜根，第四靜慮出離樂根，於無相¹³界出離捨根。是名出離差別。

2.3.3

2.3.3.0

復次，云何想蘊差別？

2.3.3.1

2.3.3.1.0

略由五種。一由_{{金 886c}{麗 924b}}事故，二由相故，三由顛倒故，四由無顛倒故，五由分別故。

2.3.3.1.1

事者，謂取所緣相及隨順彼法。

¹³ 「相」房，(T)資普崇；「想」金，麗，磧，T. cf. 「於無相中出離捨根」(『瑜伽論』「本地分中三摩呬他地」331a22-23).

2.3.2.1.4.2

これら受に対する八種の観察は、〔それぞれ、受の〕自相に対する観察、現〔世〕に起こる〔受〕の原因に対する観察、それ（現世に起こる受）の消滅に対する観察、来〔世〕に起こる〔受〕の原因に対する観察、それ（来世に起こる受）の消滅に対する観察、その〔現世と来世に〕起こる二つの〔受〕の原因に対する観察、その〔現世と来世に〕起こる二つの〔受〕の消滅の原因に対する観察、および清浄に対する観察を簡略に示すものであると知られるべきである。

2.3.2.1.4.3

以上のものを、観察〔に基づく〕区別と名付ける。

2.3.2.1.5

出離とは、第一静慮（初禪）において憂根を離れ、第二静慮（二禪）において苦根を離れ、第三静慮（三禪）において喜根を離れ、第四静慮（四禪）において楽根を離れ、無相の領域において捨根を離れる。以上のものを、出離〔に基づく〕区別と名付ける²⁰。

2.3.3 [想蘊の区別]

2.3.3.0

また、想蘊の区別は如何なるものか。

2.3.3.1

2.3.3.1.0

要約して言えば、五種に基づく。一は事という点で、二は相という点で、三は顛倒という点で、四は顛倒のないという点で、五は分別という点で〔ということである〕。

2.3.3.1.1

事とは、所縁の相を捉えること、およびそれ（所縁の相を捉えること）に相応しい法である。

²⁰ 憂根・苦根・喜根・楽根・捨根という五つの受は、受の分類の一つとして初期経典から説かれている。例えば、

Aṭṭhasata (SN 36.22. Vol. 4, p. 232, 4–6): *katamā ca bhikkhave pañcavedanā. sukhindriyaṃ dukkhindriyaṃ somanassindriyaṃ domanassindriyaṃ upekkhindriyaṃ imā vuccanti bhikkhave pañcavedanā.* (【訳】比丘たちよ、五つの受とは何か。安楽の根、苦痛の根、愉快の根、不快の根、平静の根、比丘たちよ、これら〔の受〕が五つの受と言われる。)『雑阿含』17.485 経 (124a11–13) 対応 (赤沼 [1958] では無対応とする): 「云何説五受。謂樂根、喜根、苦根、憂根、捨根、是名説五受。」(【訳】五つの受を説示することとは何か。樂の根、苦の根、喜の根、憂の根、捨(平静)の根、これが五つの受を説示することである。)この五受根もまた、二十二根という根の分類に含まれている(水野 [1966: 42] 参照)。

また、有部と瑜伽行派の論書には、五受根と禪定の段階との対応関係に関する説明が見られる。有部では、主に喜根・楽根・捨根の三根について論じ、『法蘊足論』が示すように (T26, 499b14–25 参照)、第二静慮には喜根が生じ、第三静慮には楽根が生じ、未至の禪定・中間静慮・第四静慮と無色の禪定には捨根が生じるとしている。一方、瑜伽行派では、五受根からの出離と各禪定段階との対応関係を明確に述べている。ここの記述はその類のものである。同じ記述は次に示す「本地分中三摩呬他地」にも見られる。

SamāhitāBh 148, 15–149, 3: *tatra catvāri dhyānāni vedanānāṃ nihsaraṇavastv ity ucyate. tatra daurmanasyasya prathamam dhyānam nihsaraṇam, duḥkhendriyasya dvitīyam, saumanasyendriyasya tṛtīyam, sukhendriyasya caturtham, upekṣ[āyā] animittam.* (【訳】また、四つの禪定は、諸々の受に関して、出離の場所であると言われる。その中で、憂〔根〕に関して、初禪が出離である。苦根に関して、二〔禪が出離である〕。喜根に関して、三〔禪が出離である〕。楽根に関して、四〔禪が出離である〕。捨〔根〕に関して、無相〔の禪定が出離である〕。)

2.3.3.1.2

2.3.3.1.2.1

相者，自相有六種如前應知。

2.3.3.1.2.2

等了相是共相。

2.3.3.1.2.3

是名相差別。

2.3.3.1.3

2.3.3.1.3.1

2.3.3.1.3.1.1

顛倒差別者，謂諸愚夫無所知曉，隨逐無明，起不如理作意，於所緣境，無常計常，取相而轉。是名想倒。如於無常計常，如是於苦計樂，於不淨計淨，於無我計我，此想顛倒。

2.3.3.1.3.1.2

諸在家者能發心倒，一分出家者能發見倒。

2.3.3.1.3.1.3

是名顛倒差別。

2.3.3.1.3.2

2.3.3.1.3.2.0

此想顛倒復有差別。

2.3.3.1.3.2.1

謂於四事邪取其相，是名想倒。

2.3.3.1.3.2.2

若由如是等了相故於境貪著，是名心倒。

2.3.3.1.3.2.3

若由如是¹⁴等了相故，有執_{積 463b}著者於顛倒事堅執忍可，開示建立，是名見倒。

2.3.3.1.4

無顛倒差別者，謂諸聰叡有所曉了，隨智慧明起如理作意，於所緣境，無常知無常，苦知是苦，不淨知不淨，無我知無我，正取相轉。是_{T594c}名想無顛倒、心無顛倒、見無顛倒。是名無顛倒差別。

2.3.3.1.5

2.3.3.1.5.0

分別差別者，略有五種想分別相。一境界分別，二領納分別，三假設分別，四虛妄_{房 469b}分別，五實義分別。

¹⁴ 「如是」金，麗，積，T；「如是如是」房。

2.3.3.1.2

2.3.3.1.2.1

相とは、自相には前述した通り、〔有相の想などの〕六種があると知られるべきである。

2.3.3.1.2.2

等了の相が共相である。

2.3.3.1.2.3

以上のものを、相〔に基づく〕区別と名付ける。

2.3.3.1.3

2.3.3.1.3.1

2.3.3.1.3.1.1

顛倒〔に基づく〕区別とは、諸々の凡夫は無知で、無明に随って不如理作意を起し、所縁としての対象に対して無常を常住と考え、相を捉えて活動する。これを想の顛倒と名付ける。無常を常住と考えるのと同様に、苦を楽と考え、不浄を清浄と考え、無我を我と考える。以上のものを想の顛倒と名付ける。

2.3.3.1.3.1.2

諸々の在家者は心の顛倒を起し、一部の出家者は見の顛倒を起す。

2.3.3.1.3.1.3

以上のものを、顛倒〔に基づく〕区別と名付ける。

2.3.3.1.3.2

2.3.3.1.3.2.0

この想の顛倒にはさらに区別がある。

2.3.3.1.3.2.1

すなわち、四つの事（無常・苦・不浄・無我）に対して、その相を誤って捉えること、それを想の顛倒と名付ける。

2.3.3.1.3.2.2

このような等了の相に基づいて、対象を貪愛し執着している場合、これを心の顛倒と名付ける。

2.3.3.1.3.2.3

このような等了の相に基づいて、執着のある者は顛倒した物事を固く執着して承認し、〔正しいものとして〕説示して確立させる場合、これを見の顛倒と名付ける。

2.3.3.1.4

顛倒のないこと〔に基づく〕区別とは、諸々の聡明な者はよくさとしており、智慧という明に随って如理作意を起し、所縁としての対象に対して無常を無常であると知り、苦を苦であると知り、不浄を不浄であると知り、無我を無我であると知り、正しく相を捉えて活動する。これを、想の顛倒のないこと、心の顛倒のないこと、見の顛倒のないことと名付ける。以上のものを、顛倒のないこと〔に基づく〕区別と名付ける。

2.3.3.1.5

2.3.3.1.5.0

分別〔に基づく〕区別とは、要約して言えば、五種の、想による分別の相がある。一は対象に対する分別、二は領納されたものに対する分別、三は仮設されたものに対する分別、四は虚妄なものに対する分別、五は真実のものに対する分別である。

2.3.3.1.5.1

2.3.3.1.5.1.1

若於境界取_{{金 887a}{麗 924c}}隨味相，名境界分別。

2.3.3.1.5.1.2

執取境界所生諸受，名領納分別。

2.3.3.1.5.1.3

若於自他取如是名、如是類、如是姓等種種世俗言說相，名假設分別。

2.3.3.1.5.1.4

於諸境界取顛倒相，名虛妄分別。

2.3.3.1.5.1.5

於諸境界取無倒相，名實義分別。

2.3.3.1.5.2

如是總名想蘊分別差別。

2.3.4

2.3.4.0

復次云何行蘊差別？

2.3.4.1

2.3.4.1.0

亦由五相。一由境界故，二由分位故，三由雜染故，四由清淨故，五由造作故。

2.3.4.1.1

由境界者，謂於行蘊立六思身。

2.3.4.1.2

由分位者，謂立生等不相應行。由彼生等唯有分位所顯現故。

2.3.4.1.3

由雜染者，謂於雜染諸行建立_{積 464a}煩惱及隨煩惱。

2.3.4.1.4

由清淨者，謂於清淨諸行建立信等。

2.3.4.1.5

由造作者，謂如前說五造作相，為境隨與等。

2.3.3.1.5.1

2.3.3.1.5.1.1

対象に対して、二次的な〔相〕と相を捉える場合²¹、対象に対する分別と名付ける。

2.3.3.1.5.1.2

対象から生じた諸々の受を執着して捉える〔場合〕、領納されたものに対する分別と名付ける。

2.3.3.1.5.1.3

自・他に対して、この名称・この種類・この種姓など、様々な世間の言語表現における相を捉える場合、仮設されたものに対する分別と名付ける。

2.3.3.1.5.1.4

対象に対して、顛倒した（誤った）相を捉える場合、虚妄なものに対する分別と名付ける。

2.3.3.1.5.1.5

対象に対して、顛倒のない（正しい）相を捉える場合、真実のものに対する分別と名付ける。

2.3.3.1.5.2

以上のものを総じて、想蘊の、分別〔に基づく〕区別と名付ける。

2.3.4 [行蘊の区別]

2.3.4.0

また、行蘊の区別は如何なるものか。

2.3.4.1

2.3.4.1.0

〔それ〕も五つの相に基づく。一は対象という点で、二は位相という点で、三は雑染という点で、四は清浄という点で、五は造作という点で〔ということである〕。

2.3.4.1.1

対象に基づく〔区別〕とは、行蘊に関して、六思身を設定することである。

2.3.4.1.2

位相に基づく〔区別〕とは、生などの〔心〕不相応行を設定することである。それら生など〔の心不相応行〕にはただ位相によって顕現されるもののみがあるから。

2.3.4.1.3

雑染に基づく〔区別〕とは、諸々の雑染の行に対して、煩惱と随煩惱を設定することである。

2.3.4.1.4

清浄に基づく〔区別〕とは、諸々の清浄の行に対して、信などを設定することである。

2.3.4.1.5

造作に基づく〔区別〕とは、前述した通りの、対象の随与をなすことなどの五つの造作の相である。

²¹ 「取随味相」の意味は明確でない。チベット語訳では *mtshan ma dang/ mngon rtags su 'dzin pa*（特徴と二次的な〔特徴〕を捉えること）となっている。「随味」に対応するチベット語訳は *mngon rtags*（**anuvyañjana*）であると推測される。『瑜伽論』では、*anuvyañjana* は *nimitta*（「相」）の対概念として説かれる場合が多く、一般的に「随好」と訳出されている。例えば、「本地分中声聞地」（ŚrBh-T1, 16, 22-23）では、出家者の感官に関する律儀について、次のように述べている：*sa cakṣuṣā rūpāni dṛṣṭvā na nimittagrāhī bhavati, nānuyvañjanagrāhī...*（【訳】その〔出家者〕は眼によって色かたちを見た後、特徴を捉えることがない〔し〕、二次的な〔特徴〕を捉えること〔も〕ない（後略））。漢訳の対応箇所（397a21-22）は「眼見色已，而不取相，不取随好」となっている。「取随味相」は、「随味」と「相」を捉えることを意味し、「声聞地」の記述と類似している。上記の訳文はこの解釈に従っている。

[Part 3]

『瑜伽師地論』卷 54 「攝決擇分中五識身相應地意地之四」

(T 600b26-601a21, 金 897b19-898b11, 房 478a5-b23, 麗 933a19-934a11, 磧 477b2-478b16)

3.0

3.0.1

復次，諸色所攝法，幾是根性？幾是所行性？謂五是根性，六是所行性。

3.0.2

問：何等所行境是根所行耶？答：若根不壞等，如本地分中已廣說。謂由依處故，或由相故，或由方故，或由時_{T600c}故，或由_{{金 897c}{麗 933b}}明了、不明了故，或由全事、一分事故。

3.1

3.1.1

3.1.1.0

問：由幾因緣說諸根壞及不壞耶？

3.1.1.1

3.1.1.1.1

答：由二因緣。一由羸損故，二由全壞故。

3.1.1.1.2

與此相違，當知不壞。

3.1.2

3.1.2.0

又，略由四緣，諸根變異。

3.1.2.1

一由外緣所生。謂由受用、攝受損壞外境界故，或由他輩所損益故。

3.1.2.2

二由內緣所生。謂由各別不如理作意所生貪等諸纏煩惱故，或由如理作意所生三摩鉢底等故。

3.1.2.3

三由業緣所生。謂由先業增上緣力感得端正、醜陋等故。

[Part 3 識の生起について]

3.0 [色に包摂される諸法の分類]

3.0.1

また、色（物質）に包摂される諸々の法は、幾つが根であることをもつものなのか、幾つが活動領域であることをもつものなのか、五つは根であることをもつものであり、六つは活動領域であることをもつものである。

3.0.2

問う。如何なる活動領域としての対象が根の活動領域となるのか。答える。「もし根が壊れていない」など〔と〕「本地分」においてすでに詳しく説かれているとおりである²²。すなわち、〔対象が〕抛り所によって、あるいは相によって、あるいは方向によって、あるいは時間によって、あるいは明瞭さや不明瞭さによって、あるいは全体的なものや一部のものによって〔根にとっての活動領域となる〕²³。

3.1 [根について]

3.1.1 [根の壊と不壊]

3.1.1.0

問う。幾つの原因によって、諸々の根が壊れている・壊れていない、と説くのか。

3.1.1.1

3.1.1.1.1

答える。二つの原因によって〔根が壊れていると説く〕。一は衰弱によって、二は全壊によって〔である〕。

3.1.1.1.2

それと異なる〔場合〕、壊れていないと知られるべきである。

3.1.2 [根の変異]

3.1.2.0

さらに、要約して言えば、四つの縁によって〔五〕根が変異する。

3.1.2.1

一は外的な縁によって起こる〔変異〕である。すなわち、〔根を〕利益する（「攝受」）あるいは〔根を〕損壊する外的な対象を受用することによって〔根が変異する〕。あるいは他者により損害・利益することによって〔根が変異する〕。

3.1.2.2

二は内的な縁によって起こる〔変異〕である。すなわち、各々の不如理作意から生じた貪などの諸々の纏²⁴たる煩惱によって、あるいは、如理作意から生じた定（三摩鉢底）などによって〔根が変異する〕。

3.1.2.3

三は業という縁によって起こる〔変異〕である。すなわち、前の業という増上縁の力で端正・醜陋などを感得することによって〔根が変異する〕。

²² Text A 1.2.1 参照。

²³ 本地分の対応箇所は Text A 4.2.2 参照。この記述は本地分とほぼ同じである。ただし、「或由相故」は、本地分では svabhāvato（「或由自性故」291a16）となっている。また、「謂由依處故（中略）一分事故」の部分はチベット語訳には見られない。

²⁴ 「纏」は煩惱の異名の一つで、貪・瞋などの煩惱に束縛される状態を指す。

3.1.2.4

四由自體變異所生。謂彼諸根自相差別故。

3.1.3

3.1.3.0

問：由幾因緣意根壞耶？

3.1.3.1

3.1.3.1.0

答：由四因緣。

3.1.3.1.1

一由蓋所作。謂於五蓋中隨由一蓋覆蔽其心。

3.1.3.1.2

二由散亂所作。謂由鬼魅嬈¹⁵亂其心。

3.1.3.1.3

三由未證所作。謂彼內心猶{積 478a}未證得靜慮無色勝品功德，然於其中強發作意。

3.1.3.1.4

四由未解所作。謂於多聞工巧等事，心未純熟，強施方便。

3.2

3.2.1

3.2.1.0

云何色等境界望彼諸根名為現前？

3.2.1.1

謂色於眼，非合非闍，非極細遠，亦非有障，名為現前。要唯有見，有明無障，在可行處，乃名現前。

¹⁵ 「嬈」金，房，麗，T；「撓」積，(T)資普徑崇。

3.1.2.4

四はそれ自体の変異によって起こる〔変異〕である。すなわち、それら諸々の根の自相の区別によって〔根が変異する〕。

3.1.3 [意根の壊]

3.1.3.0

問う。幾つの原因によって意根は壊れるのか。

3.1.3.1

3.1.3.1.0

答える。四つの原因によってである。

3.1.3.1.1

一は蓋によってなされる。すなわち、五蓋²⁵の中のどれか一つの蓋がその心を不明瞭にすることによって〔意根が壊れる〕。

3.1.3.1.2

二は散乱によってなされる。すなわち、鬼魅がその心を擾乱することによって〔意根が壊れる〕。

3.1.3.1.3

三は未証得によってなされる。すなわち、その者の内心はまだ、〔色界の四〕禅や無色〔界の定〕の優れた功德を証得していないにもかかわらず、その〔心〕の中に強引に作意を發動する〔ことによって、意根が壊れる〕。

3.1.3.1.4

四は未理解によってなされる。すなわち、多聞や工巧などのことに対して、心はまだ馴染んでいない〔のに〕、強引に手段を実施する〔ことによって、意根が壊れる〕。

3.2 [対象について]

3.2.1 [対象の現前]

3.2.1.0

如何にして色(色かたち)などの対象をそれらの根にとって現前するものと名付けるのか。

3.2.1.1

眼に対して色が、接触しておらず、暗くなく、極めて微細あるいは遠離しておらず、妨げがあるのでない〔場合、その色を〕現前するものと名付ける。必ず、示すことができ(有見)、明かりがあり、妨げがなく、〔根の〕活動し得る場所にある〔場合〕のみ、現前するものと名付ける。

²⁵ 「蓋」(修行を妨害するもの)は初期經典以来説かれる煩惱に関連する概念であり、一般には貪欲などの五蓋として説かれている。『瑜伽論』もその伝統的な説明に従っている。例えば、「本地分中有尋有伺地」(YBh 169, 11-12) : *nīvaraṇānīti pañca nīvaraṇāni | kāmaccchandanivaraṇaṃ | vyāpādastyānamiddhaudhatyakaukrtyavicikitsānīvaraṇāni* || (【訳】諸々の蓋とは五つの蓋である。〔すなわち、〕貪愛や欲求という蓋と、憎悪〔という蓋と〕、気鬱や眠気〔という蓋と〕、浮つきや後悔〔という蓋と〕、疑念という蓋である。)

又於一眼，雖闇_{{金 898a}{麗 933c}}障色，亦名現前。

3.2.1.2

聲於耳根，亦必非合，非極細遠，得名現前。有障無障，若明若闇，在可行處，皆名現前。

3.2.1.3

香、味、觸三，於鼻、舌、身，唯合能_{房 478b}取。在可行處，乃名現前所行境界。

3.2.1.4

若諸天眼，唯照有見。有障無障，若明若闇，若近若遠，皆名現前。然在可行處，非不可行處。

3.2.1.5

若聖慧眼，一切種色皆是所行。

3.2.2

3.2.2.0

問：如本地分說六種所行性，此何差別耶？

3.2.2.1

答：_{T601a}初所行性，謂有情世間所攝色，及器世間所攝色。

3.2.2.2

3.2.2.2.0

第二所行性，謂由三自性自性差別故。相差別故，作用差別故，分位差別故。

また、一部の眼については、色は暗かったり妨げがあったりしても、現前するものと名付ける²⁶。

3.2.1.2

耳根に対して音声はまた、必ず接触しておらず、極めて微細あるいは遠離していない〔場合〕、現前するものと名付けうる。妨げがあって〔も〕なくて〔も〕、明るくて〔も〕暗くて〔も〕、〔根の〕活動し得る場所にある〔場合〕、すべて現前するものと名付ける。

3.2.1.3

におい・味・触覚対象の三つは、〔それぞれ〕鼻・舌・身体に対して、接触している〔場合〕のみ捉えられるものである。〔根の〕活動し得る場所にある〔場合〕、現前して活動している対象と名付ける。

3.2.1.4

諸々の天眼の場合は、ただ示すことができるもの（有見）を照らす。妨げがあって〔も〕なくて〔も〕、明るくて〔も〕暗くて〔も〕、近くて〔も〕遠くて〔も〕、すべて現前するものと名付ける。しかし、〔それは根の〕活動し得る場所にあるのであり、〔根の〕活動し得ない場所にあるのではない。

3.2.1.5

聖なる慧眼の場合は、すべての種類の色が活動領域である。

3.2.2 [活動領域であることの区別]

3.2.2.0

問う。「本地分」で六種の活動領域であることを述べたように、それらには如何なる区別があるのか。

3.2.2.1

答える。最初の活動領域であること（拠り所という点）とは、有情世間によって包摂される色、および器世間によって包摂される色である。

3.2.2.2

3.2.2.2.0

第二の活動領域であること（本質という点）は、三つの本質に基づく本質の区別によるもの、〔すなわち〕相の区別によるもの、作用の区別によるもの、位相の区別によるものである。

²⁶ 「一眼」に関するチベット語訳の該当箇所は *la la'i mig la ni*（ある種の眼には）となっているが、漢訳では「一眼」という表現の意味が不明確である。この一文については次のような様々な解釈があるが、定論はない。ここでは、チベット語訳に参照して上記のように訳した。

『略纂』（198b13-15）：「謂蝙蝠鴝鵒等眼根中有障。如頗胝迦中亦見物等，以明故。」（【訳】コウモリやフクロウなどの眼根には妨げがあるということである。水晶の中でも物などが見える、透明であるから、と同様である。）また、コウモリやフクロウなどの眼は夜にも対象に触れる（牴触される）ことは、『俱舍論』「界品」第29偈の解説に言及されている（櫻部 [1979 : 192] 参照）。

『瑜伽論記』（638c18-22）：「景云。一眼翳障，色對無翳障眼，亦名現前。（中略）測云。天眼能見暗障色，故云一眼。」（【訳】景〔師〕は、「片目が翳んだけれども、色は翳んでない目にむかう〔場合〕も現前するものと名付ける」と解説する。（中略）測〔師〕は、「天眼は暗い〔色〕や妨げがある色が見えるので、一眼という」と解説する。）

3.2.2.2.1

色相差別者，謂青黃赤白等，乃至廣說。

作用差別者，謂有表無表、律儀、不律儀、非律儀非不律{磧 478b}儀所攝作用。

分位差別者，謂可意不可意色，及順捨處色。

3.2.2.2.2

聲相差別者，謂執受大種為因，非執受大種為因，執受非執受大種為因。

作用差別者，謂語表業。

分位差別者如前應知。

3.2.2.2.3

香相差別者，謂根、莖、皮、實、華、葉、果香。

作用差別者，謂香、味、觸皆無作用。

分位差別如前應知。

3.2.2.2.4

味相差別者，謂{金 898b}{麗 934a}甘苦等如前已說。

3.2.2.2.5

觸相差別亦如前說多種應知。

3.2.2.3

第三所行性，謂東南西北等方維差別應知。

3.2.2.4

第四所行性，謂過去、未來、現在差別應知。

3.2.2.5

第五所行性，謂取實、不實差別應知。

3.2.2.6

第六所行性，謂取一分事或遍滿事差別應知。

3.2.3

如是等類，是名諸¹⁶色境界現前差別應知。

3.3

云何名為能生作意？謂由所依不壞故、境界現前故所起，能引發心所¹⁷。

3.4

如是等類，應當思惟色蘊所行相。

¹⁶ 「諸」金，房，麗，磧，T；「謂」(T)知。

¹⁷ 「所」金，麗，磧，T；「法」房。

3.2.2.2.1

色の相の区別とは、青・黄・赤・白など、ないし詳しく説かれたものである。

作用の区別とは、表出されたもの・表出されないもの〔によって包摂された作用〕と、律儀（善なる行為）・不律儀（悪しき行為）・律儀でもない不律儀でもないものによって包摂された作用である。

位相の区別とは、好ましい〔色〕・好ましくない色，および捨（平静な状態）に相応しい色である。

3.2.2.2.2

音声の相の区別とは、〔心・心所によって〕執られている元素を原因とするものと、執られていない元素を原因とするものと、執られている〔元素〕と執られていない元素〔の両方〕を原因とするものとである。

作用の区別とは、言葉として表出された行為である。

位相の区別は前（色の場合）と同様に知られるべきである。

3.2.2.2.3

においの相の区別とは、根・茎・皮・実・花・葉・果のにおいである。

作用の区別とは、におい・味・触覚対象はすべて作用がないということである。

位相の区別は前と同様に知られるべきである。

3.2.2.2.4

味の相の区別とは、甘さ・苦さなど、すでに前に述べられた通りである。

3.2.2.2.5

触覚対象の相の区別も前に述べられた多くの種類の通りに知られるべきである。

3.2.2.3

第三の活動領域であること（方向という点）は、東南西北などの方角の区別と知られるべきである。

3.2.2.4

第四の活動領域であること（時間という点）は、過去・未来・現在の区別と知られるべきである。

3.2.2.5

第五の活動領域であること（明瞭や不明瞭という点）は、確実なもの〔を捉える〕や、確実でないものを捉えるという区別と知られるべきである。

3.2.2.6

第六の活動領域であること（全体的なものや一部のものという点）は、一部のもの〔を捉える〕、あるいは、〔全体に〕遍く行き渡っているものを捉えるという区別と知られるべきである。

3.2.3 [まとめ]

以上のような類のものを、諸々の色（物質）〔に包摂される〕対象が現前することの区別と名付けると知られるべきである。

3.3 [能生作意について]

如何なるものを生じさせる作意（「能生作意」）と名付けるのか。抛り所が壊れていないから、対象が現前するから、起こされるものであり、心所を引き起こすことができる。

3.4 [総括]

以上のような類のもののように、色蘊の活動領域の相が思惟されるべきである。

[Part 4]

『瑜伽師地論』卷 55 「攝決擇分中五識身相應地意地之五」

(T 601c10-602a11, 金 900c19-901b8, 房 479b6-480a6, 麗 934c19-935b8, 磧 480a10-481a2)

4.0

4.0.1

問：諸識生時，與幾遍行心法¹⁸俱起？答：五。一作意，二觸，三受，四想，五思。

4.0.2

問：復與幾不遍行心法俱起？答：不遍行法乃有多種，勝者唯五。一欲，二勝解，三念，四三摩地，五慧。{金 901a}{麗 935a}

4.1

4.1.1

作意云何？謂能引發心法¹⁹。

4.1.2

觸云何？謂三和合故，能攝受義。

4.1.3

受云何？謂三和合故，能領納義。

4.1.4

想云何？謂三和合故，施設所緣假合而取。此復二種。一隨覺想，二言說隨眠想。隨覺想者，謂善言說人天等想。言說隨眠想者，謂不善{磧 480b}言說嬰兒等類乃至禽獸等想。

4.1.5

思云何？謂三和合故，令心造作，於所緣境，隨與領納、和合、乖離。

¹⁸ 「法」金，房，麗，T；「所」(T)知。

¹⁹ 注 18 と同じ。

[Part 4 五つの遍在する心所と五つの優れた非遍在の心所について]

4.0 [総説]

4.0.1

問う：諸識が生じるとき、幾つの遍行する心〔所〕法と俱起するのか。答える：五つ。一に作意、二に触、三に受、四に想、五に思である。

4.0.2

問う：また、幾つの遍行しない心〔所〕法と俱起するのか。答える：遍行しない〔心所〕法には多種あるが、優れたものはただ五つである。一に欲、二に勝解、三に念、四に三摩地、五に慧である。

4.1 [五つの遍在する心所の定義]

4.1.1

作意とは何か。心〔所〕法を引き起こすことができることである²⁷。

4.1.2

触とは何か。三つ（感官、対象、識）の和合に基づいて、事柄（「義」）を摂受することである²⁸。

4.1.3

受とは何か。三つの和合に基づいて、事柄（「義」）を領納することである²⁹。

4.1.4

想とは何か。三つの和合に基づいて、所縁の仮の協約（「假合」）を仮設して（「施設」）取ることである。これもまた二種類である。一に随覚想（知覚に随う想）、二に言説随眠想（言説を随眠とする想）である。随覚想とは、言語に堪能な人や天人などの想である。言説随眠想とは、言説に堪能でない嬰兒などの類、ないし鳥獣などの想である³⁰。

4.1.5

思とは何か。三つの和合に基づいて、心を作動（造作）させることである。〔すなわち、〕所縁としての対象に対して、随与して領納すること、和合すること、または乖離することである³¹。

²⁷ 対比のため、「本地分」において五遍行と五別境が説明されている部分の対応箇所（サンスクリット語テキストおよび漢訳）を示す。「本地分」(Text A 4.4.2.1) : manaskārah katamaḥ | cetasa ābhogaḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.2.1) : 「作意云何？謂心迴轉。」

²⁸ 「本地分」(Text A 4.4.2.2) : sparśaḥ katamaḥ | trikaṣaṃnipātaḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.2.2) : 「觸云何？謂三和合。」

「能攝受義」の「義」(*artha) は解釈が困難である。「本地分中意地」と「有尋有伺地」の関連する説明に照らして、ここでは「事柄」と解釈した。詳しくは本論第 1 章第 1.2.3.2 節参照。

²⁹ 本地分 (Text A 4.4.2.3) : vedanā katamā | anubhavanā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.2.3) : 「受云何？謂領納。」

「能領納義」の「義」(*artha) について、上記の触の定義文を参照して、「事柄」と解釈した。詳しくは本論第 1 章第 1.3.2.1 節参照。

³⁰ 本地分 (Text A 4.4.2.4) : saṃjñā katamā | saṃjñānā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.2.4) : 「想云何？謂了像。」

³¹ 本地分 (Text A 4.4.2.5) : cetanā katamā | cittābhisamkārah || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.2.5) : 「思云何？謂心造作。」

「撰決択分」のこの思の定義文は意味が不明瞭な点が多い。特に、漢訳にのみ見られる「随与」という語は難解である。詳しくは本論第 5 章参照。

4.2

4.2.1

欲云何？謂於彼彼境界隨趣希樂。

4.2.2

勝解云何？謂於彼彼境界隨趣印可。

4.2.3

念云何？謂於彼彼境界隨趣明記。

4.2.4

三摩地云何？謂於彼彼境界隨順趣向，為審慮依心一境性。

4.2.5

慧云何？謂於彼彼境界隨順趣向，簡²⁰擇諸法。或如理觀察，或不如理觀察，或非如理非不如理觀察。

²⁰ 「簡」金，房，麗，T；「揀」磧，(T)普徑。

4.2 [五つの優れた非遍在の心所の定義]

4.2.1

欲とは何か。各々の対象に対して、趣きに随って希求することである³²。

4.2.2

勝解とは何か。各々の対象に対して、趣きに随って確認して是認することである³³。

4.2.3

念とは何か。各々の対象に対して、趣きに随って明瞭に記憶することである³⁴。

4.2.4

三摩地とは何か。各々の対象に対して、趣きに随っている、詳しく考察することの拠り所である心一境性（心の専一）である³⁵。

4.2.5

慧とは何か。各々の対象に対して、趣きに随って、諸法を簡択することである。あるいは如理に（道理のとおり）に観察することであり、あるいは不如理に観察することであり、あるいは如理にでもなく不如理にでもなく観察することである³⁶。

³² 本地分 (Text A 4.4.3.1) : chandaḥ katamaḥ | yad īpsite vastuni tatra tatra tadanugā kartukāmatā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.3.1) : 「欲云何？謂於可樂事，隨彼彼行，欲有所作性。」

「欲」から「慧」までの五法に関する説明文では、「於彼彼境界隨趣」、あるいは「於彼彼境界隨順趣向」という表現が共通して用いられている。「隨趣」の「趣」の意味は不明確であるが、直後の記述に照らせば、「隨趣」は「隨順趣向」を二文字に簡略化したものであると分かる。すなわち、「欲」「勝解」「念」では、直後に「希樂」など二文字の単語が続くため、「隨趣」はそれとともに四文字の語を構成している。「三摩地」「慧」では、直後に二文字以上の表現が続くため、四文字の「隨順趣向」が用いられている。

「趣向」の原語は特定し難い。本地分の「欲」の説明文は、上記のサンスクリットテキストでは yad īpsite vastuni tatra tatra tadanugā kartukāmatā (【訳】 望まれた物事それぞれに対して、その〔物事〕に相当する、しようと欲することである) となっているが、それに対する漢訳では「謂於可樂事，隨彼彼行欲有所作性」(【訳】 嬉しがる物事に対して、それぞれの行に随って、作そうと欲することである) となっている。原文の tatra tatra tadanugā は「隨彼彼行」と訳されているが、複合語 tadanugā の中の tad に対応する訳語が見当たらない。また、「隨彼彼行」という訳語は、「それぞれの行に随って」もしくは「それぞれに随って行く」の二様に解釈し得る。

一方、チベット語訳では、「本地分」の「欲」から「慧」までの五法に関する説明文の中の tadanuga- が de'i rjes su 'gro と訳されている。「撰決択分」の説明文では、漢訳の「隨趣」や「隨順趣向」に対応する箇所もいずれも de'i rjes su 'gro ba となっている (Text C 4.2 および Text C-tr 注 26 参照)。つまり、「本地分」と「撰決択分」の説明文のチベット語訳では、tadanuga- という複合語に対応する訳語 de'i rjes su 'gro が見られる。これに対して、漢訳には、「隨...行」もしくは「隨趣」「隨順趣向」という語があり、前者の原語は tadanuga- であると推測されるが、後者の原語は確定し難い。ここでは、漢訳を逐語的に訳した。

³³ 本地分 (Text A 4.4.3.2) : adhimokṣaḥ katamaḥ | yan niścite vastuni tatra tatra tadanugāvadhāraṇabhaktiḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.3.2) : 「勝解云何？謂於決定事，隨彼彼行，印可隨順性。」

³⁴ 本地分 (Text A 4.4.3.3) : smṛtiḥ katamā | yat samstute vastuni tatra tatra tadanugābhilapanā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.3.3) : 「念云何？謂於串習事，隨彼彼行，明了記憶性。」

³⁵ 本地分 (Text A 4.4.3.4) : samādhiḥ katamaḥ | yat parīkṣye vastuni tatra tatra tadanugam upanidhyānasamṅgīritam cittaikāgryam || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.3.4) : 「三摩地云何？謂於所觀察事，隨彼彼行，審慮所依心一境性。」

³⁶ 本地分 (Text A 4.4.3.5) : prajñā katamā | yat parīkṣya eva vastuni tatra tatra tadanugo dharmānām pravacayaḥ | yogavihitato vāyogavihitato vā naiva yogavihitato nāyogavihitataḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.3.5) : 「慧云何？謂即於所觀察事，隨彼彼行簡擇諸法性。或由如理所引，或由不如理所引，或由非如理非不如理所引。」

4.3

4.3.1

復次，作意為何業？謂於所緣，引心為業。

4.3.2

觸為何業？謂受、想、思所依為業。

4.3.3

受為何業？謂愛²¹生所待為業。

4.3.4

想_{T602a}為何業？謂於所緣，令心彩²²畫，言說為業。

4.3.5

思為何業？謂發起尋伺、身語業為業。

²¹ 「愛」房，麗，磧，T；「受」金，(T)資。

²² 「彩」金，房，麗，磧，T；「采」(T)倉知。

4.3 [五つの遍在する心所のはたらき]

4.3.1

また、作意は何のはたらきをなすのか。所縁に対して心を引くことをはたらきとする³⁷。

4.3.2

触は何のはたらきをなすのか。受・想・思の拠り所〔をなすこと〕をはたらきとする³⁸。

4.3.3

受は何のはたらきをなすのか。愛の生起のたより〔をなすこと〕をはたらきとする³⁹。

4.3.4

想は何のはたらきをなすのか。心に所縁を色付け、描写し、言語表現させることをはたらきとする⁴⁰。

4.3.5

思は何のはたらきをなすのか。尋伺や身〔業〕・語業を發起することをはたらきとする⁴¹。

³⁷ 本地分 (Text A 4.4.4.1) : tatra manaskāraḥ kiṃkarmakaḥ | cittāvarjanakarmakaḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.4.1) : 「又作意作何業? 謂引心為業。」

³⁸ 本地分 (Text A 4.4.4.2) : sparśaḥ kiṃkarmakaḥ | vedanāsaṃjñācetanānāṃ saṃniśrayadānakarmakaḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.4.2) : 「觸作何業? 謂受、想、思所依為業。」

³⁹ 本地分 (Text A 4.4.4.3) : vedanā kiṃkarmikā | tṛṣṇotpādopekṣākarmikā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.4.3) : 「受作何業? 謂愛生所依為業。」

漢訳の「愛生所待為業」(愛の生起のたより〔をなすこと〕をはたらきとする) に対応するチベット語訳は sred pa skyed (skyed DC; skyes PNG) pa dang/ btang snyoms su 'jog pa'i las can (貪愛を生じさせる〔はたらき〕と、捨に安定するはたらきをもつもの) となっており、大きい相違が認められる。この点については本論第 1 章第 1.3.2.2 節参照。

⁴⁰ 本地分 (Text A 4.4.4.4) : saṃjñā kiṃkarmikā | ālambane cittacitṛikāvyavahārakarmikā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.4.4) : 「想作何業? 謂於所縁, 令心發起種種言說為業。」

⁴¹ 本地分 (Text A 4.4.4.5) : cetanā kiṃkarmikā | vitarkakāyavākkarmādisamutthānakarmikā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.4.5) : 「思作何業? 謂發起尋伺、身語業等為業。」

漢訳では「尋伺」となっているが、サンスクリットテキストとチベット語訳には「伺」(*vicāra) に対応する語が見られない。

4.4

4.4.1

欲為何業？謂發生勤勵為業。

4.4.2

勝解為何業？謂於所緣，功德、過失、或俱相違印持為業。{金 901b}{麗 935b}

4.4.3

念為何{房 480a}業？謂於久所思、所作、所說記憶為業。

4.4.4

三摩地為何業？謂智所依為業。

4.4.5

慧為何業？謂於言論所行，染污清淨隨順考察為業。

4.5

問：此不遍行五種心法²³於何各別境事生耶？答：如其{磧 481a}次第，於所愛，決定，串習，觀察四境事生。三摩地、慧於最後境，餘隨次第於前三境。

²³ 「法」金，房，麗，T；「所」磧，(T)資普徑崇知。

4.4 [五つの優れた非遍在の心所のはたらき]

4.4.1

欲は何のはたらきをなすのか。努力を発揮することをはたらきとする⁴²。

4.4.2

勝解は何のはたらきをなすのか。所縁を功德〔あるいは〕過失あるいはその両者のいずれでもないものとして確定して〔そのような理解を〕持ち続けることをはたらきとする⁴³。

4.4.3

念は何のはたらきをなすのか。長時間にわたって、考えたこと・なしたこと・語ったことを記憶することをはたらきとする⁴⁴。

4.4.4

三摩地は何のはたらきをなすのか。智の拠り所〔をなすこと〕をはたらきとする⁴⁵。

4.4.5

慧は何のはたらきをなすのか。発言や行動を、染汚・清浄に随って考察することをはたらきとする⁴⁶。

4.5 [五つの優れた非遍在の心所の生起領域]

問う：これら五種の遍行しない心〔所〕法はどのような個別の対象としての物事に対して生じるのか。答える：その順番に応じて、愛着しているもの、確定したもの、習熟したもの、観察されるべきものという四つの対象としての物事に対して生じる。三摩地と慧は最後の対象に対して、残りのもの（欲、勝解、念）は順次に前の三つの対象に対して〔生じる〕。

⁴² 本地分 (Text A 4.4.5.1) : chandah kiṃkarmakaḥ | vīryārambhasaṃjananakarmakaḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.5.1) : 「欲作何業? 謂發勤為業。」

⁴³ 本地分 (Text A 4.4.5.2) : adhimokṣaḥ kiṃkarmakaḥ | guṇato doṣato nobhayato vālabandadhṛtikarmakaḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.5.2) : 「勝解作何業? 謂於所縁, 任持功德、過失為業。」

⁴⁴ 本地分 (Text A 4.4.5.3) : smṛtiḥ kiṃkarmikā | ciracintitaḥ tabhāṣitasmaraṇānusmaraṇakarmikā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.5.3) : 「念作何業? 謂於久所思、所作、所説憶念為業。」

⁴⁵ 本地分 (Text A 4.4.5.4) : samādhiḥ kiṃkarmakaḥ | jñānasamṇisrayadānakarmakaḥ || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.5.4) : 「三摩地作何業? 謂智所依為業。」

⁴⁶ 本地分 (Text A 4.4.5.5) : prajñā kiṃkarmikā | prapañcapracārasaṃkleśavyavadānānukūlasaṃtīraṇakarmikā || 対応する漢訳 (Text A-chi 4.4.5.5) : 「慧作何業? 謂於戲論所行染汚清浄隨順推求為業。」

Text C

『瑜伽師地論』 「撰決択分」 のチベット語訳における 「五遍行」 関連の抜粋テキスト及び和訳

◇ 使用したテキストの説明

1. 付録 C (Text C) は、付録 B と対応する、「撰決択分」の「本地分中五識身相応地・意地」に対する解説における該当内容のチベット語訳の校訂テキスト (Text C) と、その和訳 (Text C-tr) である。

2. 校訂にあたって、使用した版本および略号を以下に示す。

D	sDe dge edition, No. 4038, sems tsam, zhi.
C	Cone edition, No. 4005, sems tsam, zhi.
P	Peking edition, No. 5539, sems tsam, zi.
N	sNar thang edition, No. 4307, sems tsam, zi.
G	Golden edition, No. 3542, sems tsam, zi.

◇ Editorial Policy

1. sDe dge edition is used as the basic text.
2. The division into paragraphs is editorial.
3. Folio numbers of the editions are given at the beginning of each partition and in the () embedded in texts with abbreviations of each edition. e.g., “D4b2” means the text starts at folio 4b, line 2 in the sDe dge edition.

4. The **bsdu yigs** occurred in N edition and G edition are not recorded.
5. The indistinct uses of *p* and *b*, *d* and *ng* are not recorded.
6. The alternative use of *-gs* and *-d* or *-t* in N and G editions are recorded.

◇ Sigla and Abbreviations

em.	emended
om.	omitted in
ill.	illegible

◇ Editorial Signs

/	<i>shad</i>
//	<i>gnyis shad</i>

Text C

[Part 1]

(D3b4–7, C3b5–4b7, P4a5–5b3, N4b7–5b5, G4b5–5b5)

1.0

sdom¹ ni/

dmigs dang mtshungs par ldan pa (N5a1) dang//² gcig gi rkyen nyid gcig yin dang//³

lhan cig dngos pos 'jug pa dang//⁴ (G4b6) kun nas nyon mongs⁵ ldog pa yin//⁶ (D3b5)

mdor bsdu na kun gzhi rnam (P4a6) par shes pa'i 'jug pa ni⁷ rnam (C3b6) pa bzhis rnam par gzhag⁸ la/ (N5a2) ldog pa ni rnam pa gcig gis rnam par gzhag⁹ par rig par bya ste/

'di lta ste/ dmigs pas 'jug pa rnam par gzhag pa dang/ (P4a7) (G5a1) mtshungs par ldan pas 'jug pa rnam par gzhag¹⁰ pa dang/ (D3b6) gcig gi rkyen¹¹ nyid gcig yin pas 'jug pa (N5a3) rnam par gzhag¹² pa dang/ lhan cig (C3b7) gi dngos pos 'jug pa rnam par gzhag¹³ pa ste/ (P4a8) rnam pa bzhi po de dag gis ni 'jug pa rnam par gzhag¹⁴ (G5a2) la/ kun nas nyon mongs pa ldog pa rnam par gzhag¹⁵ pas ni ldog pa rnam par gzhag par rig (D3b7) par bya'o// (N5a4)

1.1

1.1.0

de la dmigs pas 'jug pa rnam (P4b1) par gzhag¹⁶ pa gang zhe na/

1.1.1

1.1.1.0

mdor bsdu na kun (C4a1) gzhi rnam par shes pa ni dmigs pa rnam pa gnyis kyis 'jug ste/ (G5a3) nang gi len pa rnam par rig pa dang/ phyi rol gyi snod rnam pa yongs su ma chad pa rnam par (P4b2) rig (N5a5) pas so//

1.1.1.1

de la nang gi len (D4a1) pa ni kun brtags pa'i ngo bo nyid la mngon par zhen pa'i (C4a2) bag chags dang rten dang dbang po'i gzugs so// de yang gzugs can gyi khams (G5a4) na'o//

gzugs can ma yin pa (P4b3) na¹⁷ ni bag chags len pa kho (N5a6) nar zad do//¹⁸

1.1.1.2

de la phyi rol gyi snod rnam pa yongs su ma bcad pa (D4a2) rnam par rig pa ni kun gzhi rnam par shes pa nang gi len pa'i (C4a3) dmigs pa (P4b4) gang yin pa de nyid la brten nas/ rtag tu rgyun mi 'chad par (G5a5) 'jig rten dang snod kyi rgyun rnam par (N5a7) rig pa ste/

1.1.1.3

'di lta ste/ dper na mar me 'bar ba ni snying po dang snum gyi rgyus ni nang du 'jug par 'gyur la/ (D4a3) (P4b5) phyi rol du¹⁹ ni 'od 'byung bar byed pa bzhin du nang gi len pa'i dmigs pa (C4a4) dang/ phyi²⁰ rol gyi dmigs pa 'di la yang kun (G5a6) gzhi (N5b1) rnam par shes pa'i tshul de dang 'dra bar blta bar bya'o//

¹ *sdom* DCPG; *sdon* N.

² // DCG; / PN.

³ // DCG; / PN.

⁴ // DCG; / PN.

⁵ *mongs* DCNG; ill. P.

⁶ // DCG; / PN.

⁷ *ni* DCNG; ill. P.

⁸ *bzhag* DCPNG; *gzhag* em.

⁹ *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

¹⁰ *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

¹¹ *rkyen* DPNG; ill. C.

¹² *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

¹³ *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

¹⁴ *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

¹⁵ *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

¹⁶ *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

¹⁷ *na* DC; om. PNG.

¹⁸ // DCNG; // *de la phyi rol gyi snod rnam pa kho nar zad do*// P.

¹⁹ *du* DC; *tu* PNG.

²⁰ *phyi* DCNG; ill. P.

Text C の和訳

[Part 1 アーラヤ識の所縁とアーラヤ識と相応するものについて]

1.0 [総説]

ウダーナは：

所縁と、相応するものと、ほかならぬ一方の縁が他方であることと、
同時のものによって活動することと¹、雑染が還滅することである。

要約して言えば、アーラヤ識の活動することは四つの様相に基づいて設定されている。還滅することは一つの様相に基づいて設定されていると知られるべきである。

すなわち、所縁によって活動することが設定されていること、相応するものによって活動することが設定されていること、[アーラヤ識と転識は]ほかならぬ一方の縁が他方であることによって活動することが設定されていること、および同時のものによって活動することが設定されていることである。これら四つの様相に基づいて、活動することが設定されている。雑染が還滅することが設定されていることに基づいて、還滅することが設定されていると知られるべきである。

1.1 [アーラヤ識の所縁]

1.1.0

その中で、所縁によって活動することが設定されているとは何かと言うならば、

1.1.1

1.1.1.0

要約して言えば、アーラヤ識は二種の所縁によって活動する。[すなわち]内の執受を認識することと、外の分断されていない様相をもつ器[世間]（有情が生きる物質的な環境）を認識することによって[活動すること]である。

1.1.1.1

その中で、内の執受は、遍計所執性に対する執着の習気と、拠り所（身体）と根の色（感覚機能の物質的[基体]）である²。また、これは有色界（物質的な生存領域、すなわち欲界と色界）の場合である。

無色[界]の場合は、ただ習気という執受だけである。

1.1.1.2

また、外の分断されていない様相をもつ器[世間]を認識することとは、アーラヤ識が内の執受という所縁をもつものであり、ほかならぬこの[アーラヤ識]に依拠して、常に、間断なく、世間としての器³の相続を認識することである。

1.1.1.3

それは例えば、燃えている灯火は、芯と油という原因によって内において点り、外において光りを出すように、内の執受を縁じ、外のものを縁じるこのことについてもまた、アーラヤ識の道理はそれと同様であると観察されるべきである⁴。

¹ lhan cig dngos po に関して、袴谷 [1979: 70(n. 2)] によれば、後出の例では lhan cig gi dngos po となっている。その原語は sahabhāva と想定できる。『俱舍論』のチベット語訳には sahabhāva は lhan cig pa'i dngos po と訳出される例が確認できる、という。

² 「遍計所執性に対する執着の習気」については Text B-tr 注 3 参照。「拠り所と根の色」については Text B 1.1.1.1, Text A 3.2.1, 3.2.2 参照。

³ Schmithausen [1987: 391(n. 637)] によれば、'jig rten dang snod の原語は *loka-bhājana（この複合語は『瑜伽論』「本地分声聞地」に見られる）である。*loka-bhājana を 'jig rten dang snod（世間と器）、すなわち並列複合語（dvandva）として訳出するのは誤訳である、という。したがって、「世間としての器」と解釈した。

⁴ この文の dmigs pa を「縁じること」と解釈した。その理由については注 5 参照。

1.1.2

dmigs pa de ni 'jig rten (P4b6) gyi mkhas²¹ pa rnams kyis kyang yongs su bcad²² par dka' ba'i phyir phra (D4a4) ba yin no//

1.1.3

dmigs pa de ni rtag tu yod pa yin te/ lan 'ga' (C4a5) gzhan du 'gyur (N5b2) la/ lan (G5b1) 'ga' gzhan du 'gyur ba ma yin no// 'on kyang²³ (P4b7) dang po pa'i len pa'i skad cig la brten nas/ ji srid 'tsho ba'i²⁴ bar du rnam par²⁵ rig pa ro gcig pas 'jug par 'gyur (D4a5) ro//

1.1.4

kun gzhi rnam par shes pa de ni dmigs pa (C4a6) la skad cig²⁶ pa yin (N5b3) par blta bar bya ste/ (P4b8) (G5b2) skad cig pa'i rgyun gyi rgyud kyis 'jug pa yin gyi/ gcig pa nyid ni ma yin no//

1.1.5

kun gzhi rnam par shes pa de yang 'dod pa'i²⁷ khams na ni rgyu chung ngu'i dmigs pa can du brjod (D4a6) par bya'o//

gzugs kyi (P5a1) khams na ni rgyu chen por (N5b4) gyur pa'i (C4a7) dmigs pa can no//²⁸ (G5b3)

gzugs med pa'i khams na nam mkha' mtha' yas skye mched dang/ rnam shes mtha' yas skye mched na²⁹ ni rgyu tshad med pa'i dmigs pa (P5a2) can no//

ci yang med pa'i skye mched na ni rgyu phra³⁰ ba'i (D4a7) dmigs pa can no//

'du shes med (N5b5) 'du shes med min skye (C4b1) mched³¹ na ni rgyu shin (G5b4) tu phra ba'i dmigs pa can du blta bar bya'o//

²¹ mkhas DC; khams PNG.

²² bcad CNG; gcad DP.

²³ kyang DCNG; ill. P.

²⁴ 'tsho ba'i PNG; 'tsho'i DC.

²⁵ par PNG; par shes par DC.

²⁶ cig DPNG; tsig C.

²⁷ 'dod pa'i DCNG; ill. P.

²⁸ // DCNG; / P.

²⁹ na DPNG; ill. C.

³⁰ phra DCPG; ill. N.

³¹ mched DPNG; mtshed C.

1.1.2

この縁じること⁵は、世間の智者たちでさえ見分けることが難しいから、微細である。

1.1.3

この縁じることは常に存在するものであり、時に一方になったり、時に他方になったりするものではない⁶。しかし、〔執受を〕執る最初の刹那から生きている限りまで、ひたすらに認識することによって活動する。

1.1.4

このアーヤ識は所縁に対して刹那的なものであると観察されるべきである。刹那的な流れの連続によって活動するものであるが、同一のものではない。

1.1.5

また、アーヤ識は、欲界においては、小さい執受⁷を所縁としてもつと説かれるべきである。

色界においては、大きくなった執受を所縁としてもつ。

無色界において、〔また、〕空無辺処と識無辺処においては、無量な執受を所縁としてもつ。

無所有処においては、微細な執受を所縁としてもつ。

非想非非想処においては、極めて微細な執受を所縁としてもつ、と観察されるべきである。

⁵ §1.1.2, §1.1.3 の中の *dmigs pa de* は、袴谷 [1979 : 54] では「その把握対象」、Schmithausen [1987 : 91] では“the object perceived by ālayavijñāna”（アーヤ識によって認識される対象）と理解されている。つまり、両者とも *dmigs pa* を「所縁」と理解している。しかし、Text B-tr 注5 で述べたように、「所縁」と理解する解釈は、§1.1.2, §1.1.3 には適用できない。

dmigs pa は、「（対象を）認識する」という動作を表す場合もある。『瑜伽論』「撰決択分中有心地」では、次のように、アーヤ識は執受と器を認識するということが述べられている（Schmithausen [1987 : 393(n. 653)] 参照）。漢訳・チベット語訳はいずれも「認識する」という動作として理解しているから、ここの *dmigs pa de* を「この縁じること」と訳した。

漢訳 (651b19-22) : 「復次、此中、諸識皆名心意識、若就最勝、阿頼耶識名心。何以故。由此識能集聚一切法種子故、於一切時、縁執受境、縁不可知一類器境。」

（【訳】また、その中で、諸々の識はみな心・意・識と呼ばれるが、最も優れているものという点からいうならば、アーヤ識は心と呼ばれる。なぜなら、この識はすべての法の種子を集積するので、すべての時において、執受という対象を縁じ、不可知の同一の類の器という対象を縁じる。）

チベット語訳 (D 182a4-6; P 189b3-5) : *de la nmam par shes pa de dag thams cad ni sems zhes kyang bya/ yid ces kyang bya/ nmam par shes pa zhes kyang bya ste/ kun gzhi nmam par shes pa ni dngos su na sems yin te/ 'di ltar de ni sa bon thams cad kyis kun tu (tu P; du D) bsags shing nye bar bsags pa yin no// de yang dus rtag par len (len P; len pa'i D) rgyu la dmigs pa dang/ bye brag med par ram gcig tu snod la dmigs pa yin no//*

（【訳】また、これらすべての識は心ともいい、意ともいい、識ともいう。アーヤ識は実際には心である。すなわち、それ（アーヤ識）はすべての種子によって蓄積され増長されるものである。また、それは常に執受を縁じるもの、かつ区別なく、ひたすらに器を縁じるものである。）

⁶ 袴谷 [1979 : 54] は、*lan 'ga' gzhan du 'gyur la/ lan 'ga' gzhan du 'gyur ba ma yin no* を、「ある場合には変化するが、ある場合には変化しないのである」と理解している。そして、その理解に基づいて、袴谷 [1979 : 72(n. 18)] は、玄奘訳の「無廢時、無變易」と比較すると、真谛訳の方が内容上チベット語訳に近いと解釈している（Text B-tr 注6 参照）。

一方、Schmithausen [1987 : 392(n. 640)] は、この一節を“it is not now this, now that”（それは時に一方になったり、時に他方になったりするものではない）と理解し、この文の内容を「アーヤ識によって認識される対象は常にあり、変わらない」（“The object perceived by ālayavijñāna is always present and does not change”, Schmithausen [1987 : 91]）と解釈している。この理解は玄奘訳に近い。ここでは、Schmithausen [1987] の理解に基づいて解釈する。

⁷ 袴谷 [1979 : 27, 47(n. 19)] は、*rgyu* を *rgya* と改めて読んでいる。Schmithausen [1987 : 392-393(n. 647)] によると、*upādāna* は時々、*rgyu* あるいは *len rgyu* と訳されている。ここでは、Schmithausen [1987] の指摘に基づいて解釈する。

1.1.6

de ltar na dmigs pa rnam (P5a3) pa gnyis rnam par rig pa dang/ phra³² ba rnam par rig pa dang/ 'dra ba rnam par rig pa dang/ skad cig pa³³ rnam par (D4b1) rig pa dang/ rgyu³⁴ chung ngu'i³⁵ (N5b6) dmigs pa rnam par rig pa dang/ rgyu chen por (C4b2) gyur³⁶ pa'i dmigs (P5a4) (G5b5) pa rnam par rig pa dang/ rgyu tshad med pa'i dmigs pa rnam par rig pa dang/ rgyu phra ba'i dmigs pa rnam par rig pa dang/ rgyu shin tu³⁷ phra ba'i dmigs pa rnam par rig³⁸ pas (D4b2) kyang kun (N5b7) gzhi rnam par shes pa (P5a5) dmigs pas 'jug³⁹ pa rnam par gzhag⁴⁰ par rig par (C4b3) bya'o// (G5b6)

1.2

1.2.0

de la mtshungs par ldan pas 'jug pa rnam par gzhag⁴¹ pa gang zhe na/

1.2.1

'di la kun gzhi rnam par shes pa mtshungs⁴² par ldan pa⁴³ na sems dang mtshungs (P5a6) par ldan pa (N6a1) kun tu 'gro (D4b3) ba lnga po yid la byed pa dang/ reg pa dang/ tshor ba dang/ 'du shes dang/ sems pa rnams (G6a1) dang mtshungs par (C4b4) ldan no//

1.2.2

chos de dag kyang rnam par smin par bsdu pa dang/ (P5a7) 'jig rten gyi mkhas pa rnams kyis kyang rtogs (N6a2) par dka' ba'i phyir phra ba dang/ gtan du⁴⁴ dmigs pa (D4b4) gcig la mtshungs par⁴⁵ 'jug pa yin no//

1.2.3

sams (G6a2) las byung ba de dag las kyang⁴⁶ kun gzhi rnam par shes pa (P5a8) dang mtshungs par (C4b5) ldan pa'i tshor ba gang yin pa de ni gcig tu sdug bsngal yang ma yin bde ba yang (N6a3) ma yin pa dang/ lung du ma bstan pa yin no//

de nyid kyis de (D4b5) las gzhan pa'i⁴⁷ sems las (G6a3) byung ba'i chos rnams (P5b1) kyang rnam par bshad pa yin no//

1.2.4

de ltar na sems las byung ba kun tu 'gro ba dang mtshungs (C4b6) par ldan pa dang rnam par smin par rigs 'dra ba dang (N6a4) mtshungs par ldan pa dang/ 'jug pa phra ba dang mtshungs par ldan (P5b2) pa dang/ (D4b6) dmigs pa (G6a4) gcig la mtshungs par 'jug pa dang mtshungs par ldan pa dang/ sdug bsngal yang ma yin⁴⁸ bde ba yang ma yin pa dang mtshungs par ldan pa (C4b7) dang/ lung du ma bstan (N6a5) pa dang mtshungs par (P5b3) ldan pas kyang kun gzhi rnam par shes pa mtshungs par ldan (G6a5) pas 'jug pa rnam par (D4b7) gzhag⁴⁹ par rig par bya'o//

³² *phra* DCNG; ill. P.

³³ *pa* DCPN; om. G.

³⁴ *rgyu* DC; om. PNG.

³⁵ *ngu'i* DCNG; ill. P.

³⁶ *gyur* DCPG; ill. N.

³⁷ *tu* DCNG; *du* P.

³⁸ *rig* DCPN; *rigs* G.

³⁹ *'jug* DPNG; *'dzug* C.

⁴⁰ *gzhag* DC; *bzhag* PNG.

⁴¹ *gzhag* DCN; *bzhag* PG.

⁴² *mtshungs* DCN; *tshungs* PG.

⁴³ *pa* PNG; *pas* DC.

⁴⁴ *du* DCN; *tu* PG.

⁴⁵ *par* DCN; *pa* PG.

⁴⁶ *kyang* DC; om. PNG.

⁴⁷ *pa'i* DCNG; om. P.

⁴⁸ *yang ma yin* DCNG; *yang ma yang ma yin* P.

⁴⁹ *gzhag* DCN; *bzhag* PG.

1.1.6

以上のように、二種の所縁の認識〔に基づいても〕、微細な認識〔に基づいても〕、類似の認識〔に基づいても〕、瞬間的な認識〔に基づいても〕⁸、小さい執受を所縁とする認識〔に基づいても〕、大きくなった執受を所縁とする認識〔に基づいても〕、無量な執受を所縁とする認識〔に基づいても〕、微細な執受を所縁とする認識〔に基づいても〕、極めて微細な執受を所縁とする認識に基づいても、アーラヤ識が所縁によって活動することが設定されていると知られるべきである。

1.2 [アーラヤ識と相応するもの]

1.2.0

また、相応するものによって活動することが設定されているとは何かと言うならば、

1.2.1

ここで、アーラヤ識が相応することについて、五つの遍在する心相応〔法〕である作意・触・受・想・思と相応する。

1.2.2

それらの〔五つの〕法もまた、異熟に包摂されており、世間の智者たちでさえ了知し難いから、微細なものであり、常に同一の所縁に対して共に活動するものである。

1.2.3

これら心所法の中にもまた、アーラヤ識と相応する受はひたすら不苦不楽であり、無記である。

ほかならぬこれによって、これ以外の〔四つの〕心所法も解説されるべきものである。

1.2.4

以上のように、遍在する心所と相応すること、異熟に関して同じ種類と相応すること、微細に活動するものと相応すること、同一の所縁に対して等しく活動するものと相応すること、不苦不楽のものと相応すること、および無記のものと相応することに基づいてもまた、アーラヤ識が相応するものによって活動することが設定されていると知られるべきである。

⁸ 袴谷 [1979 : 55] では、phra ba rnam par rig pa, 'dra ba rnam par rig pa, skad cig pa rnam par rig pa をそれぞれ、「微細な識別」「類似の識別」「瞬間的識別」と解釈している。ここでは、袴谷 [1979] の解釈に基づいて訳す。

[Part 2]

(D37b4–42a4, C38a7–43a3, P40a1–44b1, N41a5–45b1, G46a4–52b1)

2.0

mkhas pa drug po 'di lta ste/ phung po la mkhas (P40a2) pa nas dbang po la (G46a5) mkhas pa'i (D37b5) bar du gang gsungs pa'i mkhas pa de dag gi rnam par gzhang pa (N41a6) ji lta bu yin par rig par bya zhe na/ sdom ni/

ngo bo nyid dang don rnam⁵⁰ (C38b1) dbye// go rims⁵¹ dang ni bsdu dang brten//

2.1

2.1.1

2.1.1.0

de la gzugs gang zhe na/

2.1.1.1

de ni rnam (P40a3) pa (G46a6) bcu gcig tu⁵² rig par bya ste/ mig la sogs pa reg bya'i mthar thug (D37b6) pa'i bar gyi skye mched bcu (N41a7) dang/ chos kyi skye mched du gtogs pa'i gzugs so//⁵³

2.1.1.2

de yang mdor bsdu na 'byung ba (C38b2) dang 'byung ba las gyur pa ste/

2.1.1.3

thams cad (G46b1) kyang (P40a4) gzugs su rung ba'i mtshan nyid yin no//

2.1.2

2.1.2.0

tshor ba gang zhe na/

2.1.2.1

de ni rnam pa drug tu blta bar bya⁵⁴ ste/ mig dang⁵⁵ (D37b7) rna ba dang/ sna dang⁵⁶ (N41b1) lce dang/ lus dang/ yid kyi 'dus te reg pa las byung ba'o//⁵⁷

2.1.2.2

2.1.2.2.1

de⁵⁸ yang rnam pa (G46b2) gsum dang rnam pa⁵⁹ gnyis (C38b3) te/ lus kyi (P40a5) dang sems kyi'o// de la gzugs can la brten pa ni lus kyi'o// gzugs can ma yin pa la brten pa ni sems kyi'o// de ci'i (D38a1) phyir zhe na/ dbang⁶⁰ po (N41b2) lnga po dag ni gzugs can yin pa'i (G46b3) phyir ro//

2.1.2.2.2

2.1.2.2.2.1

gal te dbang po⁶¹ lnga po dag gzugs can yin (P40a6) pa'i phyir mig la (C38b4) sogs pa dbang po gzugs can mams la brten pa'i tshor ba gang yin pa de lus kyi yin par gyur na/ 'o na ci'i phyir (D38a2) mig la sogs pa'i dbang po de dag (G46b4) lus kyi (N41b3) mtshan nyid kho na yin par mi 'gyur zhe na/ smras pa/ mtshan nyid (P40a7) mi 'dra ba'i phyir te/ 'di ltar de dag ni phan tshun (C38b5) mtshan nyid mi 'dra ba yin pa'i phyir ro//⁶²

⁵⁰ rnam PNG; rnam DC.

⁵¹ rims DC; rim PNG.

⁵² tu DCNG; du P.

⁵³ // DC; om. PNG.

⁵⁴ bya PNG; bya ba DC.

⁵⁵ / DCN; om. PG.

⁵⁶ / DCPG; om. N.

⁵⁷ // DCNG; / P.

⁵⁸ de DCNG; da P.

⁵⁹ pa DC; om. PNG.

⁶⁰ om. PNG; gal te dbang DC.

⁶¹ po DCPG; pa N.

⁶² // DCNG; / P.

〔Part 2 蘊に精通することについて〕

2.0 〔総説〕

六つの精通することは次のようである。すなわち、蘊について精通することから、根について精通することまでである⁹。お説きになったこれらの精通することの設定は如何なるものであると知られるべきなのかと言うならば、ウダーナは：

本質と意味〔と〕 区別〔と〕、 順番と包括と 拠り所である¹⁰。

2.1 〔蘊の本質〕

2.1.1 〔色蘊の本質〕

2.1.1.0

その中で、色（物質）は何かというならば、

2.1.1.1

それは十一種と知られるべきである。すなわち、眼などを始めとし、触覚対象を終わりとする間の十の処と、〔意識の対象としての〕法という処に包摂される色である。

2.1.1.2

また、それは要約して言えば、〔四〕元素と、〔四〕元素から生じたものである。

2.1.1.3

すべてもまた物質に相応しいこと（変壞）¹¹という特徴をもつものである。

2.1.2 〔受蘊の本質〕

2.1.2.0

受〔蘊〕は何かというならば、

2.1.2.1

それは六種と観察されるべきである。すなわち、眼・耳・鼻・舌・身・意の接触から生じたものである。

2.1.2.2

2.1.2.2.1

また、それは三種であり¹²、二種である。すなわち身体の〔受〕と心の〔受〕である。その中で、物質的なものに依存するものは身の〔受〕である。非物質的なものに依存するものは心の〔受〕である。それは何故なのかというなれば、五根（眼・耳・鼻・舌・身）は物質的なものであるから。

2.1.2.2.2

2.1.2.2.2.1

もし、五根は物質的なものであるから、眼などの物質的な根に依存する受が何であれ、それは身の〔受〕であることになったというならば、では、どうしてそれら眼などの根はただ身〔根〕の特徴をもつものであることにならないのか、と問うならば、答える。異なる特徴をもつものであるから。すなわち、それら（眼などの根）は相互に異なる特徴をもつものであるから。

⁹ Text B-tr 注 7 参照。

¹⁰ Text B 2.0 参照。

¹¹ gzugs su rung ba は rūpaṇa（色に相応しいこと）の訳語と考えられる。rūpaṇa については Text B-tr 注 10 参照。

¹² 「三種であり」という記述は漢訳には見られない。ここでは三種の内容について解説していないが、一般的には、苦、楽、不苦不樂が考えられる。

2.1.2.2.2.2

gal te mtshan nyid mi 'dra ba⁶³ yin na mtshan nyid mi 'dra ba'i (G46b5) phyir lus (D38a3) kyi mtshan nyid ma yin pas/ des⁶⁴ (N41b4) na de la brten pa'i tshor ba gang yin pa de yang rgyu de gnyis (P40a8) kyis na lus kyi ma yin par mi 'gyur ram zhe na/ smras pa/ (C38b6) de las gzhan pa'i dbang po gzugs can rnam ni lus las tha (G46b6) mi dad pa'i phyir de la nye bar gdags pa la nyes pa med do// (D38a4)

2.1.2.2.2.3

gal te tha mi dad pas (N41b5) nyes pa med na de lta na yid kyang (P40b1) lus las tha mi dad par 'byung bas des na yid la brten pa'i tshor ba gang (C38b7) yin pa de yang lus kyi yin par 'gyur bas (G47a1) de'i phyir lus kyi tshor ba kho nar 'gyur gyi sems kyi ni ma yin par 'gyur ro zhe na/⁶⁵ smras pa/ lus ni dbang po (D38a5) gzugs (N41b6) can (P40b2) rnam las gtan tha dad pa ma yin la/ yid ni de lta ma yin pas nyes pa med de/ (G47a2) 'di ltar (C39a1) gzugs med par skyes pa'i sems can rnam la lus las tha dad pa'i yid kyi rnam par shes pa 'byung bar 'gyur bas de'i phyir dbang po lnga dang (P40b3) ldan pa'i tshor ba ni (N41b7) lus (D38a6) kyi kho na zhes bya la/⁶⁶ yid kyi 'ba' zhig sems (G47a3) kyi zhes bya'o//

2.1.2.2.2.4

de lta bas na (C39a2) tshor ba ni mdor bsdu na/ lus kyi dang sems kyi yin la

2.1.2.3

thams cad kyang myong ba'i mtshan nyid yin no//

2.1.3

2.1.3.0

'du shes gang zhe na/

2.1.3.1

de yang snga (P40b4) ma bzhin du rnam pa drug go//

2.1.3.2

2.1.3.2.1

de yang (N42a1) drug ste⁶⁷ mtshan ma (D38a7) dang (G47a4) bcas pa'i 'du shes⁶⁸ dang/ mtshan ma med pa'i 'du shes dang/ (C39a3) chung ngu'i 'du shes dang/ chen por gyur pa'i 'du shes dang/ tshad med pa'i 'du shes dang/ ci yang med pa'i (P40b5) 'du shes so//⁶⁹

2.1.3.2.2

de yang mdor bsdu na (N42a2) 'jig rten pa'i⁷⁰ (G47a5) dang 'jig rten las 'das pa'i'o//

2.1.3.2.3

de (D38b1) la chung ngu'i 'du shes ni 'dod pa na spyod pa'i'o// chen por gyur pa'i (C39a4) 'du shes ni gzugs na spyod pa'i'o// tshad med pa'i 'du shes ni nam mkha' (P40b6) dang rnam shes mtha' yas skye mched na spyod (G47a6) pa'i'o// ci (N42a3) yang med pa'i 'du shes ni ci yang med pa'i skye mched na spyod pa'i ste/ de dag (D38b2) thams cad ni mtshan ma dang bcas pa'i 'du (C39a5) shes yin no//

mtshan ma med pa'i 'du shes ni srid pa'i rtse mo'i (P40b7) 'du shes (G47b1) gang yin pa dang 'jig rten las 'das pa slob pa dang/ (N42a4) mi slob pa'i thams cad de

2.1.3.3

thams cad kyang kun tu⁷¹ shes par byed pa'i mtshan nyid yin no//

2.1.4

2.1.4.0

'du byed (D38b3) rnam gang zhe na/⁷² (C39a6)

2.1.4.1

de dag kyang snga ma kho na bzhin du rnam pa (G47b2) drug go//

⁶³ ba PNG; ba'i phyir DC.

⁶⁴ des DCNG; ill. P.

⁶⁵ / PNG; om. DC.

⁶⁶ bya la/ DC; bya ba la PNG.

⁶⁷ drug ste PNG; 'di lta ste/ DC. cf.: 又想有六 (Text B 2.1.3.2.1)

⁶⁸ shes DCPN; shes ma G.

⁶⁹ so// DC; dang/ PNG.

⁷⁰ pa'i DC; pa PNG.

⁷¹ tu PNG; du DC.

⁷² / DPNG; om. C.

2.1.2.2.2

もし、異なる特徴をもつものであるならば、異なる特徴をもつものであるから、身〔根〕の特徴をもつものではないので、それに基づいて、それ（根）に依存する受が何であれ、それも、この二つの理由に基づいて、身の〔受〕ではないことにならないのか、と問うならば、答える。それ（身根）以外の物質的な根は、身体から離れていないから、それ（身体）に基づいて仮説することには過失がない。

2.1.2.2.3

もし、離れていないから、過失がないというならば、同様に、意も身体から離れず活動するので、意に依存する受が何であれ、それも身の〔受〕であることになる。それゆえ、ただ身の受のみがあり、心の〔受〕はそうでないことになるであろう、と言うならば、答える。身体は物質的な元素から決して離れたものではないが、意はそうでないものであるから、過失はない。なぜなら、無色〔界〕に生まれる有情には、身体から離れた意識が生じるであろう。それゆえ、五根と相応する受はほかならぬ身の〔受〕といい、意の〔受〕のみは心の〔受〕というのである。

2.1.2.2.4

したがって、受は要約して言えば、身の〔受〕と心の〔受〕である。

2.1.2.3

すべてもまた経験することという特徴をもつものである。

2.1.3 [想蘊の本質]

2.1.3.0

想〔蘊〕とは何かと言うならば、

2.1.3.1

それも前と同様に、六種〔と観察されるべき〕である。

2.1.3.2

2.1.3.2.1

また、それは次のようにである。すなわち、有相の想と、無相の想と、狭小な想と、広大な想と、無量なる想と、無所有の想である。

2.1.3.2.2

また、それは要約して言えば、世間の〔想〕と、出世間の〔想〕である。

2.1.3.2.3

その中で、狭小な想とは、欲〔界〕において行動する者の〔想〕である。広大な想とは、無色〔界〕において行動する者の〔想〕である。無量なる想とは、空〔無辺処〕と識無辺処において行動する者の〔想〕である。無所有の想とは、無所有処において行動する者の〔想〕である。それらすべては有相の想である。

無相の想とは、それは有頂（非想非非想処）の想であり、および出世間の有学と無学のすべての〔想〕である。

2.1.3.3

すべてもまた表象させることという特徴をもつものである。

2.1.4 [行蘊の本質]

2.1.4.0

諸行とは何かと言うならば、

2.1.4.1

それらもまたまさに前と同様に、六種〔と観察されるべき〕である。

2.1.4.2

de yang (P40b8) 'di lta ste⁷³ yul dang mthun par byed pa dang/⁷⁴ de dang phrad⁷⁵ par bya ba dang/
de dang bral⁷⁶ bar (N42a5) bya ba dang/ kun nas nyon mongs pa dang/ las⁷⁷ kun tu⁷⁸ blang bar bya ba
dang/ sems kyis dbang bsgyur bar⁷⁹ (D38b4) bya ba'i (G47b3) phyir (C39a7) sems mngon par 'du byed pa (P41a1)
rnam pa lngar⁸⁰ blta bar bya'o//

2.1.4.3

'du byed rnams ni mdor bsdu na dge ba dang mi dge ba dang lung du ma bstan pa dag ste/⁸¹ (N42a6)

2.1.4.4

thams cad kyang mngon par 'du byed pa'i mtshan nyid yin no//

2.1.5

2.1.5.0

rnam par shes pa (G47b4) gang zhe na/

2.1.5.1

de ni rnam pa (P41a2) drug (C39b1) tu blta bar (D38b5) bya ste/ mig gi rnam par shes pa nas yid kyi
rnam par shes pa'i bar te/ de ni rnam par shes pa'i ngo bo nyid kyi dbye ba yin no//⁸²

2.1.5.2

2.1.5.2.1

gzhan (N42a7) yang dbye⁸³ ba rnam pa gsum yod par blta⁸⁴ bar bya (G47b5) ste/ myong ba'i dbye ba
dang dmigs pa la⁸⁵ (P41a3) mtshan mar 'dzin (C39b2) pa'i dbye ba dang/⁸⁶ (D38b6) gnas skabs kyi dbye ba'o//

2.1.5.2.2

de la myong ba'i dbye ba ni rnam pa gsum mo// dmigs pa la mtshan mar 'dzin⁸⁷ pa'i dbye ba ni
rnam pa (N42b1) drug go// gnas (G47b6) skabs kyi dbye ba ni rnam pa gsum mo//

2.1.5.3

dbye ba de dag gcig tu bsdu na (P41a4) rnam par shes pa'i (C39b3) ngo bo nyid rnam pa bco brgyad
(D38b7) du 'gyur te/

2.1.6

de ni phung po rnams kyi ngo bo nyid yin no//

2.2

2.2.0

de la phung po'i don ni gang ci'i phyir na phung po (G48a1) rnam par gzhas⁸⁸ pa yongs su bstan ce
na/ (N42b2)

2.2.1

gzugs gang yin pa ci yang rung ste/ 'das pa dang/ ma 'ongs (P41a5) pa dang/ da ltar byung ba nas
(C39b4) thag ring ba dang/ nye ba'i bar dang/⁸⁹ (D39a1) gzugs ji lta ba bzhin du⁹⁰ rnam par (G48a2) shes pa'i
bar du yang de bzhin te/

de dag gcig tu bsdu pa ni rnam pa thams cad du bsdu pa yin pa'i (N42b3) phyir bsdu pa'i don ni
phung po'i don to//

⁷³ ste DCNG; ill. P.

⁷⁴ / DPNG; // C.

⁷⁵ phrad DPNG; ill. C.

⁷⁶ bral DC; 'bral PNG.

⁷⁷ las DCNG; lus P.

⁷⁸ tu PNG; du DC.

⁷⁹ bar DCNG; ba P.

⁸⁰ lngar DCN; sngar PG.

⁸¹ / N; om. DCPG.

⁸² // DCNG; / P.

⁸³ dbye DPNG; dphye C.

⁸⁴ blta DCNG; lta P.

⁸⁵ la DC; las PNG.

⁸⁶ / DC; om. PNG.

⁸⁷ 'dzin DCPG; 'jin N.

⁸⁸ gzhas DC; bzhas PNG.

⁸⁹ / DC; om. PNG.

⁹⁰ du DC; om. PNG.

2.1.4.2

また、それは次のようにである。すなわち、対象に適応させることと、それ（対象）と結合されるべきことと、それ（対象）から分離されるべきことと、雑染と業が執られるべきことと、心によって支配されるべきこととによって、心を作動させることは五種であると観察されるべきである。

2.1.4.3

諸行は要約して言えば、善と不善と無記のものである。

2.1.4.4

すべてもまた作動させることという特徴をもつものである。

2.1.5 [識蘊の本質]

2.1.5.0

識〔蘊〕とは何かと言うならば、

2.1.5.1

それは六種と観察されるべきである。すなわち、眼識から意識までであり、それは識〔蘊〕の本質の区別である。

2.1.5.2

2.1.5.2.1

さらにまた、三種の区別があると観察されるべきである。すなわち、経験することの区別と、所縁に対して相として捉えることとの区別と、位相の区別である。

2.1.5.2.2

その中で、経験することの区別は三種である。所縁に対して相として捉えることとの区別は六種である。位相の区別は三種である。

2.1.5.3

それらの区別を総括すると、識の本質は十八種になる。

2.1.6 [まとめ]

以上は諸蘊の本質である。

2.2 [蘊の意味]

2.2.0

また、蘊の意味は何なのか。何のために諸蘊を設定することを示すのかと言うならば、

2.2.1

色であるものは如何なるものであっても、すなわち、過去〔の色〕・未来〔の色〕・現在〔の色〕から、遠い〔色〕・近い〔色〕まで〔というの〕と、色と同様に、〔受から〕識までもそうである。

それらを総括するものは、すべての〔蘊の〕種類において集積されるものであるので、集積されるものの意味は蘊の意味である。

2.2.2

yang phung (P41a6) po de dag ni bdag nyid sna (C39b5) tshogs mang po yin pa'i phyir (D39a2) 'du byed tsam ste/⁹¹ (G48a3) de las don gzhan pa'i bdag med par yongs su bstan pa'i phyir phung po rnam par gzhag par⁹² rig par bya'o//

2.3

2.3.1

2.3.1.0

de la gzugs kyi phung po'i (N42b4) rab tu dbye ba gang zhe na/

2.3.1.1

2.3.1.1.0

de ni rnam pa drug tu blta⁹³ bar bya ste/ (P41a7) dngos po dang mtshan (C39b6) nyid dang/⁹⁴ (G48a4) rnam par shes pa (D39a3) gnas pa dang⁹⁵ mi gnas pa dang/ rnam par shes pa las dben⁹⁶ pa dang mi dben pa dang/ 'du shes kyi spyod yul dang mtha'o//

2.3.1.1.1

de la gzugs kyi dngos (N42b5) po ni gzugs gang yin pa ci yang rung ste/ (P41a8) de thams cad (G48a5) 'byung ba chen po (C39b7) bzhi dag dang 'byung ba chen po bzhi dag⁹⁷ rgyur byas (D39a4) pa'o//

2.3.1.1.2

2.3.1.1.2.1

de la gzugs kyi rang gi mtshan nyid ni mdor bsdu na dang ba dang/ dang ba'i gzung ba dang/ yid kyi gzung ba'i gzugs so//

2.3.1.1.2.2

spyi'i mtshan nyid ni gzugs su rung ba'i (N42b6) mtshan nyid do// (P41b1)

2.3.1.1.3

2.3.1.1.3.1

2.3.1.1.3.1.1

de la (G48a6) rnam (C40a1) par shes pa gnas pa dang mi gnas pa ni zin pa'i gzugs gang yin (D39a5) pa de ni rnam par shes pa gnas pa zhes bya ste/

2.3.1.1.3.1.2

de yang rnam par shes pa dang 'dres pa grub pa dang bde ba gcig pa'i don gyis⁹⁸ 'jug pa gang yin pa dang/ (C40a2) tshor (G48b1) ba (P41b2) rnams skye (N42b7) ba'i rten⁹⁹ du gyur pa gang yin pa'o//

2.3.1.1.3.2

de las bzlog pa ni ma zin pa yin par rig par bya'o//¹⁰⁰

2.3.1.1.4

2.3.1.1.4.1

de la rnam par shes pa (D39a6) las dben pa dang mi dben pa ni rnam par shes pa las mi dben pa'i gzugs gang yin pa de ni mtshungs (G48b2) pa zhes (C40a3) bya ste/ (P41b3) rnam par shes pa dang mtshungs par don (N43a1) la 'jug pa nyid kyi phyir ro//¹⁰¹

2.3.1.1.4.2

rnam par shes pa las dben pa'i gzugs gang yin pa de ni de dag dang mtshungs pa zhes bya ste (D39a7) rang gi rgyud¹⁰² dang mtshungs par rjes su 'jug pa (G48b3) nyid kyi phyir ro//

⁹¹ / DC; om. PNG.

⁹² gzhag par DCN; bzhag par G; om. P.

⁹³ blta DCNG; ill. P.

⁹⁴ / DC; om. PNG.

⁹⁵ om. DCPG; / N.

⁹⁶ dben DCNG; ill. P.

⁹⁷ dang 'byung ba chen po bzhi dag DC; om. PNG.

⁹⁸ gyis DC; gyi PNG.

⁹⁹ rten PNG; don DC.

¹⁰⁰ bya'o// DC; bya/ PNG.

¹⁰¹ // DCNG; / P.

¹⁰² rgyud DCNG; rgyu P.

2.2.2

また、それら諸蘊は、様々で多くの本質をもつものであるので、〔諸〕行に過ぎず¹³、したがって、ほかの意味の無我性をもつものとして示すために、蘊を設定する〔のである〕と知られるべきである。

2.3 [蘊の区別]

2.3.1 [色蘊の区別]

2.3.1.0

また、色蘊の区別は何かというならば、

2.3.1.1

2.3.1.1.0

それは六種と観察されるべきである。すなわち、実質と、特徴と、識が依存するものと依存しないものと、識から離れているものと離れていないものと、想の活動領域と、際限である。

2.3.1.1.1

その中で、色の実質とは、色であるものは如何なるものであっても、すべてが四元素と、四元素を原因とするものである。

2.3.1.1.2

2.3.1.1.2.1

また、色の固有の特徴とは、要約して言えば、清浄なもの（五根）と、清浄なものの対象と、意の対象たる色（法処所撰色）である¹⁴。

2.3.1.1.2.2

共通の特徴とは、物質に相応しいこと（変壊）という特徴である。

2.3.1.1.3

2.3.1.1.3.1

2.3.1.1.3.1.1

また、識が依存するもの・依存しないものとは、執られている色が何であれ、それは識が依存するものという。

2.3.1.1.3.1.2

また、それは、識と混合しているもの、〔および〕同一の成就と安樂をもつものとして活動するものであり、諸々の受を生じさせることの拠り所となったものである。

2.3.1.1.3.2

それと逆のものは、執られていない〔色〕であると知られるべきである。

2.3.1.1.4

2.3.1.1.4.1

また、識から離れているもの・離れていないものとは、識から離れていない色（五根）が何であれ、それは「類似した〔色〕」という。なぜなら、識と類似したものとして、対象に対して活動するものであるから。

2.3.1.1.4.2

識から離れている色（五根）が何であれ、それは「それら〔自体〕と類似した〔色〕」という。なぜなら、自相続と類似したものとして継続して活動するものであるから¹⁵。

¹³ この一節は、漢訳では「由諸蘊唯有種種名性諸行」（諸蘊はただ様々な名称を性質としてもつ諸行であるので）となっているが、「名性諸行」という表現は解釈が困難である。一方、チベット語訳では「それら諸蘊は、様々で多くの本質をもつものであるので、〔諸〕行に過ぎず」となっており、漢訳との相違が多く見られ、意味も全体的に不明瞭である。ここではチベット語訳を逐語的に訳した。

¹⁴ Text B-tr 注9, 注15 参照。

¹⁵ 「類似した〔色〕」と「それ〔自体〕と類似した〔色〕」については、Text B-tr 注16 参照。

2.3.1.1.5

2.3.1.1.5.0

de la 'du (C40a4) shes (P41b4) kyi spyod yul ni 'du shes gsum (N43a2) po 'di dag ni gzugs la dmigs pa yin te/

2.3.1.1.5.1

2.3.1.1.5.1.0

gzugs kyi 'du shes dang/ thogs pa'i 'du shes dang/ sna tshogs kyi 'du shes so//

2.3.1.1.5.1.1

gzugs kyang mtshan¹⁰³ nyid (D39b1) (G48b4) gsum ste snang ba dang bcas pa'i (P41b5) mtshan nyid (C40a5) dang/ yul gnod pa'i mtshan nyid dang/¹⁰⁴ rgyas (N43a3) par gnas pa'i mtshan nyid de/ de dag kyang go rims bzhin du 'du shes gsum po de¹⁰⁵ dag gi¹⁰⁶ spyod yul du¹⁰⁷ gyur pa yin par blta bar (G48b5) bya'o//

de la sngon po la sogs pa'i kha dog (D39b2) (P41b6) 'dzin par byed pa ni (C40a6) gzugs kyi 'du shes so// 'gro ba thogs pa 'dzin par (N43a4) byed pa ni thogs pa'i 'du shes so// bud med dang/ skyes pa dang/ khang khyim dang/ zhing la sogs par nye bar (G48b6) 'dogs pa¹⁰⁸ 'dzin par byed pa ni sna tshogs kyi (P41b7) 'du shes te/

2.3.1.1.5.2

de ni 'du shes kyi spyod (D39b3) yul gyi (C40a7) rab tu dbye ba yin no//

2.3.1.1.6

2.3.1.1.6.1

de la gzugs kyi mtha' ni (N43a5) mdor bsdu na gzugs¹⁰⁹ rnam pa gnyis te/ khams 'og ma dang¹¹⁰ khams bar mar gtogs pa ste/ (G49a1) 'dod pa na spyod pa dang/ gzugs na spyod pa'o// (P41b8)

2.3.1.1.6.2

de la gzugs med pa rnams na ni¹¹¹ las kyi dbang gis (C40b1) grub pa nyid la¹¹² (D39b4) brten nas gzugs med pa zhes bya bar zad de/ (N43a6) snyoms par 'jug pa'i dbang (G49a2) la¹¹³ brten nas ni ma yin te/ 'di ltar de la snyoms par 'jug pas mngon par 'du bya ba mngon¹¹⁴ du gyur (P42a1) pa las thams cad na gzugs kyi rnam pa la dbang ba (C40b2) dmigs pa'i phyir te de yang snyoms par (D39b5) 'jug pa'i¹¹⁵ gzugs cha phra ba zhes bya'o//

2.3.2

2.3.2.0

de la (G49a3) tshor (N43a7) ba'i phung po'i¹¹⁶ rab tu dbye ba gang zhe na/

2.3.2.1

2.3.2.1.0

de ni rnam pa lngar blta bar (P42a2) bya ste/ dngos po dang/ mtshan nyid dang/ rab tu skye ba dang nye bar brtags¹¹⁷ pa dang/ nges par 'byung ba'o//

2.3.2.1.1

de la tshor (C40b3) ba'i phung po'i dngos po ni myong ba nyid dang/ (D39b6) myong (G49a4) ba'i gnas dang mthun (N43b1) pa'i chos rnams so//

¹⁰³ mtshan DCPG; mchan N.

¹⁰⁴ / DCPG; // N.

¹⁰⁵ de DC; om. PNG.

¹⁰⁶ gi DCPN; gis G.

¹⁰⁷ du DCPN; tu G.

¹⁰⁸ pa DPN; par CG.

¹⁰⁹ gzugs DC; om. PNG.

¹¹⁰ om. DCPG; / N.

¹¹¹ pa rnams na ni DCNG; ill. P.

¹¹² la DC; las PNG.

¹¹³ la DC; las PNG.

¹¹⁴ par 'du bya ba mngon DC; om. PNG.

¹¹⁵ pa'i DCNG; ill. P.

¹¹⁶ po'i PNG; po DC.

¹¹⁷ brtags DC; btags PNG.

2.3.1.1.5

2.3.1.1.5.0

また、想の活動領域とは、次の三つの想は色に対して縁じるものである。

2.3.1.1.5.1

2.3.1.1.5.1.0

すなわち、色の想と、抵触のあるものの想と、雑多なものの想である。

2.3.1.1.5.1.1

色もまた、三つの特徴がある。すなわち、光を伴う特徴と、場所を妨げる特徴と、集積されたものとしてとどまる特徴である。それら〔三つの特徴〕もまた順次に、三つの想の活動領域となったものであると観察されるべきである。

また、青などの色彩を把握するものは色の想である。動きや抵触のあるものを把握するものは抵触のあるものの想である。女・男、家屋・畑などに対して仮説を把握するものは雑多なものの想である。

2.3.1.1.5.2

以上は想の活動領域の区別である。

2.3.1.1.6

2.3.1.1.6.1

また、色の際限とは、要約して言えば、二種の色がある。すなわち、下の界〔に属するもの〕と中間の界に属するものである。すなわち〔順次に〕、欲〔界〕において行動する者と、色〔界〕において行動する者である。

2.3.1.1.6.2

また、無色〔界〕には、ただ業の力によって得られたもののみに基づいて、無色と名付けるだけであり、静慮の力に基づいてではない。すなわち、その場合、静慮によってなされるべきものが現れたことによって、すべてにおいて、色の種類に関して自在を得るから。これもまた微細な静慮の色と名付ける。

2.3.2 [受蘊の区別]

2.3.2.0

また、受蘊の区別は何かというならば、

2.3.2.1

2.3.2.1.0

それは五種と観察されるべきである。すなわち、実質と、特徴と、生起と、詳しく観察されるべきことと、出離である。

2.3.2.1.1

その中で、受蘊の実質とは、ほかならぬ経験と、経験の拠り所に相応しい諸法である。

2.3.2.1.2

2.3.2.1.2.0

2.3.2.1.2.1

de la rang gi mtshan nyid (P42a3) ni bde ba dang/ sdug bsngal ba dang/ sdug bsngal ba¹¹⁸ yang ma yin bde ba yang ma yin pa'i tshor ba'o//

2.3.2.1.2.2

de la tshor ba'i phung po'i spyi'i mtshan nyid ni bde (C40b4) ba'i tshor ba ni 'gyur (G49a5) ba'i sdug bsngal nyid kyis sdug bsngal (D39b7) ba dang/¹¹⁹ sdug (N43b2) bsngal (P42a4) gyi tshor ba ni sdug bsngal gyi¹²⁰ sdug bsngal nyid kyis sdug bsngal ba dang/ sdug bsngal yang ma yin bde ba yang ma yin pa'i tshor ba ni 'du byed kyis sdug bsngal nyid kyis sdug (G49a6) bsngal ba'i dbang du (C40b5) mdzad nas/ gang ci tshor ba¹²¹ yang rung ste/¹²² (P42a5) de¹²³ 'dir sdug bsngal (N43b3) ba'o¹²⁴ (D40a1) zhes bya ba'o//

2.3.2.1.3

2.3.2.1.3.0

de la rab tu skye ba ni reg pa bcu drug las tshor ba rnam 'byung bar 'gyur ba ste/

2.3.2.1.3.1

'di lta ste/ mig dang/ rna ba dang/ sna dang/ lce dang/¹²⁵ (G49b1) lus dang/ yid kyis¹²⁶ 'dus te reg pa (C40b6) rnam dang/ thogs (P42a6) pa'i 'dus te reg pa dang/ tshig bla dags (D40a2) (N43b4) kyis 'dus te reg pa dang/ bde ba'i tshor ba dang mthun pa'i 'dus te reg pa dang/ sdug bsngal gyi tshor ba dang/¹²⁷ mthun¹²⁸ pa'i 'dus te reg pa (G49b2) dang/ sdug bsngal yang ma yin bde ba yang ma yin pa'i (P42a7) tshor ba (C40b7) dang mthun pa'i 'dus te reg pa dang/ rjes su chags (N43b5) pa'i 'dus te reg (D40a3) pa dang/ khong khro ba'i 'dus te reg pa dang/ rig pa'i 'dus te reg pa dang/ ma rig pa'i 'dus te (G49b3) reg pa dang/ rig pa yang ma yin ma rig pa yang ma (P42a8) yin pa'i 'dus te reg pa las so//

2.3.2.1.3.2

de la (C41a1) yul 'dzin par byed pa nyid la¹²⁹ brten¹³⁰ nas (N43b6) ni 'dus te reg pa drug po rnam dang/ (D40a4) thogs pa'i 'dus te reg pa rnam par gzhag go// yul (G49b4) la rnam par rtog pa nyid la¹³¹ brten¹³² nas ni tshig (P42b1) bla dags¹³³ kyis 'dus te reg pa gcig tu¹³⁴ rnam par gzhag¹³⁵ go// yul (C41a2) myong bar byed pa nyid la¹³⁶ brten nas ni bde ba la (N43b7) sogs pa'i tshor ba dang mthun pa'i 'dus te reg pa gsum (D40a5) rnam par (G49b5) gzhag¹³⁷ go// kun nas nyon mongs pa dang/¹³⁸ rnam par (P42b2) byang ba nyid la¹³⁹ brten nas ni rjes su chags pa dang/ khong khro ba dang/ ma rig pa'i 'dus (C41a3) te reg pa rnam dang/ rig pa dang/ rig pa (N44a1) yang ma yin ma rig pa yang ma yin pa'i 'dus te (G49b6) reg pa dag rnam par (D40a6) gzhag par rig par (P42b3) bya ste/

¹¹⁸ ba DC; om. PNG.

¹¹⁹ / DPNG; om. C.

¹²⁰ gyi DCPG; gyis N.

¹²¹ ba DCN; om. PG.

¹²² / P; om. DCNG.

¹²³ de PNG; de ni DC.

¹²⁴ om. PNG; // DC.

¹²⁵ / DCNG; ill. P.

¹²⁶ kyis DCPG; kyis N.

¹²⁷ om. DC; / PNG.

¹²⁸ mthun DCNG; thun P.

¹²⁹ la DC; las PNG.

¹³⁰ brten DCPN; brten pa G.

¹³¹ la DC; las PNG.

¹³² brten DPNG; brtan C.

¹³³ dags DPNG; dges C.

¹³⁴ tu DCN; du PG.

¹³⁵ gzhag DCPG; bzahag N.

¹³⁶ la DC; las PNG.

¹³⁷ gzhag DCPG; bzahag N.

¹³⁸ / DC; om. PNG.

¹³⁹ la DC; las PNG.

2.3.2.1.2

2.3.2.1.2.0

2.3.2.1.2.1

また、〔受蘊の〕固有の特徴とは、楽〔受〕・苦〔受〕・不苦不楽受である。

2.3.2.1.2.2

また、受蘊の共通の特徴とは、楽受は、壊苦（変壊するという苦）性によって苦〔であるというの〕と、苦受は、苦苦（苦痛という苦）性によって苦〔であるというの〕と、不苦不楽受は、行苦（形成されたものという苦）性によって苦であるという点にして、〔世尊は〕「受であるものは如何なるものであっても、それはここでは苦である」というのである。

2.3.2.1.3

2.3.2.1.3.0

また、生起とは、十六の接触から、諸々の受が生じることになる。

2.3.2.1.3.1

すなわち、眼・耳・鼻・舌・身・意の接触と、〔五根に属する〕抵触のあるものの接触と、〔意に属する〕付与された別名の接触（増語触）¹⁶と、楽受に相応しい接触と、苦受に相応しい接触と、不苦不楽受に相応しい接触と、渴愛の接触と、瞋恚の接触と、明（知）の接触と、無明の接触と、明でもない無明でもないものの接触から〔生じること〕である。

2.3.2.1.3.2

その中で、ほかならぬ対象を把握することに基づいて、〔眼から意までの〕六つの接触と、抵触のある接触を設定する。ほかならぬ対象を区別することに基づいて、付与された別名の接触（増語触）を一つとして設定する。ほかならぬ対象を経験させることに基づいて、楽などの受に相応しい三つの接触を設定する。ほかならぬ雑染・清浄に基づいて、渴愛・瞋恚・無明の接触と、明・明でもない無明でもないものの接触を設定すると知られるべきである。

¹⁶ tshig bla dags (=dwags) kyi 'dus te reg pa (*adhivacana(sam)sparśa, 増語触) については Text B-tr 注 17 参照。

2.3.2.1.3.3

de ni tshor ba rnams kyi rab tu skye ba'i rab tu¹⁴⁰ dbye ba yin no//

2.3.2.1.4

2.3.2.1.4.1

mdo las de nas bcom ldan 'das nyag gcig (C41a4) dben par gshegs te/ nang (N44a2) du yang dag 'jog la bzhugs¹⁴¹ pa na/ thugs la thugs kyi¹⁴² (G50a1) yongs su rtog pa 'di lta bu byung ste/ (D40a7) (P42b4) tshor ba ni gang/¹⁴³ tshor ba kun 'byung ba ni gang/¹⁴⁴ tshor ba 'gog pa ni gang/¹⁴⁵ tshor ba kun 'byung bar 'gyur ba'i lam ni gang/ tshor ba 'gog par 'gyur ba'i lam ni (C41a5) gang/ tshor ba ro myang ba ni (N44a3) gang/ (G50a2) nyes dmigs ni gang/ nges par 'byung ba ni gang yin snyam nas de (P42b5) 'di snyam du (D40b1) dgongs te/ tshor ba ni gsum po 'di dag yin te/ bde ba dang sdug bsngal ba dang/ sdug (C41a6) bsngal yang ma yin bde ba yang ma yin pa'o// reg pa (G50a3) kun 'byung bas tshor ba (N44a4) kun 'byung ba'o// reg pa 'gag¹⁴⁶ pas tshor ba 'gag go// (P42b6) tshor ba la¹⁴⁷ mngon par dga' ba dang/¹⁴⁸ mngon (D40b2) par brjod pa dang/ lhag par chags pa dang/ lhag par chags shing (C41a7) gnas pa gang yin pa 'di ni tshor¹⁴⁹ ba kun (G50a4) 'byung bar 'gyur ba'i lam yin no// tshor ba (N44a5) la mngon¹⁵⁰ par dga' ba med pa dang/ mngon (P42b7) par mi brjod pa dang/ lhag par chags pa med¹⁵¹ pa dang/ lhag par (D40b3) chags shing mi gnas pa gang yin pa 'di ni tshor ba 'gog par (C41b1) 'gyur (G50a5) ba'i lam yin no// tshor ba la¹⁵² brten te/ bde ba skye ba dang/ (N44a6) yid bde ba skye ba gang yin pa 'di (P42b8) ni tshor ba'i ro myang ba yin no// tshor ba mi rtag¹⁵³ pa dang/ sdug bsngal ba dang 'gyur ba'i chos can gang yin pa (D40b4) 'di ni tshor ba'i nyes (G50a6) dmigs yin no// tshor (C41b2) ba la 'dun pa'i 'dod chags 'dul ba dang/ 'dun pa'i (N44a7) 'dod chags spong (P43a1) ba dang/ 'dun pa'i 'dod chags las yang dag par 'da' ba gang yin pa 'di ni tshor ba las nges par 'byung ba (G50b1) yin no zhes gsungs pa ni

¹⁴⁰ rab tu DC; om. PNG.

¹⁴¹ bzhugs DC; zhugs PNG.

¹⁴² kyi PNG; kyi DC.

¹⁴³ / PNG; om. DC.

¹⁴⁴ / em.; om. DCPNG.

¹⁴⁵ tshor ba 'gog pa ni gang/ DC; om. PNG.

¹⁴⁶ 'gag PNG; 'gags DC.

¹⁴⁷ la DC; om. PNG.

¹⁴⁸ / DC; om. PNG.

¹⁴⁹ 'di ni tshor DCNG; ill. P.

¹⁵⁰ mngon DPNG; mngen C.

¹⁵¹ med DCNG; mad P.

¹⁵² la DC; las PNG.

¹⁵³ rtag DCPN; rtags G.

2.3.2.1.3.3

以上は諸々の受の生起の区別である。

2.3.2.1.4

2.3.2.1.4.1

経典に：それ故に、世尊ひとり閑静な〔場所〕に行つて、隠れた〔ところ〕におかけになつた後、お心において、お心の思考が次のように生じた。「感受とは何か。感受が集合することとは何か。感受を滅することとは何か。感受が集合することに導く道とは何か。感受を滅することに導く道とは何か。感受を味わうべきこととは何か。〔感受の〕患いとは何か。〔感受から〕出離することとは何か」と考えた後、彼は次のものを心においてお考えになつた。「感受とは次の三種である。すなわち、楽と、苦と、不苦不楽である。接触が集合することによって感受が集合すること〔がある〕。接触が滅することによって感受が滅する。感受に対して、愛樂すること・〔言語で〕表現すること・愛着すること・固執すること、それは感受が集合することに導く道である。感受に対して、愛樂をもたないこと・〔言語で〕表現しないこと・愛着をもたないこと・固執しないこと、それは感受を滅することに導く道である。感受に基づいて、楽が生じること・喜が生じること、それは感受を味わうべきことである。感受が無常・苦・変異する性質をもつもの〔である〕、それは感受の患いである。感受に対して、欲求するという貪欲を抑制すること・欲求するという貪欲を断つこと・欲求するという貪欲を超えること、それは感受から出離することである」と、お説きになつたことは、

de la nye bar brtag (D40b5) pa'i rab tu dbye ba ni (C41b3) zhes bya ba la sogs pa'i tshig (P43a2) gis rnam par bshad de/

de la (N44b1) nye bar brtag pa'i rab tu dbye ba ni tshor ba rnam pa brgyad po dag la tshor ba nye bar brtag¹⁵⁴ pa (G50b2) yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas thams cad las¹⁵⁵ byung la 'di lta ste tshor ba rnam ni du/ tshor ba rnam (D40b6) (C41b4) kyi (P43a3) kun 'byung ba ni gang/ tshor ba rnam kyi 'gog pa ni gang/ (N44b2) tshor ba rnam kyi¹⁵⁶ kun 'byung bar 'gyur ba'i lam ni (G50b3) gang/ tshor ba rnam 'gog par 'gyur ba'i lam ni gang/ tshor ba rnam kyi¹⁵⁷ ro myang ba ni gang/ nyes dmigs ni gang/ (P43a4) nges par (C41b5) 'byung ba ni gang zhes bya ba¹⁵⁸ (D40b7) ste/ de la de ltar nye bar rtog pa na yang dag (N44b3) par rtogs¹⁵⁹ pa'i¹⁶⁰ tshor ba ni (G50b4) gsum po 'di dag yin no// reg pa kun 'byung bas tshor ba kun 'byung ngo zhes bya ba¹⁶¹ rgyas par ji¹⁶² skad mdo las gsungs pa bzhin rnam (P43a5) par dbye bar rig par (C41b6) bya'o//

¹⁵⁴ *brtag* DCPG; *brtags* N.

¹⁵⁵ *las* DC; *la* PNG.

¹⁵⁶ *kyi* DC; *kyis* PNG.

¹⁵⁷ *kyi* DC; *kyis* PNG.

¹⁵⁸ *ba* DC; om. PNG.

¹⁵⁹ *rtogs* DCPG; *rtog* N.

¹⁶⁰ *pa'i* DC; *pa ni* PNG.

¹⁶¹ *bya ba* DC; om. PNG.

¹⁶² *ji* DCNG; ill. P.

「また、詳しく観察されるべきことの区別とは」云々の言明によって明らかにした¹⁷。

また、詳しく観察されるべきことの区別とは、八種の感受において感受が詳しく観察されるべきことはすべての正等覚によって行われている。それはすなわち、諸々の感受は幾つか、諸々の感受の集合は何か、諸々の感受の消滅は何か、諸々の感受の集合することとなる道は何か、諸々の感受の滅することとなる道は何か、諸々の感受の味わうべきことは何か、患いは何か、出離は何か、ということである。また、このように観察するとき、正しく観察された感受とは：この三つ（楽・苦・不苦不楽）である。接触が集合することによって感受が集合すると、詳しくは経典にお説きになった通り、類別〔がある〕と知られるべきである。

¹⁷ この一段落は、前後の文脈から浮いた不自然な記述であり、漢訳とも対応していないが、記述内容は、下記の阿含経典とほぼ同様であることが確認できる。次の段落の解説には同経典の引用と考えられる部分があり、漢訳の該当箇所も同経典の文言と一致している（太字で表記）。したがって、チベット語訳のこの段落は、経説の出典を示すために挿入された可能性がある。

『雑阿含』17.475 経 (121b27-c12) : 「爾時世尊告諸比丘。毘婆尸如來未成佛時、獨一靜處禪思思惟、作如是觀觀察諸受。云何為受。云何受集。云何受滅。云何受集道跡。云何受滅道跡。云何受味。云何受患。云何受離。如是觀察。有三受。樂受、苦受、不苦不樂受。觸集是受集。觸滅是受滅。若於受愛樂・讚歎・染著・堅住、是名受集道跡。若於受不愛樂・讚歎・染著・堅住、是名受滅道跡。若受因緣生樂・喜、是名受味。若受無常・變易法、是名受患。若於受斷欲貪・越欲貪、是名受離。

(略) 如毘婆尸佛、如是式棄佛、毘濕波浮佛、迦羅迦孫提佛、迦那迦牟尼佛、迦葉佛、及我釋迦文佛、未成佛時思惟觀察諸受亦復如是。」 (【訳】その時、世尊は比丘たちに〔次のように〕告げた。毘婆尸如來は成仏していない時、ひとりで静かなところで瞑想の思考をし、次のような観察をして諸々の受を観察した。「受とは何か。受の集合とは何か。受の消滅とは何か。受の集合への道の跡とは何か。受の消滅への道の跡とは何か。受の味とは何か。受の患いとは何か。受を離れることとは何か。」〔そして〕次のように観察した。「三つの受がある。〔すなわち〕樂受・苦受・不苦不樂受である。觸の集合は受の集合である。觸の消滅は受の消滅である。受に対して愛樂する・賛嘆する・愛着する・固執する場合、受の集合への道の跡と名付ける。受に対して愛樂しない・賛嘆しない・愛着しない・固執しない場合、受の消滅への道の跡と名付ける。受という因縁から樂・喜が生じる場合、受の味と名付ける。受は無常・変異する法である場合、受の患いと名付ける。受に対して、欲求と貪りを断ち、欲求と貪りを超越した場合、受の離れることと名付ける。」(略) 毘婆尸仏と同様に、このように、式棄(尸棄)仏、毘濕波浮(毘舍浮)仏、迦羅迦孫提(拘留孫)仏、迦那迦牟尼(拘那含牟尼)仏、迦葉仏、および我、釈迦文仏は、成仏していない時、諸々の受を思考し観察することも同様である。)

サンユッタ・ニカーヤの対応経典では、観察主体は菩薩の釈迦となっているが、観察内容は阿含とほぼ同じである。Pubbeñāṇam (SN 36.24. Vol. 4, p. 233, 13-24) : pubbe me bhikkhave sambodhā anabhisambuddhassa bodhisattasseva sato etad ahoṣi. **katamā nu kho vedanā, katamo vedanāsamudayo katamā vedanāsamudayagāminī paṭipadā, katamo vedanānirodho katamā vedanānirodhagāminī paṭipadā, ko vedanāya assādo ko ādinavo kiṃ nissaraṇan ti. tassa mayham bhikkhave etad ahoṣi. tisso imā vedanā sukhā vedanā dukkhā vedanā adukkhamasukhā vedanā, imā vuccanti vedanā, phassamudayā vedanāsamudayo, taṇhā vedanāsamudayagāminī paṭipadā, *pe, yo vedanāya chandarāgavinayo chandarāgapahānam idaṃ vedanāya **nissaraṇan ti.** (*pe の省略内容は *Bhikkhu* (SN 36.23. Vol. 4, p. 233, 4-9): “**phassanirodhā vedanānirodho/** ayam eva ariyo aṭṭhaṅgiko maggo vedanānirodhagāminī paṭipadā seyyathidaṃ sammādiṭṭhi, pe, sammāsamādhī, **yaṃ vedanam paṭicca uppajjati sukhaṃ somanassam ayaṃ vedanāya assādo, yā vedanā aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā ayam vedanāya ādinavo,**” また、**原文の nissaraṇanti を nissaraṇan ti に改めた。)(【訳】比丘たちよ、私は正等覚する前に、まさに正等覚していない菩薩であったとき、次のような〔考え〕が起こった。

「いったい受とは何か。受の集合とは何か。受の集合に導く道とは何か。受の消滅とは何か。受の消滅に導く道とは何か。受には、味は何か、患いは何か、出離は何か」と。比丘たちよ、ほかならぬ私には次のような〔考え〕が起こった。「これら三つの受がある。樂受・苦受・不苦不樂受、これらは受と呼ばれる。觸の集合から、受の集合がある。渴愛は受の集合に導く道である。*中略。受に対して、欲求と貪りを抑制すること・欲求と貪りを断つこと、それは受の出離である」と。(*「中略」の省略内容：「觸の消滅から、受の消滅がある。ほかならぬこの八支聖道は受の消滅に導く道である。それは次のようである。正見、中略、正定である。受によって樂・喜が生じる、それは受の味である。受は無常・苦・変異する性質をもつものである、それは受の患いである。」)

2.3.2.1.4.2

tshor ba nye bar brtag pa rnam pa brgyad po de (D41a1) dag kyang rang gi mtshan¹⁶³ nyid (G50b5) nye bar brtag (N44b4) pa dang/ tshe 'di la 'byung ba'i rgyu nye bar brtag pa dang/ de 'gog par¹⁶⁴ nye bar brtag pa dang/ tshe phyi ma la 'byung ba'i (P43a6) rgyu nye bar brtag pa dang/ de 'gog pa la nye bar (C41b7) brtag pa dang/ de gnyi ga la 'byung ba'i rgyu (D41a2) nye (G50b6) bar brtag pa dang/ de gnyi ga la 'byung ba 'gog (N44b5) pa nye bar brtag pa dang/ rnam par byang ba nye bar brtag pa yongs su bstan par (P43a7) blta bar bya ste/

2.3.2.1.4.3

de ni mdo¹⁶⁵ bsdu na nye bar brtag pa'i rab tu dbye ba yin no//

2.3.2.1.5

de la tshor (C42a1) ba (G51a1) rnams kyi nges par 'byung ba ni 'di¹⁶⁶ lta ste/ yid mi bde (D41a3) ba'i dbang po las nges¹⁶⁷ par 'byung (N44b6) ba ni bsam¹⁶⁸ gtan dang po'o// sdug bsngal (P43a8) gyi¹⁶⁹ dbang po las nges¹⁷⁰ par 'byung ba ni bsam gtan gnyis pa'o// yid bde (G51a2) ba'i dbang (C42a2) po las nges par 'byung ba ni bsam gtan gsum pa'o// bde ba'i dbang po las nges par 'byung ba ni bsam (D41a4) gtan bzhi pa'o// (P43b1) (N44b7) btang snyoms kyi dbang po¹⁷¹ las nges par 'byung ba ni mtshan ma med pa'i dbyings te/ de ni tshor ba'i (G51a3) phung po'i nges par 'byung ba'i rab tu (C42a3) dbye ba yin no//

2.3.3

2.3.3.0

de la 'du shes kyi phung po'i rab tu dbye ba gang zhe na/

2.3.3.1

2.3.3.1.0

de yang rnam pa lngar blta bar bya (P43b2) ste/ dngos po (D41a5) dang/ (N45a1) mtshan nyid dang/ phyin ci log dang/ phyin ci ma log pa dang/ yongs su gcod¹⁷² (G51a4) pa'o//

2.3.3.1.1

de la 'du shes kyi¹⁷³ phung po'i dngos po ni dmigs pa la (C42a4) mtshan mar 'dzin pa dang/ de'i gnas lta bu'i chos rnams so// (P43b3)

2.3.3.1.2

2.3.3.1.2.1

de la rang gi mtshan nyid ni snga (N45a2) ma bzhin du rnam pa drug tu blta bar bya'o// (D41a6)

2.3.3.1.2.2

de la¹⁷⁴ spyi'i mtshan nyid ni kun tu¹⁷⁵ shes (G51a5) par byed pa'i mtshan nyid de/

2.3.3.1.2.3

de ni mtshan nyid kyi rab tu dbye ba yin no//

¹⁶³ mtshan DCN; tshan PG.

¹⁶⁴ par DC; pa PNG.

¹⁶⁵ mdo DC; mdor PNG.

¹⁶⁶ 'di DCNG; ill. P.

¹⁶⁷ nges DPNG; ill. C.

¹⁶⁸ bsam DPNG; ill. C.

¹⁶⁹ gyi DCN; kyi PG.

¹⁷⁰ nges DPNG; ngas C.

¹⁷¹ po DCNG; pe P.

¹⁷² gcod em.; spyod DCPNG. cf.: §2.3.3.1.5.0.

¹⁷³ kyi DCNG; byi P.

¹⁷⁴ de la D; de'i PNG.

¹⁷⁵ tu PNG; du DC.

2.3.2.1.4.2

また、それら八種の、感受が詳しく観察されるべきことは、〔感受の〕固有の特徴が詳しく観察されるべきこと、現世に生起する〔感受〕の原因が詳しく観察されるべきこと、それ（現世に生起する感受）が滅することにおいて詳しく観察されるべきこと、来世に生起する〔感受〕の原因が詳しく観察されるべきこと、それ（来世に生起する感受）が滅することにおいて詳しく観察されるべきこと、〔現世と来世の〕両方に生起する〔感受〕の原因が詳しく観察されるべきこと、〔現世と来世の〕両方に生起する〔感受〕が滅することが詳しく観察されるべきこと、および清浄が詳しく観察されるべきことを示していると観察されるべきである。

2.3.2.1.4.3

それは、経文を要約して、詳しく観察されるべきことの区別である。

2.3.2.1.5

また、諸々の感受の出離とはすなわち、憂根を離れることは初禅である。苦根を離れることは二禅である。喜根を離れることは三禅である。楽根を離れることは四禅である。捨根を離れることは無相の領域である。以上は受蘊の出離の区別である¹⁸。

2.3.3 [想蘊の区別]

2.3.3.0

また、想蘊の区別は何かというならば、

2.3.3.1

2.3.3.1.0

それも五種と観察されるべきである。すなわち、実質と、特徴と、顛倒と、不顛倒と、確定することである。

2.3.3.1.1

その中で、想蘊の実質とは、所縁における特徴を捉えることと、それ（捉えること）の拠り所に相応しい諸法である。

2.3.3.1.2

2.3.3.1.2.1

また、固有の特徴とは、前と同様に、〔有相の想などの〕六種と観察されるべきである。

2.3.3.1.2.2

また、共通の特徴とは、表象させることという特徴である。

2.3.3.1.2.3

これは特徴の区別である。

¹⁸ 憂根などの五根、および五根と禅定の段階との対応関係については Text B-tr 注 20 参照。

2.3.3.1.3

2.3.3.1.3.1

2.3.3.1.3.1.1

de la phyin ci log (C42a5) gi rab tu dbye ba ni byis pa mi (P43b4) mkhas pa ma rig pa dang ldan pa tshul bzhin ma yin pa yid la byed (N45a3) pa/ dmigs pa mi rtag pa la rtag go zhes (G51a6) mtshan mar (D41a7) 'dzin¹⁷⁶ pa 'byung ba ste/ de ni de'i 'du shes phyin ci log yin no// mi rtag pa la rtag pa ji lta ba bzhin du (C42a6) sdug (P43b5) bsngal ba la bde ba dang/ mi sdug pa la sdug pa dang/ bdag med pa la bdag tu mtshan mar (N45a4) 'dzin pa¹⁷⁷ yang de (G51b1) bzhin no//

2.3.3.1.3.1.2

'du shes phyin ci log de yang khyim pa rnam (D41b1) la ni sems phyin ci log tu 'gyur ro// rab tu byung ba de dag kha cig¹⁷⁸ (P43b6) la (C42a7) ni lta ba phyin ci log tu 'gyur te/

2.3.3.1.3.1.3

de ltar na de ni phyin ci log gi rab tu dbye ba yin no//

2.3.3.1.3.2

2.3.3.1.3.2.0

'du shes phyin¹⁷⁹ (G51b2) ci (N45a5) log rnam¹⁸⁰ kyi rnam grangs gzhan yang

2.3.3.1.3.2.1

dngos po bzhi po de dag la log par mtshan¹⁸¹ mar 'dzin¹⁸² pa gang yin pa (D41b2) de ni 'du shes phyin (P43b7) ci log yin no//

2.3.3.1.3.2.2

yul de la (C42b1) de ltar kun tu shes pa'i kun tu 'dod chags gang yin pa de ni sems (G51b3) phyin ci log yin no//

2.3.3.1.3.2.3

phyin ci log (N45a6) gi dngos po de nyid la de ltar kun tu shes shing de ltar lhag par chags pa'i mngon par zhen¹⁸³ pa dang/ (P43b8) 'dod pa dang/ ston pa dang/ rnam par 'jog pa (D41b3) gang yin pa de ni lta (C42b2) ba phyin ci log yin no//¹⁸⁴

2.3.3.1.4

de la (G51b4) phyin¹⁸⁵ ci¹⁸⁶ ma log pa'i rab tu dbye ba ni/ mdzangs pa mkhas (N45a7) pa rig pa dang ldan pa tshul bzhin yid la byed pa dmigs pa mi rtag pa (P44a1) la mi rtag pa dang/ sdug bsngal ba¹⁸⁷ la sdug bsngal ba dang/ mi sdug pa la mi sdug pa dang/ bdag med pa la (D41b4) bdag (C42b3) med (G51b5) do zhes yang dag par mtshan mar 'dzin pa 'byung¹⁸⁸ ba gang yin pa ste/ de ni (N45b1) de'i 'du (P44a2) shes phyin ci ma log pa dang/ sems phyin ci ma log pa dang/ lta ba phyin ci ma log pa yang yin te/ de ltar na de ni phyin ci ma log pa'i rab tu dbye ba yin no// (G51b6)

2.3.3.1.5

2.3.3.1.5.0

de la yongs su gcod¹⁸⁹ (D41b5) (C42b4) pa'i rab tu dbye ba ni lnga po 'di dag ni 'du shes kyi yongs (P44a3) su gcod pa yin te/ (N45b2) yul yongs su gcod* pa dang/ myong ba yongs su gcod* pa dang/ brda yongs su gcod* pa dang/ log par yongs su gcod* pa dang/ bden pa'i (G52a1) don yongs su gcod* pa'o//

¹⁷⁶ 'dzin DPNG; 'jin C.

¹⁷⁷ pa DPNG; pa ma C.

¹⁷⁸ cig DCNG; ill. P.

¹⁷⁹ phyin DCPG; pyin N.

¹⁸⁰ rnam DPNG; rna nams C.

¹⁸¹ mtshan DCNG; ill. P.

¹⁸² 'dzin DCPG; 'jin N.

¹⁸³ zhen DCNG; ill. P.

¹⁸⁴ // CPNG; / D.

¹⁸⁵ phyin DPG; pyin CN.

¹⁸⁶ ci DPNG; om. C.

¹⁸⁷ ba DC; om. PNG.

¹⁸⁸ 'byung PNG; la 'gyur DC.

¹⁸⁹ gcod DC; spyod PNG. Also the gcod with a “*” mark below.

2.3.3.1.3

2.3.3.1.3.1

2.3.3.1.3.1.1

また、顛倒の区別とは、無明を有する愚かな凡夫は不如理に作意し、無常の所縁を常住であると、特徴を捉えることが生じる。これはその者の想の顛倒である。無常を常住〔とする〕ように、苦を楽、不浄を清浄、無我を我であると、特徴を捉えることも同様である。

2.3.3.1.3.1.2

また、その想の顛倒は、諸々の在家者の場合は心の顛倒となる。一部の出家者の場合は見解の顛倒となる。

2.3.3.1.3.1.3

以上のように、これは顛倒の区別である。

2.3.3.1.3.2

2.3.3.1.3.2.0

想の顛倒のほかの区別も〔ある〕。

2.3.3.1.3.2.1

それら四つの事（無常・苦・不浄・無我）に対して、誤って特徴を捉えることが何であれ、それは想の顛倒である。

2.3.3.1.3.2.2

その対象に対して、このように認識することの貪愛が何であれ、それは心の顛倒である。

2.3.3.1.3.2.3

ほかならぬその顛倒の事に対して、その通り（顛倒した通り）認識し、その通り愛着している者の執着することと、承認することと、説示することと、設定することが何であれ、それは見解の顛倒である。

2.3.3.1.4

また、不顛倒の区別とは、明を有する、智慧のある聡明な者は如理に作意し、無常の所縁を無常、苦を苦、不浄を不浄、無我を無我であると、正しく特徴を捉えることが何であれ、これはその者の想の不顛倒、心の不顛倒、見解の不顛倒でもある。以上のように、これは不顛倒の区別である。

2.3.3.1.5

2.3.3.1.5.0

また、確定することの区別とは、次の五つは想の確定することである。すなわち、対象を確定すること、経験を確定すること、名称（brda）を確定すること、誤って確定すること、真実のものを確定することである。

2.3.3.1.5.1

2.3.3.1.5.1.1

de la yul la (C42b5) mtshan ma (D41b6) dang/ mngon rtags su 'dzin¹⁹⁰ (P44a4) pa ni yul yongs su gcod* pa yin no//

2.3.3.1.5.1.2

yul las nges (N45b3) par 'byung ba'i tshor ba 'dzin pa ni myong ba yongs su gcod* pa yin no//

2.3.3.1.5.1.3

bdag (G52a2) gam gzhan dag la ming¹⁹¹ ni 'di zhes bya/ rigs¹⁹² ni 'di zhes bya/ rus ni 'di zhes bya¹⁹³ zhes (C42b6) bya ba la sogs¹⁹⁴ (D41b7) pa'i (P44a5) tha snyad¹⁹⁵ du 'dzin pa ni brda yongs su gcod pa yin no//

2.3.3.1.5.1.4

yul la phyin ci log tu 'dzin pa ni log par yongs su gcod pa yin no//

2.3.3.1.5.1.5

yul la phyin ci (G52a3) ma log par 'dzin pa ni¹⁹⁶ bden pa'i don yongs (N45b4) su gcod pa yin te/

2.3.3.1.5.2

de ltar na¹⁹⁷ de ni 'du shes kyi (P44a6) phung po'i (C42b7) yongs su gcod pa'i rab tu (D42a1) dbye ba yin no//

2.3.4

2.3.4.0

de la 'du byed kyi phung po'i rab tu dbye ba gang zhe na/

2.3.4.1

2.3.4.1.0

de yang rnam pa lngar (N45b5) blta bar bya ste/ yul (G52a4) dang/ gnas skabs dang/ kun nas nyon mongs pa dang/ rnam par byang ba dang/ mngon (P44a7) par 'du byed¹⁹⁸ pa'o//

2.3.4.1.1

de la yul ni sems (D42a2) pa'i (C43a1) tshogs drug po rnam 'du byed nyid du rnam par gzhag pa yin no//

2.3.4.1.2

de la gnas skabs ni skye ba (G52a5) dang rga ba la (N45b6) sogs pa sems dang mi ldan pa'i 'du byed rnam kyi rnam par gzhag¹⁹⁹ pa ste/ de ni (P44a8) gnas skabs kyis²⁰⁰ rab tu phyed ba yin pa'i phyir ro//

2.3.4.1.3

de la (C43a2) kun nas nyon mongs pa ni 'du byed (D42a3) kun nas nyon mongs²⁰¹ par byed pa'i nyon (G52a6) mongs pa dang/ nye ba'i nyon mongs pa rnam kyi rnam par (N45b7) gzhag pa yin no//

2.3.4.1.4

de la rnam par byang ba ni dad pa la (P44b1) sogs pa rnam par byang bar byed pa'i chos rnam kyi²⁰² rnam par gzhag pa yin (C43a3) no//

2.3.4.1.5

de la mngon par 'du byed pa ni (G52b1) yul dang mthun par byed²⁰³ pa (D42a4) zhes bya ba la sogs pa mngon par 'du byed pa rnam pa lnga ste/ snga ma bzhin du blta bar (N46a1) bya'o//

¹⁹⁰ 'dzin DCNG; ill. P.

¹⁹¹ ming DCNG; ill. P.

¹⁹² rigs DCPG; rid N.

¹⁹³ om. DCPG; / N.

¹⁹⁴ sogs DCP; sod NG.

¹⁹⁵ pa'i tha snyad DCNG; ill. P.

¹⁹⁶ pa ni DC; pa'i PNG.

¹⁹⁷ na DC; om. PNG.

¹⁹⁸ byed DCNG; ill. P.

¹⁹⁹ gzhag DCPG; bzhag N.

²⁰⁰ kyis DC; kyi PNG.

²⁰¹ mongs DCNG; mos P.

²⁰² rnam kyi DC; om. PNG.

²⁰³ byed DCNG; byad P.

2.3.3.1.5.1

2.3.3.1.5.1.1

その中で、対象に対して、特徴と二次的な〔特徴〕を捉えることは対象を確定することである。

2.3.3.1.5.1.2

対象から生じる感受を捉えることは経験を確定することである。

2.3.3.1.5.1.3

自・他に対して、「名はこれという」「種類はこれという」「種姓はこれという」というなどの言語表現を捉えることは名称を確定することである。

2.3.3.1.5.1.4

対象を顛倒して捉えることは誤って確定することである。

2.3.3.1.5.1.5

対象を顛倒せずに捉えることは真実のものを確定することである。

2.3.3.1.5.2

以上のように、これは想蘊の確定することの区別である。

2.3.4 [行蘊の区別]

2.3.4.0

また、行蘊の区別は何かというならば、

2.3.4.1

2.3.4.1.0

それも五種と観察されるべきである。すなわち、対象と、位相と、雑染と、清浄と、作動させることである。

2.3.4.1.1

その中で、対象とは、六つの思の集合（六思身）を行そのものとして設定することである。

2.3.4.1.2

また、位相とは、生・老など、心不相応行の設定である。それは位相によって区別されたものであるから。

2.3.4.1.3

また、雑染とは、行を汚す煩惱と随煩惱の設定である。

2.3.4.1.4

また、清浄とは、信など〔の〕諸々の浄化する法の設定である。

2.3.4.1.5

また、作動させることとは、対象に適応させることというなど、五種の作動させることであり、前と同様に観察されるべきである。

[Part 3]

(D56a4–57b4, C57b7–59b1, P59a3–60b5, N61b3–63a5, G71a2–73a2)

3.0

3.0.1

gzugs kyis bsdu^(P59a4) pa'i chos mams las du zhig ni dbang por gyur pa dag yin/ du zhig ni spyod yul du gyur pa dag yin zhe na/ smras pa/ lnga ni dbang por gyur pa dag^(C58a1) yin la/ drug ni spyod yul du gyur pa dag yin^(G71a3) par rig^(D56a5) par bya'o//²⁰⁴ ^(N61b4)

3.0.2

de la dbang por²⁰⁵ ^(P59a5) gyur pa mams kyis spyod yul du gyur pa dag ji ltar na spyod yul yin zhe na/ de ni 'di²⁰⁶ lta ste/ sa'i dngos gzhir de la (mig kyang²⁰⁷) yongs su ma nyams la zhes bya ba la sogs^(C58a2) pa rgya cher bstan pa ^(G71a4) yin no//

3.1

3.1.1

3.1.1.0

de la rgyu dus na dbang po yongs su ^(N61b5) nyams ^(P59a6) pa ^(D56a6) dang²⁰⁸ yongs su ma nyams par brjod par²⁰⁹ bya zhe na/ smras pa/

3.1.1.1

3.1.1.1.1

rgyu gnyis kyis te/ dman par gyur pa dang/ thams cad kyis thams cad du nyams pas so//

3.1.1.1.2

de las bzlog ^(G71a5) pas ni yongs su ma nyams par ^(C58a3) brjod par bya'o//

3.1.2

3.1.2.0

gzhan yang ^(P59a7) mdor ^(N61b6) bsdu na rgyu bzhis dbang po mams 'gyur bar ^(D56a7) blta bar bya ste/

3.1.2.1

phyi rol gyi rkyen las skye ba ni 'di lta ste/ phan 'dogs pa dang/ gnod par²¹⁰ byed pa'i yul la yongs su longs ^(G71a6) spyod pa dag dang/ yul dang phan 'dogs pa pha rol ^(C58a4) gyi ^(P59a8) gnod pa dag gis 'gyur ^(N61b7) bar byed pa'o//

3.1.2.2

nang gi rkyen las skye ba ni 'di lta ste/ so so'i nang gi ^(D56b1) tshul bzhin ma yin pa yid la byed pa las skyes pa'i 'dod chags kyis kun nas dkris pa ^(G71b1) la sogs pa kun nas nyon mongs pa mams ^(P59b1) dang/ tshul bzhin yid la ^(C58a5) byed pa las skyes ^(N62a1) pa'i snyoms par 'jug pa la²¹¹ sogs pas²¹² 'gyur bar byed pa'o//

3.1.2.3

las kyis rkyen las skye ba ni 'di lta ste/ ^(D56b2) sngon gyi²¹³ las kyis dbang gis gzugs sdug pa dang mi ^(G71b2) sdug pa la sogs pas 'gyur ^(P59b2) bar byed pa'o//

3.1.2.4

ngo bo nyid las ^(N62a2) 'gyur ba skye ba ni ^(C58a6) 'di lta ste/ dbang po de dag nyid kyis mtshan nyid tha dad pas 'gyur bar byed pa'o//

²⁰⁴ // DCPG; / N.

²⁰⁵ por DPNG; par C.

²⁰⁶ 'di DCNG; ill. P.

²⁰⁷ mig kyang NG; mig gyang P; dmigs kyang DC. cf.: tatra cakṣuḥ paribhinnaṃ bhavati (Text A 1.2.1); de la mig kyang yongs su ma nyams pa dang (Text A-tib 1.2.1)

²⁰⁸ / NG; om. DCP.

²⁰⁹ par DPNG; ill. C.

²¹⁰ par DC; pa PNG.

²¹¹ la DC; om. PNG.

²¹² pas DNG; pa'i P; pa la C.

²¹³ gyi DCPN; gyis G.

〔Part 3 識の生起について〕

3.0 〔色に包摂される諸法の分類〕

3.0.1

色（物質）によって包摂される諸法の中に、幾つが根となったものであり、幾つが活動領域となったものであるのかと言うならば、答える。五つは根となったものであり、六つは活動領域となったものであると知られるべきである。

3.0.2

その中で、根となったものの活動領域となったものが如何にして活動領域であるのかと言うならば、それはすなわち、「本地分」において、「また、眼も壊れておらず」云々、詳しく説いたものである。

3.1 〔根について〕

3.1.1 〔根の壊と不壊〕

3.1.1.0

また、幾つの原因によって、根が壊れていることと、〔根が〕壊れていないことと説かれるべきなのかと言うならば、答える。

3.1.1.1

3.1.1.1.1

二つの原因によって、すなわち、衰弱になったことと、完全に壊れていることによって〔根が壊れていることと説かれるべき〕である。

3.1.1.1.2

それと異なることによって、〔根が〕壊れていないと説かれるべきである。

3.1.2 〔根の変異〕

3.1.2.0

さらに、要約して言えば、四つの原因によって〔五〕根が変異すると観察されるべきである。

3.1.2.1

すなわち、外的な縁から生起する〔変異〕はすなわち、諸々の、〔根を〕利益するあるいは〔根を〕損害する対象を受用すること〔によって〕、また、対象と利益するものを、他者により損害することによって〔根を〕変異させる。

3.1.2.2

内的な縁から生起する〔変異〕はすなわち、それぞれの内的な不如理作意から生じた貪によって纏わりつかれているものなどという諸々の雑染〔によって〕、また、如理作意から生じた静慮（snyoms par 'jug pa）などによって〔根を〕変異させる。

3.1.2.3

業の縁から生起する〔変異〕はすなわち、前の業の力による端麗・醜陋の身体（gzugs）などによって〔根を〕変異させる¹⁹。

3.1.2.4

自体に基づく変異〔から〕生起する〔変異〕はすなわち、それらの根自体の特徴の区別によって〔根を〕変異させる。

¹⁹ 漢訳では「感得端正、醜陋等」（端正・醜陋などを感得すること）となっているが、チベット語訳には「感得」に対応する語が見られない。

3.1.3

3.1.3.0

yid kyi dbang po'i yongs su nyams pa rnam pa dur blta bar bya zhe na²¹⁴ (D56b3) smras pa/

3.1.3.1

3.1.3.1.0

rnam pa bzhi ste/ (P59b3) (G71b3)

3.1.3.1.1

sgrib pas byas pa ni 'di lta ste/ sgrib pa (N62a3) lnga po dag²¹⁵ las gang yang rung bas sems sgrib pa las²¹⁶ so//

3.1.3.1.2

g.yeng (C58a7) bas byas pa ni 'di lta ste/²¹⁷ gdon gyis brlams pa la sogs pas sems g.yeng bar byas pa las so//

3.1.3.1.3

ma thob (P59b4) pas byas pa ni 'di lta ste/ (D56b4) bsam (G71b4) gtan dang (N62a4) gzugs med pa'i yon tan khyad par can ma thob pa'i sems de la (rtsol bar²¹⁸) byed pa las so//

3.1.3.1.4

ma byang bas byas (C58b1) pa ni 'di lta ste/ thos²¹⁹ pa dang bzo la sogs pa la²²⁰ yongs su byang bar (P59b5) ma byas pa'i sems las so//

3.2

3.2.1

3.2.1.0

gzugs la (G71b5) sogs pa (N62a5) yul rnam dbang po (D56b5) rnam la ji ltar snang bar 'gyur zhe na/ smras pa/

3.2.1.1

gzugs ni mig dang ma phrad par snang bar 'gyur ro// ha cang²²¹ cha phra ba ma yin (C58b2) pa snang bar 'gyur ro// (P59b6) bstan du yod pa snang bar 'gyur ro// ma bsgribs²²² pa snang bar 'gyur (G71b6) ro// (N62a6) snang ba dang bcas par²²³ snang bar 'gyur ro// ha cang²²⁴ (D56b6) bskal pa ma yin pa snang bar 'gyur ro// spyod yul na gnas pa snang bar 'gyur ro//

gzhan yang la la'i (P59b7) mig la ni (C58b3) mun khrod na yang gzugs snang bar 'gyur ro//

3.2.1.2

sgra ni rna ba dang ma phrad pa (G72a1) dang/ bsgribs (N62a7) pa dang/ ma bsgribs pa dang/ snang ba dang/ mun khrod dang/ ha cang cha phra ba ma (D56b7) yin pa dang/ ha cang bskal pa ma yin pa dang/ spyod yul (P59b8) na gnas pa brag²²⁵ par 'gyur ro//

3.2.1.3

dri dang ro dang (C58b4) reg bya mams ni rang rang (G72a2) gi dbang po rnam dang²²⁶ phrad pa dang/ spyod yul (N62b1) na gnas pa dag spyod yul du 'gyur ro//

3.2.1.4

lha'i mig la ni²²⁷ gzugs bstan du yod pa dang/ bsgribs (D57a1) pa dang/ mun khrod na (P60a1) 'dug pa dang/ bskal pa dang/ spyod yul na gnas pa yang snang bar (C58b5) 'gyur ro// (G72a3)

3.2.1.5

'phags pa'i shes rab kyi mig la ni gzugs rnam pa (N62b2) thams cad spyod yul du 'gyur ro//

²¹⁴ / CPNG; om. D.

²¹⁵ dag DC; dang PNG.

²¹⁶ las DCPG; la N.

²¹⁷ / PNG; om. DC.

²¹⁸ rtsol bar DC; sogs par PNG.

²¹⁹ thos DC; thob PNG.

²²⁰ la DCPG; las N.

²²¹ cang DC; chang PNG.

²²² bsgribs DCN; sgribs PG.

²²³ par DC; pa PNG.

²²⁴ cang DC; chang PNG.

²²⁵ brag DPNG; grags C.

²²⁶ dang DC; om. PNG.

²²⁷ la ni DC; om. PNG.

3.1.3 [意根の壊]

3.1.3.0

意根の壊は何種類と観察されるべきなのかと言うならば、答える。

3.1.3.1

3.1.3.1.0

四種類〔と観察されるべきである〕。すなわち、

3.1.3.1.1

蓋によってなされる〔意根の壊〕はすなわち、五蓋の中のどれか一つによって心を覆うことによってである。

3.1.3.1.2

乱れによってなされる〔意根の壊〕はすなわち、鬼魅に憑かれたなどのことによって心が乱されたことによってである。

3.1.3.1.3

未証得によってなされる〔意根の壊〕はすなわち、〔色界の四〕禅や無色〔界の定〕の優れた功德をもつものを証得していないその心において、〔無理にして〕努力して〔禅定を〕することによってである。

3.1.3.1.4

不熟練によってなされる〔意根の壊〕はすなわち、聴聞と工巧などに慣熟していない心によってである。

3.2 [対象について]

3.2.1 [対象の現前]

3.2.1.0

色などの諸対象は諸々の根において如何にして顕現するのかと言うならば、答える。

3.2.1.1

色は、眼と接触していない場合、顕現する。極めて微細ではないものが顕現する。示すことができるものが顕現する。妨げられていないものが顕現する。光がある場合、顕現する。極めて遠く離れているのではないものが顕現する。活動領域に存在するもの (gnas pa) が顕現する。

さらに、ある種の眼には、暗闇の中にも色が顕現する²⁰。

3.2.1.2

音声は、耳と接触していないもの〔が聞こえる〕。妨げられているもの〔が聞こえる〕。妨げられていないもの〔が聞こえる〕。光〔がある場合、聞こえる〕。暗闇〔の中に、聞こえる〕。極めて微細ではないもの〔が聞こえる〕。極めて遠く離れているのではないもの〔が聞こえる〕。活動領域に存在するものが聞こえる。

3.2.1.3

におい・味・触覚対象は、それぞれの根と接触しているもの〔が活動領域になる〕。活動領域に存在するものが活動領域になる。

3.2.1.4

天眼の場合は、示すことができる色〔が顕現する〕。妨げられているもの〔が顕現する〕。暗闇の中にあるもの〔が顕現する〕。遠く離れているもの〔が顕現する〕。活動領域に存在するものも顕現する。

3.2.1.5

聖なる慧眼の場合は、すべての種類の色が活動領域になる。

²⁰ Text B-tr 注 26 参照。

3.2.2

3.2.2.0

sa'i dngos gzhir spyod yul rnam pa (P60a2) drug ces (D57a2) gang smras pa de'i rab tu dbye ba gang zhe na/ 'di lta ste/ gnas dang/²²⁸ mtshan nyid dang/ phyogs dang/²²⁹ dus dang/²³⁰ (G72a4) gsal ba dang/²³¹ (C58b6) mi gsal ba dang/ phyogs gcig dang/ (N62b3) dngos po thams cad 'dzin pa ste/

3.2.2.1

de la dang po ni sems (P60a3) can gyi 'jig rten du gtogs pa dang/ snod kyi (D57a3) 'jig rten du gtogs pa'i gzugs so/²³²

3.2.2.2

3.2.2.2.0

gnyis pa ni ngo bo nyid rnam pa gsum (G72a5) gyis ngo bo nyid kyi bye brag las te/ mtshan (C58b7) nyid kyi bye brag dang/ (N62b4) bya ba'i bye brag dang/ gnas skabs kyi (P60a4) bye brag gis so//

3.2.2.2.1

de la gzugs kyi mtshan nyid kyi bye brag ni 'di yin te/ sngon po dang/²³³ (D57a4) ser po dang/ dmar po dang/ dkar po zhes bya ba (G72a6) rgya cher bstan pa'o//

de la bya ba'i bye brag ni 'di lta ste/ rnam par rig (N62b5) (C59a1) byed dang/ rnam par rig (P60a5) byed ma yin pa sdom pa dang/ sdom pa ma yin pa dang/ sdom pa yang ma yin sdom pa ma yin pa yang ma yin par/²³⁴ bsdus pa dag yin par (D57a5) blta bar bya'o/²³⁵ (G72b1)

de la gnas skabs kyi bye brag ni 'di lta ste/ yid du 'ong ba dang/ yid du (N62b6) mi (P60a6) 'ong ba dang/²³⁶ (C59a2) btang snyoms kyi/²³⁷ gnas lta bu dag yin par blta bar bya'o//

3.2.2.2.2

de la sgra rnam ni mtshan nyid kyi bye brag ni zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu/²³⁸ las byung ba rnam dang/ (G72b2) ma (D57a6) zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu las byung ba rnam dang/ (P60a7) zin pa dang/ (N62b7) ma zin pa'i 'byung ba chen po'i rgyu las (C59a3) byung ba rnam so//

bya ba'i bye brag ni dag gi rnam par rig byed do//

gnas skabs kyi bye brag ni snga ma bzhin du blta bar bya'o/²³⁹

3.2.2.2.3

de la (G72b3) dri rnam kyi/²⁴⁰ mtshan nyid kyi bye brag (D57a7) ni rtsa ba (P60a8) dang sdong bu dang/ shun pa dang/ (N63a1) snying po dang/ lo ma dang/ me tog dang/²⁴¹ 'bras bu'i dri dag go//

dri dang ro dang reg bya rnam la (C59a4) bya ba'i bye brag ni med do//

de dag gi gnas skabs kyi bye brag ni snga ma bzhin (G72b4) du blta bar bya'o//

3.2.2.2.4

de la ro'i (P60b1) mtshan nyid kyi bye (N63a2) brag ni kha ba/²⁴² la (D57b1) sogs pa ste snga ma bzhin du blta bar bya'o//

3.2.2.2.5

reg bya'i mtshan nyid kyi bye brag kyang rnam pa du ma ste snga ma bzhin du blta bar bya'o// (C59a5)

3.2.2.3

de la spyod yul gsum pa ni shar dang lho dang nub (G72b5) dang byang la sogs pa'i (P60b2) phyogs rnam yin par (N63a3) rig par bya'o//

²²⁸ / DC; om. PNG.

²²⁹ / em.; om. DCPNG.

²³⁰ / PNG; om. DC.

²³¹ / DPNG; om. C.

²³² // DCPG; / N.

²³³ / CPNG; om. D.

²³⁴ *pa yang ma yin sdom pa ma yin pa yang ma yin par* DPNG; ill. C.

²³⁵ // DCPN; / G.

²³⁶ / DPNG; om. C.

²³⁷ *kyi* DCPG; ill. N.

²³⁸ *rgyu* DPNG; *rgya* C.

²³⁹ // DPNG; / C.

²⁴⁰ *kyi* DCNG; *gyi* P.

²⁴¹ / PNG; om. DC.

²⁴² *ba* DPNG; *ma* C.

3.2.2 [活動領域の区別]

3.2.2.0

「本地分」において六種の活動領域と述べたが、その区別は如何なるものなのかと言うならば、〔六種の活動領域は〕すなわち、抛り所・特徴・方向・時間・明瞭や不明瞭・一部や全体の物事を捉えることである。

3.2.2.1

その中で、最初のもは、有情世間に属する〔色〕と、器世間に属する色である。

3.2.2.2

3.2.2.2.0

第二のもは、三種の本質による本質の区別に基づく。すなわち、特徴の区別と、作用の区別と、位相の区別とによるものである。

3.2.2.2.1

その中で、色の特徴の区別は次のようである。すなわち、青・黄・赤・白と詳しく述べられたものである。

また、作用の区別はすなわち、表出されたもの・表出されないもの〔と〕、律儀（善なる行為）・非律儀（悪しき行為）・律儀でもない不律儀でもないものに包摂されているものであると観察されるべきである。

また、位相の区別はすなわち、好ましいもの・好ましくないもの・捨に相応しいもの（btang snyoms kyi gnas lta bu）であると観察されるべきである。

3.2.2.2.2

また、諸々の音声は、特徴の区別は〔心・心所によって〕執られている元素という原因から生じたものと、執られていない元素という原因から生じたものと、執られている〔元素〕と執られていない元素〔の両方〕という原因から生じたものとである。

作用の区別は、言葉という表出されたものである。

位相の区別は前（色の場合）と同様に観察されるべきである。

3.2.2.2.3

また、諸々のにおいの特徴の区別は、根・幹・皮・実・葉・花・果のにおいである。

におい・味・触覚対象において、作用の区別はない。

それらの位相の区別は前と同様に観察されるべきである。

3.2.2.2.4

また、味の特徴の区別は、苦さなどであり、前と同様に観察されるべきである。

3.2.2.2.5

触覚対象の特徴の区別もまた多種であり、前と同様に観察されるべきである。

3.2.2.3

また、第三の活動領域は、東南西北などの方向であると知られるべきである。

3.2.2.4

de la bzhi pa ni 'das pa dang/ ma 'ongs (D57b2) pa dang/ da ltar byung ba'i bye brag las blta bar bya'o//

3.2.2.5

de la lnga pa ni yang dag pa dang yang dag pa ma yin par (C59a6) gzung²⁴³ ba'i bye brag las blta (G72b6) bar bya'o// (P60b3)

3.2.2.6

de la drug pa ni phyogs gcig dang/ (N63a4) dngos po mtha' dag 'dzin pa'i bye brag las blta bar bya ste/

3.2.3

de²⁴⁴ ltar de lta bu dang mthun (D57b3) pa de ni gzugs can rnam ki yul rnam²⁴⁵ snang bar 'gyur ba'i bye brag yin par rig par bya'o// (C59a7)

3.3

de dang (P60b4) (G73a1) 'byung ba yid la byed pa gang yin zhe na/ gnas (N63a5) yongs su ma nyams pa de dang yul snang ba dang phrad pa de dang/ des sems kyi²⁴⁶ 'jug pa mngon par grub pa gang yin pa ste/

3.4

de (D57b4) ltar de lta bu dang mthun²⁴⁷ pa de ni gzugs (G73a2) can rnam²⁴⁸ kyi (P60b5) phung po'i spyod yul bsam pa yin (C59b1) par blta bar bya'o//

[Part 4]

(D58b5–59b4, C60b3–61b2, P61b7–62b5, N64b1–65b1, G74b1–75b3)

4.0

4.0.1

rnam par shes pa 'byung ba na (N64b2) sems las byung ba'i chos (D58b6) kun tu 'gro ba du 'byung zhe na/ smras pa lnga ste/²⁴⁹ yid la byed pa dang/ reg²⁵⁰ (G74b2) pa dang/ tshor ba dang/ 'du shes dang/ sems pa'o// (P61b8)

4.0.2

kun tu 'gro ba ma yin pa du 'byung zhe (C60b4) na/ smras pa/ kun tu 'gro ba²⁵¹ ma yin pa ni mang mod kyi (N64b3) gtso bo ni lnga ste/ 'di lta²⁵² ste/ 'dun pa dang/ mos pa dang/ dran pa dang/ ting nge (D58b7) 'dzin dang/ shes rab bo// (G74b3)

4.1

4.1.1

yid la byed pa gang zhe na/ sems kyi (P62a1) rtsol ba gang yin pa'o//

4.1.2

reg pa gang zhe na/ gsum 'dus pa las (C60b5) don 'dzin pa gang yin pa'o// (N64b4)

4.1.3

tshor ba gang zhe na/ gsum 'dus pa las don so sor myong ba gang yin pa'o//

²⁴³ gzung DC; bzung PNG.

²⁴⁴ de DPNG; da C.

²⁴⁵ rnam DC; rnam pa PNG.

²⁴⁶ kyi DC; can gyi PNG.

²⁴⁷ mthun DCNG; mbrun P.

²⁴⁸ rnam DCPG; rnis N.

²⁴⁹ smras pa lnga ste/ PNG; smras pa/ lnga ste DC.

²⁵⁰ reg DCNG; rig P.

²⁵¹ ba DCPG; ill. N.

²⁵² lnga ste/ 'di lta DCNG; ill. P.

3.2.2.4

また、第四のものは、過去・未来・現在の区別によって観察されるべきである。

3.2.2.5

また、第五のものは、正確に〔捉えられたもの〕や、不正確に捉えられたものの区別によって観察されるべきである。

3.2.2.6

また、第六のものは、一部〔を捉えること〕や、全体の物事を捉えることの区別によって観察されるべきである。

3.2.3 [まとめ]

以上のようなものに相応しいものは、諸々の物質的なもの (gzugs can) である対象が顕現する区別であると知られるべきである。

3.3 [能生作意について]

「それと共に生じる作意」とは何かと言うならば、それは、その壊れていない拠り所 (感官) と、その顕現と結合した対象と、それによって、心に向けること (作意) が引き起こされることである。

3.4 [総括]

以上のようなものに相応しいものは、諸々の物質的なものである蘊の活動領域を思惟することであると観察されるべきである。

[Part 4 五つの遍在する心所と五つの優れた非遍在の心所について]

4.0 [総説]

4.0.1

識が生じる時、遍在する (kun tu 'gro ba) 心所法がいくつ生じるのかと言うならば、答える。五つ。すなわち、作意と、触と、受と、想と、思とである。

4.0.2

非遍在の〔心所法〕がいくつ生じるのかと言うならば、答える。非遍在の〔心所法〕は多いであるけれども、優れたものは五つ。すなわち、次のようである。欲と、勝解と、念と、三摩地と、慧とである。

4.1 [五つの遍在する心所の定義]

4.1.1

作意は何かと言うならば、それは、心の功用である²¹。

4.1.2

触は何かと言うならば、それは、三つ (感官, 対象, 識) が結合することに基づいて、事柄 (don) を捉える ('dzin pa) ことである²²。

4.1.3

受は何かと言うならば、それは、三つが結合することに基づいて、事柄 (don) をそれぞれに経験することである²³。

²¹ 五遍行と五別境を説明する「本地分」の対応箇所 (サンスクリット語テキストおよびチベット語訳) は以下のとおり。

本地分 (Text A 4.4.2.1) : manaskārah katamaḥ | cetasa ābhogaḥ || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.2.1) : yid la byed pa gang zhe na/ sems kyi 'jug pa'o//

摂決択分の定義文における rtsol ba (功用, 努力) もしばしば ābhoga の訳語として用いられる。

²² 本地分 (Text A 4.4.2.2) : sparśaḥ katamaḥ | trikasaṃnipātaḥ || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.2.2) : reg (reg PNG; rig DC) pa gang zhe na/ gsum 'dus pa'o//

don 'dzin pa の don (*artha) は解釈が困難である。「本地分中意地」と「有尋有伺地」の関連する説明に照らして、ここでは「事柄」と解釈した。詳しくは本論第1章第1.2.3.2節参照。

²³ 本地分 (Text A 4.4.2.3) : vedanā katamā | anubhavanā || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.2.3) : tshor ba gang zhe na/ (/ PNG; om. DC) myong ba'o//

don so sor myong ba の don について、上記の触の定義文を参照して、「事柄」と解釈した。詳しくは本論第1章第1.3.2.1節参照。

4.1.4

'du shes gang zhe na/ (G74b4) gsum 'dus (P62a2) pa nyid (D59a1) las dmigs par 'dogs pa la brdar 'dzin pa gang yin pa ste/ de yang rjes su sad pa dang/ tha snyad (C60b6) bag la nyal ba'o// de (N64b5) la rjes su sad pa ni 'di lta ste/ lha dang mi tha snyad la mkhas pa rnams kyi'o// tha snyad bgal (G74b5) nyal ba ni (P62a3) 'di lta ste/ byis pa tha (D59a2) snyad la mi mkhas pa rnams dang/ tha na ri dwags²⁵³ dang bya rnams kyi'o//

4.1.5

sems pa gang zhe na/ gsum 'dus pa (C60b7) las dmigs (N64b6) pa de la tshor ba dang/ phrad pa dang/ 'bral²⁵⁴ ba'i phyir²⁵⁵ sems mngon par (G74b6) 'du byed pa gang yin (P62a4) pa'o//

4.2

4.2.1

'dun pa gang zhe na/ yul de dang de la de'i rjes su 'gro ba (D59a3) dang/ de 'dod pa nyid gang yin pa'o//

4.2.2

mos pa gang zhe na/ yul de dang de la de'i rjes su (C61a1) 'gro ba (N64b7) dang/ de la nges par 'dzin²⁵⁶ 'dod pa gang yin pa'o// (G75a1)

4.2.3

dran pa gang zhe na/ yul (P62a5) de dang de la de'i²⁵⁷ rjes su 'gro ba dang/²⁵⁸ mngon par brjod²⁵⁹ pa nyid gang yin pa'o//

4.2.4

ting nge 'dzin gang (D59a4) zhe na/ yul de dang de la de'i rjes su 'gro ba dang/ (C61a2) nges par sems pa (N65a1) la brten nas sems rtse gcig²⁶⁰ (G75a2) pa gang yin pa'o//

²⁵³ *dwags* DCP; *dags* NG.

²⁵⁴ *'bral* DPNG; *'brul* C.

²⁵⁵ *phyir* DPNG; ill. C.

²⁵⁶ *'dzin* DPNG; *'jin* C.

²⁵⁷ *de la de'i* DCG; *de'i* PN.

²⁵⁸ / DPNG; om. C.

²⁵⁹ *brjod* DCPG; ill. N.

²⁶⁰ *gcig* DPNG; *kcig* C.

4.1.4

想は何かと言うならば、それは、同じく三つが結合することに基づいて、所縁に対して、仮説において名称として捉えること (dmigs par 'dogs pa la brdar 'dzin pa) である。さらにそれは、知覚に随うものと、言語を随眠とするものとである。その中で、知覚に随うものとは、次のようである。言語に堪能な天人と人の〔想〕である。言語を随眠とするものとは、次のようである。言説に堪能でない幼児と、ないし獣や鳥の〔想〕である²⁴。

4.1.5

思は何かと言うならば、それは、三つが結合することに基づいて、その所縁に対して、感受すること、結合すること、または分離することによって、心を作動させることである²⁵。

4.2 [五つの優れた非遍在の心所の定義]

4.2.1

欲は何かと言うならば、それは、各々の対象に対して、それ (対象) にしたがって、それを欲することそのものである²⁶。

4.2.2

勝解は何かと言うならば、それは、各々の対象に対して、それ (対象) にしたがって、それに対して確認して是認することである²⁷。

4.2.3

念は何かと言うならば、それは、各々の対象に対して、それ (対象) にしたがって、言い及ぶことそのものである²⁸。

4.2.4

三摩地は何かと言うならば、それは、各々の対象に対して、それ (対象) にしたがって、詳しく考察することに基づく、心の専一である²⁹。

²⁴ 本地分 (Text A 4.4.2.4) : samjñā katamā | samjānā || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.2.4) : 'du shes gang zhe na/ kun shes pa'o//

²⁵ 本地分 (Text A 4.4.2.5) : cetanā katamā | cittābhisamkārah || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.2.5) : sems pa gang zhe na/ sems mngon par 'du byed pa'o// (// DPNG; / C)

²⁶ 本地分 (Text A 4.4.3.1) : chandaḥ katamaḥ | yad īpsite vastuni tatra tatra tadanugā kartukāmatā || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.3.1) : 'dun ('dun PNG; 'dus DC) pa gang zhe na/ gang 'dod pa'i dngos po de dang de la de'i rjes su 'gro zhing byed 'dod pa'o//

「欲」から「慧」までの五法に関する説明文では、de'i rjes su 'gro ba という表現が共通して用いられている。また、注 26~30 に示すように、同じ表現はチベット語訳「本地分」の対応箇所にも見られる。de'i rjes su 'gro ba の中の de は対象を指すと考えられる (例えば欲の説明文: 「欲は何かというならば、欲した物事であるものそれぞれに対して、それ (欲した物事であるもの) にしたがって、しようとして欲することである」)。一方、漢訳の対応箇所では「隨趣」あるいは「隨順趣向」となっており、de に対応する語は見られない。Text B-tr 注 32 参照。

²⁷ 本地分 (Text A 4.4.3.2) : adhimokṣaḥ katamaḥ | yan niścite vastuni tatra tatra tadanugāvadhāraṇabhaktiḥ || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.3.2) : mos pa gang zhe na/ gang nges pa'i dngos po de dang de la de'i rjes su 'gro zhing nges par 'dzin nus pa'o//

²⁸ 本地分 (Text A 4.4.3.3) : smṛtiḥ katamā | yat samstute vastuni tatra tatra tadanugābhilapanā || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.3.3) : dran pa gang zhe na/ gang 'dris pa'i dngos (dngos DPNG; ill. C) po de dang de la de'i rjes su 'gro zhing mngon par brjod pa'o//

²⁹ 本地分 (Text A 4.4.3.4) : samādhiḥ katamaḥ | yat parīkṣye vastuni tatra tatra tadanugam upanidhyānasamṇīṣitam cittaikāgryam || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.3.4) : ting nge 'dzin ('dzin DCPG; ill. N) gang zhe na/ gang brtag pa'i dngos po de dang de la de'i rjes su 'gro zhing nges par sems pa la brten nas sems rtse (rtse DCPG; ill. N) gcig pa'o//

「本地分」との対照から、「撰決撰分」中の nges par sems pa la brten nas sems rtse gcig pa の原文は upanidhyānasamṇīṣitam cittaikāgryam であると推定される。サンスクリットテキストは「詳しく考察することによって依存されている、心の専一である」と解釈することができる。すなわち、心の専一は詳しく考察することの拠り所である、とされている。漢訳も、「詳しく考察することの拠り所である心一境性 (心の専一) ということである」(「為審慮依心一境性」Text B 4.2.4) と、類似した理解を示している。これに対して、チベット語訳は、「詳しく考察することに基づく、心の専一である」と、相反する依存関係を示している。

4.2.5

shes rab gang zhe na/ (P62a6) yul de dang de la de'i rjes su 'gro ba dang/ chos rnams rab tu 'byed pa gang yin pa ste/ de yang rigs pas bskyed²⁶¹ pa dang/ (D59a5) rigs²⁶² pa ma (N65a2) yin pas bskyed (C61a3) pa dang/ rigs pa yang ma yin rigs pa ma (G75a3) yin pa yang ma yin pas bskyed²⁶³ (P62a7) pa'o//

4.3

4.3.1

de la yid la byed pa las gang dang ldan zhe na/ smras²⁶⁴ pa/ dmigs pa la sems²⁶⁵ gtod pa'i las can yin no//

4.3.2

reg²⁶⁶ pa las gang dang ldan (N65a3) zhe na/ tshor ba (D59a6) dang/ (C61a4) 'du shes dang/ sems pa rnams kyi rten²⁶⁷ byed (G75a4) pa'i las can yin no// (P62a8)

4.3.3

tshor ba las gang dang ldan zhe na/ sred pa skyed²⁶⁸ pa dang/ btang snyoms su 'jog pa'i las can yin no//

4.3.4

'du shes las gang dang ldan zhe na/ (N65a4) dmigs pa la sems kyis (C61a5) mtshan mar 'dzin pa dang/ (D59a7) tha snyad (G75a5) 'dogs pa'i las can yin no// (P62b1)

4.3.5

sems pa las gang dang ldan zhe na/ rnam par rtog pa dang/ lus dang ngag gi las kun nas slong ba'i las can yin no//

²⁶¹ *bskyed* DPNG; ill. C.

²⁶² *rigs* CPNG; *regs* D.

²⁶³ *bskyed* DCPG; ill. N.

²⁶⁴ / *smras* DPNG; *bsmras* C.

²⁶⁵ *sems* DCNG; *sams* P.

²⁶⁶ *reg* DPNG; *rig* C.

²⁶⁷ *rten* DC; *brten* PNG.

²⁶⁸ *skyed* DC; *skyes* PNG.

4.2.5

慧は何かと言うならば、それは、各々の対象に対して、それ（対象）にしたがい、諸法を分析することである。それはまた、道理にによって生じたものと、道理でないものによって生じたものと、道理でもなく、道理でないものでもないものによって生じたものである³⁰。

4.3 [五つの遍在する心所のはたらき]

4.3.1

また、作意は何のはたらきをもつのかと言うならば、答える。所縁に対して、心を傾けるはたらきをもつものである³¹。

4.3.2

触は何のはたらきをもつのかと言うならば、受・想・思の拠り所をなすはたらきをもつものである³²。

4.3.3

受は何のはたらきをもつのかと言うならば、貪愛を生じさせる〔はたらき〕と、捨（平静な状態）に安定するはたらきをもつものである³³。

4.3.4

想は何のはたらきをもつのかと言うならば、所縁に対して、心によって特徴（*mtshan ma*）として捉える〔はたらき〕と、言語表現を仮設する（*'dogs pa*）はたらきをもつものである³⁴。

4.3.5

思は何のはたらきをもつのかと言うならば、尋（思考）と、身〔業〕・語業を発動するはたらきをもつものである³⁵。

³⁰ 本地分 (Text A 4.4.3.5) : *prajñā katamā | yat parīkṣya eva vastuni tatra tatra tadanugo dharmāṇām pravīcayāḥ | yogavihitato vāyogavihitato vā naiva yogavihitato nāyogavihitataḥ* || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.3.5) : *shes rab gang zhe na/ gang brtag pa'i dngos po nyid de dang de la de'i rjes su 'gro zhing/ chos rnam la rab tu rnam (rnam DCNG; ill. P) par 'byed pa ste/ (/ DCPG; // // N) rigs pas bskyed pa 'am/ rigs pa ma yin pas bskyed pa 'am/ rigs pas bskyed (bskyed DCNG; ill. P) pa yang ma yin rigs (yin rigs DC; yin/ rig PNG) pa (pa DPNG; pa yang C) ma yin pas bskyed pa yang ma yin pa'o//*

³¹ 本地分 (Text A 4.4.4.1) : *tatra manaskāraḥ kiṃkarmakāḥ | cittāvarjanakarmakāḥ* || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.4.1) : *de la yid la byed pa las ci byed ce na/ sems gtod pa'i las byed do//*

³² 本地分 (Text A 4.4.4.2) : *sparśaḥ kiṃkarmakāḥ | vedanāsaṃjñācetanānām saṃniśrayadānakarmakāḥ* || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.4.2) : *reg pa las ci byed ce na/ tshor (tshor DCPG; ill. N) ba dang/ (/ DCN; om. PG) 'du shes dang/ sems pa rnam (rnam DCNG; ill. P) kyi gnas sbyin pa'i las byed do//*

³³ 本地分 (Text A 4.4.4.3) : *vedanā kiṃkarmikā | tṛṣṇotpādopekṣākarmikā* || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.4.3) : *tshor ba las ci byed ce na/ sred (sred PNG; srid D; sri C) pa skye ba dang/ btang snyoms su 'jog pa'i las byed do//*

漢訳との相違については Text B-tr 注 39, および本論第 1 章第 1.3.2.2 節参照。

³⁴ 本地分 (Text A 4.4.4.4) : *saṃjñā kiṃkarmikā | ālambane cittacītrikāravayahāarakarmikā* || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.4.4) : *'du shes las ci byed ce na/ dmigs pa la sems mtshan mar 'dzin pa'i tha snyad kyi las byed do//*

³⁵ 本地分 (Text A 4.4.4.5) : *cetanā kiṃkarmikā | vitarkakāyavākkarmādisamutthānakarmikā* || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.4.5) : *sems pa las ci byed ce na/ rtog pa dang/ (/ DPNG; om. C) lus dang (dang PNG; dang/ DC) ngag gi las (las DC; om. PNG) la sogs pa slong ba'i las byed do//*

4.4

4.4.1

'dun pa las gang dang (N65a5) ldan zhe na/ brtson 'grus rtsom²⁶⁹ pa (C61a6) skyed pa'i las can yin no//
(G75a6)

4.4.2

mos pa las gang (D59b1, P62b2) dang ldan zhe na/ dmigs pa la²⁷⁰ yon tan nam/ skyon nam/ gnyi ga ma
yin pa la mos pa'i las can yin no//

4.4.3

dran pa las gang dang ldan zhe na/ yun (N65a6) ring po nas bsams pa dang/ byas²⁷¹ pa dang/ (C61a7)
smras pa dran pa rjes su dran (G75b1) par²⁷² byed (P62b3) pa'i las can yin no//

4.4.4

ting nge 'dzin las (D59b2) gang dang ldan²⁷³ zhe na/ shes pa'i rten byed pa'i las can yin no//

4.4.5

shes rab las gang dang ldan zhe na/ spros pa dang/ (N65a7) rgyu ba dang²⁷⁴ kun nas nyon mongs pa
dang/ rnam par (C61b1) byang ba dang/ rjes (G75b2) su mthun par (P62b4) kun²⁷⁵ tu rtog pa'i las can yin no//

4.5

kun tu 'gro²⁷⁶ ba ma yin pa gang dag (D59b3) yin pa de²⁷⁷ dag dngos po so sor nges pa gang la skye
bar 'gyur zhe²⁷⁸ na/ smras pa/ rnam pa (N65b1) bzhi po²⁷⁹ 'dod pa dang/ nges pa dang/ 'dris pa dang/ nye
bar brtags pa la (G75b3) go rims (P62b5) bzhin du²⁸⁰ ste/ de la ting²⁸¹ (C61b2) nge 'dzin dang shes rab ni tha
ma la'o// lhag ma rnam ni go rims bzhin²⁸² du gong ma (D59b4) gsum la'o//

²⁶⁹ rtsom DPNG; ill. C.

²⁷⁰ pa la DPNG; pa'i C.

²⁷¹ byas PNG; byams DC.

²⁷² par DPNG; pa rjes su dran par C.

²⁷³ ldan DPNG; ldar C.

²⁷⁴ / DPNG; om. C.

²⁷⁵ kun DPNG; ill. C.

²⁷⁶ 'gro DPNG; ill. C.

²⁷⁷ de DCNG; om. P.

²⁷⁸ zhe DPNG; zha C.

²⁷⁹ po DPNG; ill. C.

²⁸⁰ du DPNG; de C.

²⁸¹ ting DPNG; teng C.

²⁸² bzhin DPNG; ill. C.

4.4 [五つの優れた非遍在の心所のはたらき]

4.4.1

欲は何のはたらきをもつのかと言うならば、努力を發動することを生起させるはたらきをもつものである³⁶.

4.4.2

勝解は何のはたらきをもつのかと言うならば、所縁を功德あるいは過失あるいはその両者のいずれでもないものとして確信するはたらきをもつものである³⁷.

4.4.3

念は何のはたらきをもつのかと言うならば、長時間にわたって、考えたこと・行ったこと・語ったことを記憶する〔や〕思い出せるはたらきをもつものである³⁸.

4.4.4

三摩地は何のはたらきをもつのかと言うならば、智の拠り所をなすはたらきをもつものである³⁹.

4.4.5

慧は何のはたらきをもつのかと言うならば、戯論 (spros pa) と、動き (rgyu ba) と、雑染と、清淨とに従って分別するはたらきをもつものである⁴⁰.

4.5 [五つの優れた非遍在の心所の生起領域]

それらの非遍在の〔心所法〕は、如何なる別々に限定された物事に対して生起するのかと言うならば、答える。四つの種類、〔すなわち、〕望まれたもの、確定されたもの、習熟されたもの、詳しく観察されたものに対して順次に〔生起する〕。その中で、三摩地と慧は最後のもの（詳しく観察されたもの）に対して〔生起する〕。残りのもの（欲、勝解、念）は順次に、前の三つに対して〔生起する〕。

³⁶ 本地分 (Text A 4.4.5.1) : chandaḥ kiṃkarmakaḥ | vīryārambhasaṃjananakarmakaḥ || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.5.1) : 'dun pa las ci byed ce na/ brtson 'grus rtsom pa skyed pa'i las byed do//

brtson 'grus rtsom pa skyed pa は「努力を發動することを生起させる」と解釈し得るが、意味的にやや不自然である。「本地分」と対照してみると、この一節に該当するサンスクリット原文は vīryārambhasaṃjanana- という複合語となっている。この複合語は「努力や企てを生じさせる」とも解釈できる。チベット語訳の brtson 'grus rtsom pa は、一般には「目的語+動作名詞」を表すと考えられるが、サンスクリット原文どおりに、brtson 'grus (*vīrya) と rtsom pa (*ārambha) が並置されている可能性もある。ここではチベット語訳を逐語的に訳した。

³⁷ 本地分 (Text A 4.4.5.2) : adhimokṣaḥ kiṃkarmakaḥ | guṇato doṣato nobhayato vālabandhṛtikarmakaḥ || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.5.2) : mos pa las ci byed ce na/ yon tan (tan DCNG; ten P) nam nyes pa 'am/ gnyi ga ma yin pas dmigs pa la dga' bar byed pa'i las byed do//

³⁸ 本地分 (Text A 4.4.5.3) : smṛtiḥ kiṃkarmikā | ciracintitakṛtabhāṣitasmaraṇānusmaraṇakarmikā || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.5.3) : dran pa las ci byed ce na/ yun ring po nas bsams pa dang/ byas pa dang/ smras pa dang/ dran pa las rjes su dran pa'i las byed do//

³⁹ 本地分 (Text A 4.4.5.4) : samādhiḥ kiṃkarmakaḥ | jñānasamṇīśrayadānakarmakaḥ || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.5.4) : ting nge 'dzin las ci byed ce na/ ye shes kyi gnas sbyin pa'i las byed do//

⁴⁰ 本地分 (Text A 4.4.5.5) : prajñā kiṃkarmikā | prapañcāpracārasaṃkleśavyavadānānukūlasaṃtīraṇakarmikā || 対応するチベット語訳 (Text A-tib 4.4.5.5) : shes rab las ci byed ce na/ spros pa rgyu ba dang/ kun nas nyon mongs pa dang/ rnam par byang ba dang/ mthun pa la spyod pa'i las byed do// (// DCNG; / P)

*付録Ⅱ，付録Ⅲ（ページ289-310）は，学位授与日である令和3年3月19日から5年以内に雑誌掲載等の形で掲載予定であるため，公表することができません。

参考文献

一次文献

AcittikāBh	<i>The Sacittikā and Acittikā bhūmi and the pratyekabuddhabhūmi (Sanskrit texts)</i> , Skt. ed. by A. Wayman, 『印度学仏教学研究』通号 15, pp. 30–34, 1960.
ADV	<i>Abhidharmadīpa with vibhāṣāprabhāvṛtti</i> , Skt. ed. by Padmanabh S. Jaini, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1959.
AKBh	<i>Abhidharmakośabhāṣya</i> , by Vasubandhu, Skt. ed. by P. Pradhan, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AN	<i>Aṅguttara-Nikāya</i> , Pali Text Society, 1958–1976.
AS	<i>Abhidharmasamuccaya</i> , by Asaṅga, Skt. ed. by V. Gokhale, <i>Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society (New Series)</i> 23, pp. 13–38, 1947. D: No. 4049 ri; P: No. 5550 li.
BBh	<i>Bodhisattvabhūmi</i> , Skt. ed. by Unrai Wogihara, Tokyo, 1930–1936. D: No. 4037 wi; P: No. 5538 zhi.
DBh-K	<i>Daśabhūmikasūtra</i> , Skt. ed. by Ryūkō Kondō. Kyoto: Rinsen Book, 1983.
DBh-R	<i>Daśabhūmikasūtra</i> , Skt. ed. by Johannes Rahder, Paris: P. Geuthner; Louvain: J.-B. Istas, 1926.
DN	<i>Dīgha-Nikāya</i> , Pali Text Society, 1966–1976.
DN-a	<i>Sumaṅgalavilāsinī</i> , by Buddhaghosa, Pali Text Society, 1968–1971.
MN	<i>Majjhima-Nikāya</i> , Pali Text Society, 1974–1979.
MN-a	<i>Papañcasūdanī: Majjhimanikāyaṭṭhakathā</i> , by Buddhaghosa, Pali Text Society, 1976–1979.
Triṃśikākārikā	<i>Triṃśikāvijñaptimātratā</i> , by Vasubandhu, Skt. ed. by Sylvain Lévi, Paris: Honoré Champion, 1925.
TrBh	<i>Triṃśikā Vijñaptimātratāsiddhi</i> , by Vasubandhu <i>Triṃśikāvijñaptibhāṣya</i> , by Sthiramati, Skt. ed. by Hartmut Buescher, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2007.
PS	<i>Pañcaskandhaka</i> , by Vasubandhu, Skt. ed. by Xuezhu Li and Ernst Steinkellner, Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.
PSV	<i>Pañcaskandhavibhāṣā</i> , by Sthiramati, Skt. ed. by Jowita Kramer,

	Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013.
PSVy	<i>Pratītyasamutpādavyākhyā</i> , by Vasubandhu D: No. 3995 chi; P: No. 5496 chi. <i>Vasubandhus Interpretation des Pratītyasamutpāda : eine kritische Bearbeitung der Pratītyasamutpādavyākhyā</i> , Yoshihito G. Muroji, Stuttgart: Franz Steiner, 1993.
SamāhitāBh	<i>Samāhitā Bhūmiḥ : Das Kapitel über die meditative Versenkung im Grundteil der Yogācārabhūmi</i> , Skt. ed. by Martin Delhey, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, 2009. D: No. 4035; P: No. 5536.
SbhV	<i>The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu</i> . Part 2, Skt. ed. by Raniero Gnoli, Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1978.
SN	<i>Samyutta-Nikāya</i> , Pali Text Society, 1960–1991.
ŚrBh-S	<i>Śrāvakabhūmi</i> , Skt. ed. by Karunesha Shukla, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1973. D: No. 4036 dzi; P: No. 5537 wi.
ŚrBh-T1	『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処』大正大学総合佛教研究所声聞地研究会編，東京：山喜房佛書林，1998.
ŚrBh-T2	『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処』大正大学総合佛教研究所声聞地研究会編，東京：山喜房佛書林，2007.
ŚrutamayīBh	『仏教知識論の原典研究——瑜伽論因明，ダルモッタラティツパナカ，タルカラハスヤ』，矢板秀臣編，成田：成田山新勝寺，2005.
YBh or Bh-ed	<i>The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga</i> , Part 1, Skt. ed. by Vidhushekhara Bhattacharya, Calcutta: University of Calcutta, 1957. See YBh-t.
YBhVy	* <i>Yogācārabhūmivyākhyā</i> . D: No. 4043 'i; P: No. 5544 yi.
YBh-c	See 『瑜伽論』.
YBh-t	D: No. 4035 tshi; P: No. 5536 dzi.
『阿毘曇心論』	法勝造，僧伽提婆・慧遠訳，大正 28，No. 1550.
『阿毘曇心論経』	法勝造，優波扇多积，那連提耶舍訳，大正 28，No. 1551.
『阿毘曇毘婆沙論』	『阿毘曇毘婆沙論』迦旃延子造，五百羅漢訳，浮陀跋摩共道泰

	等訳, 大正 28, No. 1546.
『縁起経釈』	See PSVy.
『界身足論』	『阿毘達磨界身足論』世友造, 玄奘訳, 大正 26, No. 1540.
『開元釈教録』	智昇撰, 大正 55, No. 2154.
『俱舍論』	『阿毘達磨俱舍論』世親造, 玄奘訳, 大正 29, No. 1558. 『阿毘達磨俱舍釈論』婆藪槃豆造, 真谛訳, 大正 29, No. 1559. See AKBh.
『決定藏論』	真谛訳, 大正 30, No. 1584.
『顕揚論』	『顕揚聖教論』無著造, 玄奘訳, 大正 31, No. 1602.
『華嚴経』	佛馱跋陀羅訳, 大正 9, No. 278.
『解深密経』	玄奘訳, 大正 16, No. 676. D: No. 106 ca; P: No. 774 ngu. 河口慧海師将来の写本カンギユル (テンパンマカンギユルのコピー)
『解深密経疏』	<i>'phags pa dgongs pa nges par 'grel pa'i mdo'i rnam par bshad pa</i> , by Klu'i Rgyal-mtshan. D: No. 4358 cho; P: No. 5845 cho.
『五蘊論』	『大乘五蘊論』世親造, 玄奘訳, 大正 31, No. 1612. See PS.
『五蘊論釈』	『大乘広五蘊論』, 安慧造, 地婆訶羅訳, 大正 31, No. 1613. See PSV.
『薩婆多宗五事論』	法成訳, 大正 28, No. 1556.
『三十頌』	『唯識三十論頌』世親造, 玄奘訳, 大正 31, No. 1586. 『転識論』真谛訳, 大正 31, No. 1587. See TrBh.
『三十頌釈』	See TrBh.
『深密解脱経』	菩提流支訳, 大正 16, No. 675.
『集異門足論』	『阿毘達磨集異門足論』舍利子説, 玄奘訳, 大正 26, No. 1536.
『眾事分阿毘曇論』	世友造, 求那跋陀羅訳, 大正 26, No. 1541.
『集論』	『阿毘達磨集論』無著造, 玄奘訳, 大正 31, No. 1605. See AS.
『述記』	『成唯識論述記』窥基撰, 大正 43, No. 1830.
『順正理論』	『阿毘達磨順正理論』衆賢造, 玄奘訳, 大正 29, No. 1562.
『成唯識論』	護法等造, 玄奘訳, 大正 31, No. 1585.
『雑阿含経』	求那跋陀羅訳, 大正 2, No. 99.
『増一阿含経』	瞿曇僧伽提婆訳, 大正 2, No. 125.
『大乘理趣六波羅蜜多経』	般若訳, 大正 8, No. 261.

参考文献

『大毘婆沙論』	『阿毘達磨大毘婆沙論』五百大阿羅漢造，玄奘訳，大正 27，No. 1545.
『ディーパ』	『アビダルマディーパ』， see ADV.
『中阿含経』	瞿曇僧伽提婆訳，大正 1，No. 26.
『長阿含経』	佛陀耶舎・竺佛念訳，大正 1，No. 1.
『入阿毘達磨論』	塞建陀羅造，玄奘訳，大正 28，No. 1554.
『百法明門論』	『大乘百法明門論』天親造，玄奘訳，大正 31，No. 1614.
『法蘊足論』	『阿毘達磨法蘊足論』大目乾連造，玄奘訳，大正 26，No. 1537.
『品類足論』	『阿毘達磨品類足論』世友造，玄奘訳，大正 26，No. 1542.
『瑜伽論』	『瑜伽師地論』，弥勒造，玄奘訳，大正 30，No. 1579.
『瑜伽論』「撰異門分」	See 『瑜伽論』. D: No. 4041 'i; P: No. 5542 yi. See 松田和信 [1994]
『瑜伽論』「撰決択分」	See 『瑜伽論』. D: No. 4038 zhi, zi; P: No. 5539 zi, 'i.
『瑜伽論』「撰事分」	See 『瑜伽論』. D: No. 4039 zi; P: No. 5540 'i.
『瑜伽論』「本地分中 意地」	See YBh. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論』「本地分中 有尋有伺地」	See YBh. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論』「本地分中 五識身相応地」	See YBh. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論』「本地分中 三摩呬他地」	See SamāhitāBh. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論』「本地分中 声聞地」	See ŚrBh-S, ŚrBh-T1, ŚrBh-T2. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論』「本地分中 菩薩地」	See BBh. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論』「本地分中 無心地」	See AcittikāBh. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論』「本地分中 聞所成地」	See ŚrutamayīBh. See 『瑜伽論』.
『瑜伽論記』	遁倫集撰，大正 42，No. 1828.
『瑜伽論釈』	See YBhVy.
『略纂』	『瑜伽師地論略纂』窺基撰，大正 43，No. 1829.

その他の略号

- Apte *The practical Sanskrit-English dictionary*, Vaman Shivaram Apte, Kyoto: Rinsen Book, 1978.
- Cone *A Dictionary of Pāli*, Margaret Cone, Bristol: The Pali Text Society, 2010.
- CPD *A Critical Pāli Dictionary*, Vol. 1, begun by V. Trenckner; revised, continued and edited by Dines Andersen, Helmer Smith, and Hans Hendriksen, Copenhagen: Commissioner: Ejnar Munksgaard, 1924–1948.
- D チベット大蔵経 sDe dge 版
- MS 『瑜伽師地論』(See YBh) の写本
- MW *A Sanskrit-English dictionary*, Monier Monier-Williams, Oxford: Oxford University Press, 1982.
- Negi *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, J. S. Negi, Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2003.
- P チベット大蔵経北京版
- T 大正新脩大蔵経

二次文献

1. 和文

赤沼智善	[1958]	『漢巴四部四阿含互照録』, 東京: 破塵閣書房.
阿毘達磨集論研究会	[2015]	「梵文和訳『阿毘達磨集論』(1)」, 『インド学チベット学研究』 19, pp. 57–96.
一色大悟	[2015]	「『俱舍論』の〈大地〉説の特色」, 『佛教学』 56, pp. 27–47.
宇井伯壽	[1958]	『瑜伽論研究』, 東京: 岩波書店.
勝又俊教	[1961]	『仏教における心識説の研究』, 東京: 山喜房佛書林.
加藤弘二郎	[2003]	「河口本『解深密経』チベット語訳テキストについて」, 『印度学仏教学研究』 通号 102, pp. 142–144.
勝呂信静	[1982]	「唯識説における縁起の思想」, 『大崎学報』 135, pp. 205–227.
	[1989]	『初期唯識思想の研究』, 東京: 春秋社.
	[2009]	『唯識思想の形成と展開』, 山喜房佛書林.
木村紫	[2010]	「触 <i>sparsā</i> ノート」, 『東方』 25, pp. 144–166.
櫻部建	[1979]	『俱舍論の研究: 界・根品』, 京都: 法蔵館.
	[1997]	「説一切有部アビダルマにおける八種の「形色」と六種の「味」」, 『佛教語の研究』, 京都: 文栄堂, pp. 78–87.
櫻部建・上山春平	[1996]	『仏教の思想 2 存在の分析 (アビダルマ)』, 東京: 角川書店.
佐久間秀範	[2012]	「瑜伽行唯識思想とは何か」, シリーズ大乘仏教第七巻『唯識と瑜伽行』, 東京: 春秋社, pp. 19–72.
佐々木閑	[2009]	「五色根は透明か」, 『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』 7, pp. 1–16.

参考文献

斎藤明 (代表), 高橋晃一, 堀内俊郎, 松田訓典, 一色大悟, 岸清香	[2011]	『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集—仏教用語の用例集 (バウツダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』, <i>Bibliotheca Indologica et Buddhologica</i> 14, 東京: 山喜房佛書林.
斎藤明 (代表), 一色大悟, 高橋晃一, 加藤弘二郎, 堀内俊郎, 石田尚敬, 松田訓典	[2014]	『瑜伽行派の五位百法—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウツダコーシャ II』, <i>Bibliotheca Indologica et Buddhologica</i> 16, 東京: 山喜房佛書林.
高橋晃一	[2005]	『『菩薩地』「真実義品」から「撰決撰分菩薩地」への思想展開——vastu 概念を中心として』, 東京: 山喜房佛書林.
	[2012]	「初期瑜伽行派の思想——『瑜伽師地論』を中心に」, シリーズ大乘仏教第七巻『唯識と瑜伽行』, 東京: 春秋社, pp. 73–109.
張涵静・葉少勇 (著), 水船教義 (訳)	[2020]	『『瑜伽師地論』に対する未知の注釈書の梵文写本断簡—予備的報告—』, 『東洋学術研究』184, pp. 1–15.
塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著	[1990]	『梵語仏典の研究Ⅲ 論書篇』, 京都: 平楽寺書店.
西村実則	[2002]	『アビダルマ教学: 俱舍論の煩惱論』, 京都: 法蔵館.
袴谷憲昭	[1979]	「Viniścayasamgrahanī におけるアーラヤ識の規定」, 『東洋文化研究所紀要』79, pp. 1–79.
原田和宗	[2004]	『『瑜伽師地論』「有尋有伺等三地」の縁起説(1)』, 『九州龍谷短期大学紀要』50, pp. 141–179.
平川彰	[1974]	『インド仏教史』, 東京: 春秋社.
馬場紀寿	[2003]	「北伝阿含の註釈書要素—縁起関連経典—」, 『仏教研究』31, pp. 193–219.
舟橋一哉	[1954]	『業の研究』, 京都: 法蔵館.
松田和信	[1994]	『『瑜伽論』「撰異門分」の梵文断簡』, 『印度哲学仏教学』9, pp. 90–108.
松本史朗	[2004]	『仏教思想論』上, 東京: 大蔵出版.
水野弘元	[1964]	『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』, 東京: 山喜房佛書林.
	[1966]	「根 indriya について」, 『印度学仏教学研究』通号 28, pp. 39–46.
	[1997]	「心心所思想の発生過程に就て」, 『仏教教理研究』, 東京: 春秋社. 『日本仏教学協会年報』通号 14, [1942], pp. 215–231 (初刊).

参考文献

宮下晴輝	[1987]	「同分彼同分について」,『印度学仏教学研究』通号 70, pp. 96-99.
向井亮	[1985]	「『瑜伽師地論』の撰事分と『雑阿含経』:『論』所説の<相応アーガマ>の大綱から『雑阿含経』の組織復原案まで 附『論』撰事分—『経』対応関係一覧表」,『北海道大學文學部紀要』33(2), pp. 1-41.
室寺義仁	[1996]	「誕生(再生)の定型表現を巡る仏教徒の諸伝承」,『高野山大学論文集』, pp. 181-196.
	[2010]	「ヴァスバンドウの注意力(manaskāra)解釈: 識別(vijñāna)成立のための三要件」,『インド論理学研究』1, pp. 213-222.
室寺義仁(代表), 高務祐輝, 岡田英作	[2017]	「『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウッダコーシャV」, 東京: 山喜房佛書林.
山口益・舟橋一哉	[1955]	『俱舍論の原典解明 世間品』, 京都: 法蔵館.
山部能宜	[1990]	「真如所縁縁種子について」,『日本の仏教と文化: 北畠典生教授還暦記念』, 京都: 永田文昌堂, pp. 63-87.
	[2012]	「アーラヤ識論」, シリーズ大乘仏教第七巻『唯識と瑜伽行』, 東京: 春秋社, pp. 181-219.
	[2016]	「アーラヤ識説の実践的背景について」,『東洋の思想と宗教』33, pp. 1-30.
楊潔	[2017]	「『瑜伽師地論』における tājjo manaskārah 再考」,『印度学仏教学研究』通号 141, pp. 154-157.
	[2018]	「『随与>(*anupradāna)について—五遍行における思(cetanā)の一側面—」,『インド哲学仏教学研究』26, pp. 19-33.
	[2019]	「『瑜伽論有尋有伺地』の anupradānāt について」,『印度学仏教学研究』通号 147, pp. 106-109.
横山紘一	[1976]	「名と増語と想とについて」,『印度学仏教学研究』通号 48, pp. 177-182.
	[1979]	『唯識の哲学』, 京都: 平楽寺書店.
横山紘一, 廣澤隆之	[1997]	『瑜伽師地論に基づく 梵蔵漢対照・蔵梵漢対照 仏教語辞典』, 東京: 山喜房佛書林.
吉元信行	[1982]	『アビダルマ思想』, 京都: 法蔵館.
	[1985]	「心理的諸概念の大乘アビダルマ的分析」,『仏教学論集: 中村瑞隆博士古稀記念論集』, 東京: 春秋社, pp. 153-170.

2. 欧文

Chung, Jin-il and Fukita, Takamichi

[2011] *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Madhyamāgama*, Tokyo: Sankibo.

Delhey, Martin

[2009] See SamāhitāBh.

Hakamaya, Noriaki

[1984] The Old and New Tibetan Translations of the *Samdhinirmocana-sūtra* : Some Notes on the History of Early Tibetan Translation, 『駒澤大学仏教学部研究紀要』 42, pp. 1–17.

Hamilton, Sue

[1996] *Identity and Experience: The Constitution of the Human Being According to Early Buddhism*, London: Luzac Oriental.

Kato, Kojiro

[2006] On the Tibetan Text of the *Samdhinirmocanasūtra*: Towards a Comparative Study of Manuscripts and Editions which belong to the East and West Recensions, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 109, pp. 93–99.

Li, Xuezhong

[2013] Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga's *Abhidharmasamuccaya* –Folios 1, 15, 18, 20, 23, 24–, *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 16, pp. 241–253.

Muroji, Yoshihito G.

[1993] See PSVy.

Takatsukasa, Yūki

[2014] The Problem of the Simultaneous Arising of Six Vijñānas, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 133, pp. 184–188.

Schmithausen, Lambert

[1987] *ālayavijñāna: on the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy*, Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

[2014] *The Genesis of Yogācāra-Vijñānavāda: Responses and Reflections*, Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

(博士論文の内容の要旨)

論文題目 瑜伽行派における五遍行の研究 — 『瑜伽師地論』を中心として—
氏 名 楊 潔

本研究では「五遍行」という概念を取り上げる。「五遍行」とは、インド大乘仏教の一学派である瑜伽行派による、精神的・物質的構成要素 (dharma, 法) の分類概念のひとつである。同派は、作意 (manaskāra)・触 (sparsā)・受 (vedanā)・想 (saṃjñā)・思 (cetanā) の五つを、心に遍在する心作用であるとし、五つの「遍行」(sarvatraga) と称した。

瑜伽行派の心所説では、五遍行のほかに、欲などの五つの心所を五つの「別境」としている。この五遍行と五別境をあわせると、説一切有部 (以下有部) の説く十大地法になる。つまり、瑜伽行派の五遍行と五別境は、有部の十大地法と密接な関係を有する。先行研究では、遍行・別境と十大地法との比較検討が行われた。その結果、別境五法の定義は有部のものと大きな相違が認められるのに対して、遍行五法の定義は、有部の説とほぼ同様であることが指摘されている。したがって、従来の研究では、瑜伽行派の五遍行と五別境は、有部の十大地法を継承し、瑜伽行派独自の考察によってこれを二分したものであるとされている。先行研究は、瑜伽行派が十大地法を五遍行と五別境に二分した主要な理由の一つとして、作意などの五心所は、アーラヤ識を含め、すべての識に相応する一方、欲などの五心所はアーラヤ識には相応しないという同派の考え方を挙げている。一方、先行研究は、アーラヤ識が作意などの五心所と相応するという説は、アーラヤ識の潜在性と適合しないうえ、その他の教説とも齟齬するということを指摘している。このことを説明するため、先行研究は、アーラヤ識が五心所と相応するという説は、有部アビダルマに説かれる識の性質 (心所との相応関係など) をアーラヤ識の概念に追加したものである、と結論している。以上のことから、先行研究では、五遍行説は、有部の五心所の定義を継承しつつ、五心所の遍在する性質を八識に敷衍適用した、形式的な理論にすぎない、と考えられている。

しかしながら、先行研究における瑜伽行派の文献の扱い方には議論の余地がある。特に瑜伽行派の最古の文献である『瑜伽師地論』(以下『瑜伽論』) が五遍行を如何に理解しているかは十分に研究されていない。

本研究は、『瑜伽論』を中心に、初期經典や有部の論書との比較検討により、瑜伽行派の五遍行説を究明することを目指す。本研究は序章、本論の五章、結論、および付録から成る。

序章では、五遍行とその関連概念を紹介しながら、先行研究の概要および問題の所在を論じる。そして、本研究の課題と構成について説明する。

本論の第1章では、『瑜伽論』の「本地分」と「撰決択分」の説明に基づいて、初期經典、有部の論書、および瑜伽行派のその他論書と対照しながら、作意などの五心所に関する『瑜伽論』の説明を考察する。五心所のうち、作意と思についての『瑜伽論』の説明には特に問題となる点があるが、紙幅の都合で第1章において扱うことは難しい。それらの問題に関しては、第4章と第5章において詳しく考察する。

この考察によれば、作意に関しては、有部の論書、特に比較的古い有部の論書は修道論的な観点から論じる傾向があるのに対して、『瑜伽論』は、識を対象に向かわせ認識させるという作意

の機能を重要視する。触に関しては、有部の論書では、触は感官、対象、識の三つの結合であるのか、あるいは、それとは別のものであるのかが一大問題とされるが、『瑜伽論』では特にこれを問題としていない。『瑜伽論』などの瑜伽行派の論書の説明を見れば、瑜伽行派の関心は、感官、対象、識の結合から受の生起に至る過程における触の作用にある。瑜伽行派は、触が対象の特徴を捉え、楽などの受に対応させ確定させるという作用を重要視して解説しようとしている。想に関しては、『瑜伽論』などの瑜伽行派の論書は、想と言語表現との関係を重んじて説明している。思に関しては、有部では意業との関係を重要視して説明するのに対して、『瑜伽論』ではそのことは殊更問題とされていない。『瑜伽論』、特に「撰決択分」の説明は識と認識対象との関係に限定してその作動の有り方を解説しており、禅定を背景として論じていることを窺わせる。

上記のように、従来の研究では、作意などの五心所に関する瑜伽行派の理解は有部の理解とほぼ同様であるとされてきた。しかし、第1章、第4章および第5章の考察で明らかにするように、五心所に関する『瑜伽論』の説明には、有部と同様の、あるいは近似する表現がしばしば見られる一方、有部の論書には見られない、独自の要素もいくつかある。そこには、瑜伽行派独自の問題意識が反映されていると考えられる。このことから、五心所に対する『瑜伽論』、および瑜伽行派の理解は、必ずしも有部の説を踏襲していないことが明らかになる。

第2章では、「遍行」という概念について、『瑜伽論』を中心として、瑜伽行派の論書における関連する記述を検討する。

遍在するという性質に関して、瑜伽行派の論書には、概ね二種の解釈が見られる。ひとつは、『瑜伽論』に見られる、すべての状態の心に、すべての地に、常に、心所が俱起するという解釈である。『瑜伽論』は、この四つは作意・触・受・想・思の五心所の特徴であると考え、「撰決択分」において作意などの五心所を「遍行」(*sarvatraga) という語によって総称する。この五心所以外の心所は、四つの特性の一部を有するか、あるいはそのいずれも有さない。「撰決択分」ではそれらの心所を「非遍行」と総称する。欲などの五心所はその代表的なものとして説明されている。遍行心所と別境心所についての『瑜伽論』の議論においては、「本地分」でも「撰決択分」でも、アーラヤ識との相応については全く言及が見られない。

一方、遍在するとは八識に共通して存在することである、という解釈もある。八識すべてが遍行心所と相応するというのを初めて明言したのは『唯識三十頌』である。八識に共通して存在するという解釈は、『唯識三十頌』の影響によって生まれたものであろう。

すでに述べたように、先行研究では、瑜伽行派が十大地法を五遍行と五別境に二分した主な理由の一つは、作意などの五心所はアーラヤ識を含め、すべての識に相応する一方、欲などの五心所はアーラヤ識には相応しないということにあるとされている。しかし、第2章の考察により、瑜伽行派の最古の文献である『瑜伽論』は、八識との相応関係に基づいて五遍行と五別境を別に立てているのではないことが分かる。『瑜伽論』における遍行心所と別境心所についての議論は、心・心所の相応関係というより、むしろ、物事 (vastu) が認識される過程における心所の状態と働きに着目して遍行心所と別境心所を区別していると言える。

第3章では、アーラヤ識の五心所に関する『瑜伽論』の記述を考察する。

先行研究では、アーラヤ識と心所の相応関係は『瑜伽論』「本地分」においては特に問題とされていなかったが、「摂決択分」に至って、アビダルマに説かれる識の性質がアーラヤ識の概念に追加された、と考えている。第3章ではこの見解を再検討し、「本地分」にはアーラヤ識と心所の相応関係を暗示する記述があることを指摘する。「本地分」のこの記述を分析することにより、『瑜伽論』のアーラヤ識が作意などの五心所と相応するという説は、必ずしも有部の思想を踏襲しているわけではなく、ニカーヤの思想に相通するものがあるということを指摘できる。また、第3章ではアーラヤ識の五心所の特徴に関する『瑜伽論』の記述を考察する。この考察により、アーラヤ識の五心所と六識の五心所は異なる性質を有することが明らかになる。

結論では、以上の考察を総括する。

付録Iでは、資料として、『瑜伽論』「本地分」と「摂決択分」の関連部分を抜粋し、校訂と和訳を施す。

付録IIでは、本論第3章でとりあげる『瑜伽論』「本地分中有尋有伺地」の説明の中の難解な一文について考察する。付録IIIでは、付録Iに示した「摂決択分」の抜粋の中の、アーラヤ識の所縁についての説明文に見られる **aparicchina* という語について、先行研究の諸解釈を検討しつつ、「本地分」に関連する記述があることに着目して解釈を試みる。

繰り返しになるが、従来の研究では、五遍行説は、有部の五心所の定義を継承しながら、五心所の遍在する性質を八識に敷衍適用した、形式的な理論にすぎない、と見做されている。五遍行と十大地法の間形式上の関連性があることは一目瞭然である。しかし、本研究で明らかにするように、五遍行に関する『瑜伽論』の説明は十大地法とは異なる関心を示している。その意味で、この説は六識の性質を機械的にアーラヤ識に敷衍したものであるとは言えない。アーラヤ識と五心所の相応関係は、一見したところ五遍行の定義と整合的でないという印象をうける。しかし、同じ『瑜伽論』の「本地分」と「摂決択分」では、アーラヤ識の心所と五遍行の理解が一貫しており、教説として成り立っている。

瑜伽行派のアビダルマに関する先行研究は、有部アビダルマとの比較にとどまり、初期經典に遡って検討することは殆ど行われていない。しかし、本研究で示すように、瑜伽行派のアビダルマは、有部とは異なる関心に基づいて、初期經典の教説を同派の理論体系において再整理および再解釈している。『瑜伽論』では、時には、初期經典の難解な教説に対して同派独自の解釈が呈示されていることもある。したがって、瑜伽行派のアビダルマを研究することは、同派の教理（例えばアーラヤ識についての考え方）に対する理解を深める上で重要であるのみならず、初期經典の教説を理解するための手がかりともなる。この意味で、研究者は瑜伽行派のアビダルマに、より大きな関心を払うべきであると言えよう。

以上の考察により、五遍行説についての瑜伽行派の理解を明らかにするとともに、瑜伽行派アビダルマの研究の意義を多少なりとも示すことができると考える。